23

昭和五年三月廿一日印刷
昭和五年三月廿七日發行

上製 新井石禪全集第三卷



著作權者 祥雲晩成
編纂者 山田靈林
發行者 飯野政晴
東京府北豊島郡中新井一九三四番地
印刷者 加藤保
東京市神田區三崎町三丁目一二四番地
印刷所 加藤文明社印刷所

發行所
東京市芝公園十一號地八番
大本山總持寺東京出張所內
新井石禪全集刊行會
電話芝(43)一四八六番
振替東京四五四三二番

（製本 山田製本所）

【と】



【な】



【に】



【ね】



【は】



【ひ】



【ふ】

【せ】



【そ】



【た】



【ち】



【つ】



【て】

【あ】



【い】



【う】



【え】



【か】



【き】



【く】



【け】



7

5

【て】



【と】



【な】



【ぬ】



【ね】



【は】



【ひ】



【ふ】

3

【あ】



【い】



【う】



【え】



【お】



【か】



【き】

來蹭蹬覺虛行。多年枉作風塵客。種性邪錯知解。不達如來圓頓制。二乘精進無道心。外道聰明無智慧。亦愚癡亦小騃。空拳指上生實解。執指爲月枉施功。根境法中虛揑怪。不見一法卽如來。方得名爲觀自在。了則業障本來空。未了還須償宿債。飢逢王膳不能飡。病遇醫王爭得瘥。在欲行禪知見力。火中生蓮終不壞。勇施犯重悟無生。早時成佛于今在。獅子吼無畏說。深嗟懞懂頑皮靼。但知犯重障菩提。不見如來開祕訣。有二比丘犯婬殺。波離螢光增罪結。維摩大士頓除疑。猶如赫日銷霜雪。不思議解脫力。妙用恒沙也無極。四事供養敢辭勞。萬兩黃金亦消得。粉骨碎身未足酬。一句了然超百億。法中王最高勝。河沙如來同共證。我今解此如意珠。信受之者皆相應。了了見無一物。亦無人兮亦無佛。大千沙界海中漚。一切賢聖如電拂。假使鐵輪頂上旋。定慧圓明終不失。日可冷月可熱。衆魔不能壞眞說。象駕崢嶸謾進途。誰見螳螂能拒轍。大象不遊於兎徑。大悟不拘於小節。莫將管見謗蒼蒼。未了吾今爲君決。（畢）

時默。大施門開無壅塞。有人問我解何宗。報道摩訶般若力。或是或非人不識。逆行順行天莫測。吾早曾經多劫修。不是等閑相誑惑。建法幢立宗旨。明明佛勅曹谿是。第一迦葉首傳燈。二十八代西天記。歷江海入此土。菩提達磨爲初祖。六代傳衣天下聞。後人得道何窮數。眞不立妄本空。有無俱遣不空空。二十空門元不著。一性如來體自同。心是根法是塵。兩種猶如鏡上痕。痕垢盡除光始現。心法雙亡性則眞。嗟末法惡時世。衆生薄福難調制。去聖遠兮邪見深。魔強法弱多怨害。聞說如來頓敎門。恨不滅除令瓦碎。作在心殃在身。不須怨訴更尤人。欲得不招無間業。莫謗如來正法輪。栴檀林無雜樹。鬱密深沈獅子住。境靜林閒獨自遊。走獸飛禽皆遠去。獅子兒衆隨後。三歲便能大哮吼。若是野干逐法王。百千妖怪虛開口。圓頓敎沒人情。有疑不決直須爭。不是山僧逞人我。修行恐墮斷常坑。非不非是不是。差之毫釐失千里。是則龍女頓成佛。非則善星生陷墜。吾早年來積學問。亦曾討疏尋經論。分別名相不知休。入海算沙徒自困。却被如來苦呵責。數他珍寶有何益。從

夜清宵何所爲。佛性戒珠心地印。霧露雲霞體上衣。降龍鉢解虎錫。兩鈷金環鳴歷歷。不是標形虛事持。如來寶杖親蹤跡。不求眞不斷妄。了知二法空無相。無相無空無不空。卽是如來眞實相。心鏡明鑑無碍。廓然瑩徹周沙界。萬象森羅影現中。一顆圓光非內外。豁達空撥因果。莽莽蕩蕩招殃禍。棄有著空病亦然。還如避溺而投火。捨妄心取眞理。取捨之心成巧僞。學人不了用修行。眞成認賊將爲子。損法財滅功德。莫不由斯心意識。是以禪門了却心。頓入無生知見力。大丈夫秉慧劍。般若鋒兮金剛燄。非但能摧外道心。早曾落却天魔膽。震法雷擊法鼓。布慈雲兮洒甘露。龍象蹴踏潤無邊。三乘五性皆醒悟。雪山肥膩更無雜。純出醍醐我常納。一性圓通一切性。一法徧含一切法。一月普現一切水。一切水月一月攝。諸佛法身入我性。我性還與如來合。一地具足一切地。非色非心非行業。彈指圓成八萬門。刹那滅却三祇刧。一切數句非數句。與吾靈覺何交涉。不可毀不可讚。體若虛空勿涯岸。不離當處常湛然。覓則知君不可見。取不得捨不得。不可得中只麼得。默時說說

心藏㆓無價珍㆒。無價珍用無㆑盡。利㆑物應㆑緣終不㆑慳。三身四智體中圓。八解六通心地印。上士一決一切了。中下多聞多不㆑信。但自懷中解㆓垢衣㆒。誰能向㆑外誇㆓精進㆒。從㆓他謗㆒任㆓他非㆒。把㆑火燒㆑天徒自疲。我聞恰如㆑飲㆓甘露㆒。銷融頓入㆓不思議㆒。觀㆓惡言是功德㆒。此則成㆓吾善知識㆒。不㆘因㆓訕謗㆒起㆗怨親㆖。何表㆓無生慈忍力㆒。宗亦通說亦通。定慧圓明不㆑滯㆑空。非㆓但我今獨達了㆒。恒沙諸佛體皆同。獅子吼無畏說。百獸聞㆑之皆腦裂。香象奔波失㆓却威㆒。天龍寂聽生㆓欣悅㆒。遊㆓江海㆒涉㆓山川㆒。尋㆑師訪㆑道爲㆓參禪㆒。自㆔從認㆓得曹谿路㆒。了㆔知生死不㆓相關㆒。行亦禪坐亦禪。語默動靜體安然。縱遇㆓鋒刀㆒常坦坦。假饒毒藥也閑閑。我師得㆑見㆓然燈佛㆒。多劫曾爲㆓忍辱仙㆒。幾回生幾回死。生死悠悠無㆓定止㆒。自㆔從頓悟㆓了無生㆒。於㆓諸榮辱㆒何憂喜。入㆓深山㆒住㆓蘭若㆒。岑崟幽邃長松下。優遊靜坐野僧家。闃寂安居實瀟洒。覺則了不㆑施㆑功。一切有爲法不㆑同。住相布施生天福。猶如㆔仰㆑箭射㆓虛空㆒。勢力盡箭還墜。招㆓得來生不如意㆒。爭似無爲實相門。一超直入如來地。但得㆑本莫㆑愁㆑末。如㆔淨瑠璃含㆓寶月㆒。我今解㆓此如意珠㆒。自利利他終不㆑歇。江月照松風吹。永

# 證道歌

君不レ見、絶學無爲閒道人。不レ除二妄想一不レ求レ眞。無明實性卽佛性。幻化空身卽法身。法身覺了無一物。本源自性天眞佛。五陰浮雲空去來。三毒水泡虛出沒。證二實相一無二人法一。刹那滅却阿鼻業。若將二妄語一誑二衆生一。自招二拔舌塵沙劫一。頓覺二了如來禪一。六度萬行體中圓。夢裡明明有二六趣一。覺後空空無二大千一。無二罪福一無二損益一。寂滅性中莫二問覓一。比來塵鏡未二曾磨一。今日分明須二剖折一。誰無念誰無生。若實無生無二不生一。喚二取機關木人一問。求レ佛施レ功早晚成。放二四大一莫二把捉一。寂滅性中隨飮啄。諸行無常一切空。卽是如來大圓覺。決定說表二眞僧一。有レ人不レ肯任レ情徵。直截二根源一佛所レ印。摘レ葉尋レ枝我不レ能。摩尼珠人不レ識。如來藏裡親收得。六般神用空不空。一顆圓光色非色。淨二五眼一得二五力一。唯證乃知難レ可レ測。鏡裡看レ形見不レ難。水中捉レ月爭拈得。常獨行常獨步。達者同遊涅槃路。調古神淸風自高。貌顇骨剛人不レ顧。窮釋子口稱レ貧。實是身貧道不レ貧。貧則身常被二縷褐一。道則

永嘉大師は徹悃の慈悲を以つて、更に滿天下の道侶に告げて曰く『管見を以つて蒼々を謗すること莫れ、未だ了せずんば吾れ今ま君がために決せん』と管見は、莊子に『管を用ゐて天を闚き錐を用ゐて地を指す』とありて、葦の髓から天上を窺くといふ意味である。卽ち狹小の知見を以つて廣大なる眞理を窺はんとするに喩へたのである。蒼々は天の色で、つまり大宇宙のことである。竹管より天上を見て『天は小なり』といふが如きは狂妄者の言である。己見己我を以つて佛法の大を測らんと欲するものは實にこれに類す。法華を以つて華嚴を謗り、華嚴を以つて法華を謗り、互に相誹謗して遂に正法の命脈を喪失することを致す、悲しからずや。これ畢竟自己の大事を了却せぬ未了の人であるからである。未了にして却て了ぜりと思ひ、强ゐて知見に誇らんとする者は實に手のつけられぬ連中である。

未了を未了とせよ、吾れ今ま君がためにその疑團を解き、その不明を決斷してやらうぞ。滿天下の未了漢は盡く來つて永嘉の門に投ぜよ。これを導くに曹溪一味の妙法を以つてし、これに授くるに如來圓頓の制を以てすべきぞ、サア速かに來れ、速かに問着せよ。光陰は矢よりも迅かなり、身命は露よりも脆し。この身今生に向つて度せずんば、更に何れの生に向つてかこの身を度せん。暫時も在らざれば死人に如同す。何んぞ早く參究し、徹底して絕學無爲の閑道人に交參せざる。これ永嘉大師徹悃の老婆心である。

以上は單に文字上に於ける閑註脚を付して見たまでのことである。若し大師の大精神に參ぜんと欲せば、一句一句が屋裡の大公案なりと知りて、親しく參究し去らんことを要す。

これは最終の句である。我が禪門の敎たるや『大象は兎徑に遊ばず、大悟小節に拘はらず』で、決して區々たる名相や方便道などには拘泥せぬ。大象は兎などの走り廻る小徑には遊ばぬ。草叢や樹の枝の下路などにコソ〳〵もぐり込んで逃げ廻るやうなことはせぬ。但だ驀直に直指人心、見性成佛するの法門である。これを大悟といふ。小節とは些少なる節目を固執して、徒らに枝葉に走ることである。或は空の一偏に墮し、或は色の一方に執し、有と聞けば有に滯ほり、無と聞けば無に縛せらる。これ皆な小節に頭を突込んで更に出頭の分のないものである。菜根譚にも『纏縛は只だ自心に在り、心了ずれば則ち屠肆糟塵も居然たる淨土、然らずんば縱ひ一琴一鶴一花一卉、嗜好淸しと雖も魔障終に在り、語に云く、能く休すれば塵境も眞境となり、未だ了せざれば僧家もこれ俗家と、信なるかな』というてある。

釋尊の衆生を接化せらるゝや、時に隨ひ、機に臨み、圓轉無碍變通自在である。恰も雲の空界に遊び、波の海面に躍るが如し。然るに後世のもの徒らに雲迹を留め、波影を執し、色空相爭ひ有無相鬩ぎ、佛法を以つて我見の具となす、實に淺ましきことではないか。殊に敎外別傳を標榜する禪僧の如きも、別傳といへる一天地に跼蹐して禪我の角を振り立て、胡喝亂棒を事とし惡聲罵詈を能とす。傲慢不遜を以つて見知となし、放逸不羈を以つて妙覺となす。思へば慚愧の至りならずや。故に、釋尊は涅槃會上に於いて文殊菩薩が再轉法輪を請ふた時『吾れ四十九年未だ曾て一字を說かず』と仰せられた。吾人は須らく釋尊に無說の說あることを聞取し、見取し、徹上徹下せんことを要す。

達磨所傳の正傳は、大乘中の大乘であるから、象駕に比したものです。崢嶸は山の峻き貌である。漫にとは悠々逼まらざることを意味した文字で、法王の曳きたまふ象駕は、如何なる嶮山峻嶺でもビクともせずに、悠々として大道に横行濶歩して進んで居るといふことである。この象駕の進路を妨ぐるものは一人もない。然るを小見小智の徒輩がこれを妨害せんとする、恰も蟷螂が轍を拒まんとするが如きものである。

莊子に『汝、夫の蟷螂を知らざるか、その臂を怒らし以つて車轍に當り、その任に勝へざることを知らず』とある。これは齊の莊公が獵に出でられし時、蟷螂といふ小虫が公の車の輪を搏たんとしたことを述べたのである。小虫共が車のグヮラ〳〵する響に腹を立てゝ、その車を拒まうとして、ウツカリ飛び出せば忽ち車に曳き殺されて了ふ。世の學者や、または佛門でも教家の人々が、教外別傳の宗風を聞いてビツクリ致し、色々とこれを非難攻撃する輩は何れも蟷螂の御仲間です。この邊から見れば永嘉大師の時代には文字法師の論難なども隨分盛んであつたと見える。殊に大師は教より禪に入りし方ゆゑ、一層非難があつたかも知らぬ。昔も今も世の中のことは同じやうなものである。

大象不レ遊二於兎徑一。大悟不レ拘二於小節一。莫下將二管見一謗中蒼蒼上。未レ了吾今爲レ君決

【和訓】大象兎徑に遊ばず、大悟小節に拘はらず。管見を將つて蒼々を謗すること莫れ、未だ了ぜずんば吾れ今君が爲めに決せん。

便ち坐を立ちて空に昇り、師を顧みて、海水は渇すべく須彌は傾くべし、彼の上人の心志は良とに堅貞にして侵すべからず』というて、形を隱せりといふ。

大丈夫兒は能く斯くの如くならざるべからず。これ正法を守ること固きが故である。況んや、正法そのものは萬古不變の妙法なるを以つて、『日は冷かなる可く月は熱かるべくも、衆魔も眞說を壞すること能はず』、佛所說の法は皆な正法なるを以つて眞說といふたのである。この眞說は如何なる惡魔と雖も破壞することは出來ぬ。凡夫の妄見や外道の邪見を以つて、正法を疑着したり、批難したりするのは、恰も燕雀が大鵬を評するやうなものである。

魔とは梵語、譯して奪命とも殺害ともいふ。智慧道德の生命を絶つの謂ひである。瑜伽師地論には四種の魔を說いてある。一に五陰魔、これは生死海に沈溺して居るこの身を指したのである。二には煩惱魔、三には死魔、四には天魔、即ち欲界第六天の魔にして、常に出世の善根を妨害せんとして居る。今衆魔といふは、正法を攪亂し眞理に背戻するところの邪解異見者をいふのである。これ等の魔說が如何に妨害を試みたとて及ぶものではない。永嘉大師はこの正法の護持者、眞理の相續者である。故に『象駕崢嶸として漫に途に進む、誰か見る蟷螂の能く轍を拒むことを』と仰せられた。

象駕は大象の曳く車駕で、謂ゆる大乘の意である。佛の說法は皆な群生を運載して佛地の彼岸に至らしめんがためであるが、衆生の根機に應じて御教導下されたのであるから、大乘もあれば小乘もある。今、

了々見の人は人法一體となりて大安心の地に住するを以つて、如何なる惡魔にも强迫にも誘惑される氣支はない。人は卽ち眞人、法は卽ち正法、正法は古今に通じて變ぜず、眞人は順逆に對して動かぬ。先づ眞人の方を示して『假使鐵輪頂上に旋るも、定慧圓明にして終に失せず』と詠ぜられた。鐵輪とは如何なるものでも粉碎する鐵の輪棒のことである。そのやうな恐ろしいものが頭の上にぐる〲と旋ぐるとも、眞人の境界はビクともせぬ。謂ゆる定慧圓明である。定慧とは四教儀には『常恒に寂然たるを名けて定となし、寂にして常に照らすを名づけて慧となす』とある。定力に依つて妄念を絕ち、慧力に依つて正理を見る。また、定に依つて解脱の德を成し、慧に依つて慈悲の用を發す。この二者圓明にして缺くるところなければ、以つて大法を荷擔するに足れり。眞人は如何なる場合にも、この二德を完成し保任して、終に失することがない。

梁の高僧傳を見ると、昔、釋の惠鬼法師、出家して長安の大寺に住す。戒行綿密、專ら禪定を修めてゐた。一夜、頭のなき鬼來る。師更に怖れずして謂はく『汝は頭なし定めて頭痛の患なからん』、鬼卽ち形を隱し去る。また一夜鬼來る。頭髪逆まに立ち、眼に光りあり、口太だ大にして色赤し。但だ頭の下に手足ありて腹なし。師曰く、『汝すでに腹なし、定めし臟腑の病なからん』、また雪夜寒氣甚し、魔便ち美女と化し來り、語つて曰く『我は天女なり、天帝、上人の高德を景慕して我を遣はして慰諭せしむ』と、師曰く『吾が心死灰の如し、汝の身は屎糞を革嚢に入れたらんが如し、これを以つて我れを試むること勿れ』、女

沙界といふ。然れども、無限大の宇宙より見れば海中に一漚の浮べるが如くである。既でにこれ水上の漚子、有にして有に非ず、存するが如くにしてその實はない。非ずといひ無しといふも早くこれ第二頭に落在す。

正常恁麼時は、一切の賢聖の出世も、その所說の法門も、皆な閃電の虚空を拂ふが如くにして、その實の執すべきはない。賢聖とは佛菩薩といふも同じことである。孔夫子も、基督も、ソクラテースも、皆な菩薩の一分である。その敎ふるところは轉迷開悟、止惡作善、離苦得樂の外にはない。釋尊一代の敎化もまた畢竟じて斷惑證理の法門たるに過ぎぬ。妙法の妙處に至つては言詮不及意路不到、唯だ能く冷煖自知すべきである。故に、吾人はよく七尺單前王三昧に安住して、一切の凡聖迷悟等の兩端を坐斷して見よ。若し然らずんば縱ひ塵沙劫を經るとも恐くは解脫の分なからん。

假使鐵輪頂上旋。定慧圓明終不ㇾ失。日可ㇾ冷月可ㇾ熱。衆魔不ㇾ能ㇾ壞二眞說一。象駕崢嶸漫進ㇾ途。誰見蟷螂能拒ㇾ轍。

【和訓】假使鐵輪頂上に旋るも、定慧圓明にして終に失せず。日は冷かなるべく月は熱かるべくとも、衆魔も眞說を壞すること能はず。象駕崢嶸として漫に途に進む。誰か見る蟷螂の能く轍を拒むことを。

了了見無二一物一。亦無レ人兮亦無レ佛。大千沙界海中漚。一切賢聖如二電拂一。

【和訓】了々として見るに一物無し、亦た人も無く亦た佛も無し。大千沙界海中の漚、一切の賢聖は電の拂ふが如し。

『了々として見るに一物なし』、玄義には『若し佛性を見ば、了々見と名く、また實相の理を見ば、了々識と名く』とある。畢竟、如意珠を識得したのが了々見である。昔は越後雲洞の顯窓慶宗禪師、因みに僧問ふ『如何なるかこれ新年頭の佛法』、師曰く『東西南北一等の家風』と。この家風とは如何なる家風ぞや、若し色相を認むれば家風を見る能はず、若し空相を認むれば也たこれ家風を昧却す、色空の二邊を透脱して始めて家風の眞を辨ずるを得べし。これを了々知といふ。この時に當りては眼を遮ぎる一物もなく、脚を碍る一法もない。故にまた『人も無く亦た佛も無し』、實相を了ずれば諸法皆な實相なり。佛心を了ずれば法界盡く佛心なり。豈に人と佛とを分ち凡と聖とを隔てんや。若し自己以外に佛ありと執し、佛以外に人法を見るべきありと執せば、果然として鬼窟裏の活計である。試みに鬼窟裏を踍跳して見よ、『大千沙界海中の漚、一切の賢聖は電の拂ふが如し』である。

三千大千世界といへば無量の日月あり、無邊の須彌山ありて、その數は恒河の沙の數の如し。故に大千

ある。絶學無爲の閑道人といふも、眞實、自己を了却した人のことである。自己の心性を徹證して見よ、諸佛の妙智、菩薩の慈悲も皆なこの中に圓滿して横拈倒用、無碍自在である。これを如意珠に比したものだ。如意珠は能く一切の財寶を產出して意の如くであるさうな。大師は曹溪の輪下に一宿して、徹底、如意珠を解悟せられた。この如意珠は、彼の雲門が『乾坤の中宇宙の間、中に一寶ありて形山に秘在す』というた那一寶である。乾坤に充塞する那一寶である。自己方寸の中に在りて不增不減である故に、自己を了ずるは宇宙を了ずるのである。さすれば、苟くもこれを信受するものは皆な佛心に相應し、佛知見に相應して毫末も隔てはない筈のものである。

洛京靈泉の歸仁禪師に、一俗士あり問うて曰はく『俗人還た佛法を會するを許すや否や』、師曰く『那箇臺無レ月、誰家樹不レ春』、若しこの中の消息を知らば、釋尊未だ出世せざる以前に於いて、早く既でに佛法を證得することが出來るであらう。

大寧寺定菴禪師、因に僧問ふ『如何なるかこれ和尚の家風』、師曰く『倒臥霜夜月、任運落二前溪一』。又問ふ『如何なるかこれ禪』、師曰く『水上の葫蘆捺着すれば便はち轉ず』。又問ふ『如何なるかこれ道』、師曰く『風高月冷乾坤寬、南北東西任レ歩歸』。この乾坤裏に於いて自由に獨歩し得るに非ざれば、眞に能く信受するものとは許されぬ。

に一切世間の中に於いて最も氣高く、最も勝れさせ給ふのが佛である。この佛の悟り給ひしは萬古不變の眞理、法界一味の妙法である。『河沙の如來同く共に證す』で、十方の諸佛も同道同證である。河沙は恒河の沙の數といふので、無量といふ意である。

さあ是に於いて能々諸佛妙道の玄旨を知るがよい。妄りに釋尊と彌陀尊とを區別して見たり、彌陀經と法華經とを隔歴して見たりする間は、到底この玄旨には達せられぬ。一佛を證するは千佛を證するのである。三世諸佛を見んと欲せば一佛を見るがよい。その一佛を見るの法は自己心中の天眞佛を見るに在るのである。

蘇東坡居士が佛印禪師と同く遊ぶの次で、一日、觀世音菩薩の念珠を手にするを見、坡曰く『觀音既にこれ佛、如何んぞ念珠を持す、これ何の意ぞ』、師曰く『また佛號に過ぎざるのみ』、坡曰く『何の佛號をか念ず』、師曰く『また只觀音佛號を念ず』、坡曰く『他は自からこれ觀音、如何んぞ自から誦し自から號する』、師曰く『人に求むるは己に求むるに如かず』と、この因緣の如きもまた妙趣の存するものがある。今日の敎育も修養も矢張り自己が自己を見るの法なのである。自己にして自己を知らざるものは、縱ひ博學多聞と雖も道に於て失脚するものが太だ多い。併し、自己を實現せんと欲せば、先づ自己を放下するの薫錬を要す。身心脫落とは卽はちこれである。

次に『我れ今この如意珠を解す、これを信受するものは皆な相應す』とは、大師の『自信敎人信』で

にして、人天の供養を受くるならば、その供養物を消化するの力なきを以つて、罪業の負債となつて後に殘るものである。その結果、色々の果報を受けて、その負債を償はねばならぬ。牛でも馬でも皆宿債のために勞苦に服して居るのである。若し佛知見を具し菩薩行を有する人ならば、萬金の供養を受くるも敢て分外とはいはれぬ。

故に百丈錄には「一切有無の諸法、一々の境上に於いて、都て纖塵の取染なく、亦た取染なきにも移住せず、亦た不依住の知解もなければ、這箇の人は日に萬兩の黃金を食すとも亦た能く消得せん」とある。四十二章經には「千億の三世諸佛に飯せんよりは、一人の無念無住無修無證のものに飯せんには如かず」ともある。無念無住といふは不思議解脫の力を有する絕學の道人のことである。またこれを學人の方よりいへば『粉骨碎身も未だ酬ゆるに足らず、一句了然として百億を超ふ』といふべきである。

法中王最高勝。河沙如來同共證。我今解二此如意珠一。信二受之一者皆相應

【和訓】法中の王最も高勝、河沙の如來同く共に證す。我れ今この如意珠を解す、之を信受するものは皆相應す。

『法中の王最も高勝』とは、釋尊に對する讚辭である。佛を法王といふ。王には尊貴の義と自在の義とがある。佛は正法に於いて最尊の位地に上り給ひ、正法に於いて自在を得給ふが故に、法中の王と稱す。故

ことはない。この妙用を發揮する時は、一刹那の間に於いて成佛することも出來れば、一微塵裡に大經卷をも轉ずることが出來る。

昔は越州大珠の懐海禪師に、一日、某律師來りて問ふ。『和尚道を修する也た功を用ゆるや否や』、師曰く『功を用ゆ』、律師曰く『如何が功を用ゆ』、師曰く『饑來れば飯を喫し困じ來れば便ち眠る』、律師曰く『一切の人總てかくの如し、師の功を用ゆるに同じきや否や』、師曰く『同じからず』、律師曰く『何が故に同じからざる』、師曰く『他は飯を喫する時、肯つて喫せずして百種順索し、睡る時肯つて睡らずして千般計較す、同じからざる所以なり』、律師口を杜づとある。

師亦た曰く『道を解するものは行住坐臥これ道に非ざるなし、法を悟るものは縱横自在これ法に非ざるなし』と、かうなければ不思議解脱の力とはいはれぬ。この力を有するを眞の佛菩薩とも稱すべきである。眞の佛菩薩たらざれば、普く人天を利益することは出來ぬ。若し眞の佛菩薩たらんには、それこそ無上尊であるから、身命を捨てゝも供養し承事し奉るべきである。故に『四事の供養敢へて勞を辭せんや、萬兩の黃金もまた消得す』といはれたのである。

四事の供養とは飢食と衣服と臥具と醫藥とである。つまり衣食住處、一切資身の具を供給することと見れば宜しい。これ等の供養も敢へて勞を辭することなく、眞情を傾けて供養するの價値がある。縱ひ日に萬兩の黃金を施すとも、皆消得して少しも負債となつて殘るやうなことはない。若し力足らず徳薄きもの

ぬが、根本法輪の上からいへば、慥に持犯の外に立つて佛心の本德を現はすことが大切である。併し、我が禪門所傳の戒法なるものは、決して和尙のいふが如きものではない。尤も、彼の律僧の如きは、禪戒などは恐くは夢にだも知らなんだであらうと思ふ。

**不思議解脫力。妙用恒沙也無極。四事供養敢辭勞。萬兩黃金亦消得。粉骨碎身未足酬。一句了然超百億。**

【和訓】不思議解脫の力、妙用恒沙也た極りなし。四事の供養敢て勞を辭せんや、萬兩の黃金も亦た消得す。粉骨碎身も未だ酬ゆるに足らず、一句了然として百億を超ふ。

『不思議解脫の力、妙用恒沙也た極まりなし』とは、前段の根本法輪の妙德を開示せられたのである。註維摩に肇法師は『微遠幽深にして二乘の測る能はざるは不思議でない、縱任無碍にして塵累拘はる能はざるは解脫なり』というて居る。持犯の外に超然として本來解脫の妙性を顯現せば、盡虛空これ佛光明にして、盡大地これ佛淨土である。迷へる衆生もなく惱める凡夫もない。この妙境界に達すればこそ娑婆卽寂光淨土、煩惱卽菩提、生死卽涅槃である。これを不思議解脫の力といふ。維摩は正しくこの力を振うて攝取せられたのである。而して、この力は天地の勢力であり、大道の靈機である。故にその妙用は順行逆行、圓轉無碍にして、印度の大河たる恒河の沙の無量數なるが如く、實に無盡藏にして極まりある

ず」といふためにゝ五百生の間、野狐身を受けたとあるではないか。婬・殺といへる重罪を犯して居りながら、罪性は元來不可得である、惡業またこれ畢竟空ぢやなどというて、呑氣に構へて居たならば、世にこれ程の邪見はあるまいぞよ。

徒らに罪を畏るゝよりも、罪を造らぬものとなることが修行の上に於ては大切である。罪性の眞空なることを識得すれば、妄念の不可得なることにも通達すべきである。即ち法の根源實相を見破すべきである。法の根源實相を見破し得ば、脱然として佛性の本體に融合することが出來る。この時一切の妄想窟を打破し、煩惱幢を倒折し、忽爾として法界心に入りて法界身を成ずべきである。換言すれば、即心是佛の本面目を現成するのである。この時、罪を脱して業を離れ、惑を斷ずるに依つて、盡未來際の大安心が決定さるゝではないか。維摩は驀直にこの根本法輪を轉じたのである。これを因果否認論と見たならばそれこそ維摩の怨敵である。

曾て盤珪和尚に二人の律僧が相見して、「某共は二百五十戒を持して成佛を期す、可なりや」と問うた。その時和尚は『それは結構ぢや、併し至極とは許されぬ、元來律は表に立つるのは實に耻かしきことであるのぢや、律なるものは惡比丘のためにこしらへたものである、酒を飮まぬものには飮酒戒はいらぬ、盜みをせぬものには偸盜戒はいらぬ、戒を持つの破るのといふことは惡比丘の上のことぢや、不生の佛心で居れば初よりして持犯の沙汰はありはせぬ』と答へられた。これは一面の説にして全提の法とはいはれ

て、悔恨措くことなく、釋尊十六大弟子の中の持律第一と稱せられし優波離尊者のところに來りて慈誨を仰いだのである。尊者は未だ小乘佛敎の見地に囚はれて居つたに依つて、『それは飛んだ罪を造つた、恐らくは墮獄を免がるゝことは出來まい、唯だ懺悔して三惡道の苦患を免がるゝことを祈請せよ』というて、罪過の恐ろしきこと、惡道の苦患の樣等を說き聞かされたものと見える。恰もそのところに維摩居士が來りてこれを聞き、優波離尊者に對して『優波離よ、御身はこの二比丘の罪の上塗をしてはならぬ、罪性に實有の見を生ずるはこれ妄想を重ぬるのである。罪性は畢竟じて內にも在らず外にも在らず中間にも在らず、遂に不可得なるものである。この不可得を徹證すれば吾人は本來の解脫ならずや』といふ意味の根本義を說かれました。そこで二人の比丘は疑網を斷じて各々阿耨多羅三藐三菩提心を起したとある。これ優波離尊者は螢の光りのやうな小乘小機の知見を以つて見るから、徒らに罪障の相に執して、その實體に徹底することが出來なんだ。そこで却つて罪結を增加するやうな結果に至つたのである。これを『波離の螢光罪結を增す』と云うたのである。罪結とは罪業の結縛といふことである。

次に『維摩大士頓に疑ひを除く、猶ほ赫日の霜雪を銷するが如し』とあつて、幸ひに維摩大士の在るありて、大乘大機の法門を打開して一切の疑惑を除き下された。猶ほ赫々たる日光が山なす霜雪をも一時に銷滅し盡すが如くであります。併し、これ等の說を聞いて因果撥無の邪見に墮してはならぬ。昔、迦葉佛の時、百丈山の住持は『大修行底の人却つて因果に落つるや也た無しや』の問ひに答へて『因果に落ち

然るに、永嘉大師の時代にも、多くの佛教家は名相に囚はれて居つたものと見えて、次の句に『但だ犯重の菩提の障ふることを知つて、如來の秘訣を開くことを見ず』と慨かれた。犯重とは、佛教戒律の中に重罪と輕罪とを區別して制してある。その中の重罪を犯すことである。いはゆる殺生・偸盗・邪婬・妄語等の罪過である。かゝる罪過を犯すものは現身に菩提心を發すること難きを以つて菩提道を成ずることはなほ更出來ぬ。併しながら、これ等の衆生をも救濟して、見性成佛せしむるのが如來法門の秘訣である。前段、勇施の因緣を見ても解るではないか。百丈禪師は僅かに不昧因果の四字を以つて五百生野狐身に墮したる前百丈を濟度せられた。提婆達多は無間地獄の中に在りて三禪天に仙樂を享けて居るとも説いてある。これ皆佛祖の秘訣に依ることである。その秘訣の一端は次の一段に於いて見るがよい。

**有二比丘犯婬殺。波離螢光增罪結。維摩大士頓除疑。猶如赫日銷霜雪。**

【和訓】二比丘あり婬殺を犯す、波離の螢光罪結を增す。維摩大士頓に疑ひを除く、猶赫日の霜雪を銷するが如し。

これは維摩經弟子品の中に在る因緣である。『二比丘あり婬殺を犯す』とは、二人の比丘ありて、一人は邪婬を行なひ、一人は、女人を追うて彼女をして誤つて坑に墮ち死に至らしめた。この二比丘大に怖れ

【和訓】獅子吼無畏の說、深く嗟く懞憧たる頑皮靼。但犯重の菩提を障ふることを知つて、如來の秘訣を開くことを見ず。

釋尊御一代の聖敎、歷代祖師の訓誨は盡くこれ『獅子吼無畏の說』である。獅子一吼すれば百獸腦裂す百獸群を做すも獅子に敵することは出來ぬ。故に佛祖の言敎を獅子吼と稱し、または無畏の說ともいふ。今、永嘉大師が敎網を透出して曹溪の禪風を擧揚す、またこれ獅子吼無畏の說である。然るに『深く嗟く懞憧たる頑皮靼』で、世の中に眞に能く佛祖の正法を聞受する底のものは少ないものである。詢に歎嗟はしきことである。

懞憧は、辭書には心の亂れたる貌とも、または無知なりとも註してゐる。頑皮靼とは取柄のない輩のことである。頑は固陋にして活動のないこと、皮靼とは肉體といふに同じ、靼は柔熟したる皮のことである。大智度論に『譬へば牛皮の未だ柔かならざるが如き、屈拆すべからず、無信の人もまたかくの如し』云々とある。要するに、剛くなつた皮のやうで、少しも屈伸の自由を存せざるに喩へたのだ。佛敎を學得するもまたかくの如く、先入主となつて、己れの學するところを以つて是と爲し、己の知らざるところを以つて非となす。故に己見己我に蔽はれて、佛陀の大精神に接觸することが出來ぬ。孟子も『盡く書を信ぜば書なきに如かず』というたではないか。況や佛敎を學得するものが、徒らに名相に囚はれ、見執に繫がれては、畢竟じて得る所のないものである。

て染着の心を起して病となる。その母、勇施を請じて遂に婬を行ぜしむ。その女の夫これを知り勇施を殺さんと欲す。勇施、毒藥を彼の女に與へて却つてその夫を殺さしむ。而して後、大いに懺悔して煩悶措くことなし。時に鼻掬多羅と稱する菩薩あり、勇施に語げて曰く『怖るゝ莫れ我今ま汝に安心を與へん』と、乃ち無量の佛を現出し同聲に、『諸法は鏡像に同じ水中の月の如し、凡夫愚惑の心癡恚愛を分別す』といへる偈を說きたまふ。勇施、聞いて深く思惟し、遂に無生忍を得、今已に成佛して西方に在り、寶月如來と號し、國を常光と名くといふ。斯く勇施は重罪を犯したるも正知見の力に依つて業障を淨除し、早く既に成佛し、今現に常光世界に住して居られる。これ豈に希有難思議の功德ではないか。

併し、これ等の因緣は初心のものにはうつかり說かれぬ。勇施の罪業を解脫したるは、知見力最も堅強にして、且つその知見に伴ふ大行持力があつたからに相違ない。今日の吾々も亦た宿業の繫縛を受けて居るけれども、佛知見を開發すれば、この身このまゝが常光三昧に住して煩惱の昏を照す寶月如來である。卽心是佛の端的には佛光明に漏るゝ世界國土もないのである。この因緣よく〱審細に參考せねばならぬ。

獅子吼無畏說。深嗟懞憧頑皮靼。但知㆔犯重障㆓菩提㆒。不㆑見㆔如來開㆓秘訣㆒。

擧揚するのである。欲とは欲界で迷雲苦霧に包まれたる凡夫世界である。禪というても色界の四禪天のことだなど〻遠方に見まいぞ。禪は佛心佛行の異名なりと知るべし。卽ち唯心の淨土、己身の彌陀である。この身を捨てこの世を離れて佛心佛行佛土ありと思ふ勿れ、欲界卽佛界なりと徹見する底の眼あるに非ざれば、決して佛法を會することは出來ぬ。故に曰ふ『欲に在りて禪を行ずるは知見の力なり』と。欲界を欲界と見るは凡見である。三界の如くに三界を見ざる時、始めて正知見現成すべきである。僧あり曾つて鵞湖大義禪師に問ふ、『欲界に禪なし、何ぞ禪定を修するや』、禪師曰く『汝只欲界に禪なきことのみを知りて、禪界に欲なきことを知らず』と、實に親切な說話である。かくの如きの境界は舌頭上の佛法や理窟禪では駄目である。稀有難思議の妙處であるから、これを火中に蓮華を生ずるが如しといふ。維摩經の七の佛道品には『五欲を受ることを行し、亦た復た禪を行ふことを現じ、魔の心をして怪亂その便りを得る能はざらしむ、火中に蓮華を生ず、これ希有と謂ふべし。欲に在りて禪を行ず、希有なること亦たかくの如し』とある。火中の蓮とは無形の蓮と見るもよい。自己心中の蓮華臺と見るもよい。無形の蓮には榮枯盛衰の變易はないから『火中に蓮を生ず終に壞せず』と仰せられた。然らばその常蓮華の功德相は如何んといふに、『勇施重を犯して無生を悟り、早時成佛して今に在り』是れである。勇施比丘の因緣は淨業障經に出づ。

過去久遠劫に無垢光如來の時、一比丘の勇施と名くるがあつた。一長者の女、勇施の容顏端正なるを見

とゝする。双方を對照しての是非得失は今は別に批評はせぬ。

この本文の六句が一段となつて居る。これは信行の緊要なることを示されたのである。大法炬經には、『信受せざるが故に修行なし、修行せざるが故に解脱を得ず、解脱なきが故に諸の苦惱を受く』とある。信受と修行とは鳥の兩翼の如きものである。そこを『飢えて王饍に逢ふとも喰ふこと能はずんば、病んで醫王に遇ふとも爭でか差ることを得ん』と仰せられた。賤しきものが飢渇に苦しんだ際、突然、國王の食膳に出逢うても、その威德を畏れて喰ふことが出來ぬでは、寳山に入りて空手にして歸るが如く、何の功も奏することができぬ。華嚴經に『人の善膳を設くるに自ら餓て而して食せざるが如し、法に於いて修行せず、多聞なるも亦たかくの如し』とある。吾々は宿世の罪債に苦しめられ、法味に乏しきを以つて、飢餓に苦しんで居るやうなものである。幸ひに佛祖正傳の美膳に逢ふことを得たり、宜しく飽喫して法身を長養すべきである。若し喫することなければ美膳に逢ひたるかひもない。また病者が名醫に於けるもまたかくの如く、若しその藥を服せざれば竟に病を差すことは出來ぬ。故に遺教經には『我は良醫の病を知つて藥を說くが如し、服すと服せざるとは醫の咎に非ず』と仰せられた。縱ひ佛法に逢ふとも信力が堅固でないと實行が現はれぬ。實行せねば遇はざるに同じ、今日もさうである。佛法は古今に流傳し正法は隨處に充滿す。故に正法なきを憂へず、只だ信行なきを憂ふるのである。

次に『欲に在つて禪を行ずるは知見の力なり、火中に蓮を生ず終に壞せず』とありて、信行具足の人を

業障そのまゝが本來空である。これを鳥道の遊戯三昧ともいふのである。

これに反して『未だ了ぜざれば還つて須らく宿債を償ふべし』で、宇宙の眞諦を覺了せざれば、苦樂昇沈の相に執するが故に、苦の上に苦を重ね、迷の上に迷を加へ、宿世の罪業の債を償はねばならぬ。而して罪障の借財は永遠に皆濟することはむづかしい。今日の凡夫は皆な日々夜々に罪過の借金に困しめられて居る。宜しく活眼を開いて實相を見破せよ、『六道の輪轉も轉た風流、生死去來眞實の人』である。草木國土悉皆成佛、塵々刹々本來解脫、更に何れの處にか我を束縛するものゝあるべき。

飢逢二王饍一不レ能レ喰。病遇二醫王一爭得レ瘥。在レ欲行レ禪知見力。火中生レ蓮終不レ壞。勇施犯レ重悟二無生一。早時成佛于レ今在。

【和訓】飢えて王饍に逢ふとも喰ふこと能はずんば、病んで醫王に遇ふとも爭でか瘥ゆることを得ん。欲にありて禪を行ずるは知見の力なり、火中に蓮を生ず終に壞せず。勇施重を犯して無生を悟り、早時成佛して今に在り。

前段より以下は、四部錄ではこの本文と大いに相違がある。句の前後して居るのみならず、全然異なつた句もあるが、今は一々これを擧ぐるの煩を避けて、唯だ我が宗普通の用ゆるところに依つて說明するこ

る。故に『了ずれば則はち業障本來空』で、更に一塵の佛性を礙ゆるものはない。了は悟了で、不見一法が即悟了である。故に業障も本來空である。業障とは惡業の障りである。一切衆生悉有佛性であるのに、自から枉げて三界生死の間に四苦八苦の繋縛に惱むのは、皆な自己惡業の致すところである。

凡そ正道を障へ、善心を遮ぎるものに三種ある。これを三障と名づく。一には煩惱障、即ち貪・瞋・痴三毒の妄念、二には業障、即はち身・口・意の三業の上に起すところの諸々の不善行、三には報障、即はち煩惱と惡業とに依つて受くるところの六道の身分等である。煩惱と業とは原因で、障報は結果である。原因を斷ずれば將來に惡果報を受くることがない。而して煩惱の外部に形はれたのが業障であるから、業障の中に他の二障は自づから籠つて居る。然らば業障なるものは畢竟如何と觀照し見よ、一切諸法は夢幻泡影の如しだ。吾人の身分もまた空中の幻華たるに過ぎぬ。身分の上に發したる善惡の行業も、見來れば水上の波の如くにして、夢中の行爲と一般である。大道の根源から眺めたならば、何處に業障なるものゝ實體があらう。故に、臨濟禪師曰く『我れ十二年の中に於いて、一箇の業性を求むるに、芥子ばかりの如くも得べからず』と達人の達觀はかうである。

されぱとて因果を昧ますことではないぞ。有名なる越後の良寛和尚が盜賊と間違られて打たれし時、顏色もかはらずして『打つ人も打たるゝ人も諸共に如露亦如電應作如是觀』といへる古歌を吟じて泰然たるものであつたといふ。宇宙の大精神を覺了すれば、苦中にも大樂を得、勤處にも大靜を占むるに依つて

【和訓】一法を見ざれば卽ち如來なり、方に名づけて觀自在と爲すことを得。了ずれば則ち業障本來空、未だ了ぜざれば還つて須らく宿債を償ふべし。

『一法を見ざれば則ち如來』不見一法の一語に能々參究し去るを要す。謬つて空見に墮在してはならぬ。『一佛成道觀見法界、草木國土悉皆成佛』といふのが、不見一法の的意である。凡夫は宇宙を大觀するの智慧がないから見聞のために誤まられて、無繩自縛するのである。法界一佛心と見破する時は、佛心ならざる法はない。これ卽ち不見一法である。故に一法を見ざる時十方を觀見するのである。これが眞の如來である。而して『方に名けて觀自在となすことを得』で、これが觀音大士の修證である。

觀世音菩薩を觀自在ともいふ。華嚴の法藏は釋して『理事無碍の境に於いて觀達自在の故にこの名を立つ、また機を觀じて往いて救ふこと自在無礙なり、故に以つて名と爲す』というてある。前者は自覺的觀念にして智慧に屬し、後者は利他的觀念にして慈悲に屬す。觀智あるを以つて、內、大道に合沓し、觀機に依つて、外、衆生を攝取す、この兩者に於いて滯ふるところなきが故に觀自在といふのである。されば觀自在といふても超人的の大士のことゝのみ思ふまいぞ。『柳は染む觀音微妙の相、松は吹く說法度生の聲』である。大智禪師は『箇々面前觀自在、人々一座補陀山』ともいはれた。

自己を內觀して徧法界の佛性を見破し、衆機を觀察して徧法界の慈悲を顯現する時は、盡十方世界、只だこれ一佛性となり、大慈悲となり、自他の隔てなく、迷悟の隔てなし。これが不見一法の觀自在であ

とかいふ分別の對境を認め、これに着して憶度を逞うするに於いては、恰も猿猴が水中の月影を捉へんとして騒ぎ廻るやうなものです。

虚りにとは道理の根據なきをいふ。揑怪の揑は、捻聚なりとありて、無暗にかり集めること、怪は異なり奇なりと註してある。故に揑怪といふは樣々な道具を物珍らしげに捻くり廻すといふ意で、つまり妄想分別を以つて、葉を摘み、枝を尋ね廻ることである。されば吾々にして苟くも微妙の眞理を體達せんと欲せば、先づ以つて此等の妄想袋を打破つてしまふがよい。

昔、德山禪師小參の時、衆に示して『老僧、今夜答話せず、問話のもの三十棒』といはれた。時に僧あり出でゝ禮拜す。師は便はち一棒を與へられた。すると彼の僧は『某甲話も也た未だ問はざるに、和尚甚麼に因つてか某甲を打つや』というた　師曰く『汝はこれ甚麼のところの人ぞ』、僧曰く『新羅の人』、師曰く『未だ船舷に跨らざるに、好し三十棒を與ふるに』といはれた。實に徹悃の慈悲方便ではないか。この本文を會せんと欲せば宜しくこの公案に向つて精彩を着くるがよい。

不レ見二一法一卽如來　方得三名爲二觀自在一。了則業障本來空。未レ了還須レ償二宿債一。

頭に於いて、實解、卽ち何物かゞ實在するが如くに解了して、淨といへば實に淨なりと執し、不淨といへば實に不淨なりと思うて、欣厭憎愛の念止むことがないのである。

更にその實解の狀態を述べて『指を執して月となす狂て功を施す、根境法中虛りに揑怪す』と仰せられた。眞理の妙は自知自得に依るの外はない。人の水を飮んで冷煖自知するが如くにして、到底、筆舌を以つて說明し盡すことは出來ぬ。故に、一代藏經と雖も天邊の明月を指し示すところの指のやうなものである。されば圓覺經には『修多羅の敎は月を標する指の如し、若し復た月を見れば所標は畢竟じて月に非ざることを了知す。一切の如來種々の言說をもて菩提を開示することも亦復たかくの如し』とある。無に執する者のためには有と說き、色に着する者のためには空と說き、以つて有無の兩端を超出せる微妙の眞理を開悟せしむるのである。

然るに、有とか無とかいふ言說に拘泥して、その微妙の理に達することを知らされば、恰も指すところの指を執して月なりとなすが如し。これすでにその根本を錯まつたのであるから、如何ほど研究しても分別しても、唯だ狂げて修行の功勳を施し徒らに辛苦を嘗るのみで更に悟入の分はない。何故ならば、自己の妄分別を以つて想像するは、六根と六境と相對する上に於ける對待の見であるからである。

六根は眼・耳・鼻・舌・身・意の六官能にして、己れの分別材能である。六境は色・聲・香・味・觸・法の六塵にして、分別の相手である。眞理實相は法界圓融して自他の相を泯じて居る。然るに、有とか無

夫は皆な愚人と言はねばならぬ。ソクラテースは『汝自身を知れ』というたが、徹底自己を知れるものは千萬人中に一箇を得ることも難い位のものである。己れを知らざるものは他を識ることも出來ぬ。古今東西の學者智者といふ人々も、佛眼より觀れば皆な愚癡の窠窟を脫することはむづかしい。

小騃の騃は『痴なり、無知なり』と註してあるから、小兒の無知なるが如く何事をも知らぬ者を小騃といふ。普通の凡夫は自己を知らぬのみならず、知らうともせぬ。故に生れて來た譯も知らず、死しての後のことも知らぬ。つまり我は何物ぞといふことが解らぬのである。思へば淺しきことではないか。

そこで佛祖はその迷妄を愍みて、一切衆生本來成佛なるぞ、生死涅槃も猶ほ昨夢の如きものぞ、と大聲疾呼して大眞理を開示せられたけれども、大聲俚耳に入らずで、聾の如く啞の如くである。止むを得ず肉體に惑溺するものには不淨觀を修せしめ、世相に耽着するものには無常觀を修せしむるといふやうに、病に應じて藥を施し、根機に隨がつて法門を敷かれたから、遂には無量無邊の法相を分つに至つたのである。

併し、その實相を見破すれば清淨とも不淨とも名けられぬ。無常とも常住とも斷ぜられぬ。畢竟じて不可言の法、不可得の法である。その不可得不可言の中に於いて、或時は常住と說き、或時は無常と說き、乃至、淨不淨、生不生、有非有等と說くのは、恰も空拳を擧げて、さあお寶を與ふるぞというて小兒をなだめるやうなものである。然るに愚痴小騃の輩は、佛祖の眞意を辨ずること能はずして、却つて空拳の指

智慧には根本智と差別智とがある。根本智とは自己の本性を究明するをいひ、差別智とは諸法の性相を研究するをいふ。世間的學者なるものは、差別智の一部を開くことを得るも、未だ根本智に達してをらぬ。故に佛祖の眼より見來れば決して眞の智者といはれぬ。こゝを以つて生死の纏縛脱し難く、煩惱の禍根除き難し。何を以つてか永遠の大安心を獲得するに堪へんや。

## 亦愚癡亦小騃。空拳指上生二實解一。執レ指爲レ月枉施レ功。根境法中虚捏怪。

【和訓】亦た愚癡亦た小騃、空拳指上に實解を生ず。指を執して月となす枉げて功を施す、根境法中虚りに捏怪す。

二乘は利他慈悲の願行なきが故に活動の志氣を失ない、枯木死灰と同一にして何等の價値をも認められぬ。外道は斷常の二見に落在するが故に生死緣起の理を識得すること能はざるを以つて、決して圓滿なる眞理に契當することは出來ぬ。その外衆生の根性は區々別々であるが、何れも無明の煩惱に昧却せられて居ることは同一である。故に『亦た愚痴亦た小騃、空拳指上に實解を生ず』るのである。

愚癡とは、自ら惑ふのが愚で、他に惑ふのが痴である。己れを知らざるのは愚であるとすれば、吾々凡

しめ、大地を震動せしめ、天華を亂墜せしむとも、はやくこれ庫主の見解、いまだ本色の衲僧にあらず』とあるは甚深の御教訓である。

制とは法則といふ意味である。佛の經教は盡く轉迷開悟の法則であるから制というたのである。そして、その邪解者の尤なるものは二乘と外道であるに依つて『二乘は精進して道心なく、外道は聰明にして智慧なし』と仰せられた。聲聞・緣覺は二乘は頗ぶる精進力に富み、あらゆる艱難を厭はず、能く己れに克ち私しを制して一切の煩惱を斷ずるに努むるも、惜いかな利他の道心がない。

道心とは菩提心である。高祖承陽大師は『菩提心を發すといふは、己れ未だ度らさる前に一切衆生を度さんと發願し營むなり』と仰せられてある。眞正の道心は慈悲心である。慈悲心なきものは佛心なきものである。二乘は自調解脫を主として、利他の慈悲心がないから、佛種子たるべき資格を失却し去つて居るものである。

また、外道とは世間的學者である。一心の本源を知らず、佛陀の眞乘に暗きものを外道といふ。今日の無宗教的學者などは皆な外道である。外道は甚だ聰明にして利口である。四書の蒙引には『天下の理に於いて聞かざるところなきを聰と曰ふ、見ざるところなきを明と曰ふ』とある。釋尊時代の婆羅門教徒、支那に於いては孔老の流を酌む者、また、西洋に於ける古今の哲學者などは何れも聰明であるが、惜い哉、自己を徹證するの智慧がない。

故に『種性邪なれば錯つて知解す、如來圓頓の制に違せず』發心正しからざれば萬行も皆な虚事となる。種性は種子性質で、衆生の根性をいふ。一切衆生本來平等なれど、薫習の力に依つて種々の根機に分れる。卽ち自利的根性もあれば利他的性質もある。從がつて聲聞性もあれば菩薩種もある。殊に凡夫の如きは多くはこれ名利の奴隷である。豐屋に住し、錦衣を纏ふところの人々と雖も、その腔子裡を點檢して見たならば、名利以外には何物をも存せぬといふ連中が甚だ尠なからぬであらう。思へば果敢なきことならずや。

この妄想を打破せざれば益々邪境に陷いることを致し、よしや佛門に身を投ずるとも佛法中に於いて、多少の人を迷却することを免れぬ。或は自利を重んじて利他を忘れ、或は偏執に墮して眞諦に遠ざかり、或は因果を撥無して修證を勵ます。或は信念を失却して徒らに尊大自から誇る。これ等の類は皆な種性の邪なるものである。見よ佛徒にして猥りに小知小見に誇りて他を排斥することを維れ事としたり、また、妄りに自宗に染着して他の正法を聽受することが出來なんだりする者が澤山ある。佛弟子の宗見を固執する者、禪侶の小知見を鼻にかけるものなどは最も濟度し難き痴物である。これ等の輩は、縱ひ正師に遇ふとも聖教を見るとも、己見己我に礙へられて盡く皆な錯りて邪解し曲解するから、遂にその法益を得ることが出來ぬ。從がつて如來圓頓の正法に通達することも不可能である。太祖常濟大師が『一度覺觸せざれば、千萬の法門、無量の妙理も、徒らに業識流注となる』とも『たとひ千經萬論を講得し、佛を影向せ

となきや。若干の公案を透得せりと稱して、却つて一双の眉毛に辜負することなきや。或は經論を知らずして經論を呵罵し、他宗の敎義に暗くして他宗を攻撃するものあり、世にこれほど醜きことはあらじ。かくの如くにして一生を送過し去らば、閻羅の一棒何に依つてか免がるゝことを得んや。須らく我慢幢を倒却し、妄見我執を放下して、綿々密々の行持を打すること萬里一條鐵にして始めて之を得べし。禪固と洞・濟の別なし、工夫豈に默照・看話の二致あらんや、有時は入理の深談、有時は門庭の施設、有時は做工夫、有時は奪工夫、鑑、機前に在り、人を殺すに眼を鎖せざる底の漢たらずんば、爭でか向上の關捩子を透得することを得んや。

**種性邪錯知解。不達如來圓頓制。二乘精進無道心。外道聰明無智慧。**

【和訓】種性邪なれば錯つて知解す。如來圓頓の制に達せず。二乘は精進にして道心なく、外道は聰明にして智慧なし。

迷ひの前の善惡は善惡倶に迷ひなり、悟りの前の善惡は善惡倶に悟りなり。妄想を以つて天地を見れば、天地萬象はみな凡夫世界であるが、一たび佛知見を開いて宇宙を觀ずれば、草木國土も悉皆成佛である。

することなく、法の淺深を擇ばず、但し修行の眞僞を知るべし』と仰せられた。修行にして眞ならざれば、大乘の教相も瓦礫に等し、若し行持にして堅固ならば喫茶喫飯もまた正法眼藏なるべし。故に『却つて如來に苦ろに呵責せらる、他の珍寶を數へて何の益かあらん』というたのである。

永嘉大師は更に昨の非なることを追懷して『從來蹭蹬として虛りに行くことを覺ゆ、多年枉げて風塵の客と作る』といはれた。蹭蹬は道を失ふなりと註して、無方針に飛び歩くことである。發心正しからざれば萬行虛く施す。或は名のために法を修行し、或ひは利のために佛を供養す。皆な虛しく行くので、畢竟じて徒行である。これを跉跰の窮子ともいふのである。大師自ら顧みるに、吾れもまた多年の間枉げて風塵中の客となりて、虛行のみを打して居つた。風塵とは塵芥の風に散るが如く、漫然として漂泊をこれ事とするをいふ。この語は大師自誡の文なれども、また以つて今日の吾人に對する剴切なる教訓とも見るがよい。

今日、吾人分上果して如何なる修證をか成ずるや、道德を論ずるもの果してその行爲が道德になつて居るであらうか、宗教を談ずるもの果してその精神が宗教になつて居るであらうか、政治に當るもの果してその身心が政治的模型に契つて居るであらうか、經濟に任ずるもの果してその志操が天地に耻かしからぬほど堅固であらうか、仔細に點檢して見たならば頗る愧づべき點が多いではあるまいか。殊に禪道を話說するの人、その心操行持果して如何、纔かに瞥地の智通を得たりとて、我慢幢を竪てて、惡口罪を犯すこ

おろかに千萬誦の口業を頻りにして、佛道に至らんとするは猶ほこれ轅を北にして越に向はんと思はんが如し、また圓孔に方木を容れんとせんと同じ、文を見ながら修するみちに昧き、それ醫方をみる人の合藥を忘れてなにの益かあらん、口聲をひまなくせる春の田の蛙の晝夜になくが如し、終にまた益なし』云々と誡められた。

却被㆓如來苦呵責㆒。數㆓他珍寶㆒有㆓何益㆒。從來蹭蹬覺㆓虚行㆒。多年枉作㆓風塵客㆒。

【和訓】却つて如來に苦ろに呵責せらる。他の珍寶を數へて何んの益かあると。從來蹭蹬として虚りに行ずることを覺ゆ。多年枉げて風塵の客となる。

初めの一句を一鹹味には『竊念㆓如來呵責㆒』に作り、覺を學に作れり。

徒らに多聞博學を事とするは却つて菩提の妨げになる場合が多いから、釋迦如來は幾度か苦言を以つて呵責せられてある。華嚴經に『一人の他の寶を數へて自から半錢の分なきが如く、法に於いて修行せざれば多聞もまたかくの如し』と仰せられた。天文學者が天文を觀測しても、自身は地上を一歩も出づることは出來ぬ。佛敎は實行を貴ぶ、徒らに多聞を事とするは空論である。承陽大師は『佛家には敎の殊劣を對論

る大學者であつたから、古今の註疏を討究し、あらゆる經論に就いてその玄義を尋繹せられたのである。

次に『名相を分別して休することを知らず、海に入り沙を算へて徒らに自から困す』というて、經・律・論の三藏を渉獵し、三乘十二分教を研究するとも、多くは名相の分別である。名相とは名目の法相で、小乘の七十五法とか、大乘百法とか、天台の五時八教とか、華嚴の五教とかいふやうに、澤山な名目と法相とがある。これ等を比較し研究して、深淺を論じ高下を分ち、滴れ漏らさゞるまでに講説し得るとするも、若し脚跟下の一大事に通ぜざる時は、恰も海に入りて沙を算へるが如くであつて、唯だ徒づらに自から勞苦を招くのみである。一生區々として學問に首を附込んで居ればとて、それは文學と法相との穿鑿に過ぎぬ。古人が『聖人の道は耳に入りて心に存す、これを蘊めば徳行となり、これを行なへば事業となる、彼の文辭のみを以つてするものは陋し』というたもこゝらである。佛法の大事は人々の方寸裡に向つて佛徳を顯現するにあるのである。口舌の才能は畢竟無功に屬する場合が多い。

近代は學問の道大に開けて學術的思想の進歩は殆んど空前の勢ひを示して居る。是れ人文發達上、最も喜ぶべきことである。されど、この學術の進歩のみを以つて眞個の人格を完成するものとは言はれぬ。口に哲學を説き、筆に宗教甚深の理を描すとも、人々分上に心地を開明して、絶學無爲の修養を缺くに於いては、依然として算沙の客たることを免れぬ。

承陽大師は辨道話に於いて『徒らに思量念度を費やして、菩提を得ん功徳に擬せんとにはあらぬなり、

る。禪を修すれば禪我れを生じ。信を發すれば信我れを生ず、濟度し難きは悟れりと自ら許すの人、引導し難きは信ぜりと自ら誇るの人である。われ悟りと思ふ者は、動もすれば天下の內誰を見ても皆な馬鹿に見える。信ぜりと誇る者は、我れ獨り佛に親近せりと思うて、如何なる正道に逢ふもこれを聞取することが出來ぬ。これ皆な妄想を以つて禪を修し、我執を以つて信をとるからである。同一の水なれど牛が飲めば乳となり、蛇が飲めば毒となる。學佛法の人及び學を修むるの人は能く此に精彩を着けるがよい。

吾早年來積二學問一。亦曾討レ疏尋二經論一。分二別名相一不レ知レ休。入レ海算レ沙徒自困。

【和訓】吾早年より來學問を積み、亦曾つて疏を討ね經論を尋ぬ。名相を分別して休することを知らず、海に入り沙を算へて徒らに自ら困ず。

この一節と次の一節とは永嘉大師が自身の經歷談である。一鹹味には『年』の字がない。或は此の方が正當かも知れぬ。

大師は幼少の頃より學問に勉強し、世間・出世間の學術を修め、專ら力を知識の發達に盡された。故に『吾れ早年より來た學問を積み、亦曾て疏を討ね經論を尋ね』と仰せられた。大師は天台宗に於ける有名な

を佛に獻す、佛直ちにこれを受け給へり。龍女は智積と舍利弗に謂つて言はく「我れ寶珠を獻ず、世尊納受す、このこと疾かなるや否や」答へて言く「甚だ疾かなり」龍女言はく『汝は神力を以つて我が成佛を觀よ、復たこれよりも速かならん』と。當時の衆會皆な龍女が忽然の間に男子に變成して菩薩行を具し、卽ち南方無垢世界に往きて寶蓮華に坐し、等正覺を成じ、三十二相八十種好ありて、普ねく十方一切衆生のために妙法を演說するを見たとある。

佛法といふは自己なり。自己は佛法なり。正知見を以つて自己を識得する時、佛法は忽ちに現前するなり。男女老少を論ずべきに非ず、變成男子というても、身體の構造を變更するものと思ふまいぞ。非男非女の脫落面を見得したのが、變成の佛身である。見聞覺知の上に不染汚なる時が無垢世界である。

また、善星のことは、涅槃經に出て居る、善星比丘は十二部經を讀誦し、四禪を獲得したが、惜しい哉、彼には正知見がなかつた。そこで遂に四禪をも退失して因果の理を撥無し、殆んど極端なる斷見に墮ちて、『佛もなく法もなく涅槃もあることとなし』と主張した。釋尊は大にこれを憐み給ひて、更に彼がところに赴かれた。彼は遙に佛の來るを見て、乃ち惡邪の心を生じたので、生身に無間地獄に陷入したとある。

吾人もまた因果を撥無し、若しくは神佛を無みするが如きことあらばやはり善星の御仲間である。現代には却々多くの善星があるやうに思はれる。不信邪見なればその人の心中は既に暗黑の地獄である。胸臆裏には唯だ貪名愛利の欲望のみあり、我見競爭の妄想のみあらば、最早、地獄底下の人ともいふべきであ

釐もすれば失すること千里』と言はれた。非に絶對の非なく是に決定の是なし。是非の根源は吾人の一心機に在るのである。毫釐の差が千里の隔たりをなすのだ。忽然念起名けて無明となす。一念微動により、自他相に迷ひ、是非の爭ひを起す時は、脚下の大道を失却して千里の懸隔を見るに至る。

昔は法達法華を讀むこと三千部、猶ほ迷妄の窩中に在り、曹溪大師に相見して始めて眞の法華を了却することを得たり。大師、時に示して曰く『口に誦し心に行ずれば卽はちこれ經を轉ず、口誦して心に行ぜざれば卽ちこれ經に轉ぜらる』と、また、偈を示して、心迷へば法華に轉ぜられ、心悟れば法華を轉ず』云々と仰せられた。法達もまた曰く『法達昔より已來實に未だ曾て法華を轉ぜず、乃はち法華に轉ぜらる』と。一代藏經皆なかくの如しである。

次にその例を擧げて『是なるときんば龍女も頓に成佛し、非なるときんば善星も生きながら陷墜す』と示された。是とは正知見を以つて佛法を學すること、非は邪思惟を以つて佛門に投ずること、龍女も頓に成佛すとは法華經提婆品の說である。

文殊菩薩が佛會に來りて『沙竭羅龍王の女年始めて八歲、智慧利根にて諸佛の妙法を得たり』と仰せられしに、智積菩薩は大にこのことを疑はれた。時に龍王の女忽ち前に現はれ、偈を說いて釋尊を讚歎した。舍利弗尊者は龍女に對して『汝は久しからずして成佛すと聞く、佛道は懸曠なり、無量劫の苦行を要す、然るに女人の身を以つて卽生に成佛するといふことは信じ難し』といはれた。爾時、龍女は一の寶珠

に遊戯し、物外に安住しながら大慈悲の妙用を發揮するのである。大慧禪師の書に『斷見とは自心本妙明の性を斷滅却して、一向に心外に空に着して禪寂に滯ほる、常見とは一切法空なることを悟らず、世間諸の有爲の法に執着して以つて究竟と爲す』と説かれたるは、適切なる説明である。

**非不レ非是不レ是。差レ之毫釐失千里。是則龍女頓成佛。非則善星生陷墜。**

【和訓】非も非ならず是も是ならず、之に差ふこと毫釐もすれば失すること千里。是なるときは龍女も頓に成佛し、非なるときは善星も生きながら陷墜す。

文殊菩薩、曾つて善財童子に命じて藥草を採らしむ。善財、徧ねく大地を見るに、一草も藥ならざるはなかつた。乃はち手に信かせて一草を採つて文殊菩薩に度與す。菩薩接得して衆に示して『この藥能く人を殺しまた能く人を活かす』といはれた。草に殺活の定性あるに非ず、殺活は終に吾れに在るのである。一切諸法は同一の性であるから、その體は迷悟の相を絶して居るが、凡夫はこれに迷うて苦を招き禍を牽き、聖者はこれを悟りて樂みを享け喜びに住す。佛法もまたかくの如く、正人これを説けば皆な正なりと雖ども、邪人これを用ゆれば却つて邪見に墮す。故に『非も非ならず是も是ならず、これを差ふこと毫

大慧禪師が天寧に居して第一座に擧られた時、自ら香を炷いて『寧ろこの身を以つて衆生に代り、地獄の苦を受くるとも、終に佛法を以つて人情に當てず』と誓はれたとある。吾人も斯くなければならぬ。故に、永嘉大師は、達磨の佛法は人情の束縛を許さぬから、苟くも疑情があつて、解決がつき兼ねるならば、何處までも爭うて研究を戰かはし、論議を進めて、飽までも信得及するまで實參實究せよと言はれたのである。

次に『是れ山僧が人我を逞うするにあらず、修行恐らくは斷常の坑に墮せん』と仰せられしは、實に徹骨徹髓の慈誨である。大師が佛法の弊風を歎じ、證道の大經を示すがために、種々の苦言を施すのは、決して人我の見を逞うするのではない。人我といふは宗見宗我のことである。先入主となるの理で、吾吾は動もすれば自分の信ずる敎義を執して、無暗に宗派的見地に蔽はれやすいものである。

承陽大師は『佛法には敎の殊劣を對論することなく、法の淺深をえらばず、たゞ修行の眞僞を知るべし』と仰せられた。この修行力が眞か僞かといふことが大切である。佛法の修行が世を害し人を謬るやうでは、縱ひ大乘の妙典を傳ふるとも、却つて外道の典籍となる。これに反して世を益し人を導くことあるに於いては、小乘の法要と雖ども直ちにこれ佛陀の眞風である。若し空を聞いて斷滅の見に陷いり、佛性常住を聞いて常見に墮在するが如きことあらば、佛法中の外道と謂ふべきである。

佛法は正眞調直の道である。空中に常德を現はし、常中に眞空を證す。世間に在りながら大解脫の三昧

【和訓】圓頓の教は人情沒し、疑ありて決せずんば直に須らく爭ふべし。是れ山僧が人我を逞うするにあらず、修行恐らくは斷常の坑に墮せん。

佛祖の大道は人情を以つて左右することは出來ぬ。故に『圓頓の教は人情沒し、疑ひありて決せずんば直に須く爭ふべし』と仰せられた。圓頓の教とは、達磨大師所傳の我が禪門の宗旨をいふ。圓とは偏邪を離れて、理として備はらざるなく、德として全からざるなきの義、頓は漸に對して直下に承當するの法門である。とかく學佛法の人は多く名相言句に着するから困る。十萬億土を隔つといへば遠方のこととのみ思ひ、三祇百大劫と聞けば、直ぐその數字に拘泥するに依つて、遂には一佛法の中に於いて徒づらに是非の爭ひを起すやうになる。

六祖大師は『心地たゞ不善無ければ、西方こゝを去ること遙かならず、若し不善の心を懷かば、念佛往生して到ること難し、今、善知識に勸む。先づ十惡を除かば即はち十萬を行かん、後、八邪を除かば乃はち八千を過ぎん、念々見性して常に平直を行せば、到ること彈指の如くにして便はち彌陀を觀ん』云々と示された。吾人が佛教を觀る、須からくこの見知を具へざるべからず。若し能く恁麼ならば、八萬の法門は盡く吾人の脚跟下に七通八達するであらう。この見知は人情の測るところではない。人情といふは凡夫根性のことである。事相に執するのも人情なれば、事相に背くのも人情である。一知半解を以つて佛法を判ぜんとするが如きは、果然として附佛法の外道たるを免がれぬ。

のであるから、百千の野干が群をなして、あらん限りの妖怪變化の力を盡して吼え立てたとても、唯だ無闇矢鱈に口を開くのみで、到底、獅子の眞似は出來ぬ。故に『若しこれ野干法王を逐ふならば、百千の妖怪も虚りに口を開かん』といふたのである。山僧（自分）の如きも身は禪門の一數に在りと雖も、道業未だ成らず、願力未だ堅からず、動もすれば野干鳴をなして妄りに獅子吼に擬せんとす。洵に愧づべきことである。

山僧の本師如禪老漢の夜話に、老漢、壯にして錫を美濃國關の龍泰寺に掛け、來應禪師に參侍す、一日僧あり來り問ひ、禪師に參見して『金毛の獅子出で來る、請ふ師一接』とやつた。その勢ひ殆んど當るべからざるものがある。すると、師は前の机の陰にヒヨツクリ頭を藏した。その僧擬議す。師忽ち頭を出して『果然として野干鳴』といはれたことがある。子等もまた學問和解のみを以つて禪旨を得んと欲せば、この野干鳴を免がれざるものあらんといはれたことがある。今に至りて益々この話頭を思ひ出し轉た慚惶に堪へざる心地がする。

圓頓敎沒二人情一。有レ疑不レ決直須レ爭。不三是山僧逞二人我一。修行恐墮二斷常坑一。

群がり行く、夜になると鳴く聲狼の如しといふ。野狐の如き種類のものであらう。こんなものは百千年かゝりて獅子の眞似をしやうとしても駄目であるが、眞の獅子兒ならば三年にして能く獅子吼をなすものである。野干とは名利の邪念に捕はれたり、または佛法に入ると雖も文字や言句に附き纏うて居る連中である。
昔は德山禪師、衆に示して『問へば卽はち過ちあり、問はざればまた乖く』といはれた。言句に墮するも不是なれば、言句を離るゝもまた不是である。こゝに不傳の妙旨があるのである。時に一僧ありて衆を出でゝ禮拜した。この僧なにか胸中に一物を貯へて居るらしい。すると禪師は直ちに一棒を與へた。この僧驚いて『某甲話も也た未だ問はざるに甚としてか打つ』といふた。果然として說默の相に縛せられて居る。そこで禪師は『汝が口を開くを待たば什麼を作すに堪へん』といはれた。實に徹悃の御示しではないか。併し、大概の禪者はこの僧の御仲間で、默つてさへ居れば是非を絶するものと思ふのは妄想の重ね着である。

彼の弘安四年の秋、元虜の大軍我が鎭西を侵せし時、執權北條時宗、軍裝して祖元禪師に見えて曰く『大事到來せり』、師曰く『如何か向前せん』、時に公は身を躍らして大喝した。師は莞爾として『眞の獅子兒、能く獅子吼す、驀直に進前して回顧すること勿れ』といはれた。この獅子吼ありてこそ栴檀林中に獨立獨步し去ることが出來る。

德山會下の一僧の如く妄想袋を擔ぎ廻つて居たならば、野干が獅子王の背後を逐ひかけて居るやうなも

きもなく、下、煩惱の斷ずべきもない。天上天下唯我獨尊の風流が打せらるゝのである『獨り自ら遊ぶ』とは、緣に隨つて放曠して、更に塵累の脚跟を遮るなきをいふたのである。承陽大師の謂はゆる『守るとも思はずながら小山田のいたづらならぬ案山子なりけり』とは獅子王の端的を詠ぜられたものである。さればば走獸も飛禽も皆な遠方に遁げ去つて、その跡を絕つて居る。純一大乘の佛祖門中には、小乘や外道の頷出しは許さぬ。況んや惡魔鬼神をやである。吾人が七尺單前兀々地に坐定する時が卽ちそれである。

## 獅子兒衆隨レ後。三歲便能大哮吼。若是野干逐二法王一。百千妖怪虛開レ口。

【和訓】獅子兒衆後へに隨ふ、三歲にして便はち能く大に哮吼す。若し是れ野干法王を逐ふならば、百千の妖怪も虛りに口を開かん。

佛祖の兒孫たるものは必ず佛祖なるべし。獅子王の在るところには、必ず獅子兒の衆をなして後ろに隨ふが如くならさるべからず。卽ち『獅子兒衆後へに隨ふ、三歲にして便はち能く大に哮吼す』である。涅槃經には『猶ほ野干の獅子を學ぶこと百千年に至ると雖も、終に獅子の吼を作す能はざるが如し、獅子の子の若きは三歲なれば則はち能く哮吼す』とある。野干は能く木に緣る獸で、形色は青黃で、狗の如くに

獸飛禽皆遠く去る。

前段には末世の弊風を警誡し、これより以下は眞純無雜の禪林の風規を示されたのである。

『栴檀林に雜樹なし、鬱密深沈として獅子のみ住す』といふは、正しく曹溪門下純一の風致である。栴檀は梵語で樹の名である。こゝには與樂と譯し、これに白檀・赤檀等の種類がある。祖庭事苑に『白檀は能く熱病を治し、赤檀は能く風腫を去る、皆な除疾身安の藥なるを以つての故に與樂と云ふ』とある。この栴檀林には他の雜木がない。栴檀、卽ち香木の勢力熾盛なるがために餘外の樹木は發生せぬと見ゆる。鬱密は叢生稠密の貌で、隙間もなく繁茂して居ること。深沈は幽邃の貌で、奧深くして閑寂なること。この幽邃のところに獅子王が棲んで居るから、他の獸類は寄りつかぬ。曹溪直指の佛法は猶ほ栴檀の如く、能く衆生の惑業の病を療して、安樂の法門に歸入せしむ。而して、唯佛與佛乃能窮盡の道場であるから、恰も獅子王の蟠踞するが如くにして、天魔外道も近傍することが出來ぬ。

而して、この栴檀林の位地はといへば『境靜かに林閒にして獨り自ら遊ぶ、走獸飛禽皆な遠く去る』で、その境地は靜かにて浮世の塵を受けず、その林も閑寂にして春風秋霜のために變動することがない。いはゆる物外の別天地である。別天地といふても遠方のことと思ふまい。到るところ無心なれば便はちこれ山である。維摩經に『白衣たりと雖ども沙門淸淨の律行を奉持し、居家に處すと雖ども三界に着せず』とあるのはこれである。若しこの境界に達すれば花街柳巷も枯木堂の大道場であるから、上、菩提の求むべ

り聖教を無し、遂に惡道に墮落して了ふ。故に『無間の業を招がざることを得んと欲せば、如來の正法輪を謗すること莫れ』と誡められた。

無間といふは無間地獄で、地獄の中の最苦の世界である。正法輪とは天台の輔行に『結惑を摧破すること王の輪寶の能く壞り能く安んずるが如し、法輪もまた爾り、煩惱の怨を壞りて諦理に安住す』とある通り、如來の正法には一切の煩惱惡魔を打摧くの妙用あるを以つて、輪寶の能くものを摧破するに喩へたものである。謗するといふは單に口先で非難することばかりではない。心に不信を抱くのは全く正法に反對するのである。苟くも佛教の教條に違背するものは盡く不孝の子と言はねばならぬ。果して然らば今の世に不孝の子たらざるものは抑も幾許かある。吾人は自ら顧みて慚汗の滴るを覺える。況んや、神佛を無し正法を謗る輩の如きは、生々世々三惡道に墮在して、終には無間獄中の定客となつて了ふであらう、豈に恐れて且つ懼れざるべけんや。

栴檀林無雜樹。鬱密深沈獅子住。境靜林間獨自遊。走獸飛禽皆遠去。

【和訓】栴檀林に雜樹無し、鬱密深沈として獅子のみ住す。境靜かに林間にして獨り自ら遊ぶ、走

惡報に對する警誡を下されたのである。

初めに『作は心に在り殃は身に在り』とあるは、作は行爲卽はち作業のこと、殃は種々の苦報をいふ。一切の行爲は妄心より生ず。心念鼓動して貪慾・瞋恚・愚痴等を起し、それより種々の作業を現はす。而して、その結果は凡夫の身、業繫の報を受けて、様々なる殃禍を感ずるのである。臨濟禪師はこの理を示して『儞が一念心の語、地に來り礙へられ、儞が一念心の愛、水に來り溺され、儞が一念心の嗔、火に來たり燒かれ、儞が一念心の喜、風に來り飄はさる、若し能くかくの如く辨得せば境に轉ぜられず』云々と仰せられた。されば十界の別、三千の相も、その本源は自己の一念心を出でぬ。因果の法則より觀れば、何事も自作自受、自業自得である。故に『怨訴して更に人を尤むることを須ひざれ』と示されたのである。

渡邊崋山は公明正大の志しを抱きながら時利あらずして蟄居の身となりしも『とりつみて身を炭竈のけむたきは己がたきさふ薪なりけり』といふ歌を詠じて諦らめて居られた。頼三樹三郎は三十五歳にして刑場の露と消えたる勤王家であるが、その辭世は『まかる身は君が世思ふ眞心の深からざりししるしなるらん』といふのであつた。眞に大志あるものは妄りに人を恨み世を怨らむの愚をなさぬ。熊澤蕃山も『人は咎むとも咎めじ、人は怒るとも怒らじ、怒りと欲とを捨てゝこそ常に心は樂しからめ』というて居る。邪見不信の人には、却々この明らめはつきかねるものだ。啻に明らめの出來ざるのみか、益々神佛に遠か

『如來頓教の門を說くことを聞いて、滅除して瓦のごとく碎かしめざることを恨む』といはれたのである。

この二句を、一說には『迷妄不信の輩は頓教の法門を說くことを聞くも、却つてこの法門に反對してこれを滅除して粉碎することの難きを恨みとして居る』といふ意味に見て居る。何れも文意は通ずるが、前說の方が適切のやうに思はれる。

作在レ心殃在レ身。不レ須二怨訴更尤一レ人。欲レ得レ不レ招二無間業一。莫レ謗二如來正法輪一。

【和訓】作は心にあり殃は身にあり、怨訴して更に人を尤むることを須ひざれ。無間の業を招かざることを得んと欲せば、如來の正法輪を謗すること莫れ。

この四句は前節を承けて、痛切に邪見不信を誡められたものである。信念の基礎は、因果の原則の一毫も昧すべからざることを信ずるに在り。因果を信ぜざれば、佛の存在をも信ずること能はず、來世の苦樂をも信ずること能はざるべし。抑も因果の道理は歷然として私なし。三界六道、生死變易の苦患は、皆な宿業の所生である。而して、その業なるものは一念の妄想これが根元である。業に善惡あり、心に迷悟あり、ために凡聖位を殊にし、苦樂報を分つのであるが、玆では暫く迷信惡業の方面を說いて、現在の

勉の人の前には福徳の道が通じて來る。國民が邪見なれば天祐も神助も施すに術がない。

總べての怨害は皆な惡魔の所爲である。怨害とは妨害といふが如し、卽ち行ひを傷り心を惱まし、家を亂し社會を穢すのが怨害である。魔とは梵語で、委しくは魔罪といふ。玆には害と譯す。魔にも內外の別がある。內魔は精神上の魔で、小止觀には貪慾・憂愁・飢渴・渴愛・睡眠・怖畏・疑悔・瞋恚・利艱・自高慢、以上の十種を魔軍といふ。また外魔は水火風等の天災、及び外界のあらゆる誘惑物、その他吾人の道念を妨げ幸福を傷つけるものは皆な外魔である。併し玆では佛の正法を妨げ人倫の大道を害するものに名けたのである。

魔と法とは兩立しない。魔の領分が弘くなれば法の範圍は狹められる。これ等の迷執を救ひ、時弊を矯正するのが佛教の目的の一である。邪心を轉じて正念に住し、惡業斷じて善業に進めばこそ、この身心を捨ずして頓に佛身佛國土を實現するものである。これを頓敎と名く。起信論筆削記には『頓敎とは一直にして談じ、更に委曲なし、階漸を歷ずして唯だ本源を指す、故に稱して頓と爲す』とある。我が禪門の如きは頓敎の中最極最勝なるものです。

かくの如き如來の直指單傳の妙法たる頓敎の門を說くことを聞きながら、容易にこれを信受すること能はず、縱ひこれを信受するも、これを奉行すること能はず、故に、內外の惡魔を滅除して瓦の碎くるが如く粉微塵にすることが出來ぬといふは、實に遺憾の極みで、恨めしきことの限りであるといふ御慨きから

くして怨害多し。如來頓敎の門を説くことを聞いて、滅除して瓦のごとく碎かしめざる事を恨む

これより以下は時弊に對する御感慨である。永嘉大師は達磨七世の法孫で、この時代に於て既でに種々の弊風が生じたと見える。獨り禪門のみならず、一般の人心も頗る醇厚の風が廢れたと見え、『嗟末法の惡時世、衆生薄福にして調制し難し』といはれた。嗟とは嘆息の聲である。末法とは、佛敎に佛滅後を正・像・末の三時期に分けて居る。即ち正法千年、像法千年、末法萬年である。これには別説もあるが、今は一々陳列の必要もあるまい。兎に角、敎・行・證の三者が備はつて居るのが正法の時代で、これは佛在世と異ならぬ。像法の像は相似の義で、聖敎もあり行人もありて、唯だ證者を缺くの時代である。敎のみありて行・證ともに缺くを末法といふ。永嘉大師の頃は佛滅後既に千數百年、最早末世に屬して居るから、惡時世といふたのである。徒づらに口舌に巧みにして實行に乏しく、名利にのみ奔りて道念に親しからず、一般の衆生界にも眞實の福が薄い。即ち永久的なる幸福の基礎を有せぬ。若しこれを化導せんとすれば、我見深く、恰も惡馬の奔馳して留まらざるが如く、容易にこれを調御し制裁することが出來ぬ。

『聖を去ること遠くして邪見深し、魔強く法弱くして怨害多し』聖は釋尊である。佛滅後一千餘年を經て年代も遠きため、佛敎々理の上にも化導應用の上にも種々の弊害が生じて、佛敎中に在りながら尙ほ邪見の淵に沈むものあり、況んや無信の人をやである。因果を撥無するもの、三寶に背戻するものは皆邪見の漢である。衆生に邪見あれば惡魔は自づとその便りを得るものです。怠惰の人の前には貧窮の門開き、勤

この消息を普勸坐禪儀には『須らく回光返照の退歩を學すべし、身心自然に脱落して本來の面目現前す』と仰せられたり。また、學道用心集には『請ふ試みに意根を坐斷せよ、十に八九は見道を得ん』とも示された。意根とは妄分別のことである。妄分別だに坐斷せば心と法との對待は、直下に圓融して痕跡なきに至るものである。この時始めて無我の三昧に入ることを得べし。無我の三昧に住してこそ能く大我の現前を見ることが出來るものである。夢想國師は『一切を放下せよ』と申せばとて、外道二乘の惡念を制して起さじとするには同じからず、さやうにすることは血を以つて血を洗ふが如し、眼に翳病ある人、虚空に向へば諸の花の亂起亂滅する相あり、愚人これは翳病の故とは知らずして、實は花ありと思つて、或ひはこれを厭ふて拂ひて除けんとするものあり、或ひはこれを愛して除かじとするものもあり、一翳若しやみぬれば亂起亂滅の花もなし、何をか厭ひ、何をか愛せんや』といはれてある。今の心法雙泯といふも只一翳の止みたる狀態を示されたものに過ぎぬ。

嗟末法惡時世。衆生薄福難㆓調制㆒。去㆑聖遠兮邪見深。魔强法弱多㆓怨害㆒。聞㆑説㆓如來頓敎門㆒。恨㆑不㆔滅除令㆓瓦碎㆒。

【和訓】嗟末法の惡時世、衆生薄福にして調制し難し。聖を去ること遠くして邪見深し、魔强く法弱

根の機關に依つて能く萬境を緣ずるから、緣慮心ともいふ。根は能生の義、この六根能く種々の分別取捨を生じ、諸の善惡業を生長するの根本となるからである。法は六根の對境となるべきもので、これを色・聲・香・味・觸・法の六塵または六境といふ。塵は染汚の義、この六境が諸の煩惱を惹起し、吾々の心識を穢すからである。吾々が、年が年中、六根と六境と相對する上に諸の分別を起し、諸の業作用をも發して居る。我々凡夫は、色を見、聲を聞き、乃至、物に觸れるところに迷想を生じ、煩悶を生じ、惡業を作り、業苦を招ぐからして、六根と六塵とは明鏡の上に塵の痕を殘すやうなものである。併し、六根六塵を憎み捨てよとの教訓ではない。心の悟りあれば根塵共に佛性の妙相妙用である。水火は人間の生命と謂ふべきもので、世に水火ほど實に貴といものはないが、恐ろしいものもまた水火ほど甚だしきものはない。佛菩薩は根塵を以つて却つて轉大法輪の資料として居られる。が、凡夫は兎角に根塵のために苦を招いてゐる。凡夫自から罪を起したために諸佛同體の心鏡に塵垢を留むるやうなものであるから、それを警められたのである。若し塵垢の痕を盡くし除くが如く、煩惱妄想を解脫する時は、本心の明鏡は忽ちにして靈光を現はし、本具の佛性は燦然として輝きを發するものです。これを『痕垢盡く除いて光り始めて現ず』といはれたのである。この時こそ塵垢の本たる心と法とは兩つながら泯滅し、本性の功德圓成して毫も僞妄の混ずるものなく、盡天盡地が眞如眞相の面目となり、謂はゆる卽身成佛の大事を了ずることが出來るから『心法雙べ亡じて性則ち眞なり』といふたのであります。

性か現はれる『釋迦阿彌陀地藏藥師と名はあれど同じ心の佛なりけり』とある、その一つ心の佛を識得すれば、三世十方の諸佛ましますと雖もその體自づから同性同道である。獨り諸佛のみならず、吾人も亦た、この一性に通ずれば諸佛と同體にして寸毫の隔てもない。隔てなきに至つて始めて證契即通の妙旨が實現せらるゝものである。

## 心是根法是塵。兩種猶如鏡上痕。痕垢盡除光始現。心法雙亡性則眞。

【和訓】心は是れ根法は是れ塵、兩種猶ほ鏡上の痕の如し。痕垢盡く除いて光り始めて現ず、心法雙べ亡じて性則はち眞なり。

一鹹味には『心是根法是境。兩種猶如鏡上塵。塵垢盡時光始現。心法雙忘性即眞』に作つてある。押韻上からは塵の字が正しいと思ふが、何れでも宗意に別はない。この一段は一性如來の地に達すべき修證の標準を示されたものである。初めに『心はこれ根法はこれ塵、兩種猶ほ鏡上の痕の如し』とあるは大切な御言葉である。

心とは吾々の思想である。この思想を生ずべき機關を眼・耳・鼻・舌・身・意の六根といふ。思想は六

墮し、無に着しては斷見に陷ゐる。彼の未來觀の如きも、或る人は有と執し、或る人は無と斷ず、兩頭俱に不是である。故に若し大道を證得せんと欲せば有無の二見を遣去せねばならぬ。華嚴の疏には『妄法本と空なるを稱して無生と曰ふ、眞法相を離る亦た無生と曰ふ』とある。若し兩頭を截斷し去れば、中間といふ處にも足を留めぬ。これぞ金剛不動の大安心である。不空といふは實在の語と同一で、實相もまたは眞理の異名と見るがよい。徹底、對待の見を放下し去る時は、實在といふやうな那一物をも存せぬから、不空も空といふたのである。華嚴の疏に『幻有は卽はちこれ不有の有なり、眞空は卽はちこれ不空の空なり』とある。不有の有とは有無の二邊を超越した絕對の有である。不空の空も空有相待的の空でなく、絕待の眞空をいふのである。故に、この本文も『不空の空』と讀ませる本もある。何れにても宗意には變りはない。

次に『二十の空門元と着せず、一性の如來體自づから同じ』とあるは、證契卽通、以心傳心の妙處を示されたのである。二十の空門とは、大般若經に內空、外空、內外空等二十種の空を說かれたり、畢竟、深遠なる空の義を悟らしめんがために重々に說き示されたもので、謂はゆる殺人劍の上乘なるものであります。併し、自を空じ、他を空じ、法界を空じ盡したならば、結局はどうなるであらう。大死一番、大活現成で、空じ盡した時自然に二邊を超脫したる眞如實相の本來面目が現前するのである。故に空を究めて空に着せぬ。若し着する空があつたならば眞空とはいはれぬ譯だ。この時始めて三世の如來同體平等なる一

不淨、不生不滅、不增不減である。故に『眞をも立せず妄本と空なり、有無倶に遣れば不空の空なり』といはれたのです。天地萬象は廣大にして涯際なしと雖も、約して言へば眞妄と有無との二門を以つて說明することが出來る。眞とは眞諦または眞如の點で、眞實不虛にして不變不易の義である。これは宇宙の本體に名けたものである。妄は衆生の妄想に依つて幻出する差別の相であるから、變々化々して暫時も停まることはない。若し眞を實體とし、妄を現象と見る時は、妄を以て衆生妄想の所產とのみはいはれぬ。さりながら、吾人の感情に於いて喜怒哀樂等の別あるは、畢竟一時の幻影にして、決して決定性のあるものではない。故にこれを妄と稱するのである。併し、今玆では眞妄の二つを迷悟の二法と見るがよい。迷ふが故に三界城、悟るが故に十方空、繩を見て蛇なりと思ふは迷ひで、蛇に非ずと見るは悟りである。五指を攝して一拳となす。この一拳頭には善惡の名は立てられぬ。若しこれを以つて人を毆打すれば惡となり、兩親の肩でも敲けば善行と稱せられる。拳頭そのものは善と惡とを超脫して居る。眞といふも妄に對して名けたる假名字であつて、妄既でに實體なしとすれば、眞もまたその實體ありと謂ふべからず。眞妄の對待を泯じ去つて、始めて大道を徹證し得べきである。故に『眞をも立せず妄本と空なり』といはれたのである。

有無の二邊もまたかくの如くにして、一切諸法、元來その實體なしと雖も、稱して滅無なりと言ふべからず、有にして有に非ず、無にして無に非ず、これ諸法の實相である。然るに吾々は有に執しては常見に

時に當り、信を表するため袈裟を傳へたのが傳衣と稱するのである。これより次第に禪風が四海に彌淪し、天下これを知らざるものなきに至れるを以つて『六代の傳衣天下に聞う』といふたのである。

六祖の後、青原・南嶽の二高僧を始めとして多くの明師宗匠を輩出した。永嘉大師もその中の一人である。この時に當り、上は國王大臣より、碩學鴻儒と稱する人々に至るまで翕然として心を禪門に歸したる者その數を知らず。而して、これら參禪の士は、始めて敎外の宗風に接觸し、以つて宇宙の至道に體達することが出來た。故に『後人の得道何ぞ數を窮めん』といふたのである。

眞不レ立妄本空。有無俱遣不空空。二十空門元不レ着。一性如來體自同。

【和訓】眞をも立せず妄本と空なり、有無俱に遣れば空も空ならず。二十の空門元着せず、一性の如來體自から同じ。

これより以下八句は、西天東土佛祖正傳の大道を示されたのである。中に就いてこの四句は大道の妙體を說かれたものだ。

大道とは唯佛與佛乃能究盡の妙法である。この妙法なるものは、宇宙に彌淪し、天地に充滿して、不垢

歷二江海一入二此土一。菩提達磨爲二初祖一。六代傳衣天下聞。後人得道何窮レ數。

【和訓】江海を歴て此の土に入る、菩提達磨を初祖と爲す。六代の傳衣天下に聞ゆ、後人の得道何ぞ數を窮めん。

前段に續いて支那に於ける傳燈の狀況を示されたのである。支那に於ける禪門の嚆矢は達磨大師である。故に『江海を歴てこの土に入る、菩提達磨を初祖と爲す』といへり。

達磨大師は天竺南印度香至國王第三の王子である。父王崩御の後、般若多羅尊者に就いて出家し、左右に侍すること四十年、尊者示寂の後、六宗を教導し五天を遊化すること六十餘載、震旦（支那）の佛緣熟するを知りて、遂に天竺を去り、航海三年にて支那の南海に着船せられた。時に梁の武帝大通元年九月二十一日であつた。この達磨大師こそ釋尊二十八代の正統にして、支那禪門の初祖である。大師は梁の武帝を接得せられたが機契はざりしかば、楊子江を渡りて魏に入り、杖を嵩山の少林寺に停めて、面壁端坐すること九年、この間に神光を接して正法を附囑せられた。この神光禪師が支那の二祖で慧可大師と稱し、それより三祖僧璨大師、四祖道信大師、五祖弘忍大師、六祖大鑑慧能大師と嫡々相傳し來れり、その嗣承の

道なることを明かされたのである。

初めに『法幢を建て宗旨を立す』とは直指の宗風なることを示したのである。法幢を建つるとは釋尊の嫡嗣として人天の師表たるの標示である。天竺の風として化門を開帳する時は幢を竿頭に飜へしてこれを門頭に建て、廣く天下の人の目標となす。これを法幢と稱す。釋尊の嫡嗣たる祖師方は、正々堂々として大に門戶を開き、以つて別傳の宗旨を建立せられた。而して、これ正しく佛勅に依るものとす。故に『明明たる佛勅曹谿是れなり』といふ。佛勅とは佛陀の宣旨である。釋尊曾つて靈山に在りて八萬の大衆を集め、說法の座に陞つて一枝の優曇波羅華を拈じて瞬目せられ、遂に一言をも發し給はぬ。大衆は佛意を了する能はず、空しく頭を擧げて茫然たるのみであつた。唯だ摩訶迦葉尊者のみありてニッコリと破顏微笑せられた。時に釋尊は『我に正法眼藏あり、摩訶迦葉に付囑す』と仰せられた。これ實に明々たる佛勅である。迦葉尊者はこの佛勅を奉じて西天の第一祖となり給ひ、嫡々相傳して曹谿に至つたのである。曹谿は山の名である、六祖大師は曹谿山寶林寺に住し給ふを以つて曹谿大師ともいふのである。

故に我宗門の起原は『第一の迦葉首めて燈を傳ふ』で、第一祖摩訶迦葉尊者こそ傳燈の最首である。燈は大般若經に『佛の言ふところは燈の照を傳ふるが如し』とあるが、衆生煩惱の暗を照すに依り、佛法を燈光に喩へたものだ。迦葉はこれを阿難に傳ひ、阿難はこれを商那和修に傳へ、師資面授面禀して、西天竺に於いては二十八代連續して達磨大師に至れり。これを『二十八代西天の記』といふたのであります。

蚑蜺蛢蝱蠢動含靈一々大光明を放ち、一々壁立萬仭ならん』といはれてある。

この間の消息に至つては、縦ひ天神の靈あるも能くその機微を測ることは出來ぬ。何故ならば、若し意識を以つて測量せんと擬すれば、既でに早く第二頭に落在するからである。況んや口眞似の佛法などは何の役にも立たぬ。眞參實究、法のために身命を抛擲する底の漢にして始めて得べきである。故に、永嘉大師劈腹剜心して『吾れ早く曾て多劫を經て修す、是れ等閑に相ひ誑惑するにあらず』と仰せられた。人智も天心も窺ふ能はざる底の大機用を得るには、實に多劫の間粉骨碎身して修養を積みたる上の結果である。決して輕々しく放言壯語し、世人を驚かしたり、誑惑したりするのではない。如何なる人でも獻身的に大道を欣求すれば、必ずこの大機用を得るであらう。

## 建二法幢一立二宗旨一。明明佛勅曹谿是。第一迦葉首傳レ燈。二十八代西天記。

【和訓】法幢を建て宗旨を立す、明々たる佛勅曹谿是れなり。第一の迦葉首めて燈を傳ふ、二十八代西天の記。

以下は前段に示すところの甚妙不可思議の宗旨は、佛祖正傳の正法眼藏にして、いはゆる直指端的の大

と、非とは否認すること、或時は諸法實相と說き、一色一香無非中道と談じて、佛法門中一法をも捨てぬ。即ち萬法を認可して齊しく大道の露現なりとす。また、或時は諸法皆空と說き、本來無一物と談じて實際理地に一塵を立せず。即ち幻相を否認して齊しく常住寂滅なりとす。この消息に至つては如何なる智者學者と雖も妄想を以つてこれを識得することは出來ぬ。また逆行とは世情に反するの行爲、順行とは常識に順ずるの動作である。

佛祖の活機輪を轉ずるや。或時は世情に反する行爲がある。雲門は釋尊の降誕會に臨んで『吾れ若し當時に在りしならんには、一棒に打殺して狗子に與へて喫せしめん』といはれた。達磨大師は神光の雪中に立つを顧みず、遂に彼をしてその臂を斷たしめられた。南泉は利刀を振つて猫兒を斬殺し、丹霞は木佛を燒いて煖を取られた。これ、果して何の玄旨ぞ、また或時は常識に隨順するの動作がある。承陽大師、興聖寺を宇治に創して開堂說法せらるゝや『山僧叢林を歷ること多からず、只だ是れ等閑に天童先師に見え當下に眼横鼻直なることを認得して人に瞞ぜられず、便はち空手にして鄕に還る。所以に一毫も佛法なし、乃至、朝々日は東より出で、夜々月は西に沈む』云々と開示せられた。また、山居の偈に『夜坐更闌眠未ㇾ熟、情知辨道可ニ山林一、溪聲入ㇾ耳月到ㇾ眼、此外更須ニ何用心一』と仰せられた。誠に明々白の佛法である。かくの如く順逆縱横、與奪自在なるを以つて、圜悟禪師は『若し向上に轉じ去れば、直に得たり釋迦彌勒文殊普賢千聖萬聖天下の宗師も普く皆な氣を飲み聲を吞む、若し向下に轉じ去れば、

するにあらず。

四部錄に依れば、般若力の下に『默時說說時默、大施門開無二壅塞一』の句あり『天莫レ測』の下には『不レ依レ空不レ依レ色豈可ニ世娘生下得一』の句がある。

この一段は永嘉大師の本領を明したものである。初めに『人あり我に何の宗をか解すと問はゞ、報じて道はん摩訶般若の力と』とは、正しく本領を示したものである。若し人が有つて我れ（永嘉）に如何なる宗旨をか解すと問はゞ、只だ摩訶般若の力と報じてやらうと思ふ。

摩訶は梵語、こゝには大と譯す。一體、摩訶の一語には大・多・勝の三義がある。多義なるを以つて特と梵語その儘を用ゐたものだ。般若も梵語、漢土には智慧と譯す。金剛の纂要には『五蘊空を照す。相應本覺の慧なり』と釋してあるが、つまりは自己心性を見得するの智慧である。佛法を習ふといふは自己を習ふなり、自己を照見する時、宇宙の本體をも萬法生起の原由をも識得すべし。これを佛知見といふ。この佛知見が佛教の淵源、八萬法門の關鑰である。這裡一毫も禪と教との別なく、世間と出世間との隔てはない。この智力能く大法を擔荷し、能く群生を拔濟す。佛陀の神通も、祖師の靈機も、皆なこの智力の活潑々地である。故に『或は是或は非人識らず、逆行順行天も測ること莫し』で、應用自在、圓通無礙である。

識の字、一本に知に作つてあり、その方が正當ならんが、今は普通の本に從がふ。是とは認可するこ

して法ならざるはなく、行ひとして道ならざるはない。身を以つて說法し、意を以つて說法し、行住坐臥、盡くこれ無礙の說法であるから、壅塞はない。壅塞は二字ともに、フサガルと訓じ施門の閉塞をいふ。佛祖は身心を以つて法とし、天地を以つて法とし、萬象を以つて法とす。故に佛祖の大施門は常恒不斷である。吾々もこうならねば役に立たぬ。

明治天皇の如きは古今の聖德を有せられたに依つて、御一生の御行持は廣大なる施門を開いて、寰宇を包容し給ふて居る。『まつりごと出でゝ聞くまはかくばかり暑き日としも思はざりしを』の御製の如く、國民を思召さるゝ餘り、夏の暑さをも御忘れなされて國政をみそなはせらるゝ。また『てるにつけ曇るにつけて思ふ哉わが民草の上はいかにと』の御製の如く、從晝至夜に御心を惱まさせらるゝは、實に無限絕對の大布施で、如何なる物もこの施門を壅塞することは出來ぬ。

有人問我解何宗。報道摩訶般若力。或是或非人不識。逆行順行天莫測。吾早曾經多劫修。不是等閑相誑惑。

【和訓】人あり我れに何んの宗をか解すと問はゞ、報じて道はん摩訶般若の力と。或は是或は非人識らず、逆行順行天も測ること莫し。吾れ早く曾つて多劫を經て修す、是れ等閑に相ひ誑惑

るがよい。

次に『默の時說說の時默、大施門開いて壅塞なし』とは、大道を得たる佛祖の轉法輪を述べたのである。不可得の法なるが故に言端語端の及ぶところではない。不可言の法中に横說竪說し給ふ佛祖の妙用はまた格別である。

釋尊、一日、說法の座に陞り給ひて端坐良久、更に舌頭を動かされぬ。時に文珠菩薩槌を打つて大衆に報じて『法王の法を諦觀するに、法王の法はかくの如し』といはれたではないか。これ一言半句も發せずして圓滿に大乘の妙法を說破せられたので、卽ち默時の說法である。縱ひ說法することありとも舌頭に痕跡を留めぬに依つて默と異なることなし。

趙州に僧問ふ『狗子に還つて佛性ありや』、州曰はく『無』これ何んの說法とかせん、若し有無の無を以つてこれを解せんと欲せば趙州を去こと白雲萬里ならん。また、一僧あり、青原禪師に問ふ『如何なるかこれ佛法の大意』師曰はく『盧陵の米作麼の價ぞ』盧陵縣は上等米の產地だといふが米の値段はいか程であるか。只だこの一語、何處に佛法があらう世法があらう、全くこれ無舌人の解語である。全くこれ說時の默である。かくしてこそ始めて佛法を語るべきである。

默中に大法輪を轉じ、說中に王三昧を打する底の人ならざれば、佛祖の大道を荷擔することは出來ぬ。默說ともに大施門である。釋尊一代の敎化、祖師歷世の事業は、皆な廣大なる法施門の打開である。言と

なければならぬ。

肇論に『夫れ至人は空洞無象、萬物我が造に非ざるはなし。萬物を會して以つて己れと成すものはそれ唯だ聖人乎』とある。誠に能く大道を究盡したる至人は、その胸中磊々落々として取捨憎愛の罣礙はない。全く空洞無象である。無象なるが故に萬物を包容して餘すことはない。然るに吾々凡夫は容易に空洞無象なること能はず、多くはこの頑皮袋にあらゆる妄想を包んで、惜い欲い、憎い可愛と、朝から晩までもがいて居るではないか。それゆゑ一法を見れば一法を執し、一法を聞けば一法に偏し、迷上に迷を重ね苦上に苦を添へて、終に了期あるべからず。これ等の妄想袋を叩き破つて不可得の妙境に達した時、始めて『只麼に得たり』で大道を我が物とすることが出來る。

只麼とは『かくの如し』といふ語である。かくの如しとはその通りといふことである。即ち、山は高く海は深し、柳は綠、花は紅その通りである。佛法には妄りに不思議を說くことはない。山は高いそのまの大道、海は深いそのまゝの靈覺、眼横鼻直そのまゝの佛法である。得たりというても別に新奇の物を生み出す譯ではない。本來に得て居るのである。盡天地間一箇として佛法を得ざるものはないのである。

二祖慧可大師が達磨大師に參ぜし時『吾がために安心の法門を與へよ』と乞ふた。達磨大師は『心を持ち來れ、汝がために安心せしめん』といはれた。二祖は參究の後『心を見むるに終に不可得』といひしに、大師は『汝がために安心せしめ了れり』と仰せられた。これ等の公案に就いてよく〳〵玄旨を參究して見

【和訓】取ることを得ず捨つることを得ず、不可得の中只麼に得たり。默の時說說の時默、大施門開けて壅塞なし。

四部錄の方では『默時說』以下の二句を次の『有ㇾ人問ㇾ我』以下の二句の後に入れて、この本文とは前後して居る。韵文としては四部錄の方が正しいやうに思ふ。今は暫らく我が宗常用の本に從うて說明をして置く積りである。

靈覺の妙體、卽はち宇宙の大道は、前に述べたる如く、元より他に覓むべきことではない。然れば己れに向つて覓むべきものかと云ふに、自己といふ一物ありと執すれば早くすでに妄想窟裡に墮在し了るのである。故に承陽大師は『佛法を習ふといふは自己を習ふなり、自己を習ふといふは自己を忘るゝなり』と仰せられてある。自己を忘れて而して始めて自己を顯現することを得べきである。自己を忘却する時、盡天地間取捨すべきものはない。そこで『取ることを得ず捨つることを得ず、不可得の中只麼に得たり』といはれたのである。

取るといふも、捨つるといふも、倶にこれ相待の見より生じたものである。徹底自己を忘却して見よ、何れのところか取るべきものがあらう。若し取るべきものありといはゞ、これ未だ自己を忘却せざるなり。すでに取るべきものなしとせば、捨つべきものも亦たあるべからず。取捨ともに不可得なる時、眞實自己を忘却し得べきである。併し、不可得といへばとて空亡滅無の謂ひと思ふまいぞ。不可得も亦た不可得で

併し、この境界に達するの道は坐禪より外はない。只管打坐の正當時に善惡邪正の妄分別を放下し、通身脫落の時始めてこの妙味を感得することが出來やうと思ふ。若し然らずして徒らに色空の名に迷ひ、凡聖の相を執して、他に向つて靈覺の大道を了ぜんと欲せば『覓むれば則はち知る君が見るべからざることを』で、彌々覓むれば彌々大道に遠ざかる。

洞門の俊傑明峰素哲禪師は、加州大乘寺に於いて、その師瑩山禪師、卽ち曹洞太祖常濟大師の侍者たりしが、大師は之を哲侍者と呼ばれた。一日、大師が急に哲侍者を召されたので、師が『ハイ』と返事すると、直ちに『これ什麼ぞ』と一拶を與へられた。これ什麼ぞとは正しく自己の問題である。我れはこれ何物ぞ、これ實に千古の大懸案である。師は工夫八年の後、豁然として、契悟し、方丈に上つて乃ち曰はく『某甲會せり』、大師曰はく『爾作麼生か會す』、師曰はく『皮膚脫落し盡して唯だ一眞實のみあり』、大師曰はく『脫落々々』師拂袖して出づとある。吾々も皮膚脫落し盡して自己を徹證するに非ざれば、佛祖の大道を自分の物とすることは出來ぬ。

取不得捨不得。不可得中只麽得。默時說說時默。大施門開無壅塞。

一切の數句と非數句とを超絕したる靈覺の妙境に至つては、固より『毀るべからず讃むべからず』で、毀譽褒貶の下すべきはない。攝大乘論には『有はこれ增益の謗、無はこれ損減の謗、亦有亦無は相違の謗、非有非無は戲論の謗』と云うてある。凡情を以つて批評する時は盡く誹謗罪に陷ゐる。併し、如何に誹謗するとも靈覺は一微塵も動搖せぬ。また、盡十方無礙光とか、光明偏照十方世界とかいうて讃めたてゝ見ても、決して靈覺を讃歎し盡すことは出來ぬ。依然として混沌に眉を畫くやうなものである。何故ならば『體は虛空の如く涯岸なし』で、靈覺の本體は恰も大虛空の如くにして涯際も岸邊もなく、無限絕對であるからである。すでにこれ無限絕對なりとすれば、これを讃するも、これを毀るも兩頭ともに沒可把である。

然らば靈覺の體は、到底、吾人の見得し能はざるものかといへば『當處を離れず常に湛然』で、擧手投足の上も、靈覺の道は圓通無礙である。當處はそのところであるから、吾々が日常生活の上がそのまゝ大道の七通八達である。湛然とは水の盈ちて動かざるの貌で、仁王經には『湛然淸淨にして常住不變なり』とあり、華嚴經には『淸淨の妙法身、湛然として一切に應ず』とある。靈覺の體は無始無終、不生不滅であるから、古往今來微塵も變動はない。森羅萬象は轉變無常なるも、その體は常住にして不動である。吾人の日用もまた運作顚倒息むなきも、その活動のまゝが本來湛然として眞空寂滅なることを了せねばならぬ。

たのである。或ひはこの句を『一切の數句非數句』と讀む人もある。この時は數句は放行門で、佛法を應用する時は、色空、內外、迷悟、得失、種々の數句があるが、把住門即ち向上の一路より見る時は、四十九年一字不說で、數句はない。非數句である。併し、何れにしても『吾が靈覺と何ぞ交涉せん』で、人々具有の天眞佛より見れば、數句も非數句も相待的の假名字であるから吾が本性とは、何等の交涉も關係もない。靈覺とは本性の異名である。常濟大師は『更に古今と說くべきところなし、迷悟と論ずべきことなし、恁麼に參徹する時十方壁落なく、四面また門なし、處々脫白露淨なり』と仰せられた。この時豈に數句非數句の論ずべきあらんや。

不レ可レ毀不レ可レ讃。體若二虛空一勿二涯岸一。不レ離二當處一常湛然。覓則知君不レ可レ見

【和訓】毀るべからず讃むべからず、體は虛空の若く涯岸なし。當處を離れずして常に湛然、覓むれば則ち知る君が見るべからざることを。

一本に見を看の字に記してある。押韻として或は看の字の方が正しいかとも思ふが、見の字でも通韻でさしつかひはなからう。この一段は靈覺の體を示されたものである。

す。劫は時分と譯す、諸佛が無數時の修行を三期に分けて三祇劫といふたものです。一念の發菩提心に能く佛教全體の大目的を圓成し、三祇劫の修行力を以つて滅盡せられたる煩惱及び罪障をも能く即時に滅却することが出來る。

大梅法常禪師は馬祖に參じて『如何なるかこれ佛』と問ふた。馬祖は『即心即佛』と答へた。大梅はこの一語に於いて佛教の大眞理を徹證して大安心を得られた。三祖大師は二祖慧可大師に參じて『弟子の身風恙に纏はる、請ふ和尚罪を懺せよ』私は病に犯されて苦しんで居る。願はくば罪を滅し給へ、と願はれた。すると二祖は『罪を持ち來れ、汝がために懺せん』罪なるものを持ち來れといはれた。三祖は良久しくして『罪を覓むるに不可得』罪性元來不可得にして、これが罪の自性であるといふべきものはないと見破せられた。その時二祖は『我れ汝が與に罪を懺し竟れり、宜しく佛法僧に依つて住すべし』といはれました。罪性不可得なりと徹證せば、そのまゝ無始劫來の煩惱罪業は跡を空じ去りて、毫も吾人の心地を束縛は致さぬものである。千百年の暗室も、僅かに一孤燈を點ずれば即時に光明界と變ずるものである。斯くありてこそ眞の安心立命も出來るのだ。

次に『一切の數句は數句に非ず』とは、數句は名數句義で、大乘・小乘、佛乘・菩薩乘等、八萬四千の法門の名目をいふ。その名目も畢竟一佛性を顯現する上の道具立であるから、大道を究盡すれば諸法本來一佛法にして決して幾許の數句はないのである。故に倶胝和尚は一指頭を以つて佛法を自在に提唱せられ

の功徳を具足するものである。信仰上のことも同一である。徹底、自己の罪惡を自覺してこれを悔悟し、佛陀の大光明を敬慕して心の奥より信仰する時、自づと菩薩二利の大功徳を備ふるものである。故に承陽大師は『必ず佛果位に非ざれば信現成せず、おほよそ信現成するところは佛祖現成のところなり』と仰せられてある。

元來、吾人は諸佛同體の本性を有して居るのであるから、一たびこれを信じて疑はざるの地に至らば、この身心は蕩然として大道と一如し去るものである。これ決して人爲の法に非ず、迷雲晴るゝところ眞月自づから明らかなるものである。故に『色に非ず、心に非ず、行業に非ず』色は物質、心は精神、行業は人力を以つて施設することである。徧法界の大道露現する時は、天地四維そのまゝの一實相であるから、物質とか精神とか、人とか我とかいふ區別は立たぬ。また、人力を以つて勝手に製作すべきものでもない。實にこれ天眞の妙法である。靈雲は桃花を見て心を明らめ、香嚴は擊竹を聞いて悟道す。この正當時に於いて直下に諸佛の心印を徹證し、佛教の根柢を見破するものである。卽ち『彈指に圓成す八萬の門、刹那に滅却す三祇劫』である。

彈指は指を彈くに時間の短かきをいふ。刹那は最短の時間である。壯士の一彈指六十五刹那といふから、一彈指を六十五分したものが一刹那である。八萬の門とは佛教を八萬四千の法門と稱するに依る。卽ち佛教の全體といふに同じ。三祇劫とは、委くは三阿僧祇劫といふ。阿僧祇は梵語で、こゝに無數と譯

一地具足一切地。非色非心非行業。彈指圓成八萬門。刹那滅却三祇劫。一切數句非數句。與吾靈覺何交涉。

【和訓】一地に具足す一切地、色に非ず心に非ず行業に非ず。彈指に圓成す八萬の門、刹那に滅却す三祇劫。一切の數句は數句に非ず、吾が靈覺と何ぞ交涉せん。

四部錄では交涉を較涉に作り、その次に『一月普現一切水、一切水月一月攝、一地具足一切地』の句を置き、その次に『毘盧印文界界淡、一性圓通一切性、蠢動含靈光嘩々』の句がある。毘盧と蠢動の二句は我宗に用ゆる本にはない。今は前にも言ふた通り我宗常用の本に依つて講じて置く積りである。

先づ『一地具足す一切地』とは、頓敎の法門を標示せられたのである。菩薩の學佛道の階級に、四十一位とか五十二位とかいふ等級あり、卽ち、十信・十住・十行・十回向・十地・等覺・妙覺が五十二位である。このうち、十信と妙覺とを除いて、四十一位と立てる場合もある。その中でも斷惑證理して聖地に昇つたのが十地である。聖地の內にも、修行の深淺に依りて證果の高低があるから、十地に分けたのである。今の一地といふは、必ずしも五十二位の中の十地に限つた語ではない。つまり如來頓敎の法門を聽受して、大菩提心を發得したのが、すでに一歩を聖地に踏み込んだのである。この初發心の端的直下に一切地

故に華嚴經にも『普く十方刹に現じてその實は二種なし、譬へば淨滿月の普く一切の水に現ずるが如し影像無量なりと雖も、本月未だ曾つて二ならず』というてある。かくの如く圓通の妙理あるが故に、若し一たびこの妙道に契當すれば、吾々お互の身心もそのまゝが諸佛と圓融一如となるものである。そこを『諸佛の法身我が性に入り、我性還て如來に合す』といはれたのである。

諸佛の法身は淸淨無礙にして法界に充滿し、智慧德相微塵も缺くるところはない。わが性とは衆生性である。衆生の根性は智愚、賢不肖、種々樣々であるが、衆生の根性内に徧法界の佛身が具足して居る。故に衆生の根性が即諸佛の法身である。先づこれを吾人の當面に返照して見よ。吾々は五尺分段の肉身を受けて無限大の宇宙間に生存すること滄海の一粟よりも小なり。この小なる人身が能くその本性を現はし來れば、この身心がソックリ徧法界の佛陀と同一體である。

昔は黃檗の希運禪師、風采堂々身長六尺に超えたり、一日、笠子を戴いて他に出でんとす。師の百丈禪師はこれを見て『汝が笠子何ぞ甚だ小なる』餘りに笠が小さいではないかといはれた。『笠子小なりと雖も大千界を容るゝに堪へたり』笠は小さいが全世界を容れても、餘りがあると答へた。吾人はこの見地に住するの力量がなければならぬ。九尺二間の裏店に住居しても、能く天地の大道を七通八達するの妙機を發轉せねば、眞箇の佛法は決して自分のものにはならぬ。

八萬の佛法も、無數の公案も、盡く含蓄して餘すことのない道理を見得する底の漢に非ざれば、決して正法眼藏は傳へられぬ。

一月普現㆓一切水㆒。一切水月一月攝。諸佛法身入㆓我性㆒。我性還與㆓如來㆒合。

【和訓】一月普く一切の水に現じ、一切の水月一月に攝す。諸佛の法身我が性に入り、我が性還つて如來に合す。

『一月普く一切の水に現じ、一切の水月一月に攝す』の二句は前句の比喩である。天邊の明月は唯だこれ一輪なれども、大川小河、澄潭濁江を擇ばず、能く一切の水中にその影を現じて居る。大海に映ずる月も溪河に印する月も、寸毫の異なりはない。濁波に在りと雖も濁れるに非ず、清漣に在りと雖も淨らかなるに非ず、一切の水月がソツクリそのまゝ天心一箇の明月に攝せられて居る。宇宙の大道、本具の佛性もまたかくの如くであつて、一微塵の中にも充滿し、四大海の外にも遍滿し、一滴の水中に生存する小蟲もまたこれを具へ、湖海の間に餘れる巨鯨もまたこれを有し、凡夫も聖人も、女子も男子も、一として具足せざるはない。而して、大に非ず、小に非ず、增に非ず、減に非ず、ソツクリそのまゝが同一佛性である。

し』で、他の草が雑つて居らぬ。この肥膩草を彼の白牛が食すると、純粋の醍醐を出すといふことである。故に涅槃經の八に『雪山に草あり、名けて肥膩と曰ふ、牛若し食すれば純ら醍醐を得』とあり。その醍醐とは同經に『牛より乳を出し、乳より酪を出し、酪より生酥を出し、生酥より熟酥を出し、熟酥より醍醐を出し、醍醐最上なり』とあつて、牛乳の最とも醇厚精良なるものである。而して、人にして一たびこれを喫すれば、能く體力を增進し、病魔をも退散するの功能があるさうである。そこで、これを諸佛の證し給ひし圓頓一乘の妙法に喩へたものである。永嘉大師はこの醍醐の妙法を證得して、常恒に相離ることなきを以つて『我れ常に納む』と申されたのである。併し、敢て必ずしも大師のみ納受せらるゝ獨占の法ではない。佛眼を以つて觀照すれば、山川草木、墻壁瓦礫も一々大光明を放つてこの妙法を演暢して居るのである。

元來諸佛の妙法は宇宙に徧滿して居る。一塵一芥も妙法の露現である。妙法には大小長短の量も、迷悟凡聖の別もない。されば、吾人の本性と天地の本性とは圓通して相隔てぬに依つて、一性が卽はち一切の性である。また、一枝の花、一滴の水は些々たる法なれども、この法の中に天地法界一切の法を含蓄して漏すことも餘すこともないものである。こゝを『一性圓かに一切の性に通じ、一法徧く一切の法を含む』といふたのである。斯くいへばとて決して空理空論ではない。吾人の一身は一法なれど、この一身が直ちに法界身であることを知らねばならぬ。釋尊が靈山會上に一枝の花を拈ぜられたが、この一枝の上に、

こと勿かれ、聲色の法に滯まること勿かれ、夜間をも日裡をも虚しく渡ること勿かれ、子細に辨道功夫して古人の徹處に到り、今時の印記を受くべし』と仰せられた。若し能くかくの如くならば、吾人もまた第二の佛祖となりて法雷をも震ひ、法皷をも擊ち得べきである。

## 雪山肥膩更無ㇾ雜。純出二醍醐一我常納。一性圓通二一切性一。一法徧含二一切法一。

【和訓】雪山の肥膩更に雜はりなし、純ら醍醐を出す我れ常に納む。一性圓かに一切の性に通じ、一法徧く一切の法を含む。

以下四部錄の證道歌と比較して非常に句が前後して居る。四部錄の方では第一句に『更』の字がない。三四の句は後にある『諸佛法身入二我性一、我性還與如來合』の語になつて居る。韻字の上から見れば四部錄の方が或ひは正しいかも知れぬが、本宗に於いて通途讀誦して居る本と餘りに相違して、却つて混雜を來し易いからして今は普通に依つて置くつもりである。固より宗意の上には何等の差支へもないのであるに依つて、句の前後、文字の增減に關する詮索は各自の研究に任せること丶致した。

印度の雪山に肥膩と名くる草がある。高山のことであるから一面に肥膩草のみであつて、『更に雜りな

が愛兒を懷にして育養するが如く、折伏は時ありて大威力を現じて剛強我慢の衆生を降伏し、迷想偏執の徒黨を呵責せらるゝ手段である。維摩居士の如きは主として折伏的手段を以つて正法を開示せられたのである。これを大象の威力に喩へたのである。併し、攝取も折伏も、歸するところは、唯だ一切衆生の枯渴に瀕せる心田を潤澤せんがための慈悲方便であるから、その利益は無量無邊である。如何なる衆生と雖もこの利益に洩るゝといふことはない。

三乘とは佛弟子の機類を三種に分つたものである。卽ち聲聞乘と緣覺乘と菩薩乘である。聲聞乘のためには苦集滅道の四諦の法門を示し、緣覺乘のためには十二因緣を觀ぜしめ、菩薩乘のためには六度の大行を敎へられた。乘は運載の義、佛の法門はなほ乘車の如く、衆生はこの法門に乘じて所期の道果に達するのである。

五性は、一には聲聞乘性、二には緣覺乘性、三には如來乘性（これは前記の菩薩性に當る）四には不定乘性（これは前の三性に通ず）五には無性（これは三乘の性を有せざるもの、卽ち涅槃經の一闡提に當る）一應は無性のものは成佛することを得ずと談ずるも、實大乘の上からいへば一切衆生悉有佛性である。佛祖の慈光に觸るゝ時は、盡く無明煩惱の夢醒めて眞如の妙理を悟了せずといふことなし。併しながら、この慈光に觸るゝことは信念堅固精進不退の漢に非ざれば能はず。故に、吾人は切に、法のためには寧ろ身命をも惜まざる底の大信念を發揮すべきである。常濟大師は『妄りに古今の情に封ぜらるゝ

【和訓】法雷を震ひ法皷を撃ち、慈雲を布き甘霈を灑ぐ。龍象の蹴蹋潤ひ無邊、三乘五性皆醒悟す。

降魔成道の後法輪を轉じて衆生を普濟するは諸佛の化儀、すでに智劍を提げ、內外の諸魔を降伏せば、進んで利他の妙用に出でねばならぬ。この四句は卽はちその妙用を示されたものである。

佛祖が法を說き敎を垂るゝや、その廣長舌は中外を覆ひ古今に涉りて洩すことなく滯ることなし。恰も天雷一たび震へば猛獸も尙ほ畏縮し、草木昆蟲もまた蘇生するが如く、外道天魔は法力を畏れて遁竄し、業苦の衆生も皆なその德化に依りて轉迷開悟の域に進むことが出來る。また、恰も陣太皷の聲の一たび響けば百萬の軍兵も皆なこれに依つて進退するが如く、佛祖の法輪は萬代不易の號令にして如何なるものもこれに違背することはならぬ。故に『法雷を震ひ法皷を撃つ』というたのである。而して、この法雷は直ちに天をも蓋はん程に濃厚なる慈悲の雲を布き、三草二木をも普く潤ほして漏すことのない甘露の雨を灑ぎ、その功德靈驗不可思議不可稱量であるから『慈雲を布き甘露を灑ぐ』といはれたのである。

次に『龍象の蹴蹋潤ひ無邊、三乘五性皆な醒悟す』といふは、法力感化の偉大なるを示したのである。『龍象の蹴蹋』とは、維摩經の不思議品に『譬へば龍象の蹴蹋は、驢の堪るところに非らざるが如し』とあるより出づ。龍象は肇法師が註維摩に『象の上なるものを龍象と名く』と註した通り、象王の最も優勝なるものを歎美して龍象と稱したのである。如來の說法は譬へば龍象が大力を振うて蹴り蹋むが如く、驢馬や狡兎は一潰しとなつて了ふ。總じて衆生を濟度せらるゝには攝取と折伏との二門がある。攝取は慈母

くにして如何なる天魔鬼神も近傍することは出來ぬ。金剛は天界の寶にして、その質剛堅、如何なるものをも粉碎せずといふことなし。また如何なるものを以つてするも、これを損傷すること能はざるものである。故に『但だ能く外道の心を摧くのみにあらず、早く曾つて天魔の膽を落却す』で、（人間にして邪說を主張するものを外道といふ、人間以上の威力を有して正道を妨ぐるものを天魔と名く。この魔王は天界の內欲界の第六天に住するを以つて天魔と稱したのである）般若の智劍に觸るれば天魔の心膽も七華八裂し去るものである。

また、佛教には四魔十魔等の說がある。その內の四魔とは、一に欲魔、即ち煩惱の魔である。二に身魔卽ち肉體の障礙である。三に死魔、死する時は道業成じ難し。四に天魔である。魔は損害の意義である。慧劍を乘る時は煩惱自づから斷ぜられ、從つて法身を證得するが故に身體の繫縛はない。身縛なき時は生死を透脫す。故に、今は天魔を舉げて他の三魔を攝したものと見るがよい。洪自誠が『降レ魔者、先降二自心一、心伏則群魔退散、馭レ橫者先馭二此氣一、氣平則外橫不レ侵』というたのも、また聊か智劍の鋒光を認めた上の知言であります。

震二法雷一擊二法鼓一。布二慈雲一兮灑二甘露一。龍象蹴蹋潤無邊。三乘五性皆醒悟。

の膽を落却す。

佛知見を開發する底の漢を大丈夫といふ。丈夫は男子の稱稱である。大と稱するは男子中の男子、即ち人中の尊貴なるものをいふ。佛家にては菩薩のことを大人または大士といふ。これまた大丈夫といふに同じ。孟子は『富貴も淫すること能はず、貧賤も移すこと能はず、威武も屈すること能はず、これこれを大丈夫と謂ふ』と申してある。人間は總て高尙なる理想と確實なる信念とを堅持して、獨立獨行の英氣なかるべからず、徒らに見聞覺知のために蔽はれて、五欲六塵の奴隸となつて居るやうでは、とても大丈夫とは稱されぬ。

眞箇大丈夫の漢は、必ず先づ『慧劍を秉る』というて智慧の劍を秉つて一切の妄想を斬却し、一切の疑網を截斷し、直下に佛知見を開發するものである。妄想と疑惑を斷じ、煩惱の根源を打ち破るは、自覺の智慧に非ざれば能はざるを以つて寶劍に比したものである。此の寶劍には『般若の鋒金剛の焰』があるから、尋常一樣の世智凡見ではない。般若は梵語で、こゝに智慧と譯し、佛智の異名である。心經に在るが如く『五蘊皆空なり』と照見するのが佛の根本智である。既にこれ皆空、何の生滅かあらん、何の增減垢淨をか立せん、一切の顚倒夢想は當處脫落である。維摩經に所謂『智慧の劍を以つて煩惱の賊を破る』とは此のことである。

かくの如き鋭利なる智慧の鋒尖なれば、一たび鞘を出づれば神光燄の如くに騰る。この燄、金剛の如

た同工異曲である。妄想する底のものは何物ぞ、足を組み手を組む底の主人公は果して何物ぞと、從晝至夜に參究して見よ。忽然として本來心に觸着するの時節があるであらう。

坐禪儀に『珠を探るには宜しく浪を靜むべし、水を動ずれば取ること應に難かるべし、定水澄淸なれば心珠自づから現ず』とあるが、工夫をして、工夫しぬいて、工夫の究盡するところ定水の澄淸を見るものである。これを『頓に無生に入る』といふ。頓とはこの身心のまゝこの現在のまゝといふことである。無生は生死の相を泯じた大涅槃の境界、父母未生以前の本來面目である。換言すれば佛の覺道である。佛の道を覺するのが禪門の目的にして、自覺の極處である。この境界に達するは全く佛知見の力である。知見とは佛のお悟りのことで佛のお悟りとは自覺の極處をいうたものである。釋尊御一代の御化導も唯だ佛知見を開示して悟入せしめんがための御艱難である。併しこの佛知見は文字言句を以つて詮顯し得べき法でない。宜しく七尺單前に向つて妄想窟を打破し、箇の活工夫を下し來れ。

大丈夫秉慧劍。般若鋒兮金剛燄。非但能摧外道心。早曾落却天魔膽。

【和訓】大丈夫慧劍を秉る、般若の鋒金剛の焰。但能く外道の心を摧くのみに非ず。早く曾つて天魔

の大功徳は、本來自家の寶藏に備はり、曾つて缺くることはない。然るに、この法財を損害し功徳を滅却して、枉げて貧窮薄福の凡夫となりて、三界六道に輪轉しつゝあるは、決して他より我れを苦しむるに非ず、畢竟じて皆な、自己の心意識の所爲である。

心意識とは楞伽の註に釋論を引いて『心意識の三は一法の異名なり、對境を心と名け、能生を意となし、分別を識となす』また云はく『前起を心となし、次起を意となし、後の了別を識となす』とありて、つまり妄心妄念のことである。故に古歌にも『心こそ心まどはす心なり心に心こゝろゆるすな』とある。

次に『これを以つて禪門は心を了却す、頓に無生に入るは知見の力なり』と仰せられたは、禪の主眼を示されたのである。法財功徳の大賊たる心意識を降伏するの術は、心意識の本質を了却するに如くはない。これ禪門に於ける直截根源の開示である。心意識なるものは畢竟なにものぞと回光返照して見るがよい。

昔、靜上座なる高僧があつた。玄沙禪師に參得して大事を明らめ、天台山に居ること三十年とある。ある時一禪者が來りて『坐禪の時心念紛糾して三昧に入り難し、願はくは示誨を賜へ』と願うた。すると上座は『汝、心念糾紛の時に當つて却つて紛糾の心を以つて紛糺のところを究めよ、これを究むるにところなくんば則はち紛糾の念何んぞ存せむ』と示された。參禪者は先づ以つてこの工夫を試むるがよい。

二祖大師は達磨大師に『乞ふ安心の法門を與へよ』というて、不安心の心を將ち來つて安心の道を求められたその時、達磨大師は『心を將ち來れ、汝がために安心せしめん』といはれた。靜上座の所説もま

損法財滅功德。莫不由斯心意識。是以禪門了却心。頓入無生知見力。

【和訓】法財を損じ功德を滅することは、斯の心意識に由らずといふこと莫し。是を以つて禪門には心を了却す。頓に無生に入るは知見の力なり。

始めの『法財云々』の二句を深く參究するがよい。法財といふは世間の物質的財寶と簡別したのである。世財は此の身を賑はし、法財はこの心を飾る。未曾有因緣經や十誦律には七聖財を說かれてある。卽ち一に信財、二に戒財（修身）、三に慚財、四に愧財、五に聞財（聞法得智）、六に捨財（布施喜捨）、七に定慧（凡夫の智慧は散亂妄動するを以つて散慧といふ、賢聖の智慧は理を守ること堅牢にして、道に住することと安固なるを以つて定慧といふ）の七ツである。孔夫子の仁も基督の愛も、皆な法財の一部分である。

併しながら、眞個の法財は人々具有の佛性である。八萬の法門も無量の敎義も皆なこれより生ずるのである。この法財に依つて衆生利益の願行も發せられ、四恩報謝の行持をも完うするのであるから、洵とに功德中の大功德と謂ふべきである。孟子でさへも『萬物我れに備はる』といふた通り、かくの如く法財

いのである。唯だ一時の顚倒に依つて、空中に華を認むるが如く、妄なきに妄を生じたのである。妄の妄なることを識得すれば、この身心がソックリ全宇宙の眞理である。換言すれば卽心是佛である。然るに、この理を知らずして猥りに妄心を惡み、この身心を離却して別に眞理を取らんとすれば、恰も波を棄てゝ水を求めんとするやうなもので、その取捨する心が旣に一箇の妄想である。巧はタクミ、僞はイツハリ、妄想で小刀細工をするのが巧、眞實の妙理に背くのが僞である。

然るに『學人了せずして修行を用ゆ、眞に賊を認めて將つて子と爲すことを成す』で、多くの學佛法の人は眞實の妙理を了知せざるを以つて、迷悟苦樂の相を認め、轉迷開悟、離苦得樂の目的を以つて修行力を用ゆるのである。尤も佛敎の目的は轉迷開悟、離苦得樂といふことも出來るが、單にこの目的のみを以てすれば、所謂無漏の修行にして、到底、絕學無爲の三昧に達することは出來ぬ。何故なれば、迷悟の幻相を執し苦樂の影像に着するは畢竟妄想であるからだ。妄想は佛性の寶珠を奪取する大賊である。その大賊を以つて妄に修行の功を貪り、これを以つて大道を徹證せんと思ふのは、賊を認めて子とするやうなものである。果してかくの如くならば、依然として野狐窟に墮在するものといはねばならぬ。

併し、その賊なるものを活捉して、これを訓練し誘掖し去らば、却つて眞實の愛子と變じ去るであらうと思ふ。菜根譚に『見聞聲色は外賊たり、情慾意識は內賊たり、唯だ能く主人翁惺々不昧にして中堂に獨坐せば、賊便はち變じて家人となる』とあるも、またこれ一面の觀察である。

碧巖の雪竇の頌に『一に多種あり、二に兩般なし』とあるが、眞理はさうしたものである。一かとすれば無量の法あり、二かとすれば微塵も差別なし、一にして一に非ず、二にして二に非ず、一卽一切、一切卽一である。この眞理を自己の境界とせねば絶學無爲の道人とはいはれぬ。非思量といふのもこの境界を說破せられたものである。

捨二妄心一取二眞理一。取捨之心巧成レ僞。學人不レ了用二修行一。眞成二認レ賊將爲一レ子。

【和訓】妄心を捨て眞理を取る、取捨の心巧僞と成る。學人了せずして修行を用ふ、眞に賊を認めて將つて子と爲すことを成す。

前句より更に一歩を進めて論ずれば『妄心を捨て眞理を取る、取捨の心巧僞と成る』で、凡夫迷妄の心を捨て、この身心以外に眞理を取得せんとするも、矢張、取捨の心を存するを以つて、恰かも第二の妄想を拵へ出したやうなものである。妄心とは六塵の緣影を追うて憎愛の念を生ずる凡夫の妄心である。この妄心なるもの畢竟何物ぞと返照工夫して見よ。妄心と稱すべき固體はない筈のものだ。吾人の身心は宇宙の一分體である。否、この身心を究盡すれば、宇宙の全體である。元來、身心には妄心なぞといふものはな

蕩は譬に大なりと註して、天の高きが如く、海の濶きが如く、少しも邊際の見えぬ意味である。玆では法度廢壞の貌で、締めくゝりのつかぬことをいふ。原因結果の理法を信ぜざる時は自然に善惡賞罰の法則も成り立たぬから、人道も遂に不規則、無制裁に流れ、その結果は現世に在りては迷妄を重ね、罪惡を増し未來に於いては惡道に墮ち、衆苦に縛せらるゝといふ殃禍を自ら招くことになる。

次に『有を棄て空に着く病亦た然り、還つて溺を避けて火に投ずるが如し』とあるは、有とは三世實有法體恒有といふやうに諸法は實にあるものぞと執して、本來無自性不可得なることに體達せぬ、これ凡夫の妄執である。無量の煩惱無邊の罪惡は皆これより生ずるを以つてその病たることは論なし。然らば、その有の見を棄てゝ諸法畢竟空なりと執し、偏へに空の一方に墮在して空卽是色の妙理を知らざれば、前二句に說くが如き斷見外道の窠窟に投入するが故に、これまた一種の病である。『然り』とは有執の病と同一であるとの語であるが、斷見の病は自然破壞主義になるから有執の見よりも寧ろ猛烈である。蜷川新左衛門の妻が『麻絲の長し短かしむづかしや有無の二ツをいつか離れん』と詠んだとあるが、兎角吾々は有執に墮せざれば空見に偏し、空見を脫すれば有執に墮し、容易にこの病を離るゝことが出來難い。一類の外道や小乘の學者は、有執の妄なるを悟りて空見に墮するものが多い。これ一病を脫して更に他の一病を發するやうなものである。故に還つて、水に溺るゝを恐れてこれを避けたはよいが、更に火中に投ずるやうなもので、法身の慧命を害することは同じである。

而投ㇾ火。

【和訓】豁達の空は因果を撥ふ、莽々蕩々として殃禍を招く。有を棄て空に着く病亦た然り、還つて溺を避けて火に投ずるが如し。

この四句は前の『一顆の圓光内外に非ず』といふことを妄解して、空見に墮在するものを誡められたのである。

初めに『豁達の空は因果を撥ふ、莽莽蕩蕩として殃禍を招く』は、正しく空見の弊患を述べたのである。豁はホガラカ、達はトホル、即ち洞豁通達の義である。喩へば四方の障子を明け開いて、何等の障碍物をも見ざるの貌である。内外にあらざる空界には、因もなく果もなく神もなく佛もないと、緣起差別の相を排除して空の一偏を執するを豁達の空といふ。故に因果を撥ひ無みして、惡因あるも惡果なし善因あるも善果なし。三世因果といふは佛の方便説で、畢竟は無いものであると執するのである。かくの如きは斷見の外道と稱して、邪見の甚しきものである。華嚴疏鈔には『邪見と言ふは因果を撥無す、諦理に於いて猶豫して決せざるを以つて遂に撥つて無となす』とありて、眞理を決着するの知見を有せざるを以つて斷見に落つるのである。莽莽は艸の深き貌、漠々たる曠野は見渡す限り一面の草原、一峯の聳ゆるなく、一林の見るべきなきが如く、因果の原則を否認するが故に道德上何等の制裁も規律もない狀態である。蕩

菩薩も盡く自己方寸の中に顯現して大光明を放ち大神通を現じたまふ。自己の全身がそのまゝ法界の佛事をなして無邊際無間斷であるのである。併し『一顆の圓光内外に非ず』で、自己と世界とは元來別々のものではない。萬法の全體が自己の一心鏡であるから、この一心鏡の光明は宇宙法界を盡して唯一無二で、且つ不生不滅、不增不減なるが故に圓光といふ。玄沙が『盡十方世界一顆の明珠』というたのもこのことを示したのである。

すでにこれ法界一心鏡とせば、映すところの鏡と、映さるゝものとの差別は立てられぬ。世間の鏡なれば外にものありてその影を内に現ずと雖も、心鏡に至りては天地一枚の靈光であるから、内外表裡の別はない。これを内外に非ずというたのである。龍門覺禪師が『盡大地これ學人が一卷の經、盡乾坤これ學人が一隻眼、這箇の眼を以つて是くの如きの經を讀むこと百千萬劫常に間斷なし、諸人還つて看讀し得るや否や』といはれてあるが、吾人もまたこの盡乾坤一面の古鏡を見得して、蓋天蓋地、靈光を發揮せねばならぬ。これを丈六の金身を攝して一莖草に收め、一莖草を拈じて丈六の金身となす底の妙用といふのである。佛教に就いて、いはゞ一切藏經を攝して自己の脚跟下に收め、脚跟下の一進一退をして一切藏經たらしむる底の活機輪がなければならぬ。

豁達空撥㆓因果㆒。莽莽蕩蕩招㆓殃禍㆒。棄㆑有着㆑空病亦然。還如㆓避㆑溺

光内外に非ず。

これは空無相を了知したる覺悟の狀態を述べられたのである。『心鏡明かに鑑みて礙りなし、廓然瑩徹して沙界に周ねし』とは了知の境界である。一心は本と明鏡の如くにして靈照不昧であるが、二法差別の迷執に礙へられて、空中に華を認め、繩なき繩に縛ばられて居るのである。一たび二法の空無相なることを了知すれば、心鏡再び明らかにして、順逆の境に對し、迷悟の域に處するとも、その實相を鑑みて曾つて境界のために轉ぜられぬから、無礙自在である。凡夫は外境の假相に執着するが故に、取捨憎愛の見に繫縛せられて、永く解脫の分がない。如來の眞實相を大觀し來らば、十方世界行くとして至道ならざるはなく、森羅萬象物として佛法ならざるはなし。故に廓然として心光瑩徹り、沙界に周徧するに至るのである。廓然の廓はホガラカで、秋空一點の雲だもなき如く、何處から何處まで通暢なるをいふ。瑩は光りの輝くをいひ、徹は隅々までも輝き渉るをいふ。沙界は恒河の沙の如く限りなき世界といふので、宇宙の全局を指したる語である。

かく心鏡の瑩徹する時は、『萬象森羅影中に現ず』で、天地法界盡く自己の心中に包含せらるゝこと、萬象の影を鏡中に現ずるが如くである。萬象は千萬無量に差別する現象界のこと、森羅は樹木長翠にして目前に羅列すと註して、鬱茂なる大森林の目前に羅なるが如きをいふ。萬法卽一心、一心卽萬象にして圓融無礙であるから、自己一心の明鏡裡には十方法界を攝し盡して漏すことはない。故に三世の諸佛十方の

となり、極樂へ行くはよし。地獄へ落るは目出たし、玉韻を和す。

自己念其不レ見レ心、青燈已耀一燈心、市々默々有二明鏡一、全識人間清淨心。

『誰か見ん誰か見るべき有にあらず無きにもあらぬ法の燈火』、園女の見解は未だ乳臭を脱せざるところがある。空と不空とを脱落する底の境界は大信念の人に非ざれば得難し、『極樂へ行くはよし、地獄へ落つるは目出たし』とは既に第二頭に落在して、二法のために囚はれて居る。更に數十步を進めて、徹底、無相の相を見破したのが『卽はちこれ如來の眞實相』で、諸佛如來の證得したまへる、中道眞實の相である。眞實相というても不思議の觀をせまいぞ。曹洞太祖常濟大師は、その師徹通禪師の『平常心是道』の話を擧するを聞いて覺省するところあり。更に數歲の工夫を凝らして廓然徹證し、禪師に答へて『黑漆の崑崙夜裡に奔る』というた。禪師未だ肯がはず『未在、更に道へ』と再驗せられた時『茶に逢うては茶を喫し飯に逢うては飯を喫す』と答へられた。喫茶喫飯曾つて味ますことなし、こゝに眞實相が現成する。

心鏡明鑒無レ礙。廓然瑩徹周二沙界一。萬象森羅影現レ中。一顆圓光非二内外一。

【和訓】心鏡明かに鑑みて礙り無し。廓然瑩徹して沙界に周し。萬象森羅影中に現ず、一顆の圓

【和訓】眞をも求めず妄をも斷ぜず、二法空にして無相なることを了知す。無相は空無く不空も無し。卽ち是れ如來の眞實相。

前句の如く、自己の身心と佛祖の身心と一如契合する底の人ならば、既に生佛眞妄の二邊對待を超脱するが故に『眞をも求めず妄をも斷ぜず』で、身心以外に別に求むべき眞實の法もない。如何となれば生死去來眞實人であるからである。また、別に斷ずべき妄想とてもない。如何となれば身心世界そのまゝが一佛法の露現であるからである。眞妄の上に於いて差別の執見を立せざるが故に『二法空にして無相なることを了知す』二法とは眞妄迷悟等の對待の法でああ。この法そのまゝ平等なるを空にして無相といふたのだ。一線和尚は『空は中道の空、無相の相は實相である』と解釋した。つまり二法圓融を空とも無相ともいふたのである。既に圓融して對待の見るべきなしとすれば『無相は空なく不空もなし』で、空と不空との名もない筈である。色以外に空を立つれば、空の相手に空ならざるものがある譯である。然るに色と空との二法を超越したる實相、無相であるから、空不空の沙汰は御無用である。女流俳人として名高き伊勢の園女が、雲虎和尚に答へたる書に、

來書の趣拜見仕候『不求眞不求妄』は大道の根源、誰も存する處、憚りながら珍しからず候、一心源頭に上つての所作、柳は綠花は紅、唯その儘にして常に句を云ひ、歌を綴つて遊び申候ことに候無益の口業ならば一切經も無益の口業にて候、法臭きことは嫌ひにて。我が平日の行ひは念佛と句と歌

はす物なく、一鉢一錫、飄然として塵外に逍遙す、これ道人の活計である。併し、必ずしも、これを社會に遠ざかりたるものとは思ふまいぞ。縱ひ花街柳巷に在りと雖も、絕學無爲の人ならば、そのまゝが空劫以前の風光であるからだ。

『これ形を標して虛く事持するにあらず、如來の寶杖親く蹤跡す』是くの如きは單に佛弟子たるの形容を標示して、虛く古風を死守して事に從がひ、法を持つのではなく、この境界が直ぐ佛祖の身心を實現するのであるから、釋迦如來の寶杖、即ち錫杖をば佛在世と同一に、親しく拜戴奉持して其の蹤跡を實踐するのである。寶杖とは、錫杖には自利々他の功德あるを以つて寶の杖と稱す。而して、寶杖の一を擧げて、降龍の鉢、雲霞の衣をも含んで居るのである。親くとは、自己の身心と如來の身心と、一如契合するをいふ。佛法は是非かうなければならぬ。唯だ外形だけが佛弟子の眞似をしても、一如契合の妙處がなければ沐猴の冠と一般である。併し、頭を丸め衣を染めたばかりが一如契合ではない。居士でも、大姉でも、佛性戒を發得して絕學無爲し去る時は、そのまゝのが佛心佛行である。

不レ求レ眞不レ斷レ妄。了二知二法空無相一。無相無レ空無二不空一。即是如來眞實相。

『降龍の鉢』と稱するのは、釋尊が嘗つて優樓頻羅迦葉及び那提迦葉、迦耶迦葉の三迦葉を濟度せられんとする時、三迦葉は火龍を使ふて釋尊を害し奉らんとしたが、釋尊は彼の火龍を降伏して鉢の中に收められた因緣がある。また、支那晉の高僧涉公は、符堅の建元十一年、長安大ひに旱せる時、符堅の請に應じて天龍に雨を祈つたことがある。その時、天龍が涉公の鉢中に入り、大雨盆を傾くるが如くに降つたとある。これ等の因緣に依つて降龍の鉢といふたものである。

『解虎の錫』とは、齊の高僧稠禪師が懷州の王屋山に入りて禪を修して居られた時、忽ち虎の鬪ふ聲を聞いた。往つてこれを見るに二疋の大虎が死力を竭して相鬪つてゐた。師はこれを愍然に思ひ、錫杖を以つて中解られた。それより解虎の錫と名くるやうになつた。

降龍も、解虎も、その修行力の甚だ大にして威德無邊なるをいふ。『兩鈷の金環鳴つて歷歷』とは、矢張、錫杖のことである。鈷の字は、辭書には黍稷を盛る器とあるが、或る說には『股』または『箇』の字と同じで、兩鈷とは兩般とか兩箇とかいふ意味であるというてある。また、一說には鈷といふは、錫杖の首の、環の掛かつて居る中心のことで、二股になつて居るを兩鈷といふとある。四股になつて居るのもある。環にも六環と十二環とがある。梵天の琪和尙の注に『兩鈷は眞俗の二諦を表し、六環は六波羅蜜を表す、中心は中道を表す、小乘の錫杖は卽はち四鈷十二環なり、四鈷は四諦を表す、十二環は十二因緣を表す、中心の浮圖は住持三寶を表す』というてある。歷々は金環の鳴る音色である。身邊一物の我を累

志すものは參學の目的を定め、あらゆる疑團を生起して、これを打破することに努めざるべからず。而して、その參禪なるものは畢竟自己の研究なるを以つて、如何なるものもこの問題に向つて工夫せざるべからず。而して、その工夫の標準は古則公案を以つて切實なるものとす。古則公案のうちにても、己れの機宜に適當なるものを擇ぶの要がある。これを擇ぶの法は宗匠の鑒照慈誨を仰がねばならぬ。無師獨悟などいふことは、初發心のものゝいふべきことではない。その公案を工夫し盡して、遂に徧法界の大公案を觀破するに至るのである。この邊の機微は能々親參實究を要することゝ思ふのであります。

## 降龍鉢解虎錫。兩鈷金環鳴歷歷。不是標形虛事持。如來寶杖親蹤跡。

【和訓】降龍の鉢解虎の錫、兩鈷の金環鳴つて歷々。是れ形を標して虛しく事持するにあらず、如來の寶杖親しく蹤跡す。

鉢といひ、錫杖といひ、皆な道人自受用底のものである。鉢は梵語で、具さには鉢多羅、こゝには應量器と譯して、食を盛るの器のことである。佛弟子は乞食を以つて自活す。食を乞ふに當り、自己の分量に應じてこれを受けて決してその他を望まざるが故に名く。

へたものである。この戒珠は一心の上に本來具有するを以つてこれを佛性戒といふ。絶學無爲の道人たるものは、この佛性戒の如意珠を自己の心田地に印して諸佛と同道同證である。印は印象といふ意味で、佛性戒の妙德を、印形を押して證據を現はしたやうに、自己方寸の中にピタツと刻み込むことである。自己心の地に戒德成就するを以つて、その境界は實に人生を解脫し、超然として三昧に遊戲して居るから、霧露雲霞等の大自然そのまゝを體上の衣となすといふたのである。

衣は佛袈裟のことである。袈裟は福田衣とも、解脫服とも名づく。それは世塵を超越するが故に解脫服と稱し、人天を利益するが故に福田衣と稱するのである。霧といひ、露といひ、雲といひ、霞といふは、何れも無心解脫の意味と、能く衆生を潤ほす菩提の芽を生ぜしむるの意味とを形容したものであります。

これを要するに、古則公案を提撕するは見性の標的を定むるものであるから、參禪學道の士は、初發心の最初よりこの公案を擧着して、從晝至夜に工夫せざるべからず。豈に唯だ坐時のみに限るの道ならんや。拔隊和尙は常にこの事を硏究し『自ら生死事大緩うすべからず』と嗟げき、功を用ゆること益々切に或は遊行して足の移るすら忘れ、或ひは露坐して驟雨の侵すを覺えなんだとある。卍山禪師も、

參禪の要路は平生に在り、眼を開いて常に須らく驀直に行くべし、一切有爲皆夢幻、時々に觀破して情を容るゝこと勿かれ。

物理家が事々物々に物理を硏究するが如く、政治家が在々處々に政治を考査するが如く、撥草參玄に

『江月照し松風吹く、永夜の淸宵何の所爲ぞ』とは、自利々他受用不盡底の光景を示されたのである。江に浮べる明月は珠の如く淨らかにして、影を萬波の上に宿し、普く天地の暗を照らして居る。これ自利々他の妙用にあらずや、松に吟ずる淸風は、水の如くに凉しくして、曲を翠葉の陰に奏し、人間の熱塵を吹き散じて居る。これまた自利々他の妙德である。而して、かくの如く永き夜に於ける淸凉なる宵の景色は果して何の所爲であらう。また何のためであらう。これ何んのためといふことなくして自然に然るのである。月の輝くは敢て自己のためにするに非ず、風の吹くは敢て他人のためにするに非ず、而も任運にして自を照し、他を照し、天眞にして自を淨め、他を淨む、雪竇禪師は『百花春到爲誰開』といひ、宏智禪師は『犀依翫月紋生角、象被驚雷花入牙』ともいはれてある。然れば自利々他の功德は法性自然の妙用なることを知るがよい。この法性自然の德と一致したのが眞箇の閑道人であるから、徹底證道の人ならば無心無爲にして自づと自利々他の妙用を現ずべきものです。

次に『佛性の戒珠心地に印す、霧露雲霞體上の衣』とあるのが、その閑道人の光景である。佛性とは吾人の心性に佛の智慧德相を具有するが故に名けたもので、つまり心の異名と見るがよい。戒は防非止惡の義、一切の不善業を制せられたる佛敎の道德律であるが、併し縮めていへば孝順慈悲これ戒である。孝順慈悲とは畢竟自利々他の德相である。然れば戒と稱するは自利々他の法をいふのであります。この自利々他の功德に依りて、煩惱の暗を除き、業障の穢れを去り、人生をも照し、天地をも照すからして珠に喩

三世諸佛の月光は卽時に吾々の心地上にその輝きを發し、吾と佛と感應冥合するものである。これ謂はゆる佛法をして自己たらしむるもの、而して、これが正しく佛法の根本精神である。

永嘉大師の證道というもまた、唯だこの卽心是佛を自得し實現せられたのである。故に『我れ今この如意珠を解す』と仰せられた。如意珠というは、前にある摩尼珠の譯名で、つまり人々本具の佛心に名けたものです。この佛心は、從本以來、曾つて迷はず、曾つて汚れず、而して一切の智慧德相、圓滿具足して缺くるところなきを以つて、如意珠に喩へたのである。一度この如意珠を了解すれば、本性の智德を開發し天性の恩德を顯現するが故に『自利々他終に竭きず』で、自ら佛地に遊戯するのみに非ず、進んで一切の衆生を誘引して齊しく佛地に悟入せしむ。自利は智德の開發にして利他は恩德の顯現である。佛性無限なるが故に智德も無限なり。本心常住なるが故に自利々他の妙用もまた常住なり。自他平等に差別なく、盡十方世界が一顆の明珠となり去るのである。

**江月照松風吹。永夜淸宵何所爲。佛性戒珠心地印。霧露雲霞體上衣。**

【和訓】江月照らし松風吹く、永夜の淸宵何の所爲ぞ。佛性の戒珠心地に印す、霧露雲霞體上の衣。

利利他終に竭きず。

吾人の脚跟下に佛世界の存することを知らず、妄りにこれを遠きに求むるが凡夫の通弊である。故に『但だ本を得て末を愁ふること莫かれ』で、佛法を修せんと欲つせば、佛法の根本精神を覺得することが肝要である。根本を覺了すれば、本來一佛法にして、天地萬象も一法の所印であります。即心是佛の外に佛法の精神はない。然るに或は西方と說き東方と說き、迷界と論じ聖界と論ずるは、盡くこれ隨機の說法である。衆生の根性千差なるを以つて佛の說相もまた萬別ならざる能はず、喩へば來賓を接するに、夏は戶を開き風を招き、冬は戶を閉ぢ風を防ぐが如し。その跡殊なりと雖も、來賓を遇する所以の旨趣は、更に異なることがない。來賓をして安樂ならしむるは、これ本にして門戶の開閉は末である。凡夫は漫りに末のみを追ふてその本を忘るゝに依り、動もすれば佛法中に在りながら佛法に辜くことを致すのである。能くその本を得る時は、末は自づから具足するに依つて、何ぞ敢へてこれを愁ふることをなさんや。

佛法は元來自己心地上の法門である。佛法をして自己たらしむるに非ざれば、佛法の功德は決して現前せぬものです。これを喩へて見れば『淨瑠璃に寶月を含むが如し』である。これは楞嚴經に『圓明精心中に於いて化を發す、淨瑠璃の寶月を含むが如し』とあるより出でたり。楞嚴の義疏にはこれを釋して『慧心は瑠璃の如く、因行は寶の如く、果德は月の如し』とあるが、茲では寶月は唯だ月の形容語と見れば宜い。淨らかなる瑠璃盤には天邊の明月自からその影を印するが如くにして、吾々の心地清淨ならば

實相とは法性自然の相である。法性眞實の相といふは、人々具有せる本來の面目のことである。佛教の大目的は衆生を誘引してこの實相の門に入らしめんとするに外ならぬ。而して、この實相の門は觸處々々に圓通して居る。溪聲便是廣長舌、山色豈非淸淨身、水鳥樹林も皆盡く佛心佛德を顯現して居らぬはない。若しこの意を識得せば、一切衆生本來成佛、天地法界そのまゝが佛國土である。されば未來に赴いて成佛するとか、西方にのみ佛土を見るとかいふやうな迂遠な法ではない。從つて三祇百劫などといふ閑名目も用不著である。多劫を經ずして卽座に成佛するを以つて一超といふ。多岐に渉らず、驀直に證入するを以つて直入といふ。如來地とは佛地のことである。

曾て一俗士あり。洛京靈泉の歸仁禪師に問ふ『俗人還た佛法を會することを許さんや否や』と。禪師はこれに答へて『那箇の臺にか月なからん、誰が家の樹か春ならざらん』といはれた。知るべし、佛界遠からず、自己方寸の間に在りて、終日終夜大光明を放ち、大法輪を轉じて居るといふことを。

**但得レ本莫レ愁レ末。如三淨瑠璃含二寶月一。我今解二此如意珠一、自利々他終不レ竭**

【和訓】但本を得て末を愁ふること莫れ。淨瑠璃に寶月を含むが如し。我今この如意珠を解す、自

勢力盡箭還墜。招二得來生不如意一。爭似無爲實相門。一超直入如來地。

【和訓】勢力盡きぬれば箭還つて墮つ、來生の不如意を招き得たり。爭でか似かん無爲實相の門、一超直入如來地なるに。

上の二句は前句を承けて『勢力盡ぬれば箭還て墮つ、來生の不如意を招ぎ得たり』と示されたものである。布施にせよ、禪定にせよ、妄想の窠窟を破却せざる以上は、虚空に箭を射るが如くなるを以つて、勢力のあるうちは高く天上にも昇るが、その勢力が盡きまするると、また本の下界に墮落するを免がれぬ。啻に本の下界に墜つるのみならず、鬱頭藍弗の如く、還つて、來生、卽ち未來の生には飛狸の身を受けて、現在よりも遙かに劣等にして苦惱多き惡報を招ぐやうなことにもなるものである。不如意とは意の如く自由ならずであるから、衆苦のために繫縛せらるゝをいふ。地獄・餓鬼・畜生の三惡道等は、最も不如意の世界である。

故に下の二句に『爭でか似かん無爲實相の門、一超直入如來地なるに』というて、吾人進趣の標準を示されてある。無爲は有爲の反對であるから、凡夫の妄想を離却して天眞の妙理に隨順したる佛境界をいふ。

菩薩の大行を六度と稱す。卽ち布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧の六大行である。この六度の行は何れも最勝の善根なりと雖も、若し妄想心を以つてこれを行ふ時は、決して佛法廣大の功徳を收むることは出來ぬ。此の句は六度の中の最初の布施行を擧げて他を略したのである。なぜなれば、妄想あるものは必ず布施の相に住着し、常に所施の境に對して憎愛の念を生じ、施物に於いては輕重大小の相を執す。故に、その心に限りあつて、その物にも亦た限りがある。限りあるの心を以つて限りあるものを布施するのであるから、その果報は少かに生天といふて、天上界に生るゝの福を享くるに過ぎぬ。換言すれば、名譽を博するとか尊敬を受くるとかいふ、優等の位地に進むことが出來るだけである。併し、既に有限なるが故に、何時までもその名譽と尊敬とを占有することは出來ぬ。猶ほ箭を仰いで、上向きにして虛空を射るが如く、全く一時的の向上である。少しく油斷すれば、今日の名譽も他日の不名譽となり、現在の尊敬も將來の侮蔑と變ずるかも知れぬ。

欝頭藍弗仙人は五通を得た程の賢者であつたが、林樹の間に入れば鳥の樹上に鳴くあり、水邊に坐すれば魚の鬪かつて水を動かすあり、彼はこれを憤りて、我れ當に盡く魚鳥を殺すべしといふ念を生じた。死後、定力に依つて一旦は非有想非無想處天に生れたが、天壽盡くるや否や、飛狸といふて獺に羽の生えたやうなものに生れ變り、水に入つては魚を殺し、山に飛んでは鳥を殺すやうな身になりしことが大論に出でたり、妄想界のことは大概こんなものである。

を仰いで虚空を射るが如し。

法の本法は元來無法である。迷悟凡聖の相を執するは空中に華を認るよりも果敢なし。天地法界を盡して一大佛身なることを覺悟すれば、この身は本來成佛である。これを『覺すれば則はち了ず』といふ。了とは了事底の人なることをいふのである。功を施さずとは三祇百劫を經、五十二位の階級を履みて漸々に修行の功勳を施すことなく、謂はゆる一超直入如來地なることを示されたのである。如何となれば『一切有爲の法と同じからず』で、凡夫人爲の法でないからである。凡夫界に於ける迷悟苦樂等の一切の諸相は皆な有爲の法である。有爲とは『爲すこと有り』といふので、總て妄想分別を以つて爲作へたるものをいふ。

人生の苦樂昇沈は皆な一時的の幻象である。そは妄想の所爲であるからである。喩へば夢中に種々の苦樂を感ずるが如き、覺者の眼より觀れば夢想も夢境も兩つながら妄想の所生である。人生の順逆苦樂もまたかくの如くである。故に逆も絶對の逆に非ず、順も絶對の順に非ず、苦にして樂なるあり、樂にして苦なるあり、苦樂順逆變遷して定め難き、これが有爲の法の常態である。然るに、祖門の覺道は常住不滅なる大道の顯現なるが故に、古今に通じ東西に渉りて毫末の異動はない。卽ち法性天眞の妙法なるを以つて、有爲の法とは本より相同じからぬこと當然である。唯だ凡夫の悲しさは、この有爲の法にのみ執着するを以つて、縱ひ善根功德を積むと雖も、多くは妄想の所爲に屬し、眞の功德を得ることが難いのである。故に次の句に『住相の布施は生天の福、猶ほ箭を仰いで虚空を射るがごとし』と仰せられた。

次に『優遊靜坐す野僧が家、閴寂たる安居實に瀟洒』とあるは、前二句は境にしてこの二句は人をいふ。優遊は自得の貌、即ち他に待つところなく自ら安心の地を得て、物外の天地に逍遙するを云ふ。靜坐とは、諸縁萬境の繋縛を受けず、自己本分の田地に安坐するをいふ。野僧とは田舎僧といふので、自から謙遜した辭、閴寂とは物寂しく人聲をも聞かざる深山の光景である。安居は資持記に『形心攝靜を安といひ、要期して在住するを居といふ』とありて、一夏九十日、雨期を尅して攝心靜住することであるが、今は唯世外に住することゝ見るが宜い。瀟洒は清虚累ひなきの貌とあるから、水を以つて洗ひ洒ぎし如く、更に一點の塵垢だも留めざるをいふ。野僧が優遊として自家の牀上に穩坐する時は、境既に靜かにして人もまた寂嘿なり。何んぞ六根六塵等の煩累あらんや。卍山禪師の偈に『一時靜坐一時佛、縱是念生如電拂、諦了自家方寸心、元來大地無他物』とあるが、徹底王三昧に安住すれば、盡天盡地到るところとして自家の本家鄕に非ざるはないのである。

覺則了不施功。一切有爲法不同。住相布施生天福。猶如仰箭射虛空。

【和訓】覺すれば了じて功を施さず、一切有爲の法と同じからず。住相の布施は生天の福、猶ほ箭

この一段の慈訓、參じ去り參じ來りて止まざれば、自づから生死を以つて佛の轉大法輪とも見ることが出來るであらう。

入₂深山₁住₂蘭若₁。岑崟幽邃長松下。優遊靜坐野僧家。閴寂安居實瀟洒。

【和訓】深山に入り蘭若に住す、岑崟幽邃たり長松の下。優遊として靜坐す野僧が家、閴寂たる安居實に瀟洒。

これ生死の羈縛を脱したる道人の活計を述べたるものにして、永嘉自得の境界とも見るべし。生死を解脱する底の人は、人生の假相に執せず、故に『深山に入り蘭若に住す、岑崟幽邃たり長松の下』を以つて自家の道場となす。蘭若は具さには阿蘭若、こゝに無諍處、または遠離處等と稱す。即ち世俗の喧諍を遠離するをいふ。岑崟は山の高き貌、幽邃は深遠の貌とあるから、遠く人間を離れたる貌。長松の下とは寒暑に依つて色を變ぜざる境界を露はせり。併し、必ずしも世と相容れざるものと思ふてはならぬ。『到る處無心なれば便ち是れ山』で、生死を透脱する底の漢ならば、縱ひ紅塵堆裡に住するも、猶ほ深山長松の下に在るが如くならん。

生入死、悠々として際限なく、或は天上人間に生じ、或は地獄鬼畜に生じ、こゝに死し、かしこに生まれ、三界六道を輪廻して定止すべき決つた場所はないのである。併し、一たび曹谿の道に參じて、頓に無生といふて『わが這裡生死なし』といへる眞理を悟了し去り、佛性常住にして曾つて變易なきの道を明らめなば、法界一佛體、古今一實相なることを了するが故に、人生の榮辱や禍福の相に對して惑亂せらるゝことはない。榮は光榮、辱は屈辱である。凡夫は兎角、榮華の位地に達すれば、これを喜ぶの餘り驕慢または懈怠となり、他の屈辱を受くるあれば、これを憂ふるの餘り怨恨または憎嫉となり、敵なきに敵を作り、讎なきに讎を結び、是非善惡、取捨憎愛、紛然亂然、遂に自ら劍樹刀山を造り出して苦痛を招ぐのである。若し生死の實相を證すれば、忽然として凡情を解脫することが出來よう。如何んか生死の實相を證すべきやといふに、承陽大師は左の如くお示し下されてある。

この生死はすなはち佛の御いのちなり、これをいとひすてんとすれば、すなはち佛の御いのちをうしなはんとするなり、これにとゞまりて生死に着すれば、これも佛の御いのちをうしなうなり、佛のありさまをとゞむるなり、いとふことなく、したふことなき、このときはじめて佛のこゝろに入る、たゞし心をもてはかることなかれ、ことばをもていふことなかれ、たゞわが身をも心をも、はなちわすれて佛のいへになげいれて、佛のかたよりおこなはれて、これにしたがひもてゆくとき、こゝろをもつひやさずして生死をはなれ佛となる、たれの人かこゝろにとゞこほるべき

時に菩提流支と光統律師といふ二人の外道あり、師の道徳天下に布き、人悉く歸敬するを見て、その憤ほりに堪へず、乃はち石を擲げて當門の齒牙を缺くのみに非ず、五度大毒を上つりたれば、祖乃ちその毒藥を、六度の時、盤石の上に置きしかば卽はち石裂けたりき

とある。達磨大師も毒藥の禍に逢はれたが、一心閑寂にして毫も攪亂することがなかつた。これ生死海中に在りて能く涅槃寂靜の大安心を獲て居られたからである。坦々は安く平らかなること、閒々は煩累なきの貌である。卽はち曹谿の道を認得せられてより後は、生死も更に相關はることなく、身心は縱ひ鋒刀に遇ふことあらんも常に坦々たり、假饒ひ毒藥を呑むとも、也た閒々たりと云ふ有樣になられたのである

幾囘生幾囘死。生死悠々無定止。自從頓悟了無生。於諸榮辱何憂喜。

【和訓】幾回か生じ幾回か死す、生死悠々として定止なし。頓に無生を悟了してより、諸々の榮辱に於いて何ぞ憂喜せん。

この一節は永嘉大師自から自己の經歷を敘べ、兼ねて生死卽涅槃の安心を示されたるなり。

吾人は無始の無明に依りて種々の業を造り、生死海中に浮沈すること、その幾回なるやを知らず、出

右借用仕候處實正也、御入用の節は何時にても差上可申候、爲後日如件。さあ〳〵宿がへの御用心々々々。

豪　潮　書

これは尾州知多郡乙川村の眞寶正通寺に現存して居る。さればとて生死を輕視してはならぬ。關せずといふは、生死のために束縛せられ、煩悶または疑惑の間に彷徨することなきの謂ひである。煩悶なく疑惑なきを以つて、生死を善用し、利用し、活用して隨處に大法輪を轉ずることが出來るのである。下の二句は正しく無礙自在の樣子を示されたのだ。

　西天の師子尊者は釋尊二十四世の祖師であるが、罽賓國王のために殺されたまふた。王は外道の謀に陷ゐりて佛法を滅さんとし、伽藍を破毀し、釋衆を去除し、劍を乘りて師のところに至り、問うて曰く、『師は蘊空を得るや否や』、師曰く『已に蘊空を得たり』、王曰く『生死を離るゝや否や』、師曰く『已に生死を離る』、王曰く『既に生死を離るれば我れに頭を施すべし』、師曰く『身はわが有に非ず、何ぞ頭を惜まん』王乃ち刄を揮つて師の頭を斷る。時に白乳を湧かすこと高さ數尺であつたとある。

　また、釋尊が過去に於いて、忍辱仙人となりて忍辱行を修せられし時、訶梨王のために身體を割截せられたが、我相なきがために一念の忿心だも起されなんだとある。これ即ち鋒刀に遇ふとも心地坦々として些子の動搖だもないのである。また、傳光錄、達磨の章に、大士の西來以後の事蹟を述べて、

ず、死し去りて死する所以を知らず、唯だ夢の如くに生死の荒波に飜弄せられ、喜怒哀樂の巷に彷徨して居るのである。然るに、永嘉大師の六祖に參ずるや、乃はち曰く『生死事大無常迅速』と。六祖が『何ぞ無生を體取し無速を了ぜざる』といふを聞いて『體すれば卽ち無生、了ずれば本と無速』と答へて、六祖より『如是々々』といふ印可を受けられた。體すれば卽ち無生、了ずれば本と無速、といふが大師の生死觀である　こゝに於いてか『生死相關からざることを了知す』で、驀然として生死を透脫せられたのである。生死は元來、開花落葉にも似たり。花開くとも天地は一絲毫を增すに非ず、落葉つるとも宇宙は一微塵を減ずるに非ず、仔細に觀じ來れば、一日の中にも生死あり、一時の中にも生死あり、一刹那の中にも生死がある。生死は宇宙活動の相である。故に生卽不生にして死卽不死なり。唯だ生といへば有の見を起し、死といへば無の見を執するを以つて、永く生死の假相に囚はれて涅槃の實相に通じないのである。この生死ありて吾人は大誓願を發し大修行をなす。この生死ありて宇宙は大機輪を轉じ大妙用を現はす。吾人の身分は無常なりと雖も、その無常こそ佛行佛德を顯現する基礎である。生死のまゝが生死脫落である。生死吾に於いて何かあらん。故に妙心開山無相大師は『吾が這裡生死なし』といはれたのである。また、豪潮律師は左の如き文字を弄して、生死自在の風光を描かれてある。

借宅證文の事

一　地水火風空作りの家　一軒

自認得曹谿路。了知生死不相關。縱遇鋒刀常坦々。假饒毒藥也閑々。

【和訓】曹谿の路を認得してより、生死相關らざることを了知す。縱ひ鋒刀に遇ふとも常に坦々、假饒毒藥も亦閑々。

曹洞宗に用ふる普通の本には『自』の下に『從』の字あり。二字にてヨリと讀んで居るが、證道歌は最初の五句を除き、他は總て四句を以つて一節となし、四句の中の第一句は皆な六字句になつて居るから、今は且らく四部錄に依つたのである。

曹谿は永嘉大師の師たる曹谿山に住せられたる達磨六世の祖師大鑑慧能禪師である。大師は特に六祖に參じ、一宿の下に於いて六祖の心印を單傳せられたから『曹谿の路を認得してより』といふたのである。

佛道修行の大眼目は、生死の問題を解決して、生死海中に遊戯自在なるにあり。故に承陽大師も『生を明らめ、死を明らむるは佛家一大事の因緣なり』と仰せられてある。

生とは生まるゝこと、死とはこの世を去ること。吾人は何に依つて生れ來りしや、死して何れのところにか去るや、また、何故に生死といへる事實の存在するものなりや。吾人は生じ來りて生ずる所以を知ら

行住坐臥、總てこれ禪ならざるはない。終日語るも口に咎なく、終夜默するも沈に墮在せず、動かば天下の則となり、靜まらば宇宙の眞玄に徹す。故に造次顚沛もその體自づから安然たるものがある。體とは自己をいふなり。身心ともに不動なるを以つて安然といふ。身心不動ならば天地も不動なり、萬境もまた不動なり。所謂『坐禪せば四條五條の橋の上往來の人を深山木に見て』で、動中に大靜を得、忙裡に大閒を占むることが出來るから『語默動靜體安然』というたのである。かくの如きは『我なく人なく法相なし』といふ徹底無我解脫の德に依るのであります。

金剛經には、我相・人相・衆生相・壽者相の四相を說いてある。五陰の法中に於いて常一主宰の我ありと計するを我相といふ。五陰の法中に於いて妄りに我はこれ人なり、我は人道に生れて餘道に異なると計するを人相といふ。五陰和合して實にこの身ありと計して、五蘊皆空の理に迷ふを衆生相といふ。我が身あれば必ず一期の壽命ありと計して刹那生滅の理に迷ふを壽者相といふ。この四種の迷相を離るれば般若眞空の妙理が自づから現はれる。今玆に法相なしといふ中には衆生と壽者との二相を攝したものである。無我無人無法相に至れば、始めて淨信大忍の力を增長し、本性の智德を顯現することを得べし。是れ即ち知識の根本、道德の淵源であるから『即ちこれ衆生の良福田』といふことが出來る。福田とは幸福を生長するの田地といふことである。幸福とは智德の顯現をいふ。智を明からにして道を辨まへ、德を圓かにして道を行なふ、是れ即ち永遠無窮の幸福を增進する所以である。

さるを怒り。刀を提げて仙窟に至り、遂に仙人の手足を截り落した。けれども仙人は少しも怒りの念を起されなんだ。而して、忍辱の功德は能く截り落したる手足が本の如くなつたとある。故に金剛經に於いて『また過去を念ふに五百世に於いて忍辱仙人と作る、爾所の世に於いて我相もなく人相もなく衆生相もなく壽者相もなし、この故に須菩提、菩薩は應に一切の相を離れて阿耨多羅三藐三菩薩心を發すべし』と仰せられた。

かく釋尊は然燈佛のところに於いて淨信を發し、忍辱仙となりては無我の大忍を行ぜられた。江海山川を歷訪し、道を求め禪を學ぶには、是非とも淨信と安忍の力に依らざれば能はず。

行亦禪坐亦禪、語默動靜體安然。無我無人無法相。卽是衆生良福田。

【和訓】行も亦禪坐も亦禪、語默動靜體安然。我なく人なく法相なし、卽ちこれ衆生の良福田。

淨信大忍の力は能く禪の骨髓に徹證せしむ。禪とは心を不動の地に安住して、取捨の妄念を起すことなく、直下に心地の光明を開發して智德の靈機を撥轉するの法であるから、禪機內に發する時は、一言一行、一動一靜も皆盡く、天眞の妙理に合し自然の妙道に契ふものである。故に『行も亦禪坐も亦禪』で、

を被むりて、頗る危險の地位に立つて居られたものと見える。元來、大師の眼中には教と禪との隔執はない。唯だ釋尊の大精神たる無上菩提を徹證するのが正しくその大目的である。この目的を達せんために、或は江海の間をも遊歷し、或は山川の險をも跋渉して、明眼の宗師を尋ね探り、佛祖の大道を訪らひ求めて專ら參禪のために辛勞せられたのである。

參禪とは禪道を參究することである。禪道とて別のことではない、佛教の眞髓これ禪道である。不惜身命は求道者の覺悟であるから、忍び難きをも忍び、堪へ難きにも堪へられたものと見える。豈に唯だ永嘉大師のみならんや『我が師然燈佛に見ゆることを得て、多劫曾つて忍辱仙となる』で、この難行苦行こそ寧ろ釋尊の芳躅である。

然燈佛のことは大論及び瑞應經等に出て居る。釋尊が過去世に於いて菩薩たりし時、然燈佛といへる佛が在まされた。菩薩、一日、懼夷と名くる王家の女が七莖の靑蓮花を持するを見、五百の銀錢を投じて五莖の蓮花を買ひ、これを然燈佛に供養した。その時、然燈佛は記別を授けた『汝は後九十一劫に當り作佛を得て釋迦文佛と號すべし』と仰せられた。これ釋尊が發心受記の因緣である。

忍辱仙のことは大般若金剛經や新婆娑論等に出て居る。釋尊、因地の御修行中、忍辱仙となり深山に在りて忍辱の行を修せられた時に、羯利といへる國王が遊山をして山中に眠られしことがある。其の際、宮女扈從の面々が、圖らず忍辱仙を見て、皆な其處に赴いて法を聞けり、王眠り覺めて嬪女等の傍らに在ら

游二江海一渉二山川一。尋レ師訪レ道爲二參禪一。我師得レ見二然燈佛一。多劫曾爲二忍辱仙一。

【和訓】江海に遊び山川を渉り、師を尋ね道を訪うて參禪を爲す。我が師然燈佛に見ゆることを得て、多劫曾つて忍辱仙となる。

曹洞宗に於いて最も廣く流通して居る本に依れば、第三第四の句は後に廻りて『爲二參禪一』の次が『自從認得曹谿路一、了三知生死不二相關一。行亦禪坐亦禪、語默動靜體安然。縱遇鋒刀常坦々、假饒毒藥也閒々。我師得レ見二然燈佛一、多劫曾爲二忍辱仙一』としてありて、この次の三四句なる『無レ我無レ人無二法相一、即是衆生良福田』の十四字を除いてある。今は四部錄に據つて本文の配置を定めたのであります。それは韵字を推して見れば、この四句と次文の四句とは先韵を連用し、次の四句は删韵を用ゐてあるから、意味は兎に角、韵字の方からは四部錄の方が正しいやうに思はるゝ。併し、迂衲は何處までもこれを固執する譯ではないから、取捨の判斷は識者に一任する考へである。

この本文以下も永嘉大師の確信と證道の經過とを述べられたものです。この文に依つて考ふるに、大師は元と敎家でありながら、專ら曹溪の禪を主張せられたところから、世上よりは必ず幾多の謗誹と妨害と

故に次の句に『香象奔波するも威を失却す、天龍寂かに聽いて欣悅を生ず』といふたのである。香象は水を渡るに足水底を踏むといへり。優婆塞戒經に「恒河の水、三獸倶に渡るに兎は底に至らず、水に浮んで過ぐ、馬は或は底に至り、或は底に至らず、象は則はち底を盡すが如し」とある。兎は凡夫に喩へ、馬は小乘に喩へ、香象は權敎の菩薩に喩ふ『奔波』は臨濟錄に『奔波して道を訪ふ』とありて、波の奔流するが如く、急遽逃れ去るの貌である。これは釋尊が曾て一乘圓頓の妙法を說きたまひし時、凡夫外道の輩は言ふに及ばず、權敎の菩薩までも皆な驚き恐れて、平生の威勢もどこへやら、全身の智力を盡すも更に妙法に觸るゝの分はなかつたとある。

永嘉大師も、今、曹溪直傳の妙法を宣傳するに、天下の人多くは驚き恐るゝのみであつて、容易に證契卽通するものはない。獨り諸天龍王の如き眞實佛法を外護せんとするものゝみ、心寂かに大乘獅子吼の音聲を聽いて深く欣悅の念を生ずるのである。直截にも『近世曹溪の本來無一物を判じて斷見と謂ふの類は、愚に非ざれば則はち狂か、若しまた狂に非ざれば定めてこれ魔屬なり』とあるを見れば、禪門の宗趣に通ぜざる輩などの、隨分と淺薄なる批評を下して、徒らに驚懼の情を逞しうしたものと見える。併しながら、知る人ぞ知る、見る人は見るらん。苟も天龍の如く眞に能く釋尊の正法を護持するの志あらんものは必ずや曹谿の佛法に對して深大なる欣悅を生ずるならん。

なり。諸佛の本體といふは定慧これなり。佛教の目的は成佛に在り。成佛といふは佛の覺體に一致するの謂である。而して覺體は人々具有の法にして他より來れるに非ず、これを開示したまふのが佛祖の轉大法輪である。

## 獅子吼無畏說。百獸聞レ之皆腦裂。香象奔波失二却威一。天龍寂聽生二欣悅一。

【和訓】獅子吼無畏の說、百獸これを聞いて皆腦裂す。香象奔波するも威を失却す、天龍寂かに聽いて欣悅を生ず。

『獅子吼無畏の說』とは佛祖の轉法輪に喩へたのである。獅子は百獸の王なるを以つて一たび哮吼すれば『百獸これを聞いて皆な腦裂す』で、他の獸類はこれを聞くと頭腦が破裂するとある。佛祖の法輪もまたかくの如く、その一言一句が最尊最勝の妙理なるを以つて、天魔外道の頭腦は盡く粉碎せらるゝのである。故に維摩經には『法城を護せんがために正法を受持して能く獅子吼す』とあり。僧肇法師はこれに註して『獅子吼とは畏れなきの音なり、凡そ言說するところ群邪異學を畏れず』といはれたり、獅子は他の獸類に對して更に畏るゝところなし、而して他の獸類は一として畏れざるものなきを以つて無畏の說といふ。されば、その勢力の猛烈なる、その威德の宏大なるは世に比すべきなし。

知するをいふ。圓覺經に『無礙の淸淨慧はみな禪定より生ず』といふてあるから、定よく慧を生ずることと明らかなり。文殊師利問經には『心性は本淨し、諸の過ちを垢となす、智慧の水を以つて心の垢を洗除せよ』とあるから、慧よく定を圓かにすることもまた明らかなり。定と慧とは車の兩輪の如く、相依り相扶けて竟に離るべからず。但し單に定のみならば、死水の如くなるべし。單に慧のみならば世智と異なることなし。故に古人も『單定は癡定、單慧は狂慧』といはれてあります。宗と說とに通ずる時、定慧は自づと圓滿具足して明了不昧なることを得ん。圓とは缺目のなきこと、明とは昧からぬことである。斯く定慧双び全ふするものは、內、眞如平等の本源に通じ、外、萬法差別の性相に達するが故に『空に滯らず』で、決して眞空の一偏に滯るやうなことはない。

空に滯らざるを以つて能く大慈悲の妙用あり、色に迷はざるが故に能く天地の實相を大觀す。これ卽ち祖師門下に於ける眞實の大悟である。而して、この大悟こそ三世諸佛の覺體である。故に『但だ我れ今獨り達了するのみに非ず。恒沙の諸佛體皆な同じ』といはれたのであります。『我れ』とは大師自らいふ、大師は曹溪の印可を得て無價の道寶を發顯し、定慧圓明の地に通達せられたのであるが、唯だ大師一人のみ獨り達了するのみではない。無量恒沙の諸佛の覺體も畢竟この道寶を獲得したまひたるに外ならぬ。恒沙とは、印度の雪山の阿耨達池より出づる恒河といふ世界有數の大河あり、その河沙最も多し、故にその數の無量なるを斯くいふ。三世十方の佛陀、無量無數なるを以つて恒沙の諸佛といふ。體は諸佛の本體

ることではない。大解脱地には別に除くべき煩惱なく、即心是佛の正當時には別に求むべき眞實もないからである。謂はゆる無病の人の前には藥を說かずといふは玆のことである。

**宗亦通說亦通。定慧圓明不ㇾ滯ㇾ空。非㆓但我今獨達了㆒。恒沙諸佛體皆同。**

【和訓】宗も亦通じ說も亦通ず、定慧圓明にして空に滯らず。但我れ今獨り達了するのみに非ず、恒沙の諸佛體皆同じ。

宗通說通のことは楞伽經より出づ。宗はタツトシ、ミナモト、モトなどと訓じ、尊なり、始なり、主なりなどと註し、最も尊崇すべき本源に名づく。玆では佛敎の根源、眞理の源泉、大道の歸趣をいふ。即ち自己の本心を自覺したのが宗通である。その自覺したる宗旨を衆生の根性に本心隨順して縱橫に解說するのが說通である。通は通達無礙の義である。一度無價の道寶を獲得せば、宗說兩ながら通達自在にして、自行化他の二利を圓滿すべきは當然であります。

『定慧圓明』といふは、定は即ち禪定、慧は即ち智慧、禪定とは散亂の妄念を定止して一心を淸淨ならしむるをいひ、智慧とは明了の智を以つて是非を揀擇し、一切の煩惱と疑惑とを斷じて自己の心地を覺

惡言もまた我が善知識にあらずや。善知識とは猶ほ善友といふがごとし。涅槃經には『自ら正見を行ひ人をして正見ならしむ、若し能く是くの如くならばこれ則はち名けて眞の善知識となすことを得』とある。

次に『誹謗に因つて怨親を起さゞれば、何ぞ無生慈忍の力を表せん』とあるは、大解脱の境界を示されたものである。誹謗の兩字はともにソシルと訓みて惡言することである。怨親は怨はアダ、親はシタシミ卽ち己れの心に反するものを怨といひ、之に順ふものを親といふ。信心銘にはこれを是非とも違順とも憎愛ともいはれてある。順逆の境に對して、憎愛の情を起し、憎愛の情よりして貪瞋愚痴の煩惱を生じ、遂に三界六道の迷衢に彷徨ふやうになる。佛はこれを愍みて、ために開悟の法門を示したまへり。その法門とは所謂無生慈忍の妙力である。

無生とは維摩經に所謂無生法忍である。僧肇はこれを『法の無生を見るを以つて心智寂滅し、堪受して退かず、故に無生法忍といふ』と釋してある。法の本法は空にして未だ曾つて生ぜざることを了知すれば、怨親の情は自づから泯滅して、超然として違順の兩境を解脱すべし。慈忍力とは内に慈悲の徳を貯へ、外、諸境に對して能くこれを忍ぶをいふ。表とは詮表または表顯の意で、故らにこれを主張し説示するをいふ。若し誹謗を受くるに當りて、人法本と空なることを觀じ、更に怨親の情を起さゞれば、別に無生の慈忍力といへるが如き法門を詮表するを要せざるべし。如何とならば、怨親の情を泯ずるのが、やがて無生慈忍の妙力あるからである。絕學無爲の道人が、妄想を除かず眞を求めずといふても、ボンヤリして居

觀㆓惡言是功德㆒。此則成㆓吾善知識㆒。不㆘因㆓訕謗㆒起㆗怨親㆖。何表㆓無生慈忍力㆒。

【和訓】惡言はこれ功德なりと觀ずれば、これ則ち吾が善知識と成る。訕謗に因つて怨親を起さざれば、何ぞ無生慈忍の力を表せん。

前には、他の誹謗を受くるも毫も信念を動搖せず、却つて己れの力を勵まし、怠慢怯弱の病を除くの因緣となすべきを示し、この一節は更に進んで、他の惡言に對して宜しく感謝の念を發すべきことを示されたのである。

縱ひ他より惡言を加ふることあるも、能々人生の始終を洞觀するに、決してこれを憎み恨むべきものではない。人生に違逆多く、萬事に障礙多きは免るべからざる古今の通患であるが、この通患あればこそ菩薩の大行も、佛陀の行願も、燦然として光明を發揮するのである。忍び難きことあればこそ我が大忍力を增長し、意の如くならざることあればこそ我が大精進力を增進す。故に『惡言はこれ功德なりと觀ずれば、これ則ち吾が善知識と成る』のである。我が大忍力・大精進力の功德を成ずるは全く惡言の賜といふべきである。惡言の我れを警誡し、我れを策勵するこそ、その力甚だ大なりといふべし。然れば

うではならぬ。邪は遂に正に勝たず、眞理は最後の大勝利者である。よしや火を把つて天を燒かんと欲する者あるも、唯徒らに自から疲れを招くのみで、天は遂に一絲毫も燒かるゝ氣支ひはない。紛々たる小人の妄評、我れに於いて何かあらん。

加之、これらの妄評も寧ろ己れを警しめ勵ますの因縁となることあり。故に『我れ聞いて恰も甘露を飲むが如し』で、寧ろ我がための鍼砭として益々勇猛精進すべきである。妄りに不信の輩を惡むが如きは決して大丈夫の作爲とはいはれぬ。寧ろこれを惡まずして益々これを愍れむべきである。甘露とは膏露ともいふ。光潤にして酒の如く、凝結して脂の如く、これを服するものは病を除き力を增すといふことである。かく毒を變じて藥とする時は『銷融して頓に不思議に入る』で、天下に一人の怨敵なく、法界を擧げて一佛心となる。銷融は氷や雪の融解るのをいふ。『恐しき氷の角も元は水』釋尊は提婆を視ること猶ほ羅睺羅の如しと仰せられた。佛の眼中には怨敵はない。大信決定の人の眼中にもまた惡人はない。外道でも、惡人でも、一念發起すれば皆な佛界中の人である。よしや發心の因縁未だ熟せざるも、彼の佛性を觀ずる時は、惡人外道もそのまゝ、この觀念の水に入りて銷融し去るものである。『不思議』とは維摩經に不思議品といふがある。羅什は釋して『能く然して然る所以を知らざるが故に、不思議といふ』といふてある。つまり佛法の異名である。佛法の極意は自知自得の法にして心言路絕であるからです。

に向つて法を求むるが如きことはあるべからず。若し心外に法を求め去らば、如何に精進してその修行力に誇るとも、彌々求むれば彌々大道に遠ざかりて、未來際を盡すとも安心解脱の期はあるべからず。精進とは華嚴の疏に『心法を練る、これを名けて精となし、精心務め達す、これを目けて進となす』とありて、精練進修の義をいふのである。

## 從㆓他謗㆒任㆓他非㆒。把㆑火燒㆑天徒自疲。我聞恰如㆑飲㆓甘露㆒。銷鎔頓入㆓不思議㆒。

【和訓】他の謗するに從せ他の非するに任かす、火を把つて天を燒く徒らに自ら疲る。我れ聞いて恰も甘露を飲むが如し、銷鎔して頓に不思議に入る。

一本には如を似に作り、また、鎔を融に作つて居るが、何れでも意味に於いて變りはない。

これより以下は大信決定の功徳を示されたので、つまり永嘉大師自己の修養と經驗との結果を發表せられたものである。正法を傳持してこれを保任することは却々容易の業ではない。寸善尺魔は世の習ひである。教外別傳の正法眼藏を流通するに當りては、中下暗鈍の機は教網に滯り、名相に拘泥して種々の誹謗を加へ、様々の迫害を試みることもあるであらう。されど、これらの毀譽褒貶のために所信を動かすや

己の知見妄情を以つて測度思量するのであるから、遂に正信心を發することが出來ぬのである。上中下根というても、必ずしも學解の深淺、才幹の有無をいふのではない。身命を惜まずして法を求め名利を解脱して道に參ずる程のものを眞の上士と謂ふのである。故に『但だ自ら懷中に垢衣を解け』但だ自ら自己の心頭に返照して、本具の天眞佛に相見し去らんことを要す。これぞ清淨の大心である。懷中とは自己の心頭のことである。垢衣を解けとは法華經譬喩品の長者窮子の喩の意である。

一の長者子が郷關を迷ひ出で、他國に跉跰し、己れが長者子なることをも打忘れて、垢づきたる汚穢不淨の衣を纏ひ、空しく哀れみを他の門頭に請うて居つた。その父なる長者は見て深くこれを愍れみ、種種の方便を運らして彼を誘引し、遂に財産を相續したといふ面白き譬がある。吾人もまた本來本法性、天然自性身たる長者子なるに、正知見を昧却したるがために三界六道に跉跰して、煩惱惡業の垢衣を着くるやうになつたのである。故に垢衣を解けといふは凡情を離却することである。

凡情解脱の法は他なし、徹底、自心これ佛なることを信ずるに在り、承陽大師は『佛道を修行するものは先づ須らく佛道を信ずべし、佛道を信ずるものは須らく自己本と道中に在つて迷惑せず、顚倒せず、増減なく、誤謬なきことを信ずべし』と仰せ下されてある。斯く自己の心頭を返照して正信心を發する時、始めて佛法と自己と第二面なきことを得べし。

されば苟も參禪學道の正軌を識得する程のものならば『誰か能く外に向つて精進に誇らん』で、心外

上士一決一切了（了一作レ順）。中下多聞多不レ信。但自懷中解二垢衣一。誰能向レ外誇二精進一。

【和訓】上士は一決して一切了ず、中下は多聞なれども多く信ぜず、但自から懷中に垢衣を解け、誰か能く外に向つて精進に誇らん。

了の字、四部錄には順に作れり。了は篠韻なり。この句は震韻を用ふるを以つて順の字の力妥當なるべし。（編纂者曰く、禪師は晚年に到り『前の一節も震韻を用ゐあり、同韻を押し來つた故、順の字は當らず、了の字正しからん』とお說きになつてゐられました）

上士は上根上機の士をいふ。老子に『上士は道を聞いて勤めてこれを行ふ、中士は道を聞いて存するが若く亡ずるが如し、下士は道を聞いて大いにこれを笑ふ』とある。前句に所謂、この身心に於いて佛身佛德を顯現するの理は、迷妄暗鈍の輩はこれを信ずること能はず、唯だ上根の士のみありて、一たびこれを聞けば直ちに決定信を發して不疑の地に到ることを得ん。若し能く決定信を發することを得ば、天地法界一切の法も皆な亦た決了して疑ふところあるべからず。卽ち一決一決了である。順の字の時は順理の義となる。卽ち一理を決了すれば、一切の法も亦た自から一理に順じて徹證することを得べし。

然るに『中下は多聞なれども多く信ぜず』で、中根・下根の士は飽まで道を聞き道に參ずるも、唯だ自

益して所作の佛事を成ずるをいふ。

八解は具には八解脱と稱す。この八門能く生死の苦惱を解脱するが故に、または八背捨とも名く。この八法能く衆生の欲念に背き、着心を捨離するが故に、即ち一に内有色相觀外色、二に内無色相觀外色三に淨色解脱、四に空如解脱、五に識處解脱、六に無所有處解脱、七に悲想解脱、八に滅盡解脱である。要するに身心の繋縛を免絶することである。

六通は六神通なり。妙用礙えざるを神といひ、壅滯するところなきを通といふ。即ち一に天眼通、二に天耳通、三に他心通、四に神境通、これは出沒縱横、飛行自在にして、境界の障礙を受けざるをいふ。五に宿命通、これは過去世の因縁相狀を識知するをいふ。六に漏盡通、これ有漏の煩惱を斷じ盡すをいふ。

以上の三身・四智・八解・六通はともに佛身佛徳の標示である。體中に圓かなりとは吾人の心體中に圓滿具足するをいふ。心地に印すとは、印は鏡裡に影を印象するが如く、鐵木に文彩を印刻するが如く、吾人の心地上に佛身佛徳を印象し銘刻して、佛と我とが一體無二になるをいふ。これを悟とも印すともいふ。大燈法語に『佛といふも悟るといふも、名は變れども同じ道なり、わが本心を悟る人を即ち佛と名くるなり』とあるのは即ち是れである。

慧となりて物を照し、菩薩の願行となりて生を霑ほし、用ふれば用ふる程その量を增し、使へば使ふ程その光りを添ふるものである。故に、物を利し緣に應じて終に惜まず、時に隨つて物機を利益し、因緣に應じて苦惱を救濟し、而して終に惜むといふことはない。如何とならば不悋は實に本性の妙德だからである。見よ、天地は萬物を覆載してその力を惜まず、日月は萬物を照鑑してその光りを惜まず、これ豈に自然の妙用に非ずや。諸佛賢聖は本性の妙德を發揮したまふが故に、自然の妙用に於いて缺くるところがないのである。これを佛身を證し佛德を備ふる底の鐵漢と稱するを以つて『三身四智體中に圓かなり、八解六通心地に印す』といふた。

三身とは、法身・報身・應身の三なるも、つまり一佛身の異名である。法性を以つて身となすを法身といふ。自行化他の因を修して、衆德圓滿の報を感ずるを法身といふ。衆生の根性に應じて隨類化導の大用を起すを應身といふ。要を取つていはゞ、法身は佛の心體、報身は佛の身相、應身は佛の妙用である。而してこの三身三德も、吾人の本性に具有して缺くることなし。故に六祖大師は『三身とは、清淨法身は汝が性なり、圓滿報身は汝が智なり、千百億化身（應身のこと）は汝が行ひなり』と示されてある。

四智は佛智の異名である。一には大圓鏡智、佛智普く萬物を照すこと大圓鏡の如くなるをいふ。二には平等性智、諸法平等の法性を證得するをいふ。三には妙觀祭智、諸法の差別を觀察し、衆生の機類を知りその根性に隨つて諸の妙法を說くをいふ。四には成所作智、本願力に乘じて種々の形を示し、衆生を利

貧なるが故に身は常に縷褐を被着して、却つてこれに安んずるも、道に饒かなるが故に心には自づと無價の珍寶を藏めて居る。縷は襤褸と相通じて弊衣のこと、褐は毛布のことにて賤しき者の服するところなり。價なきの珍とは道徳をいふ。卽ち五眼五力である。これ佛祖の世榮を離れて道行を勵み、名利を脱して菩提を成ずるをいふ。併し得道は必ずしも出家人に限るに非ず、在家と雖も法財に富み善寶に豊かなるものは皆な佛弟子と同參である。

無價珍用無盡。利物應緣終不恡。三身四智體中圓。八解六通心地印。

【和訓】無價の珍は用ふれども盡くること無し、物を利し緣に應じて終に恡まず、三身四智體中に圓かなり、八解六通心地に印す。

前句の無價の珍を承けて應用無邊なるをいふ。無價の珍とは大道のことで、大道は吾人方寸の間に在りて、七通八達、無礙自在である。凡夫は妄想執着の雲に蔽はれて、心地の珍寶を抱きながら貧苦を訴へて居るのである。一度この心寶を識得せば、佛法他に在らず、大道脚下に通じ、如何程受用するとも盡るといふことはない。八萬の法藏も、無邊の功德も、皆なこれ心寶の光明片々である。この心寶が佛祖の智


245

羅漢樣のやうな眞似をすることでない。超然として凡俗を飛び離れ、威あつて猛からず、儀あつて則るべく、濁世に在りながら蓮花の水に着せざるが如きをいうたものである。枯木寒岩に倚り暖氣一點もなし。參禪の客は必ず一度はこの境界を自得せねばならぬ。

窮釋子口稱レ貧。實是身貧道不レ貧。貧則身常被二縷褐一。道則心藏二無價珍一。

【和訓】窮釋子口に貧と稱す、實に是れ身貧にして道貧ならず。貧なれば身常に縷褐を被す、道あれば心に無價の珍を藏む。

この四句は前句を承けて、絶學無爲の閑道人の生涯を叙べたのである。『窮釋子』とは何かといふに、窮とは困窮の意で、世欲を遠離して貧困に甘んずるをいひ、釋子とは佛弟子のことである。佛弟子が皆釋を以つて氏とすることは、阿含經に『四河海に入つて本名なく、四姓出家して同じく釋氏と稱す』とあるに依る。三衣一鉢は佛祖の家風であるから『口に貧と稱す』で、漢魏兩晉の頃、沙門が王者に對する時は自から『貧道』と稱したとある。貧は佛弟子の眞面目である。然れども『實にこれ身貧にして道貧ならず』で一身の榮達を望まず、名利の繋縛を解脱するを以つて、身の貧なるに從がつて道は益々饒かなるを得べし。

うなことでは役に立たぬ。獨行獨歩は唯我獨尊の行事である。獨尊といふは心念のために動亂せられず、外境のために誘惑せられず、行住坐臥に大道を踐み、大道に遊び、大道裡に七通八達する底の境界をいふのである。換言すれば大道の主人公となることである。故に手の舞足の踏むところ、大道に遊戯して毫も他の罣礙を被むらぬ。これが眞の『達者』である。佛といふも祖といふも皆な達者に名けた御名である。十方薄伽梵一路涅槃門ともいふてあるから、千佛萬祖は皆な『同く遊ぶ涅槃の路』である。遊ぶといふは、任運騰々として邪知妄分別を費やすことなきをいふ。涅槃は滅度と譯してあつて、死ぬことではない。煩惱を滅して生死を度脫したるをいふ。解り易くいへば佛境界の異名とも見るがよい。もつと適切にいへば佛法のことである。

凡そ眞の達者なるものは、平常の容貌や起居動作まで、悉く脫俗して居なくてはならぬ。即ち達者とは、今日の言葉で云はゞ、人格自から崇高な人のことである。『調べ古り神清うして風自から高し、貌頳け骨剛うして人顧みず』の二句は全く達者の形容である。調べとは格調、即ち全體の調子が時流を超えて居るを古りといふたものである。神は精神、清は清淨にして汚濁なきこと、即ち心地の皎潔なるをいふ。故にその風采は自から高尚にして凡庸の及ぶところではない。而して、外觀を衒はず邊幅を飾らざるを以つて、容貌は憔顇と瘦せ衰ろへて文彩を加へずと雖も、道骨は堅剛にして、順逆の境に處するも超然として動搖するところなし。故に、凡人はこれを見るも殆ど顧みることなし。さればとて、決して圖に畫いた

手段でか取留むることが得られやうぞ。
捉月の緣は僧祇律に出でたり。昔、伽尸國の波羅奈城邊に五百の獼猴があつた。林中に遊行して一切俱律樹の下に到りしに、樹下に井戸があつて、井中に月影が映つて居つた。獼猴の主がこれを見て、他の猿共に向つて『月が死んで井中に落在せり、共にこれを出して世を照すの具とせん』とて、自ら樹枝を捉へ他の猿をして己れの尾を捉へて、展轉相連ならしめた。すると多數の猿が繫がり合ふた重量のために、樹の枝が折れて盡く井戸の中に墮ちて死んださうな。これ直に根源を截斷することを知らず、徒らに葉を摘み枝を尋ぬるに比したものである。拈といふは指を以つて物をつまみ取るをいふ。

常獨行常獨步。達者同遊涅槃路。調古神淸風自高。貌顇骨剛人不顧。

【和訓】常に獨り行き常に獨り步す、達者同じく遊ぶ涅槃の路。調べ古り神淸うして風自から高し、貌顇け骨剛うして人顧みず。

これ唯證相應底の那人の行履を述べたものである。『常に獨り行き常に獨り步す』常とは始中終一行三昧をいふ。賢聖の行履は十二時中無間斷である。打坐の時は寂靜なれど、坐禪を息むれば直ちに散亂するや

觀照するの眼、佛眼は前の四眼の均等に發達し、能く中諦を照して最勝最明なるに名く。五力とは一に信、二に進、三に念、四に定、五に慧なり。卽ち確信と精進と正念と寂定不亂と智慧明了とである。この五法は惡業を斷じ魔障を排するの作用であるから力と名く。五眼は專ら智に係り、五力は主として行に係る、ともにこれ佛智佛行である。摩尼珠を開悟せば佛智佛行自からその身に備はる。是の如きの境界は所謂『唯證相應』だ。唯だ能く自證自得して始めて能くその妙味を知るべきものにして、世知學解を以つて測量すべきものに非ず、況んや邪智妄想の企て及ぶところならんや。

然らば、吾人は到底、證得し能はざるものかといふに、決して然らず。如何とならば、喩へば明鏡の裡に形を看るが如く、苟くも盲者に非ざるよりは、これを見るに何んの難きことやあらん。況んや形の本は我れに在るを以つて、つまり我れ我れを見るのである。溪聲の淺々たる、松風の颯々たる、山色の崢嶸たる草木の爛熳たる、盡く大圓鏡裡に映じたる本來心の影像ならざるはない。否な、影像にしてその實相である。これを以つて靈雲は桃花を一見して三十年來の疑網を斷除し、香嚴は擊竹を聞いて肚裡幾般の葛藤を摧破したのである。臺山の老婆は曾て僧の『臺山の路何れの處に向つてか去る』と問ふに對へて『驀直去』といふたさうな。今も鏡裡に形を看ること宜しく驀直なるべし。擬議するを得ざれ、測度することを得ざれ。一切の妄想を打破して、直下に看取し去らんことを要す。若し然らずして猿猴が水中の月影を見てこれを捉へんとせしが如く、幻影に迷ひ假相に着して、取捨憎愛の二見を弄しなば、百千萬劫を經るとも

抱いて眠る底の消息である。師云く『往來せざる者』進一歩の問題である。泉云く『亦た是』徹頭徹尾一佛性である。師云く『如何なるか是れ珠』珠と藏と二物ありと思ふまいぞ。泉召して云く『師祖』師應諾す。泉云く『去れ、汝我が語を會せず』他に求めて聞かんと擬すれば、旣に早く珠を忘失し了らん。師これより信入せられたとある。

## 淨五眼得五力。唯證乃知難可測。鏡裡看形見不難。水中捉月爭拈得。

【和訓】五眼を淨うし五力を得、唯證して乃ち知る測る可きこと難し。鏡裡に形を看る見ること難からず、水中に月を捉ふ爭でか拈得せん。

『五眼を淨うし五力を得、唯だ證して乃ち知る測るべきこと難し』の二句は、佛性の摩尼珠を開悟したる聖者の境界を叙べ『鏡裡に形を看る見ること難からず、水中に月を捉ふ爭でか拈得せん』の二句は開悟の方法を示されたのである。

五眼とは、一に肉眼、二に天眼、三に慧眼、四に法眼、五に佛眼なり。肉眼は普通の眼、天眼は天趣の眼、若くは透徹無碍、今の所謂千里眼的の眼、慧眼は眞諦の理を觀達するの眼、法眼は俗諦差別の諸法を

如何やうに光明を放つかといふに『六般の神用空不空、一顆の圓光色非色』である。

六般とは六根門のこと、般は物の區分あることで、眼耳鼻舌身意の六根は、色聲香味觸法の六境に對し秩序非然、各々その妙用を發して居る。眼は必ず色を見、耳は必ず聲を聞き、寸毫もその分限を超ゆることなく、微塵も他の領域を侵すことなく、常に神變不可思議の妙用を現はして居るではないか。凡夫は兎角、六根のために惑はされ惱まされて居るが、これ決して六根の罪ではない。六根何れよりか生じ來るといへば、畢竟じて無我なり無自性なりで、その實體は不可得である。無我にして能く眼見耳聞の妙用を發するを以つて、空にして空に非ず、空に非ずして空なり、空と不空との兩頭を超越したる中道一實の妙法である。換言すれば一箇摩尼珠の神光である。臨濟錄に『六道の神光未だ曾て間歇せず』とは玆をいふたのである。この神光は大は、天地の外を照らし、小は極微の奥に徹す。而して無二亦無三であるから、一顆の圓光といふ。顆はヒトツブとも訓じて珠の數を算へる語。六根六境現象分明なるを色といひ、現象即無差別平等にして、唯だこれ一佛性なるを以つて非色といふ。色にして色に非ず、色に非ずして色なり色と非色とを超越したる如來の大圓覺性である。

要を取つていへば、六般の神用は摩尼珠の用にして、一顆の圓光はその體なり。空不空、色非色は體用不二の妙理を示したものである。故に終南山の師祖禪師、南泉に問ふ『摩尼珠人識らず、如來藏裡親しく收得すと、如何なるかこれ藏』、泉云く『王老師と爾と往來する者是』これ朝々佛を抱いて起き、夜々佛を

般で、益々佛法に遠ざかつてしまう。そんなことは我が能くするところではない。

摩尼珠人不レ識。如來藏裡親收得。六般神用空不空。一顆圓光色非色。

【和訓】摩尼珠人識らず、如來藏裡に親しく收得す。六般の神用空不空、一顆の圓光色非色。

摩尼珠は寶珠の名である。摩尼を離垢、または如意とも譯す。その體精明なるを以つて離垢と稱し、多くは龍王の腦中より出で、これを所持するものは衣服・財寶・飲食等を出生すること意の如くにして福徳自在なることを得るが故に如意と名く。玆には人々本具の佛性をいふたものである。智慧徳相備はらざるなく、神通光明缺くるところなく、能く一切の佛土を建立し、能く一切の功徳を出生して自由自在である。悲しい哉、凡夫人はこれを識らずして、枉げて三界六道に沈淪して居るのである。而して、その如意珠は那邊にか在るやといふに、如來藏裡に親く收得して居る。如來藏とは吾人の心識に名けたものである。如來は佛の異名、吾人の心識は寶藏の如くにして、能く如來の功徳を收得して餘すことなし。佛性の摩尼珠は吾人の心識内に充滿して居る。啻に心識の内にのみならず、盡法界にも充滿して居る。故に四大五蘊、山川草木悉くこれ摩尼珠の光明片々であるから、妄りに他に向つて尋ね廻つてはならぬ。

覺といふが涅槃寂靜印に當る。これ實に決定不動の眞說である。釋尊一代の御說法も唯だこれがためなり、歷代祖師の公案も亦た唯だこれがためである。佛弟子たる僧寶の自行も化他も皆な源を決定の說に發せざるはない。故に、眞實の僧寶、卽ち佛弟子たるの資格も、本分も、全く決定の法を說き得るか否かに在りて存するのである。佛祖の慧命を相續すべき眞僧たるの價値は、全く決定勝義の說を傳持するに依りて表明せらるべきものである。是れ永嘉大師自ら六祖の正嗣を以て任ぜられ、その證道の純一無雜なることを告白せられた所以である。若し人ありて吾が說を肯はずんば、情に任せ心のまゝに徵問し來れ、吾は決してその徵問を拒まざるべし、徵とは人に向つて問ひ質すことである。

抑も如來の在世には全く二致なく全く二師なし。唯だ衆生を誘引するがために無量恒沙の法門を開示せられたるのみ。所謂『雨霰れ雪や氷と隔つれど落つれば同じ溪川の水』である。然るに一經一論に拘泥して自法を愛染し、徒らに勝負の念を以つて佛敎を取扱ふが如きは、葉を摘み枝を尋ぬる漢である。正法人を說けば邪法も正となる。邪人法を說けば正法も邪となる。佛法の中に在りて佛法に辜負するものゝ多いのは直に佛法の根源を截斷ることを知らぬからだ。禪門に於いて不立文字敎外別傳といふのは、必ずしも文字を嫌ひ、聖敎を捨てよといふのではない。名相の枝葉に固執せず、直ちに佛法の大本領を占取するをいふのである。永嘉大師の證道といふは何を證つたのか、卽ち佛法の大本領、至道の根本義を悟つたのである。その根本義は唯一の如來の大圓覺である。枝葉の議論にのみ涉るが如きは、泥裡に土塊を洗ふと一

妙體妙德である。この妙體妙德を外にして、徒らに枝葉にのみ走りなば、決して絕學無爲の人となることは出來ぬ。

## 決定說表二眞僧一。有レ人不レ肯レ任レ情徵。直截二根源一佛所レ印。摘レ葉尋レ枝我不レ能。

【和訓】決定の說は眞僧を表す、人有り肯はずんば情に任せて徵せよ。直に根源を截るは佛の印する所、葉を摘み枝を尋ぬるは我れ能はず。

『決定の說』とは佛敎の本領、萬古不變の眞理である。佛敎の本領は宇宙の眞面目を發揮するに在り、宇宙の眞面目は古今に通じて變易なく中外に徹して隔異がない。謂はゆる日は冷やかならしめ月は熱からしむべくとも、眞理は決定して移動あるべからず。その眞理を說明したのが佛の正法であります。故にこれを決定の說と稱するのである。前に說くところの諸行無常の二句は、正しく佛敎の大本領にして決定の說示であります。

佛敎には三法印といふことがある。卽ち諸行無常印・諸法無我印・涅槃寂靜印なり。前節の諸行無常といふは、言ふまでもなく三法印の第一である。而して、一切空といふが諸法無我印に當り、如來の大圓

塵生か會す』といふに答へて『黒漆の崑崙夜裡に奔る』といひ『未在、更に道へ』との再驗に逢ふて『茶に逢ふては茶を喫し、飯に逢ふては飯を喫す』と答へられた。これ卽ち寂滅性中の飲啄である。

元來『諸行は無常にして一切空なり』であるから、諸法そのまゝの大涅槃である。諸行とは宇宙萬象のことである。行は遷流の義で、一切諸法、一として無常遷流を免がるゝものはない。剎那々々に生滅し、曾て暫くも停まらず、朝の紅顏も夕べの白骨、今日の我は明日の我に非ず、畢竟じて我なく法なく、一切皆空である。空といふても現象界を離れて外に求むべきものではない。無常遷流して自性の該むべき無きを了知せば、現象そのまゝが皆空である。一切有爲の法は夢幻の如くなることを體せば、夢幻のまゝが皆空である。然れば空は諸法の實相である。常住不變の眞理である。故に『卽ち是れ如來の大圓覺』といふたのである。

如來は佛、大圓覺とは佛心といふに同じ、大は絕對、圓は圓滿で、迷執の疵の無いこと、覺は靈知である。佛心は諸法の實相を證して一切の迷執を解脫し、常住の眞理に契當して、宇宙乾坤と無二無別なるを以つて大圓覺と稱したのである。さすれば佛の覺りといふは、實相の諸法を離れたものではない。草木國土も悉皆、佛心佛知見の露現で、一切衆生も本來成佛なのである。

凡そ佛敎の基礎は實に玆に在るのであります。聖道門とか、淨土門とか、自力とか、他力とか、三學とか、六度とか申しても、畢竟、如來の大圓覺を驗證する上の名相です。然れば佛敎は宇宙の法門、諸法の

なり、即ち是れ如來の大圓覺。

『四大を放つて把捉すること莫れ』とは機關木人の境界である。四は地・水・火・風であり、大は周徧の義である。この四大は法界に周徧して居る。人畜草木、一として四大所成ならざるはない。『ひき寄せて結べば柴の菴なりとくればもとの野原なりけり』四大假和合の相を生といひ、四大分離するを死といふ。而して、その四大は、刹那〳〵に生滅して實我實法の執すべきはない。四十二章經には『常に身中の四大を念ずべし、各自に名あり都て我なきものなり、我既に無ければそれ如幻なるのみ』とある。凡夫はこれを知らずして、我なきに我を執するを以つて、百千萬境襲ひ起りてその身を苦しむるのである。故に四大の色身を放ち捨てゝ、把捉、即ち執着せまいぞとの御誡めである。さればとて、この身を殺せといふのではない。要するに無我の眞理に體達して無我の境界になることである。

諸法の實相を究むれば十方法界そのまゝの寂滅である。寂滅とは涅槃のことで、不生不滅、不垢不淨にして妄想の除くべきも無く、菩提の求むべきも無い。而して、この涅槃は法性本有の實相にして、修得顯現の法では無いから、寂滅性と名けたのである。吾々は、日用光中、常に寂滅性の中に在りて起居動靜、喫茶喫飯して居るのである。飲啄とは、渇すれば水を飲み、飢ゆれば食を啄ばむといふので、日常の生活をいふたものである。

洞門の太祖常濟大師は本師徹通禪師が『平常心是道』の話を擧するを聞いて豁然大悟し、禪師が『爾作

喚び出して問ふて見よとは、生滅眞妄を脱落し來れといふに同じく、また、燈籠露柱に聞いて見よといふにも同じである。

或人はこの木人を、四大所成のこの身を指したものと見て居る。この身は四大假和合の幻影にしてその實體は無い。然るにこの身を執し、强ひてこの身に於いて成佛を期せば、遂にその効なきことを示されたものと釋して居る。この見方は必ずしも不是なりといはぬが、予はこれを取らぬ。

生不生を超越したる端的は、言語文字の盡す所に非ず、情識分別の及ぶ所に非ず、佛祖も口壁上に掛け、賢聖も舌上の齶を拄ふるの外は無い。こゝを機關木人といふたものである。故に木人を喚取すといふは、木人石女の境界となれとの御示しと見るがよい。然るに、若し、徒らに凡身を捨てゝ佛身を求めんと欲し迷界を厭ふて悟域に達するの功を施さんと欲せば、益々分別に勞し、妄想を重ねて、遂に成佛の期あるべからず。これを『早晩か成ぜん』と仰せられたのである。

放二四大一莫二把捉一。寂滅性中隨飮啄。諸行無常一切空。即是如來大圓覺。

【和訓】四大を放つて把捉すること莫れ、寂滅性中隨つて飮啄せよ。諸行は無常にして一切空



233

が出來ぬ。

前に『覺めて後空々として大千も無し』とあるのは、大千卽一實相なることを示されたるなり。この一實相の妙理を吾人の修養上に實現せしめたのが無念無生である。されば無念とは念々卽解脫の境界に名け、無生とは生死卽涅槃の端的に名けたるなり。故に徹底、無念無生といふべきものもない筈である。若し無念とか無生とかいふ一物ありとせば、決して眞の無念無生に達したものとはいはれぬ。そこで『誰か無念誰か無生』無念無生とは何物ぞ、無念無生といふべき何物かゞあるのであるか、と問ひ詰められたのである。『若し實に無生ならば不生も無し』實際、無念無生の時は無念無生といふべきものも無い筈だ。元來、宇宙何物ぞ、萬法何物ぞ、自己畢竟これ何物ぞ、仔細に參究して見よ。生といふべからず、不生といふべからず、妄といふべからず、眞といふべからず、本來、對待の相を離れて居るものである。然れば修行の力に依りて無念無生の妙體を現はしたのではない。宇宙萬象は法爾として無念無生なのである。無念無生なるが故に、これが無念無生であるといふて把捉すべきものも無い。この本面目を究盡するのが絶學無爲の道人である。

サアこの妙處は言語文字の及ぶ所ではない。須らく機關木人を喚取して問ふて見るがよい。機關木人とは木を以つて製したるカラクリ人形のことである。カラクリ人形の芝居を見よ、判官にならうが、師直にならうが、安珍にならうが、清姫にならうが、そのまゝの身心脫落で、生滅眞妄の沙汰はない。この人形を

つてかこの身を度せん。故に分明に須く剖拆すべしとの御勸戒である。剖はワルと訓じ、拆はサクと訓じ、二字で物事を確實に判斷することである。即ち今日の機會を逸せず、分明に心地の靈境を判別して、寂滅の自性三昧に安住せよとの御諭しであります。

**誰無念誰無生。若實無生無㆓不生㆒。喚㆓取機關木人㆒問。求㆑佛施㆑功早晩成。**

【和訓】誰か無念誰か無生、若し實に無生ならば不生も無し。機關木人を喚取して問へ、佛を求め功を施さば早晩か成ぜん。

一切の煩惱惡業、苦痛逼迫は皆な妄念より起る。妄念斷ずること能はざるが故に、惡業苦惱の諸法雜然として生じ來るなり。凡そ念は本にして生は末なり。凡夫はこの理に昧きがために、念上に念を重ね、益益生滅の相に迷ふなり。若し妄念一たび離るれば、念々これ正念、生々皆な實相たるなり。正念といふは念々道に合して、萬里一條鐵なるをいふ。實相といふは、生々眞を現はして諸相即非相なるをいふ。故に若し徒らに念を厭ふて無念に歸せんとせば、恰も澁を棄てゝ、甘柿を得んとするが如し。若し徒らに生を嫌ふて無生に歸せんとせば、恰も波を去りて水を求めんとするが如くにして、遂にその目的を達すること

明に須らく剖拆すべし。

大千世界も盡くこれ一實相なりと徹見し去る時は、罪業のために苦を招ぐとか、福業のために樂を感ずるとかいふ差別のあらう筈が無い。從つて古今不變の至道には損減もなければ、增益も無い。損減して迷界に墮在すると見るも、增益して悟域に證入すると見るも、第一義門より觀ずれば夢中の幻象たるに過ぎぬ。何故なれば至道には古今東西の隔てもなく、迷悟凡聖の別も無い。心經にいはゆる『不生不滅、不垢不淨、不增不減』である。これを寂滅の性とも名くるのである。故に寂滅といふても空々漠々の謂ひではない。心本と善惡の相を離るゝを寂といひ、法自から生滅の邊に非ざるを滅といふ。性は天然の本性にして、人爲の法に非ざるをいふ。然るに、吾人は妄りに分別を起して善惡の相に執し、生滅の跡を認め、彼を問ひこれを覓めて止まぬといふは大なる錯りである。

比來とは今までといふに同じ。塵鏡とは、心は明鏡の如く物を照して遺すこと無きも、唯だ妄想の塵に蔽はれてその妙用を現はすこと能はざるに喩ふ。佛一代の御敎化は心鏡の塵を拂ふの法門を示されたものである。故に華嚴經には『一切衆生皆な如來の智慧德相を具す、唯だ妄想執着の爲めに而かも證得せず』と仰せられた。然るに吾々は、今日に至るまで曾て塵鏡を磨するの方法を知らず、佛を抱いて佛を忘れ、法を懷にして法を求め、枉げて三界六趣に沈淪することを致す、慚愧すべきことならずや。今日こそ幸ひに受け難き人身を受け、遇ひ難き佛法に逢ひ奉り、この身今生に向つて度せずんば、更に何れの生に向

して禁厭憎愛の渦中に投ぜしむるのである。六趣とは地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上の六道のこと、この六道は、自己の業因に依つて趣向するところなるが故に六趣ともいふ。煩惱の夢一たび覺め果つれば、夢中の幻影は消滅して一塵の跡をだも留めぬのである。

大千とは大千世界のことである。佛經の説に依れば、この世界の中心に須彌山といふ山があつて、山上山下に無數の國土がある。これが所謂一の太陽系ともいふべきものだ。その四方に各々國土ありて、吾人の生息して居る人間界は其の南方に當るといふ。この一太陽系的世界を千合せたものが小千世界、その小千を千合せたものが中千世界、その中千を千合せたものが大千世界といふ。この大千世界を以つて一佛の化土と稱して居る。この中には樂土あり、苦界ありて千態萬狀なれど、畢竟は吾人一念心の幻影である。一念心を離れて外に大千世界ありと認めてはならぬ。さればとて、無といふ語に執着いて斷滅の見を起すまいぞ。空々とは實相の異名とも參究するが宜い。大千なしとは天地法界一實相なるをいふたのである。

無㆓罪福㆒無㆓損益㆒。寂滅性中莫㆓問覓㆒。比來塵鏡未㆓曾磨㆒。今日分明須㆓剖拆㆒。

【和訓】罪福も無く損益も無し、寂滅性中問覓すること莫れ、比來の塵鏡未だ曾つて磨せず。今日分

法を使用し、喫茶喫飯の間に祖道を實踐することである。如來禪とは我が正傳の佛法のことである。禪は一なれども聲聞は聲聞だけ、緣覺は緣覺だけにしか現はし得ぬものである。抑も禪は中峯禪師の謂はれた通り一心の異名である。卽ち衆生本有の性、諸佛證の三昧である。故に吾人にしてこの三昧に安住する時は、吾人の身心は洞然として脫落し、全く如來禪の面目と化し去るのである。而して、この如來禪は吾人本有の佛性なるを以つて、他に向つて求むべきものではない。釋尊が淨土を西方に願はしめ、成佛を未來に期せしめたまひしは、初機誘引の善巧方便である。

次に『六度萬行』といふは佛菩薩の行持である。六度は菩薩行の標準にして、六波羅蜜とも稱す。波羅蜜は到彼岸と譯し、凡夫の此岸を出でて、煩惱業苦の大河を渡り、竟に聖者の彼岸に到るの義であるから、六度とも稱す。卽ち布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧の六大行である。此の六度を標準として萬事萬境に應用するを萬行といふ。而して六度萬行は智德の二を出でず、智德は本具の性德なり。故に佛性を覺了すれば、その佛性の理體中には、六度萬行を圓滿具足して微塵も缺くる所なきを以つて、緣に觸れ感に赴ひて能く佛智を現じ佛慈を發揮することが出來るのである。

元來、一切の諸法は皆なこれ唯心の所現にして、一微塵も心外の法は無いのである。然るに無明煩惱のために蔽はれて、心外に法を見、徒らに取捨憎愛の念を生じ、繩なき繩に縛られてゐるのが凡夫の常態である。恰も夢中に諸々の幻影を認むるが如きものである。夢の裡には明々として三界六道の相を現じ、我を

次の二句は永嘉大師の證言である。妄語は虚妄の言語を弄して人を欺くことである。若し此の罪障が刹那に消滅するといふことにして、衆生を誑くの妄語でありしならば、予は自ら拔舌地獄に墮在して、塵沙劫にも解脱すべからざる業苦を招くであらう。拔舌とは地獄の苦勞である。即ち妄語の人は舌を拔かるゝといふことである。塵沙とは無數のこと、劫は梵語で、委しくは劫波、こゝに時分と譯し、即ち時間の謂ひである。されど、この語を聞いて業道を輕んじたならば、撥無因果の外道となるの恐れがある。如來猶ほ九難あり、獅子尊者・二祖大師も鋒刄の禍を免れたまはぬではないか。併し、定業を受けながら自他の相を忘じ、人法相の域を脱して居る。火中にも清凉の氣を感じ、白刄の下にも不滅の妙樂を占取するでなければ、活社會に在りて活佛法を受用することは出來ぬ。

**頓覺了如來禪。六度萬行體中圓。夢裡明明有六趣。覺後空空無大千。**

【和訓】頓に如來禪を覺了すれば、六度萬行體中に圓なり。夢裡明明として六趣有り、覺めて後空空として大千も無し。

頓は頓速と熟字してスバヤイことである。即ち、この身心に於いて如來禪を覺證し、擧手投足の上に佛

實相とはマコトのスガタである。五陰の浮雲、三毒の水泡は皆因緣和合の法にして假りの相である。生死去來も皆因緣の聚散に依りて現はれたる假りの相である。古人も『生死去來眞實の人、四大五蘊不壞の身』といはれてあるが、その眞實の人といひ不壞の身といふがマコトの相である。前に佛性といひ法身といはれたのは何れも實相の異名だ。この佛性法身を徹證するを佛知見といふのであつて、佛教最終の大目的は此處にあるのである。

古來、實相は無相なりと釋してあるが、無相といふも佛性法身の說明であるから、滅無・空無と見てはならぬ。一たび實相を證すれば、人・法の隔ては自づから融合するものです。人法とは、人は我、法は我に對する萬境である。宇宙萬象を大別すれば、我と法との二を出でぬ。吾人が憎愛取捨の妄想を逞ふし、三毒五陰のために苦しめらるゝは、皆人と法との對待より生ぜざるは無い。而して人と法との對待は幻化の空身に沈溺して卽法身なることを知らず、泡影の萬境に執着して卽平等なることを知らざるより起る。豁然として法身平等の實相を諦觀し去れば、法々位に住するそのまゝが、そつくり常住寂滅の相なることを識得すべきである。かく識得し去る時は、その端的に於いて『刹那に滅却す阿鼻の業』で、一切の煩惱業障は忽然として消滅に歸するものである。刹那は極々短小なる時間をいふ。故に仁王般若經には、『一念の中に九十の刹那あり』とも說いてある。阿鼻は梵語、こゝに無間と譯し、地獄中最苦の世界である。今は極重の苦果を擧げて、あらゆる業障を總括したものと見るが宜い。

して貪求して飽くこと無きもの、瞋恚とは忿怒の心、即ち一切違情の境に對して、怨恨憎嫉するもの、愚痴とは迷惑の心、即ち一切事理の法に於いて明了する所なく、轉倒妄取して、諸の邪行を起すものである。この三毒煩惱は我執より生じ、その我執なるものは忽然念起の上に現はるゝものにして、更に實體は無い。喩へば水上の泡沫の如く、唯だ一時の因緣に依りて出沒するのみにして、自性なきを以つて虛出沒といふたのである。

既に色身といひ煩惱といふ、是れ浮雲水泡の假相にして、その體空寂なることを徹證し去らば、色身の全體そのまゝが宇宙絕對の法身にして、煩惱の全體そのまゝが無上正覺の佛心なることを知るべし。佛心顯現すれば靈光天地に輝き、法身現成すれが靈機乾坤を動かすに堪へたり。これを無一物中無盡藏の莊嚴功德といふのである。

證實相無人法。剎那滅却阿鼻業。若將妄語誑衆生。自招拔舌塵沙劫。

【和訓】實相を證すれば人法無し、剎那に滅却す阿鼻の業。若し妄語を將つて衆生を誑さば、自ら拔舌を招ぐこと塵沙劫ならん。

光耀して時として照さゞる無し。即ち光明無量、悲智圓滿なる宇宙の靈體である。

次に『五陰の浮雲は空去來』五陰とは吾人の身心のことである。吾人の身心は色・受・想・行・識の五つから出來てゐる。色は質礙の義と注して所有物質の總名なれど、今は吾人の肉體に名けたもの、他の四陰は心である。中に就て受は領納の義で、眼・耳・鼻・舌・身・意の六根が色・聲・香・味・觸・法の六境に對して、これは美なり、醜なり、苦なり、樂なりと心に受け込むをいふ。想は思想で受け込んだることを想念するをいひ、行は遷流造作の義で、思想の上から種々の變化運動を現はすこと、識は了別の義で、色聲香味觸法に就て認識了別するの作用をいふ。而して陰は蓋覆の義で、ツヽミ藏すの意味を有してゐる。

吾人凡夫は、この身心に依りて種々の煩惱罪業を生起し、遂に本心の妙德を包み藏すといふところより名けたものです、斯くの如く吾人の肉體は地・水・火・風の四大原素の集合せるもの、吾人の精神は受想行識の積聚せるもの、この色と心と相合して『我』といふものが假りに現はるゝと雖も『曳寄せて結べば柴の庵なり解くればもとの野原なりけり』で、元來、實體の執すべきはない。喩へば浮雲の空中に聚散するが如く、空しく生死去來するのみである。

次の『三毒の水泡は虛出沒』とは三界六道輪廻の根本は何かといふに、無明煩惱の致す所である。その煩惱を三種に大別してこれを三毒と稱す。この三種は皆な能く善心を破壞し、性德を損害するが故に毒と名けたのである。その三毒とは貪慾と瞋恚と愚痴とである。貪慾とは貪求の心、即ち一切順情の境に對

死即涅槃ともいふなり。然れば、徹底、大道を證得すれば迷も無く悟も無く、妄も無く眞も無く、所謂中道一實相である。この中道に契當し去らば、人々箇々絶學無爲の閒道人となりて、佛位を相續することが出來るのである。

## 法身覺了無一物。本源自性天眞佛。五陰浮雲空去來。三毒水泡虛出沒。

【和訓】法身覺了すれば無一物、本源自性天眞佛。五陰の浮雲は空去來、三毒の水泡は虛出沒。

『法身覺了すれば無一物』とは前句を承けられたのである。色身即法身なりと徹底覺悟り了れば、無限の空間を盡し無限の時間を通じて常住普遍なる法性眞如なるが故に、生滅の相も無く、凡聖の隔ても無く、『法の華やまきばかりに限らめや松竹櫻當意即妙』で、これを無一物といふのである。圓覺經に『始めて知る衆生本來成佛、生死涅槃猶ほ昨夢の如し』とあるもこの意である。是れ天眞の妙體、自然の性德なるを以て、佛天人の所作にも非ず、修證功勳に依るにも非ず、即ち『本源自性天眞佛』である。本源とは萬法の實體をいひ、自性とは自己の本性をいふ。天は自然にして人力を假るに非ざること、眞は眞實にして虛妄變化の法に非ざること、されはこの天眞の佛體は宇宙に遍滿して、處として存せざる無く、十方に

實の本性で猶ほ實體と言はんが如し。佛性とは衆生本具の理性をいふ。佛は果上の名、性は種子因本の義、凡夫因位に於て佛果に至るべき種子を具するが故に佛性と名く。併し今は佛心といふ程の意味に心得るが宜い。幻化の幻はマボロシ、化はバケルと訓じ、共に實體なくして假りにあるが如くに變化するをいふ。空身といふも吾人の色身は因緣假和合の相にして、その體空しきを以て名けたるなり。法身とは空身の反對で眞如法性の理體をいふ。故に法身は常住不滅にして固より大小長短の量は無い。卽ち當體全是の義と注して、そつくりそのまゝといふことです。

抑も佛法の目的は何ぞやといへば、一應は轉迷開悟、離苦得樂、止惡作善これが目的である。而してその迷といひ苦といひ惡といふは皆な無明煩惱より生ずるものである。さすれば無明煩惱こそ我等の怨敵とも惡魔ともいふべきである。然れども、衆生心を離れて別に佛心を求めんと欲せば、これ猶ほ火を棄てゝ熱を取らんとするが如し。地に依て倒るゝ者は必ず地に依て起つ、煩惱の實體を究盡すれば佛心は自づからその中に徧在す。惜しい欲しい、憎い可愛といへる煩惱心が罪惡邪業の根本なりと雖も、これを制するに道を以てし、これを整ふるに法を以てせば、惜い、欲いといふが佛陀の大誓願の原動力となり、憎いといふが惡魔降伏の大斷德、可愛いといふが衆生攝取の太慈悲力となるのである。故に無明の實體そのまゝが佛心の光明である。また、草の葉末に結ぶ露よりも脆く、空に亂るゝ華の影にも似たらん色身なりと雖もその實體を究盡すれば、生滅去來のそのまゝが常住不滅の法身なることを知るべし。これを煩惱卽菩提、生

をか憎み、何をか愛せん。故に捨つべき煩惱も無く學ぶべき菩提も無し、この境界に安住するを絶學の聖者といふたのである。無爲の爲は分別心を以て造作するなり。故に妄分別を離却して天眞の大道に融合する者を無爲と名けたのである。されば、終日行ふて身に咎なく終日言うて口に咎なく、千變萬化の活作用が盡く眞如一乘の妙道なるを以て、爲即無爲と謂つべし。閑とは淸閑無事の義なれども、必ずしも世事に關せざるをいふには非ず、直下に第二念に流注せず、心々不染汚、事々無罣礙の謂である。道人とは大論にいふが如く得道の人を稱するの名なり。要するに、一切の迷想を解脫して悟境に證入し、而して悟迹を留めざるを絶學と謂ふ。一切事上に應用無礙にして曾て凡情に墮せざるを無爲と謂ふ。故に花街柳巷の間に處するも猶ほ深山幽谷に住するが如くなるを以て、閑道人と謂ふたのである。

是の如き證道底の人は『妄想を除かず眞をも求めず』寂然として對待の相を超越して居る。妄想とは虛妄の思想にて凡夫の迷執をいふ。その迷想たるや無我に我を計し、不生に生を執し、平等法中妄りに差別の相に縛せらるゝが故に妄想といふ。眞は眞實の大道で虛妄の反對である。佛法修行の第一歩は妄想を除いて眞道を求むるに在りと雖も、一たび天眞無爲の境界に達すれば法界平等にして諸法一相であるから、除くべき妄想も無ければ求むべき眞道も無い。何故なれば天地法界皆な盡く眞道の露現であるからである。

次に『無明の實性即佛性、幻化の空身即法身』の二句こそ正しく一篇の綱領です。無明は煩惱の異名である。一念蹉過すれば忽ち天眞の妙理に背き、性智の光明を失却するが故に無明と名づく、實性は眞

法の偈に始まり、次には三祖大師は信心銘を著はされた。爾來、詩偈を以て宗旨を述ぶることが殆ど禪門の家風のやうになつたものである。

## 君不レ見。絶學無爲閒道人。不レ除二妄想一不レ求レ眞。無明實性卽佛性。幻化空身卽法身。

【和訓】君見ずや、絶學無爲の閒道人、妄想を除かず眞を求めず。無明の實性卽佛性、幻化の空身卽法身。

君見ずやの『君』は滿天下の求道の士を指されたのである。『見ずや』とは諸君は既に見られたであらう、若し未だ見ずといはゞ疾く／＼見られよとの警告である。この三字一句は全篇の冒頭にして、見ずやといひしは、近くは次の絶學無爲の閒道人を指し示し、廣くは全篇に通じて居る。卽ち大師證道の玄旨を天下參禪の客に知らしめんが爲めに、君見ずやと呼び起されたのである。

『絶學無爲の閒道人』とは、證道底の人をいふなり。絶學とは學を廢するの意には非ず、學窮まりて學ぶ所なきに至れるをいふ。迷境を脫して悟域に入り、凡夫界を出で、賢聖界に進むは學地の分際である。宇宙の眞源を徹證し自己の本性を開悟し盡せば、法界平等にして萬法一玄なり。何をか厭ひ、何をか欣ひ、何

易くいへば、疑ひと迷ひとに包まれて居りし心が、洞然として眞理の光明に接觸したのが悟である。證といふは驗證、又は證明など〻熟字して、修行の效驗が立派に顯はれて大道が自分のものになりし狀態である。悟は主として知に屬するが故に、大疑の下には大悟あり、小迷の人には小悟あり、事に依れば誤りたる悟、偏僻なる悟もこれなきを保せず。故に禪門に於ては、大悟底の人と雖も、必ず明眼の宗師家に就てその嚴格なる點檢を被むり、且つその明白なる證明を得ることになつて居る。彌々大悟の境界に進み、その所悟の大道が單に知的方面のみでなく、身・口・意、三業の上に證據を表はして、通身これ大道、全心これ佛法となりしを、眞實證得底の人といふのである。大師は何を證せられたかといふに、道を證せられたのであるから證道といふ。證道といふは佛道である。佛道といふは自己の本性である。自己の本性といふは宇宙の眞理である。森羅萬象の眞實相である。これを證するを佛といひ、これを學するを菩薩といふ。この道を傳ふるを祖師といひ、この道を究むるを參禪といふ。而して道の全體大用は具さに本篇の中に說き去り說き來つてあるから、本文に就て仔細に研究せらる〻が宜い。

歌とは聲を出し、節をなして吟詠すべき文詞であるから、全篇韻を押し、音律に諧ふやうに出來て居る。唐朝時代は特別に韻語が流行を極めたれば、大師は韻語に依つて證道の妙旨を述べ、道俗をして吟詠の間に自から求道の志を發起せしめんとの慈念に出でたものと思はる〻。支那に於て韻語に依つて宗乘を詮表したるは、達磨大師の『吾本來此土、傳法救迷情、一華開五葉、結果自然成』といへる傳

常を諦觀するは常住に復歸するが爲めなり、生死を解脱するは無生に回光するが爲めなり、徹底回光すれば主も無く賓も無し、眞實に諦觀すれば我も無く法も無し、何の我慢かあらん、何の禮節かあらんとの好商量である。そこで六祖は『如是々々』と印可せられた。時に師は方に威儀を具して禮拜し、師資の證契こゝに卽通し了れり。而して直ちに御暇を告げられた。六祖曰く『歸ること何ぞ太だ速かなるや』、師曰く『本と自から動くに非ず、豈に速かなることあらんや』、師曰く『誰か動くに非ざることを知る』、師曰く『仁者自ら分別を生ず』、六祖曰く『汝甚だ無生の意を得たり』、師曰く『無生豈に意あらんや』、六祖曰く『意なくんば誰か當に分別すべき』、師曰く『分別も亦た意に非ず』、六祖曰く『善哉、少らく留つて一宿せよ』、遂に僅かに一宿せられたために、時人は稱して一宿覺といふた。卽ち一宿の下に悟道の大事を了畢せられたからである。爾後、盛んに曹溪の佛法を宣揚して、證道歌及び禪宗悟修の圓旨十篇を著はす。永嘉集卽ち是れなり。學者幅湊その德を稱揚して眞覺大師と號す。先天二年十月十七日を以て寂を示す。睿宗皇帝勅して無相大師の諡號を賜はられた。

　次に本篇の題號を釋すれば、大師が曾て維摩經に依りて自己の心地を開明し、尋で曹溪六祖に參じて眞箇の大安心を獲得せられた。その大道證悟の妙旨を詠ぜられたのが『證道歌』である。證は證悟と熟字してサトリのことなるも、審細に說明すれば證と悟とは多少の異りがある。悟といふは字書には『心解くるなり』と注して、從前の疑團を氷解し未知の道理を會得して、胸中の迷雲を晴らしたる狀態をいふ。解り

# 證道歌講義

此の一篇の作者は唐の永嘉大師玄覺禪師である。師は溫州永嘉郡の人、俗姓は戴氏法諱は玄覺と稱す。幼年にして出家し徧く經律論の三藏を學び、殊に天台止觀の法門に精通し、因みに維摩經を看て心地を發明せられたとある。

後に達磨六世の法孫たる曹溪の六祖大師大鑑慧能禪師の弟子玄策禪師の勸告を蒙むり、相携へて曹溪大師の許に參ぜられた。而して其の初めに六祖の禪牀を繞ること三匝し、錫を振ふて立たれたのである。すると六祖は徐ろに告げて『夫れ沙門は三千の威儀八萬の細行を具すべきものである。然るに大德は何れより來つて禮を設けず拜を行はずして、斯く大我慢の振舞をなさるゝや』といはれた。すると師は『生死事大無常迅速』一人の生命は繫りて一息の間に在り、禮を省きたるは道を求むるの急なるが爲めなりと答へた。そこで六祖は向上より、何ぞ無生を體取し無速を了ぜざるや、常住不滅の那一物を徹證せば、何ぞ恐れを生死無常の相に抱かむやとの點檢である。師は一心湛然として毫末の疑滯もない。乃ち曰く『體すれば卽ち無生、了ずれば本より無速』と、諸法の本體を了ずれば、元來、生滅の相を超え變化の迹を絕す、無

# 摩訶般若波羅蜜多心經

觀自在菩薩。行深般若波羅蜜多時。照見五蘊皆空。度一切苦厄。舍利子。色不異空。空不異色。色即是空。空即是色。受想行識。亦復如是。舍利子。是諸法空相。不生不滅。不垢不淨。不增不減。是故空中無色。無受想行識。無眼耳鼻舌身意。無色聲香味觸法。無眼界。乃至無意識界。無無明。亦無無明盡。乃至無老死。亦無老死盡。無苦集滅道。無智亦無得。以無所得故。菩提薩埵。依般若波羅蜜多故。心無罣礙。無罣礙故。無有恐怖。遠離一切顚倒夢想。究竟涅槃。三世諸佛。依般若波羅蜜多故。得阿耨多羅三藐三菩提。故知般若波羅蜜多。是大神呪。是大明呪。是無上呪。是無等等呪。能除一切苦。眞實不虛。故說般若波羅蜜多呪。即說呪曰。羯諦羯諦。波羅羯諦。波羅僧羯諦。菩提薩婆訶。

## 道を得るこそたのしけれ

吾々が平生底此の觀念に住して修養したならば、自然に此の心が佛の心に契ひ、此の行ひが佛の行ひに契うてゆくであらうと思ひます。かくしてこそ始めて此の般若心經なるものが、皆さんの身ともなり心ともなり、又、その德行ともなり、朝な夕な自由自在に般若の大威德を應用して行くことが出來ます。此の所に至て始めて眞箇の佛教が此の身心の上に活動してゆくことが出來るであらうと思ふ。

これで先づ大體の所は一通りお話を致した積りでありますが、尚ほ足らざる所は更に專門の師家に就き、若しくは銘々の御力でもつて充分御研究を願ひたい。私の說明した所は唯だ道行きだけのことで、所謂門外に在て評判をしたに過ぎない。其の堂奧に達するに至ては所謂冷暖自知で、廓然無聖、不識である。何卒その堂奧に向て充分御研究になりまする樣に願つて置きます。

法がありましても是を實行し實現せねば空論である。大般若と云ふ高尚幽遠なる眞理をも吾々の手の舞、足の踏む所の實行上に現成せしめてこそ始めて佛の道を成就することが出來たのである。

## 般若心經と日常生活

是の如く心經全體に渉つてお說き下された眞空實相の妙理と實踐得益の功德とを、此の簡單なる眞言の中に悉く總持されたるものであります。之を呪文として朝な夕なに讀みますれば自然に感應を得て自利々他の功德が成就せられます。前に申上げた通り呪文とは卽ち陀羅尼であります。吾々の方寸の內に具有する摩訶般若波羅蜜多の智慧德相も本然の陀羅尼ではあるが、それを一つの言語として、日本で云へば歌の樣なものとして、吾々に從晝至夜之を唱へ之を念じさせると云ふのがお經文の中の眞言呪文であります。故に皆さんが他日に至り、若し腹が立つたとか、氣持が惡いとか、煩悶を起したとかいふ時には、深く信念を凝らして此の陀羅尼を御讀みになつて御覽なさい。必ず此の功德に依て己を度し他を度し、超然として彼岸に遊ぶ事が出來やうと思ひます。忙しい場合などはお經を讀む代りに、或はお經の讀めないお方は、此の陀羅尼だけでも必ずお讀み下されたいのであります。是で一と通り講演も終りましたが、此の呪文を試みに和譯して見たならば何んな風になるかと云ふに、私が假りに作つたものを書いて見ますると

いざや渡らん彼のきしに、われ人のみか世にこえし、ひじりとともにみほとけの、

禪宗に於て坐禪の力で悟を開いても、その悟りが消化せずにトゲトゲして鼻の先や顔つきに出るやうでは却て劍呑で溜らない。堂々たる大丈夫には自づと洒落な風韻がある。廟堂に立て天下の經綸を論じて居た豪傑でも、自宅に歸れば禮服を脫ぎ捨て赤足になつて庭に飛び降り、自ら水でも汲んで其所等の盆栽にでもかけてやる。又は小供と一緒になつて嬉々として笑うて居る。そこに人格の高潔が養はれるのだ。それが學問離れのした學問以上の學問である。是の如き修養を敎るのが彼岸衆度です。苦集滅道も無い、智も無く、亦得も無く、總て迷も無く、悟も無い、一切飛越えてこそ、始めて圓熟した所の般若の智慧が現はれて一切の顚倒夢想が遠離される。

## 娑婆訶

『菩提』は道と譯し『娑婆訶』は成就と譯す。前に述べし如く迷も悟も兩頭ともに超越し、徹底、無所得になつた處で始めて佛の圓滿なる大道を成就するのである。佛の道と云へばとて必ず佛にのみ限られた道と思うてはならぬ。古今不變の眞理が融然として自己の胸臆裡に開發し、大道と自己とが一致したのが道の成就したので、之を娑婆訶と云ふのである。成就は成功の意であるから、世の中の事は何の事業でも娑婆訶で無ければならぬ。學問をすれば學問娑婆訶、實業家たる者は實業娑婆訶にならねばならぬ。萬事萬端が成就を見なければ役に立たぬ。道の成就とは解り易くいへば智行合一の意味である。どんな立派な敎

覺の三乘である。前の本文では苦集滅道、十二因緣、六度を擧げて示されたが是れが三乘の法門です。併し此の經では總て無し無しと說いて盡く拂ひ除けてある。何故なれば、迷既に無なれば悟も亦無である。是れが眞空實相です。故に一度迷を轉じて悟を開いたといふものは更にその悟りといふ地位をも飛び越えるから彼岸の衆をも度するといふのであります。換言すれば迷悟ともに超越するのである。世執と法執とを並び亡ずる時始めて向上向下、宛轉無罣礙の妙德が得られるのである。これを兩頭ともに截斷する底の人と云ふ。

凡そ人といふものは學問を致しましても更に學問離れをせんければ本物にはならぬ。學問離れをせぬ人は兎角に學問臭い。學問臭いといふと、時としては學問が却て身の仇となることもある。何故なれば學問からして却て汚い惡德が現はれるからである。例せば學問が鼻にかゝつて親までも馬鹿にする。二言目には『天保時代は役に立たぬ』などと云うて世間の人が盡く馬鹿の樣に見える。又、財產が出來ても、財產離れがせぬと金錢の奴隷となる。財產が始終自分の胸の處にくツついて銅臭に堪えぬ。財產が出來ても、乃公は財產家であると云ふ樣な心のない洒落の趣味が無ければならぬ。古人も『學問は置所に依て善し惡しあり、腹の底に置くは善し、鼻の先に置くは惡し』と云うてあります。自分は既に學問が出來たと云ふ高慢心があつては、最早それ以上に學問の發達が出來なくなる。高慢心は學問の妨害である。味噌の味噌臭きは上味噌でありませぬ。

の門下に投じて勉強したが、その勉強は自然に人の三人前も出來た。人は遊びに出懸ても自分は人に嫌はれるからと思うて一向に出ない。つまり顔が醜いために人よりも餘計に勉強が出來た。是の如く非常なる勉強をして今日の位地に進んだ。彼の嫁が私を嫌はずに居たならば到底此の奮發心も起らず、從て聖賢の道を學ぶ事も出來なかつたであらう。嫁に嫌はれた爲に、幸ひにして聖賢の道を學び人間の人間たる道をも自覺することが出來た。是れ全く逃げてくれた嫁の賜であるに依て、此の御恩は却々忘れられぬ、そこで繪像を懸け之を供養して報恩の志を表し、合せて自己の志を失はぬ樣にするのであるといふことであつた。これらは所謂『瓦を以て鏡となし、石を以て黃金とする』修養の力です。般若の上の修行も同じ譯で、貪欲・瞋恚・愚痴の凡夫地を一變して、智德・斷德・恩德の三種の大德となすこそ、此の身此の儘圓滿なる佛の大智慧光明を體得する轉凡入聖の路である。此の一轉の工夫がなか〳〵大切である。是れが彼岸度であります。

## 波羅僧羯諦

『波羅僧羯諦』と云ふには古來二通りの見方がありますが、二通りとも御話をすると却て迷ひ易いから其の中の一説に就いて説明して置きます。波羅僧羯諦は彼岸衆度と譯する。一旦迷を轉じて悟を開き、苦みを離れて樂しみを得、惡を止めて善を爲すに至つた聖者の境界を彼岸の衆と云ふ。即ち菩薩方や聲聞、緣

ならば皆な是を濟度しやうと云ふ願力を起されたが、實に絶大の勇氣と申さねばならぬ。

又、愚癡と云つて、兎角に心が結ぼれて一方に迷ひ込み、更に物の道理を解決することの出來ぬ者が、ヒヨツと心が一轉して忽ち廓然として精神の自由を得、茲へ智慧の光を發するものである。愚癡の固まりが解けさへすれば一心は卽座に變じて智慧となる。馬鹿で仕方が無いと云はれた者も適當なる教育を施して行くと隨分立派な智者になる事がある。法には定相は無く痴も智も同一源です。

## 安積艮齋の教訓

安積艮齋先生は幕末の碩儒であるが、或る人が先生の書齋へ行つて見ると、床に嫁さんの像が懸けてあつて色々珍しい菓物などが備へてある。昔の儒者などは一層固くるしい嚴格なものであつたから、婦人の繪などが掛つてあると如何にも不思議に思はれる。其の譯を聞て見ると、實は若い時に兩親が嫁を貰うてくれたが、私は元來が醜く生れた上に重き天然痘を煩らひ、此の通りに二た目と見られぬ樣な顏に成つた。それが爲めに貰つた嫁も我慢が出來ないで、到頭、二人まで逃げて歸つてしまつた。女から見捨てられた當時は餘り好い氣持はせなんだが、鏡に向て見ると逃げるのも無理はない、自分でさへ逃げ出したい位な顏だから。併し身體容貌だけで人間とはいはれない、人間には身體の外に心と云ふ大切なものが有る。私の顏はトテも改造は出來んが心の方を立派に磨いて見やうといふ大奮發を起して、江戶表へ出て佐藤一齋

次に恩德も吾々に具はつて有ります、だが吾々凡夫が兎角その恩愛が不公平に、又は利己的にのみ現はれるから貪欲といふものになる。人の物でもなんでも自分の方へ取りたいと云ふ樣な貪る心が出てならぬ。元來善惡迷悟は所謂心機一轉する所に分れて善とも惡ともなるのである。昔、支那の楊子と云ふ學者は路の岐に立つて泣いて居られた。『なぜ泣いてござるか』と問ふと、『吾れは此の岐路に立つて居るが、足の踏出し方一つで天地の隔たりを爲す、右せんか左せんか是れ最も大切なる處ぢや』吾々の修養も其の通りで一念の轉處に依て鬼になつたり佛になつたり十界百界種々樣々の境界を作り出すといふ意味で泣かれたのであつた。又、墨子と云ふ先生は手に白糸を持ちながら頻りに泣いて居る。其の譯は『今は白糸であるが染め方次第で赤くもなれば青くもなる、一旦染め了れば却々本の白糸にはならぬ。人間も亦斯くの如く發心の如何に依て正邪の色が分れるぢや』といふ意味で泣かれたのであると云ふことです。吾々お互の一心の發動も實に其の通りで、右の方へ轉ずれば恩德になるものが左の方へ動けば貪慾と變ずる。又、善い方から見ても、今迄は人の懷に手を入れて物を取るといふ程の者でも、心機一轉すれば、今度は反對に人の懷へ物を入れて施すと云ふ恩德となる。

又、今迄は腹を立てゝ人を恨み丑の刻參りもするといふ樣な者が、夫れが善い方に向へば『何のその岩をも通す桑の弓』と大高源吾が詠んだ如く大勇猛心を奮起して、家をも國をも支へ且隆ならしむる程の大勇者ともなる。阿彌陀如來樣は五劫の間思惟觀察せられた結果、一切衆生にして我が名を稱へんほどの者

は度である。彼岸とは佛地を云ふ。佛地とは如何なる所なりやと云ふに、佛の境界は一寸一口に之を說明することは出來ないが、併し佛樣の具へてござる德相に依て一通り說明することが出來る。即ち佛の道德的現象である。是を大きく別けて智・斷・恩の三德と云ふ。是が佛地の現はれたる德相である。

智は般若の智慧、斷は勇猛決斷の德、心理學的に說明すれば意志の活動である。恩はメグムと訓じて廣く恩惠を施すの德だから、心理學的にいへば同情の發達である。此の智・斷・恩の三つの大德が備つたのが佛樣である。般若は此の智・斷・恩の三德を圓滿した眞の智慧である。精神現象中の一部分の智慧ではなく、精神の全部が圓滿に調和し發達したる上に現はれた智慧であるから、之を般若と云ふのである。此の大智慧は佛樣の上にばかり在つて凡夫には無いかと云ふに決してさうではない。併し此の智慧が凡夫の中に昧まされて居るから、反對に愚癡となつて現はれて居る。同じ『ち』の音でも癡の字は餘り感心しない方である。其の愚癡が一轉して開發すると眞智が現はれる。

又、凡夫には斷德も具つてゐる。斷德は智・仁・勇の三德でいへば勇氣になりますが、凡夫は兎角その勇氣を惡い方へのみ使ふから瞋恚と云ふ腹を立てる煩惱と變ずるのである。纖弱い御婦人などが夜分にでもなるとお寺の前は怖はくて通れないと云ふ樣な人でも、腹を立てると丑の刻參りでもやりだす樣になる。如何なる人にも腹を立てると云ふ一種の力があるからして喧嘩口論なども起つて、却々騷々しいものである之は勇氣の濫用である。

るならば、夫れは無秩序惡平等である。

佛教で謂ふ所の公平平等といふは光明遍照自在無礙にして天地の大道大德に合ひ、自然的に秩序ありて近きより遠きに及ぼす、即ち兩親よりして兄弟夫妻等の一家內に及ぼし、段々推し廣まりて一村一國に光被するのであります。即ち平等の中に自づと差別あり秩序ありて整然紊れず、故に平等的差別とでも申すべきものである。併し、豫め差別を立てゝおいて强て平等にするのでない。公平平等の慈悲海裡に天眞にして差別の波瀾が現はれるのである。丁度、前にも申した通り、電氣燈は美しい物でも汚い物でも、貴い物でも、賤しい物でも、分け隔てなく平等に照すのであるが、其の中に於て、自然的に近きより遠きに及ぼすと云ふ秩序がある樣なものである。十燭の電氣燈ならば十燭だけの光明がある。三十燭ならば三十燭だけの光明を放つ、吾々の慈悲の德も亦其の通りで、其の德が大きくなれば大きくなるほど、廣く遠く人生を濟度し利益して行く。佛境界に至ると無限に慈悲心が擴張せらるゝから、『今此の三界は皆是吾が有なり、其の中の衆生は皆是吾が子なり』といふ、廣大無邊なる大慈悲光明となるのであります。

## 波羅羯諦と佛の三德

心經は何の爲に說かれたか、大般若經は何の爲めに說かれたかといふた、歸する所は、度即ち濟度の爲めである。濟度とは何方へ渡すのであるかと云ふと、『波羅羯諦』譯すれば彼岸度である。波羅は彼岸、羯諦

無形の財産を得る。自他法界平等利益とは此の謂である。然るに、自分と他人との隔てをつけて行きますと、此の平等の慈悲心が現はれぬから、甚しきに至ては人を苦しめても自分だけ助らうといふ樣な邪見が起り、所謂自業自得で、それがやがて自分の苦みを増す因緣となる。又、愛情の爲め執着の爲めに人を救ふと云ふの類は、一種の迷執が內部にあるから、救ふ上に於て自づと公平を缺くのみならず、却て本末を顚倒する樣な結果にもなる。

例へば玆に紳士があつて一人の妾を置くとせんに、その妾を愛する情の爲めに自分の財産を捨てゝでも彼に親切を盡すであらうが、之と同時に、一方には自分の大恩義ある父親母親等に對しては不孝の振舞となり、又、妻子に對しては甚だ不親切な行ひとなる。一面から見ると非常に人情に厚き點があるやうだが、他の一面から見ると情どころではない、却て恩人をも虐待して行くと云ふ樣な恐ろしい結果が現はれる。是等は決して公平平等の愛とは云はれない。

然らば公平平等の愛、即ち佛の大慈悲は何んなものかと云ふと、例へば此所に電氣燈を點ける、其の電氣の光明には決して不公平はない、依怙も偏頗も無いから平等である。併し、其の實際はといへば、先づ電燈の脚下の方から明るくなる。遠くへ離るれば離れるほど光明が薄くなる。是は決して不公平より出たのではないが、近きより遠きに及ぶのが自然の道理である。お互が公平平等の精神を涵養すると云うても親戚も他人も、自國も他國も、ゴチヤ〳〵にする譯ではない。若し自他を混じ遠近を辨へぬといふ樣であ

掲諦掲諦波羅掲諦波羅僧掲諦菩提薩婆訶、之が唯今迄お話に及びました心經一卷の全體の意味を總合した大陀羅尼である。『掲諦』とは玆に度と飜譯をする。度とは一切の苦厄を度し給ふの度です。『佛心とは大慈悲心是れなり』であつて、佛は大慈大悲を以て、衆生をして迷を轉じて悟を開き、苦みを離れて樂みを得、惡を止めて善を行はしむ。是れが佛法化導の眼目である。何れの宗派に致しましても轉迷開悟、離苦得樂に反した敎は無いのであります。煩惱業障と云ふ苦惱や迷執の大河を渡つて、目的地たる佛の彼岸へ到る之を度と云ふ。此の度即ち掲諦を二つ重ねたのは、一には自を度し二には他を度するからです。自分だけは何程立派な者に成りましても、それで佛法の目的を達したものとは申されぬ。一切衆生を濟度するには自身にも夫れだけの力量を具へんければならぬから、先づ己れを度し、而して、之と同時に他を度するのである。

例へば自身の財産を擲つて天下の人を助けると云ふ場合ありとせんに、それでは人を助けることが出來ても自分は全く助かることが出來ぬではないかと云ふ疑が起るであらうが、決してさうではない。成ほど、財産を捨てゝしまへば自分は貧乏にはなるが、道德上精神上に於て非常な大德を得るから、抛つた財産は自然に戻つて來るものである。故に人を救ふと云ふ時に自分も自づと救はれる。有形の財産を失ふと同時に

尊有物では無い。各自銘々の所有物である。吾々御互にして若し般若の智眼を開いて之を見る時は、佛法の道理を開示してあるのは啻に一切藏經のみならず、庭前に繁茂せる青松綠杉を始め、千草萬木悉く天地の眞理を說明し、表示して居る。『溪聲便ち是れ廣長舌、山色豈に清淨身にあらざらんや』とは東坡居士のお悟りであるが、佛法本來天地に遍在して居るのである。併し、對機の法門として衆生の根機に應じて、種々の方便を以て說示せられた法門は、苟も之を信ずる人ならは容易に知る事も出來やうが、秘密の法門と稱する佛陀自證の妙法たる奧座敷に至ては、容易に之を窺ふことは出來ない。夫を佛の力に依て易々と窺ひ得る樣にお示し下されたのが眞言の咒文である。

眞言とは眞實の言葉であるから、方便も飾りも無く、眞面目を呈露しにしたる故に萬古不滅です。此の眞言なるものを中心として宗旨を開かれたのが眞言宗であります。眞言宗では『即事而眞』と云うて、差別の事相其の儘が直ぐに眞實である眞言であると說く、故に吾々凡夫の目から見ると、十萬億土も隔て居ると云ふ樣な淨土も、周遍法界なる大日如來の大智大德も、事々物々の上に顯現するのが眞言宗の敎で、つまり極々氣高い妙德妙理を卑近の上に活動して行く、即ち吾々の力では容易に研究の出來ぬ高尙幽玄なる理想界を、銘々の一擧手一投足の上に現成するといふが眞言の宗旨であるから、殆ど佛敎應用門の極點に達した宗義であります。眞言宗は秘密と云ふ語の爲めに、大層、人生より飛び離れた遠方にでもある敎の樣に世間から誤解せられて居るが、其の實は今申した如く實に應用自在の宗旨であります。

るのである。何故なれば佛法に所謂秘密と云ふは、冷暖自知の法をいふのであるからである。冷い熱いと云ふことは自分が實地味ふ時に始めて感得するものだ。縱ひ親の力と雖も教育家の力と雖も、外より言語や文字を以て其の味を教へてやることは出來ぬ。其の言語道斷の處を假りに秘密というたものです。さて其の秘密の藏は誰が開けるかと云ふと、吾人の熱烈なる信仰を以て開き得べきものである。又は吾人の大智慧力を以て開き得べきものである。禪宗で教外別傳と申すのも矢張それであります。

眞言宗に於ては一代藏經を顯密の二門に分けて、顯教・密教と云ふ。釋尊の御說きに成つた教を顯教と云ひ、大日如來の御說きに成つた教を密教と云ふ。之を禪宗の見地から解釋すると、顯教とは對機の說法で衆生の根機に對して言辭の上に現はし文字の上に顯はして說かれたる教である。密教とは諸佛自證の法で唯佛與佛乃能究盡であるから、その悟られた味は口にも文字にも到底現はす事は出來ぬ。孟子ですらも其の悟得の處は『曰く言ひ難し』と云うた。到底、言詮不及意路不到である。之を密教と云ふ。それ故に禪門から云へば、一切藏經は總て是れ顯教で、さうして又、總て是れ密教である。如何となれば、衆生の根機に應じて、文字に現はし言語に顯はして說示せられた經卷は、皆な顯教であるが、其の一切藏經の精神を究盡すれば、皆諸佛自證の法門より出でざるは無いから、之を密教と見ることが出來る。

元來、佛樣は廣大にして際限なきを以て、眞言の法と雖も、決して弘法大師、卽ち眞言宗の所有物では無い。三部經と申しても、決して法念上人や親鸞上人の所有物では無い。坐禪と申しても、決して承陽大師の

故說般若波羅蜜多咒。卽說咒曰、羯諦羯諦、波羅羯諦、波羅僧羯諦、菩提薩婆訶。

【和譯】故に般若波羅蜜多の咒を說く。卽ち咒を說て曰く、羯諦羯諦、波羅羯諦、波羅僧羯諦、菩提薩婆訶。

是れが最後の一段で卽ち秘藏眞言分であります。秘藏と云ふは秘密の藏である。他の凡見を以て窺ふべからざる妙義あるを秘といふ。藏とは寶藏に喩へたので、僅かに簡單なる眞言の内に無量の妙義、道中の至寶を具へて居るが故に藏といふ。其の至寶とは、之を約めて申せば智德の二寶である。秘密と云うても佛法は元來、人に秘するといふ樣な法ではないが、盲者の見ざるは日月の咎に非ずで、日月は天に輝き渡つて明かなれども、盲人には之を見ることが出來ない。

### 秘密と呪文の意義

六祖大師の御弟子に明上座といふが有つた。此の人が六祖大師に向て教を請ひました時に『此の外密意有りや』此の外に秘密の法が有りませうかと問はれしに、六祖大師は『有る』と答へた。『然らば其の秘密の教法を聞かして戴きたい』と云ふと『密は汝が邊に在り』秘密は有るが、然し其の秘密はお前の方に有

か垢とかいふものは新陳代謝する如く、佛法の中にも爪もあらうし垢もあらう、さういふものは時としては捨てもせねばならず斬りもせねばならぬ。若し文字にのみ拘泥して一經一論の章句に執したならば、爪や垢を大切に保存するやうなものです。故に達磨大師は敎外別傳、不立文字と喝破せられ、黄檗禪師は『汝等は盡く是れ噇酒糟の漢ぞ』と叱られた。今日の吾々は動もすれば酒の糟ばかり食べて本當の佛法の正味を忘れて居る、若しその糟を忘れて佛法の正味骨髓を得たならば佛樣は常在靈鷲山で、佛法の原理は眞實にして虛ならず萬代不易であります。

以上で心經の本文の講釋は終りまして、是れからは咒文になるのであります。陀羅尼の事は前にも一寸申して置きました通り、萬德總持の眞言である。此の眞言は天地をも感動し神人をも感應せしむる威力があるから、之を咒ともいふのであるが、眞箇の大陀羅尼は吾々の胸三寸の内にあるのである。般若波羅蜜多と云ふ六字の中にも般若六百卷を總持して居る。麻三斤にも庭前の柏樹子にも、拳頭にも鼻孔にも、大陀羅尼あることを知らねばならぬ。併し、さう申した許りでは、吾々が朝な夕なに信仰してゆく所の標準が立たぬに依つて、釋迦牟尼如來は更に一步を進めて、陀羅尼と云ふ一つの眞言をお示しになつたのが即ち咒文であります。

## 秘藏眞言分

の口にて將に首を切られんとした。是を龍の口の御法難と云ひます。宗教家としての天下の英雄たる日蓮上人が、今や幕吏の手に殺さるゝとは情けないことであるといふので、其所に集りたる信者の人々は聲を擧げて泣き悲しんだのである。其の時の日蓮上人のお語が實に有難い。『吾々が生れ替り死に替りする中には、或は鼠と生れて猫に喰はれた事もあらう、或は雉に生れて鷹に捕られた事も有らう、ところが、今は幸にして佛法の爲めに命を捨てると云ふ事は、何んたる仕合なことであらう』所謂道に殉せられたので、つまり國家の爲め衆生の爲めに命を捨つるに何として之を惜むべきぞ、吾れは幸にして人間に生れたればこそ、佛法の爲めに身を捨てることも出來るといふものぢやとの御觀念です。首切役人が今や首を切らんとするとき、一同の者がワッと許りに泣き叫んだ。其の時に上人が靜かに諭して、『さても〳〵不覺なる殿輩かな、此樣な喜ばしき事はないではないか、各々は宜しく悦びの心を以て笑へよかし、なぜ祝うてはくれぬ』斯云ふ樣なことを仰せられたとある。如何であります、今首を切られやうと云ふ場合、一同が泣くのを制して、首を切らるゝ御本尊が何故笑つてはくれない、何故萬歳を唱へて祝つてはくれぬぞと云うて居る。其所に至つては實に其の精神、金城鐵壁も啻ならず、八風吹けども動ぜず天邊の月である。日蓮上人の大安心は全く玆に在る。而して此處に眞理の大活動が顯はれて居る。卽ち『能く一切の苦を除いて眞實にして虛ならず』といふ眞理が活き〳〵して居る。

眞理は常住です。故に佛樣の敎は三千年後の今日に至ると雖も少しも變動はせぬ。人間の身體でも爪と

行福とは菩提心を發して佛の道を行ひ、深く因果を信じて經典を讀誦し行者を勸誘するをいふ。此の三福を備へればこそ、朝晩にお念佛を唱へるも、お經を讀むのも、皆佛の行ひとなつて來るのであります。斯云ふ風に、世間の道德も勸め佛法の行ひをも勵んで行くのが、正しき原因と成つて往生成佛の素懷を遂げることになる。而して其の根源は信仰心であることはいふまでもない。

それで、淨土眞宗などでは行門の名相に重きを置かず、其の根源たる信の一字に歸結して信心爲本と說かれてある。堅固なる信心が發得さるれば三福の正因は自然に備はつて來るものである。蓮如上人が御臨終の時に、お弟子の人が上人の御足を見ると、足の裏が石の樣に堅くなつて居る。殊に上人は長年の開衆生濟度の爲めに東奔西走なされ、時としては、石の上でも砂の上でも、少しも厭はず步いておいでなされたから、足の裏は割れて土なぞが割目に這入て色が着て居る。上人の仰せに『我は斯く足の裏が石の樣に成るまで、山を越え坂を登つて佛法の爲めに盡したのである、我子孫たる者は此の足を以て行持の手本とせよ』と云はれましたが、實に有り難いお示しであります。此等こそは全く信仰心の上から現はれた御勸めであるから、此の御勸めの內には人間の行ひも自然に備はつて居ります。卽ち三福正因は收めて此の中に在るのであります。

日蓮上人は何うであるかと云ふと、此のお方は非常に御氣象の烈しいお方であつて、常に奮鬪的態度を取て宗義の擴張に盡された。其の結果、鎌倉政府より憎まれて罪人として取扱はれ、由井ケ濱に引出されて龍

であるのであります。

又、眞言宗では何う說いてあるかと云ふと、『色心不二卽事而眞卽身成佛』と談ずる、之が眞言の大安心である。吾々が口に發する言語と佛樣の無漏の口業が同一體となる。吾々が心に念ずる事が佛の御心と一致する、吾々の身で行ふことが佛の大行と一致する、之が卽身成佛である。併し、玆に凡夫の妄情あるが爲めに容易に成佛が出來ぬから、三密相應の方法、加持の功德を實行する。加持とは『佛日の影の衆生の心水に現ずるを加といひ、行者の信水能く佛日を感ずるを持と云ふ』と申して、佛樣の備へてござる最尊無上のお悟が吾々の心中を照し、吾々の身心が佛の光明に包まれてゆくのを加と云ひ、吾々の信心が能く佛の光明を感受するのが持です。つまり親の方では誓て子供を助けてやるといふので、『さあ此方へ來い』と云うて手を出すのが加、『ハイ』と答へて此方から親にすがりつくのが持である。斯くして佛の心と我々の心とが一致して三業不二となる時、眞に眞言の功德が成就するのである。

次に淨土門に於ては三福正因と云ふことを說て居る。三福とは、

世福、戒福、行福

である。世福とは人間普通の道を盡くしてゆく事、卽ち世の中の福である。親に孝行を爲し、師匠に向つて慈心を抱いて親切を盡くし、常に衆生に向て情けの心を起し、自身は能く十善の淨行を營むのが世福である。次に戒福とは佛・法・僧の三寶に歸依し、常に佛樣の戒法を遵守し、非法の威儀に涉らざるをいふ。

望であるから、その中には實に言ふにいはれない無限の樂みがある。此の樂みは如何なる寶を以ても求むることが出來ぬものです。

吾々が日常の上に就て見ても、一日庭掃除でもしてクタビレた處で、お茶の一杯も飲むときは實に言ふにいはれぬ美味があるが、若しや二時間も三時間も午睡でもして、起きるや否や直ぐに酒でも飲まうものなら、味も何にもあつたものでない。本當の甘味は彼にあらずして吾にあるのです。誠心誠意を以て慈善事業にでも從事し、奮て人を救ひ人を助けるといふ様な事は、幾多の苦勞艱難をせねばならぬが、其の苦勞艱難が寧ろ吾人に無限の樂みを與ふることになるものである。此の如き精神上の快樂を獲得するのが眞の幸福であつて、これが佛敎に於ける一つの目的であります。決して高尚な理論のみを談ずるのが佛敎の本意でない。何れの宗門からいうても此の點に至ると同一歸であります。

## 佛敎の目的と各宗の所説

天台宗のお悟りは『治生產業與₂實相₁不₂違背₁』といふのである。中道實相の理を體觀すれば平常のすること作す事の其の儘が眞如實相の妙理妙德で、一色一香も中道ならざるは無いと云ふのが天台宗の宗旨である。勤儉產を治め忠實業を勵む所の治生產業の當體が、ソックリ般若の眞空實相と一致して少しも隔歴はない。之が佛樣の御仕事である。平常、商業を營なんだり農業を働いたりする儘が、佛の神通光明

に思うた。『今何にか唱へたが、それは何んだ何んだ、何んの呪ひだ』、『いや呪ひではない』實は斯樣〳〵の譯であると一通り感慨を述べると、狄の大將は是を聞て更に大に感激し、『嗚呼、實にその通りだ、我れも幸にして今度こそは大勝利を得たが、此の後の運命は何う成るか分らぬものぢや、今此の者一人を殺したからとて此方の國が盛になるでもなし、此の者を活かしたからと云つて波斯の勢が回復する譯でもあるまい』と思ひ廻らし、何んとなく其の間に可愛想なと云ふ同情の念が起つたから、遂に波斯王の命だけは赦すことゝなつた。そこで波斯王は不思議にも危き命を助けられることになつたといふ話があります。實に面白い御話である。

如何程榮耀榮華の身の上であつても、觀じ來れば黄粱一炊の夢である。榮華の夢は醒め易い、無明の眠りは覺め難い。永久に賴むべきは唯だ其の人の善業の力である。ソロンの擧げたる、何某といへる雅典の都の片邊りの百姓、何故世界第一の幸福者というたのであらうかといふと、彼は貧乏な家に生れた者だが、己れの勤勉力行に依て何十萬といふ財産を作つた。子供が出來た、孫が出來た。其の多くの子や孫も立派に教育して無事健全に發達し、家内中が圓滿に和合して麗はしき樂園を作つて居る。而して、彼は七十歳といふ老人に成つてから、身體が健康であるといふので、他國との戰爭に、進んで志願兵に出で壯者を凌ぐ働きをなし、天晴れ戰死を遂げたのである。故にソロン先生は、彼を以て世界第一の幸福者であるといつたのである。道の爲めに道を盡すといふ覺悟を有すれば、身命を擲つて國家に御奉公をするは人生の本

し、且つ國家の爲めにこれも志願して兵隊に出て、或る戰場に臨み衆に拔んでゝ忠義の働をなして名譽ある戰死を遂げ、親の名前までも輝し、軍神として國民から尊重されました、此の少年こそ第二の幸福者でありませう』と答へた。波斯王は自分の事を賛めるだらうと思うて居たに、スッカリ當が外れたから、もう我慢が出來なくなつたと見え『然らば朕が如きは如何』といはれた。すると、ソロン先生は『左樣であります、人の一生と云ふものは棺を蓋うて定まるとやら申して、死んでしまつてからでなければ、其の人が果して幸福者であるかないかと云ふことの確實なる品定めは出來ません、唯今の處では、陛下の如きは最も幸福であらせらるゝ樣に見えますが、人生の事は明日をも保し難し、是から先きは何うなるものか分りませぬ』と云ふ答辨であつた。波斯王は非常に不滿の體であるから、ソロン先生も其の儘歸つてしまつた。果せる哉、間もなく波斯國は北方の狄に攻め込まれたが、國王も國民も惰氣滿々であつた爲め遂に大敗軍となつた。のみならず、國王は到頭捕虜と成つて、愈々敵の首切臺の上に載せられ、今や夷狄の爲めに首を切られ樣と云ふ時に至りて、波斯王は始めてソロンの云うた語が解つた。『成程此所だ、人間は明日の事も保し難い、國王の運命も死後にならねば判ぜられぬ、人は棺を蓋うて定まるものだと申した、其の時は妙な事を云ふ奴だと思うたが、あの時ソロンの語を翫味して自ら警誡する所があつたなら、此の失敗はあるまいに殘念なことを致した』と深く感ずると同時に、ソロンの智慧が如何にも有難く成つたから、思はず知らず、『ソロンよ、〳〵、〳〵』と三度その名を呼んだ。すると、今まで首を切らうとした役人は不思議

し獨り威勢を恣にして居つた。その波斯の國王がソロンの賢名を聞て態々御招きになつた。ソロンは波斯王の御殿へ上つて參りましたが、王は容易に面會はせられぬ。波斯王は臣下に命じて色々の手續を示しておいて、先づソロンをして國の威勢に驚かしてやらうと云ふ考であつたらしい。面謁の以前に、多くの寶藏や武器の澤山ある處などを足の痛くなるほど案内して見せしめ、それから御自分は高い所に悠然と構へ込み、大勢の者に警護せられつゝ、ソロンを呼びだして面謁せられた。『今日、卿を招きしに早速來てくれて甚だ滿足に存ずる、予は先づ以て卿に尋ねることがある、凡そ世界の中に於て最第一の幸福者と云ふ者は誰であらうな』と云はれた。云はずと知れた、御自分こそ世界一の幸福者であるとの自惚からのお尋ねである。

其の時、ソロン先生は徐ろに口を開いて『左樣でございます、世界第一の幸福者といふべきは、私の住居する雅典の都の片邊りに某と云へる農民が有ります、此の者が元は貧家の子に生れたが、腕一本の働きで數十萬の財產を造つた、而して不正の業務は少しもせぬ、後に至りて多くの子孫を持ち、皆相當に敎養をなし天晴一家の獨立を鞏固にした、七十餘歲になりてから、國の戰爭に志願兵となつて名譽の戰死を遂げました、此の人が先づ世界第一の幸福者と思はれます』と云うた。波斯王は甚だ不滿足である。世界第一の幸福者は波斯王でありますと申すであらうと內々思うて居たに、更にそんなこともなく、おまけに名も無い他國の百姓を世界一だと云うて居るから、一向合點がゆかぬ。そこで『然らば世界第二の幸福者は』、『世界第二の幸福者は希臘の國の或る都會に、十七歲の一少年でありながら、少年の模範とも謂ふべき立派な行ひをな

のは却々容易ならぬ艱難辛苦であるが、育てる母親になつて見ると、その艱難辛苦が唯一の大快樂であるやうなものであります。又、教育家が鞭を執り教壇に立つて育英に從事する、是れも却々容易ならざる職務であるが、教育家はそれが無上の樂みである。又、政治家が政治を行うて行く、軍人が軍事に精勵する、何れも容易ならざる艱難であるが、その艱難こそ其の人に取つて大なる樂みであります。所が、自分は御金が澤山あるから別に教育に從事するに及ばぬ、財産が多く有るに依つて政治にたづさはるに及ばぬ、と云ふ樣な風の考を起した樂隱居的な人が澤山出來たなら、世の中は爲めに活動力を失つてしまふと同時に樂みもなくなる譯である。人は必ず働く樣に出來て居る。適度の働きは體力を增進する。若し吾々に働く事を止めて寢て許り居よと云はれたなら、それこそ非常に骨が折れます。偶々、一朝一時間ぐらゐの朝寢ならば大層に愉快であるが、『御前は起る事は相成らぬ、向ふ一週間は宜しく寢て許り居るべし』と云はれたら、それこそ大變骨が折れて命も續かぬ。時々刻々に活動して止まざる天地の間に在る人であるから、必ず働かねばならぬ。其の働きの中に大なる樂みがあるのである。

## ソロンと波斯王との問答

希臘の雅典にソロンと云ふ大政治家が有りました。雅典の憲法を始めて作つた人です。其の當時に於ては世界一の法制家であつた。其の頃は波斯國が非常な勢力を得て、亞細亞、歐羅巴に掛けて多くの領土を有

である。

例へば島根縣においでになる場合、島根縣がどんなに立派に成りましても、若し鳥取縣に多少の缺點があるとすれば進んで鳥取縣を救はんとする、山口縣に災難でもあれば是れ亦進んで救濟を講ずると云ふ風に、日本內地は云ふに及ばず、其の佛德光明が世界中に照耀して、印度に飢饉があつても自分の頭を痛め亞米利加に地震があつても自分の胸を痛めると云ふ樣になる。さすれば世界全體を以て自分の活動すべき領分として、世界中の有らゆる人類は一人も殘らず、我が同胞兄弟なりと思うて之を利益し救濟してゆくと云ふ樣に、世界全體に行渉る程に佛心を擴張してゆく、而して其の願行が無所得で、唯だ一切の苦厄を度し給ふと云ふ大慈悲の發現である。故に顯性門の中で佛性は慈悲體で、自性は智慧の力になる。人々の本心の現はれたのが即ち智慧力で、之を自性を顯はすといふ。此の自性の德を推し弘めて、一切衆生を濟度せんとの大心の顯現が慈悲體である。之を無等々呪と云ふ。此所に至れば、佛教各宗の安心も皆同一に歸着します。此の『一切の苦を除く』と云ふ語と初めの『一切の苦厄を度したまふ』と云ふ語と前後照應して居る。前の方では佛樣が衆生濟度をなさる上から說き、此所では、吾々が般若の功德に依て、自ら諸々の苦みを悉く除いてしまふ上から云うたものであるが、遂には智慧慈悲體、自利々他不二の法門となるのであります。

苦を除くと云つたからとて、別に世間的の快樂を求むると云ふ意味ではない。丁度、母親が子供を育てる

いふ誓願が自づと發せられるのである。阿彌陀樣なぞも不取正覺の御誓ひである。阿彌陀如來は極樂世界といへる立派な御淨土を構へた佛樣ではあるが、願力の上から申せば阿彌陀樣は未だ御修行中と云はねばならぬ。何故かと云ふと、一人でも世の中に迷つて居る衆生があるうちは自受用法樂にのみ住せられては居たまはぬからである。

## 無等等呪の意義

水があれば自づと月影のうつるが如く一衆生でも存する以上は、阿彌陀樣の光明は必ず其所に輝いてゆかねばならんはずです。然れば吾々御互も、何うか樂をして行きたいと云ふ樣な考は捨てゝしまつて、生々世々を期して、社會の爲めに盡くし、國家の爲めに盡し、地獄界へ行けば地獄の衆生を濟度し、餓鬼道へ行けば餓鬼の衆生を濟度し、その大慈悲行を以て唯一無二の大快樂とする大願力が無ければならぬ。此の大願力用が所謂無等等呪である。無等とは等しうするもの無しといふので、並べ較べが無いといふことであるから、倫等の等である。次の等の字は平等圓滿の意である。既に並べ較べの無い大佛德であるから、其の行ひを正等と云つて正しく等しい、卽ち公平、平等である。正しきを以て萬世の模範となり、等しきを以て一切衆生を網羅して餘すこと無し、一切の世界を自分の領分とし一切の衆生を自分の子として活動するのである。今日、皆さん方が社會國家の爲めに御盡しなさると云ふのは、取りも直さず、一種の正等の德

酒屋の前を通つても鼻も動さぬと云ふ巍然たる大丈夫でも、美しい婦人の前にでも行くとグニヤつくことがある。故に勇氣の方にも色々の勇氣がある譯です。されば煩惱と一口にいうても、細かに調べて見れば澤山あるから、佛は八萬四千の煩惱とも說かれてある。今の人に就て詮索したならば、もつと澤山になつて居るかも知れぬ。其の多くの慾なるものは何處から涌き出すかといふに、決して外より來るのでない。『盜人を捕へて見れば我子なり』、澤山にある慾と慾とが集つて來ると種々の衝突が起る。慾と慾との議會を開く場合、勢力の強い慾が勝つ。所謂多數決である。故に御互は常に精神を鞏固にして合理的信念を有すれば、其の力でみごとに情慾に打勝つことが出來ます。此の時こそ眞に能く自性を顯はすのである。之は人としての本性本德を顯はすのであります。

もう一歩進めると、佛心に冥合して佛性の大功德大妙用を顯はすと云ふことになる。併し、つまり吾々の良心を無限に推し弘めたのが、佛心とも佛德ともいふのである。其の佛心佛德といふは法華經に『今此の三界は皆是れ吾が有なり、其の中の衆生は悉く是れ吾が子なり』とあるのがそれである。三千世界を以て自分の領分としてゆく。領分といふは活動の舞臺と云ふことです。其の三千世界の中に居る一切の衆生は盡く是れ吾が子であるといふのであるから、敵も味方も、自身も他人も無い、即ち光明遍照である。此のくらゐ大きな佛心は有りますまい。それ故に、若し迷ひに苦しむ衆生が一人でも世の中に在るうちは、決して自分だけ佛の樂みを得て滿足して居ることは出來ぬ。『衆生を濟度し盡さずんば誓て正覺を取らず』と

のであります。次に顯性門に二つある。

顯性　自性……………無上呪……………智
　　　佛性……………無等等呪…………慈悲

一は自性を顯す、解り易く云ふと自己の本精神を顯現するのである。吾々の腹の底には神佛の樣な美しい立派な心がある。其の心の現はれたのを自性を顯すといふ。是れが無上呪です。世に學問と云ひ道德と云ふも、何處に尊い價値があるかと云ふと、矢張り自性を顯すにある。自分の本性は元來外物の爲めに少しも穢さるゝものではない。本來、玲瓏潔白にして、法界に照耀して居る本心の大功德を顯はすのであるから、これこそ此の上も無き最も尊いのであるに依て、無上呪と名けたものです。今日の世間の倫理道德の上から申したならば、此の自性の德を顯はすといふのが人間の最終の目的であるといふことも出來ます。吾人の眞實なる自我の實現、換言すれば圓滿なる良心の開發、意志の活動がそれである。併し圓滿といふことが却々容易でない。是れが最も修養の必要なる所以であります。

第一御互の心に煩惱といふものがあるが、それも無量です。欲と云ふものゝ上から見て、どの位多くの欲があるかも知れぬ。一部分の欲を離れたとて決して修養の手は弛められぬ。例せば、戰爭にでも出づれば千軍萬馬の間を往來して、彈丸雨飛の下に在りながらピクともしないと云ふ程の天下の豪傑でも、若し其の人が酒が好きであつたならば、酒屋の前へ行くと直ぐに勇氣が挫けて了うてグニヤつく樣になる。又、

氣の弱いものは皆逃げ出したと云ふ話が莊子の中にも書いてある。此等の話を見ても西施などは美人中の美人であつたらうと思ふ。併し、かういふ美人に對しても、此の美しいといふのは一時の假相で、幻も同然の姿である。決してこれが美人だと云ふ實體は無い。刹那生滅の理は指を彈く間にも轉々として移り變つて居る。縱ひ小野小町の如き美人でも、十年廿年の後には塔婆を杖に腰を屈めて步かねばならぬ、と云が人間の有樣である。元來、美と云ふ實體の迷ふべきものは無いと觀照し去れば、朝の露眼を遮ぎるが如くにして毫も執着の念は殘さぬやうになる。斯く萬境の外相を解脫するを大神と云ふ。神とは淸淨の義で、外物の爲に自心を穢されぬ、淸淨無垢の功德を有する大陀羅尼であるぞと云ふので、大神呪と申したのであります。

## 大明呪無上呪の意義

次に大明呪とは內相を破する方です。內相とは心の內の迷想です。外界の色や聲に觸れても迷はぬとい ふ樣に成りましても、自己の胸中に細かい妄想を描いて居る樣では依然たる凡夫である。故に此の心內の妄想をも破せねばならぬ。內外の相はたゞ麤細の別はあるが何れも執着である。內相は細で外相は麤である。縱ひ超然として世間を飛び越えたと云ふ程の人でも、若し自分は出世間の道人で偉い者だと云ふ高慢心でも起れば、矢張、自己と云ふ內相に囚はれたものといはねばならぬ。その心內の迷相を破り少しでも妄想の暗を留めぬやうにする。妄想の暗去りぬれば精神の光明が方寸の間に輝き渉るから、大明呪と云うた

曹洞宗の御開山のお語に、『縦聞二緊那迦陵讃歎之音聲一。夕風拂レ耳、縦見二毛嬙西施美妙之容顔一朝露遮レ眼』とある。緊那と云ふは緊那羅王と云つて天上界の音樂師、迦陵は迦陵頻伽鳥と云ふ三千世界に比ひ無き好い聲を發する鳥である。さういふ絶妙なる音聲を聞きましても、世間の法は悉く轉變無常で、刻々に移り變つて毫も自性の認むべきは無いものと諦めて居るから、丁度、夕の風が耳の邊りを拂つて通るも同じ事で更に意中に留らぬ。又、毛嬙と西施とは古の美人の名で、殊に西施は支那の春秋戰國の時、越王より呉王に獻上したる美人である。呉王は其の美人の愛に溺れて國の政治を怠たり、後に越王の爲めに國を亡ぼされてしまうた。古書を見ると毛嬙、西施何れも双び無き美人であつたらしい。『西施胸を疾む』と云ふことがある。西施が或時、胸が痛いと云ふので顔をしかめて居つた。其の顰め顔がまた一段と美しく見えて却て評判となつた。其の隣舍に極々醜い婦人が居つた。『西施さんはあんな顔をして大變に世間から賞められて居る、妾は一向世間から持囃されんから妾もあんな顔附をやつて見やう』と、痛くも無い胸を抑へて顔を顰めた。唯さへ怖い顔附の者が、思ひ切て顰め顔をしたのだから殆ど二た目とは見られぬ。全で化物である。それでゐて自分は其の顔を人に見て貰はうと云ふ考だからたまらぬ。態々外へ飛び出して人の顔の前へ自分の顔を突出した。人々は驚いて『コリヤ氣が狂つたのだらう、いや鬼に變じたのだらう』と云ふので

別『無二聖解』といふのがそれである。凡情とは凡夫の迷情、聖解とは聖人覺悟の眞智である。迷執斷する時覺悟自から顯はれる。故に別に悟りを求むるには及ばぬ。

然れども、此の迷執を離れて覺悟を得る迄に大層な距離があると思うてはならぬ。迷を斷ずる時その儘悟の本面目が現成する。例へば吾々が非常につまらぬことで腹を立てるとする、之が所謂凡情です。其の時思ひ直して自らその短氣を抑へますると、自然に優美なる慈悲柔輭の德が現はれるに違ひない。又、短氣と云ふ凡情を盡せば、それと同時に勘忍といふ一つの美德が自づと現はれて來る。故に迷ふべき相を破つてしまうと、大に死して大に活きるの理で、本性の妙德が發現するものです。だから、般若の功德も一面から見ると空であるが他の一面から見ると不空と云ふ事が云はれます。空にして空に非らず、空に非らずして空なり、之を大神咒、大明咒、無上咒、無等等咒と、四種の德目を分けて示されたのである。就中、初めの二目は破相門に屬する。

破相 ─┬─ 破外相……………大神咒
　　　 └─ 破內相……………大明咒

自分の對境たる聲とか色とか云ふ可見可聞の相が外相である。此の外相は畢竟因緣生の假相であつて、其の儘元來空であると觀ずるのが外相を破ぶると云ふのである。此の外相を破し了れば如何なる境界に對しても決して迷はされぬ様になる。

悪魔を拂ひ或は天地神明を招くのである。そこで釋尊の御說き下された唱へ事が此の陀羅尼であるが、是を呪文とも云うたのである。

初めの『故に知る』とは、前の文を承けた御言葉である、三世の諸佛も十方の菩薩も、皆般若波羅蜜多に依つて證入し修養し、以て眞實の菩提道を成就せられたとして見れば、般若波羅蜜多の六字は心經全部の代名詞、般若六百巻の綱要で、宇宙の大德大用も此の中を出でず、これが眞の大總持である。此の般若波羅蜜多の中に所有眞理を具有して居る。凡ての佛法も、凡ての道德も、終に此の中を出でぬから、下に『是れ大神呪なり云々』と四通りの德號を附して御示しになつたのであります。『是れ大神呪なり、乃至、是れ無等等呪なり』といへる名目は、般若の功德を淺より深、麁より細に入りて說示せられたものであります。

前にも申した通り、般若の中にも破相と顯性との二つの意味がある。破相とは一切の迷相を打ち破るので消極的智力、顯性とは吾々の本來本性の德を現はすので積極的智光である。大般若に第一に眞空をお說きになつたのは卽ち破相門です。眞空の理を體すれば迷執の根本が泯絕するから執着すべき根據が無くなる。吾々は姿を見て實有の見を起すから姿に迷ふのである。聲が聞えて實在の執を生ずるから聲に縛られる。然るに、姿も本來空である、聲も本來空であると云ふ道理が分つて來れば、迷ふべき物も執すべき物も其のまゝ解脫である。此の解脫を得る時、正知見が明らかになりて、始めて天地間に法性天眞の妙理が開顯し暗去り明來るが如くであるから、暗黑さへ除かるれば光明は自ら輝くものである。禪宗に於て『但盡二凡情一

ツトは鐵瓶の湯氣が蓋を動かすのを見て蒸氣を發明した。始めは誰人も何んとも思はずに居りし極些細な物柄から、天地の大眞理を究めることが出來るとすれば、一事一物にも總持の德のあることが分るのではないか。況んや佛教中の陀羅尼の如きは、甚深微妙の密言であるから、盡十方界に充滿する眞理の全體を悉く收め盡して漏すことなし。故に總持と云ふ。佛教には飜譯語に色々あるから、陀羅尼の事を持命とも總持とも云ふが、何れも同一の意味であります。

## 空の一字

さて大般若は六百卷も有る大部の經文だが、縮めて見ると空の一字に歸します。故に空の一字が大般若の大陀羅尼というても宜い。空とは何んぞといふに吾々の一心の異名である。つまり吾々の一心が甚深なる大般若を持て居るのであるから、此の一心こそ取りも直さず活きた陀羅尼である。それ故に此の根本陀羅尼の上に、如何ほど枝が附き葉が茂つて八萬四千の法門と分るゝとも、畢竟じて唯一法に歸するのである。其の一法に歸する趣を示されたのが此の心經でありますから、總じて持明、即ち陀羅尼に歸するのである。然れば陀羅尼といふは、其の實吾々の方寸の内にあるのであります。併し、一應は佛の說かれた眞言であるから通俗的に是れを咒とも云ふのである。日本ではマジナヒとも、ノロヒとも訓む。之は支那の道教などで常に咒と云ふものを用ひる。即ち『九字』などを切つて眞言の樣な唱へものをする。これで或は

## 總歸持命分

故知、般若波羅蜜多是大神呪、是大明呪、是無上咒、是無等等呪、能除二一切苦一眞實不レ虛。

【和譯】故に知る、般若波羅蜜多は是れ大神呪なり、是れ大明咒なり、是れ無上呪なり、是れ無等等咒なり、能く一切の苦を除て眞實にして虛ならず。

總歸持命とは、總じて持命に歸すると讀む。持命とは陀羅尼の異譯であります。陀羅尼は印度の語で、之を飜譯して普通には總持と云ふ。一句の中に無量の義を總べ持つの意である。尤も諸法の一々が皆な總持の義を有して居らぬは無い。故に、僅に一つの物をあげて、其の一物の上に諸法全體の事理を收め盡して居るとすれば、是れも總持の意味になります。喩へて見れば、玆に一滴の水ありとせんに、此の一滴の水を能く研究して見ますると、自づから全世界の水の眞理が解つてゆく。又、玆に線香に火を點ず、此の線香の火を充分研究して見れば、自づから天地間の火の性質を判斷することが出來る。故に西洋に於ける究理學者の如きは、微物の內より大眞理を發見して居る。ニュートンは林檎の落ちるのを見て重力の原理を悟り、ワ

鍊二得身形一似二鶴形一。　千株松下兩函經。
我來問ㇾ道無二餘說一。　雲在二青天一水在ㇾ瓶。

大道なるものは天地法界に充滿して居る。人々の方寸に向つて退歩一回せば、草木瓦礫も亦大光明を放つて居ることが解る。併し、凡夫は妄想顚倒の爲に、道の中に在りながら道を覺了することが出來ぬ。若し一旦豁然として道を體得すれば、動靜起居、之くとして道ならざるは無い。今日吾々が御互に、親子の間に於て、兄弟の間に於て、若しくは社會に對し、若しくは國家に對し、或は忠、或は孝、或は信義、或は博愛の法に遵つて、活動自在、手を擧げ足を移す所にも、阿耨多羅三藐三菩提といふ此の上も無い正眞の佛道が顯現して來るでなければ、本當に心經を解した人とは云はれませぬ。唯だ心經を讀んだり講じたりしたのみでは、それは文字に書いた心經であつて活きた心經とは申されぬ。故に吾々は、縱ひ心經の一部分なりとも自己の物となし、般若の智光が自己の胸中に輝きを發したならば、夫を以て社會的國家的に應用し、此の人生に對し大解脫の効を現はし、自分自らが大安心を得るのみならず、他の人をして大安心を獲得せしめ、自分自らが其の解脫の境界を樂しむのみならず、又、他の人々をして解脫の境界を樂しませる。是くの如くにして始めて佛法が活動するのである。所謂活佛法と成るのである。これでこそ佛が艱難辛苦して大般若を開示せられた目的も始めて圓滿に達せられるのであります。

て見れば人に挨拶をする事も知らない無禮極つた和尚だ。すると禪師は流し目にジロリッと李翺の顏を見て『何んぞ眼を貴んで耳を賤しんずることを得たる』御身は眼の方が大事で耳の方は大切でないと思召すか、目といふものは始終動いて居つて働きがあるが、耳といふものは聲は聞くけれども動かない。それと同じ事で人に向つても『マア能くおいでなさつた、サアどうぞ』と云うて、チヤホヤする待遇の仕方もあるが、『お出でなさつたか』とも云はず、耳の樣に少しも動かずして默を守つて接待をする法もある。山僧(自分)は人が來たからと云つて、目の待遇ではなくて耳の待遇ぢやから、チヤホヤ云うて騷がぬ。夫れを眼の方が好きで耳の方を嫌ふ樣な人は、まだ本當の人物とはいはれぬ、さういふ人に顏を合はすことは此方でも御免を被むる、山僧はお茶屋姉さんの樣なことは出來ぬ、縣知事が來たからとて俗物の眞似は致されぬといふ挨拶であつた。李翺もこれには驚いたが、何んと無く有り難く感じたと見え、姿を正うして『如何なるか是れ道』大道とは何んぞやと問はれると、禪師は、手を以て上下すと云つて、手を上げたり下げたりせられたのみであつた。李翺は何んの事か薩張り解らぬ。禪師が『會すや』解つたか、李翺は『不會』解りません、すると禪師は『雲は青天にあり水は瓶に在り』といはれた。是れが藥山の說法であります。それ見られよ、雲は是くの如く青天に靉いて居る、水は是くの如く水瓶の中に在るに非らずや、佛法は元來天地に充滿し大道は隨處に圓通である。これが手を以て上下せられたる所以であつた。遉は李翺、其の一言を聞いてハツと感ずる所あり、思はず頭を下げた。其の時に作つた詩があります。

起して盛大になるといふ様な結果も現はれます。尤も印度の如きは一時殆んど佛法は滅却したのであるが、今日ではまた餘程恢復の兆象があるさうである。其の時、藥山禪師は五六人のお弟子を連れて山中に引込んで居られたが、徳孤ならず必らず隣ありで、窃にお布施を持つて來たり御馳走を持つて來たりする信者があるけれども、禪師は固より無欲の道人であるから、そんな物には手も觸れなかつた。三年程を經て武宗皇帝の死するや、宣宗皇帝其の位を繼ぎ、一層熱心に佛法を恢復せらるゝ事に成りましたから、禪師も始めて山を出でられたが、其の時、草庵の戸棚には御布施の包が一杯積んであつたさうです。それ迄は唯だ米さへあれば宜いと云ふので、米湯の如きものを造り、それへ摘み草を交へ、生鹽を加へ、お粥として食べて居られた。之を藥山の瓔珞粥と云ふ。菜葉が這入て居るから、箸で以て之を挾むと、丁度、瓔珞の様にピラピラするから名けたのである。隨分氣樂なものです。

此の藥山禪師の所へ、今日で云へば縣知事の職に新任せられた李翺と云ふ先生が尋ねて來た。此の人は韓退之の高弟で、師の韓退之の學を繼ぎ、更に一見識を立てた大學者です。卽ち學者であつて政治家であつたのである。夙くより藥山禪師の芳名を慕ひ、何うか遇ひたいと思ひ屢々使者を遣つたが、禪師は一向に應じないから、或時、進んで禪師の門を訪うたのである。往つて見ると禪師はお經を廣げて見て居る。縣知事公が傍へ寄ても碌に挨拶もせず、一心にお經を見て居る。其の無禮を憤つたる李翺先生が『面を見るは名を聞くに如かず』と云つた。聞て千金見て一文、名前を聞いて居た時は大層評判の好い和尙だが、來

ら思想感情の上に衝突する場合が澤山ある。父親と息子さんの間柄も亦さういふ衝突を來す場合があるのです。所謂新思想と舊思想との調和が容易に取りにくいからである。縱ひ舊思想の人でも、現代の狀態を能く辨へて、其の人の正しい精神が時代思想に順應して、完全なる調和を得た時が、始めてそこに至善の德が顯はれて來るのである。

佛教家も其の通りです。時代に順應すると云ふことを知らずして、自分獨り極で二千年前の風をのみ死守して居つては、如何程立派な教理を心得てゐても役に立たない。況てや、下手なお悟を開いてお天狗樣に成つて、天下人を罵倒して揚々たる似而非なる善知識などは、世の中に一番厄介なものです。それ故佛教家などは、動もすると社會から遠ざけられる樣なことになるのであります。時代と云ふことを見る眼が無かつたならば佛教も、亦盲動たるを免れぬ。是れが百尺竿頭に一歩を進め、所謂心に罣礙なき大自在を得て、人生の上に般若の妙德大力を應用することの必要なる所以であります。

## 藥山禪師と李翶

支那に藥山禪師といふ六祖大師から四代目に當る大德なお方があつた。唐の武宗皇帝の時、帝は道教を信じて佛教を憎み、遂に暴力を以て佛法を潰したことがあります。併し佛法が價値の無いものならば別に潰ぶさなくても自然に潰ぶれるが、佛法に價値があるものならば、外より迫害を受ける時は却つて反動を

身善にして心善ならざるものは至善に非ず、心善にして身善ならざるものは至善に非ず、と云うたさうである。行狀は立派でも精神が善でなければ至極の善ではない。又、精神は善良でも行ひが完全でなければ是亦圓滿なる善ではない。つまり至善とは知行合一した處にある。斯く申すのも矢張學者の議論であつて、未だ至善といふ事の標準が確定したものとは許されぬ。併し、昔は至善といへる目的地を前方に立てゝ、吾々が之に向つて段々向上し進修し、漸く其の地に達する樣に敎へたものです。ところが段々學理の進歩に連れ、最近の倫理學者なぞのお話を聞くと、至善といふものは決して遠方に求むべきものではなく、吾々の眼の前に在る。卽ち吾々の意志が合理的に活動して現代の事情に順應し、時代精神と吾々の良心とが一致した處に聖賢の至善の德なるものが現はれる、といふ樣な風に說明してをる。

## 時代への反逆と順應

昔の人が、熱心に親孝行といふことを說いて置いたが、其の通りに守つて行つても至善といはれぬ場合が幾等もある。これは時代に順應せぬ所があるからである。時代精神といふものは時々刻々に變化して止まぬ。嫁さんの了簡と姑さんの了簡とは、十年なり二十年なりの時代が違ふから中々和合が難しい。嫁さんの方は新しい現代的敎育を受けて居る。今の姑さんならばまだ昔の女大學的敎育を受けて居るから、双方が賢德ある人でも意見の衝突を免れぬ。嫁さんも溫厚な性質、阿母さんも賢婦人で、共に立派な婦人でありなが

# 阿耨多羅三藐三菩提

吾々は却々一足飛びに大佛には成れないが、先づ小佛から修養をする。一日坐れば一日の佛である。終身禪に住すれば、終身の佛である。縱ひ惡人でも、一日親に孝行をした時は一日の孝子である。どんな墮落した人間でも、國家に報功せんが爲めに身命をも顧みぬといふ樣な精神が、チョッとでも方寸の中に顯現すれば、其の一念の間だけは、楠正成公の如き立派な靈光が方寸の中に輝いて來るのである。三世の諸佛は皆圓證の大佛樣であるが、其の境界は何うして成就せられたかといふと、般若波羅蜜多の大智慧力に依つて、眞空實相の妙理を究竟し、涅槃寂靜の本源に歸着せられたからこそ、阿耨多羅三藐三菩提を得たまうたのである。阿耨多羅三藐三菩提は梵語で、飜譯すると無上正等覺と云ふ。卽ち此の上無い最も正しきお悟りと云ふ事であるから、たゞ今申した圓證の佛智である。三世の諸佛は皆是の如きお悟りを開いて成佛せられたのである。

併し、此の三藐三菩提といふ大道は畢竟何處にあるかといへば、決して外に在るのでない。今日の倫理學者などは能く云ふ、昔は道理といふものを遠方に見てをつたが、あれは誤りであると。又、儒者の方から云へば、儒敎の目的は何かと云ふと至善に止まるにある。其の至善とは如何なるものかと云へば、これは却々むづかしい。中江藤樹が大學の至善を講義して、

も佛があれば現在にも佛がある。未來にも亦佛がある。今日の吾々御互は未來の佛である。未來といつても死後の事ではない。將來といふ意味です。吾々は今日佛となるべき修行を積んで居るのであります。故に將來には必ず成佛する。故に未來にも無限に佛がある。三世の諸佛各々相同じからずと雖も、其の大智大德、大願大行は一如にして不二である。而して、諸佛一如のお悟りといふは、畢竟ずるに此の涅槃を究竟せられたのである。何に依つて究竟せられたかと言ふに、勿論、般若の智慧力に依つて究竟せられたのです。故に古歌に『釋迦阿彌陀地藏藥師と名はあれど、同じ心の佛なりけり』、三世十方に恒河沙無數の佛ましますと雖も同一般若の光明體である。世の所謂聖人賢人なるものでも、佛敎の上から見ると皆佛の一分の智光を發したものである。

佛敎では分證圓證といふことを云ふが、分證とは一分一分の悟を開いた佛である。故に吾々と雖も一念正しき心を發起すれば、其の正しき心の起つた時の一念は、正しく佛一分の光明が輝いたのである。設ひ監獄の中に收容せられて居る犯罪者でも、嗚呼濟まぬ事を致したと、一念徹底悔悟して善道に歸した時は、其の當體に一部分の佛光明が現はれて居る。本より世には絕對の惡人といふ者は無い。如何なる罪人でも、腹の中には必ず立派なる佛心が見えて居るに相違ない。其の佛心を發揮して、從前の惡き了簡を解脫せしむるのが敎化の力、若しくは敎育の力である。併し、いよ〳〵成佛と云ふ名の附くのは、そのお悟りが最も圓滿に成つた時である。故に吾々は、此の樣に修養しても急に圓滿なる成佛は出來ぬが、小佛には成れるのである。

乘教になると其の意義が發達して居る。つまり般若眞空の妙理の實現したことを涅槃というたのである。語を換へていへば、天地の實相、宇宙の大道、人々具足の本來面目心を涅槃というたのである。故に涅槃を究竟すとは、卽ちあさきゆめみしゑひもせすといふ事です。之を具體的にいへば、佛の境界に證入したことを涅槃を究竟すといふのである。故に佛教の最大目的は究竟涅槃であります。

之れによつて御承知を願ひたい。禪宗ばかりではなく、どの宗門からいうても、如何ほど立派な見識を備へて居りましても、其の心操行持綿密ならずして、世間差別の假相に迷ひ聲色の奴隷になる樣なことでは、決して本當の禪を得た者といはれぬといふことを。又、どの樣に精神が落ち着いて氣高い境界を有しても、法執と申して、自分の悟得の境界に執着して高貢我慢を持つて居る樣では、決して純粹の涅槃の境に達したものとは申されませぬ。大悟徹底の後、百尺竿頭に更に一歩を進めて、悟後の修行をして其の行持を錬磨せねばなりませぬ。此の境界を得しめんが爲に、心經に於て釋尊は其の眞空實相の妙理をお說きになり、自づと中道の德を示されたのである。更に詳しくいへば、此の眞空實相の原理に基いて、吾人が實際に佛法を修行して般若の大智光を放つべき標準をお敎へになつたのであります。

## 三世の意義

三世諸佛依二般若波羅蜜多一故得二阿耨多羅三藐三菩提一、三世といふは過去・現在・未來である。過去に

ヤ勿體無い事をした、一升徳利に憎まれては最早生きては居れんと思つたのだ、おまへの頭ならあやまるには及ばなかつた』と云つて憎まれ口をきいたといふ話がある。

物に迷ひ込むだ人は丁度こんなもので、親の頭よりも一升徳利の方が有難くなるものです。併し是等は顛倒の甚しきものである。兎角、人間は一念ひどく迷ひ込んでしまうと、先祖代々傳來の大切な家財をも捨てゝ顧みないのみならず、金錢を以て購ふことの出來ぬ萬物の靈長とも云はるゝ此の身體生命までもムザ〳〵と打捨てゝ顧みないといふ樣な事にもなる。是こそ一升徳利よりも親の頭が粗末に見えると同じ事です。故にゑひもせすと云はれたのは、無明煩惱の迷夢を覺醒し生死を解脱したる『寂滅を以て樂と爲す』の境界を示されたのである。それであるから、吾々お互は一切の顛倒を、遠離というて遠く離れ、永久に迷執を解脱した所に於て、始めて涅槃を究竟するのである。究竟とは物を盡して餘りなきに至ることである。

## 涅槃の意義

涅槃とは印度語で、『ニルバナ』といふが原音であるさうな。支那には寂滅、又は圓寂と飜譯してある。印度の原語の意味は物の消滅した樣な意味であるそうです。卽ち火を吹き消した樣に何もかも無くなつてしまつたといふ樣な意味とか申すことである。併し佛教では、小乘教は身心都滅を無餘涅槃と説くが、大

無いところに苦しみを設けて居ること、丁度淺はかな夢を見るやうなものだ。身は寂滅の床の上に在りながら、迷心は四方に奔馳し、空中に種々の幻影を認めて騒ぎ廻はつて居る。その迷夢の覺めた時、初めて寂滅の境界が現はれるのです。ゑひもせすとは無明の酒に醉ひもせぬといふ事である。酒と云ふものは、一旦之を呑んで醉ふ時は精神が錯亂して物の前後をも忘却し、貴い物を貴いと見る事能はず、賤しいものを賤しいと見る事能はず、見處顚倒して其の實相を見る事が出來ぬものです。

## 一升德利か老爺の頭か

或所に一人の酒飲みの息子どんがあつた。酒に醉拂らつて夜分遲く歸つて來た。お父さんはランプを消して寢て居る。息子どんは足元がシドロモドロに成つて居るから、ツイお父さんの頭に躓づいたので、頭が割れる樣に痛い。非道い奴であるわいと父親は頭を抑へて居ると、息子どんは暗黑の中に坐り込んで『あなたが此所においでると思へば、氣を附けるのであつたに暗黑とは申しながら足蹴に掛けて如何にも申譯けがありません、あなたに見放されましては、私はもう生きて居ることが出來ません、どうか御勘辨下さいませ』というてあやまられて見ると、そこが親の慈悲心で、まだあやまるだけ可愛らしい所があると、お父さんは頭の痛いのも打忘れて『これ倅や、もう宜い、勘辨してやるから早く寢むが宜い』といふと、息子は驚いて『何、おやぢさんの頭であつたか、餘りツル〳〵して丸いから一升德利だと思つた、そこでコリ

いと思うて修行せられたのであるが、眞に能く大解脫を成就した方は少いものである。して見ると有爲轉變の浮世といふ迷界は、山の奥のまたその奥山の如くにして、容易に飛越える事が出來ないが、唯だ信仰の力、坐禪の力、大修行の力に依つて打ち越える事が出來る。之を『生滅し滅し已る』といふのである。生滅の相が滅すると云ふのは死ぬ事ではない。眞空實相の理を明らめて般若の智光の顯現した時、生滅の相は其の儘滅し已るのである。そこで『寂滅を以て樂と爲す』ことになる。寂滅の狀態をあさきゆめみしゑひもせすと云はれた。卽ちあさきゆめみしとは淺はかな夢を見まいと云ふ事で、吾々お互の迷界に沈淪する樣は始終淺はかな夢ばかり見て居る樣なものである。

無常と云へば無常と云ふ相に苦しめられ、常住と云へば常住と云ふ名に束縛せらる。苦と云へば苦の爲めに繫がれ、樂と云へば樂の爲に過まらる。迷ひの人の上からは順境・逆境二つながら迷を重ぬる因緣となる。幸福の身分に生れると身分が幸福なるだけ却つて墮落し易い。困難な者に生れると境遇が困難なる爲に墮落する。根本に迷執があるから總てが迷執の影となるものです。其の反對に信仰力、禪定力が鞏固であれば順境に處しても心を亂さず、益々自己の信念を增進する。逆境に在りては艱難汝を玉にすと云ふ具合で、其の艱難が却つて好因緣と成つて、彌々自己の修養を積み、玉の如くに精神を磨いてゆくものである。

處が、普通、凡夫は却々さうはゆかぬ。敵のない所に敵を作り、怨みのない所に怨みを結び、苦しみの

そ人間の手で作つた程の物は必ず壞れるものであらうか如何でありませう』師匠さんは笑ひ出した『發明なやうでも流石は小僧、つまらぬ事を考へたものぢや、それは人間の手で拵へた程の物は必ず壞れるに極つて居る』、『だつてお師匠さん、極大切な物でもあつたならば、特別に壞れぬ樣に永久に保存されませうか』、『何程大切な物でも時節因緣と云ふものがあるから壞れる時には壞れる』、『して見ると時節因緣といふものは恐いものですなあ』、『そうさ、恐いものだ、佛天の力と雖も、及ばぬものぢや』、『然らば生れた者は必ず死ぬる、拵へた物は必ず壞れると云ふが世の中のきまつた相場ですなあ』、『夫れは云ふまでもない、きまつた道理だ』、『きまつた道理として見ると、死んだからと云つても之を立派に諦めて心を動かさず、壞れたからと云つても時節因緣と觀念して腹も立てぬと云ふ、之れが悟りと云ふものでせうか』、『まあそんなものだ』、『私共は貴師の樣なお悟りの開かれた有り難いお師匠さんを持つたのは甚だ幸福です』、『小僧、何を云つて居る』、『實は斯くの通り時節因緣が到來致しました』と、袂の中から壞れた茶碗を出した。師匠さん驚いた。『此の小僧め後日にどんな者になるであらうか、後世恐るべき小僧だ』と云はれたと云ふ話がある。此の頓智談の中に一分の眞理は含まれて居る。

どんな大切な物でも生滅の道理は免かれぬから、わかよたれそつねならむと弘法大師は仰せられた。然るに生死の實相に迷ふ爲に、見聞覺知に礙へられて種々の顚倒を生ずる、此の顚倒せる迷界はうゐのおくやまで、容易に之を越されない。古への聖人賢人等が、何卒して此の人生の苦惱を解脫したい迷執を離れた

くて泣かすには居られぬ』、『そりやお前が氣が小さいからだ、お前は兎に角、私の兄弟子の事だから兄弟のよしみ、此の周建が一つ茶碗壞はしの名代を勤めてやらうか』、『それは忝じけない、御前は頓智が宜いから是非賴む、其の御禮には、餘所へ往つた時分に貰つた御饅頭は皆御前に上げる』といふので、到頭、饅頭を抵當にして茶碗を壞した名代を引受けた。周建は平氣なもので、壞れた茶碗を手拭のやうな物に包んで袂に入れ、再び本堂へ行きて遊んで居る。

間もなくお師匠さんが御歸りになつた。すると早速頭を下げて『お早うお歸りでございます』、『小僧、又例によつて惡戯をして居たであらう』、『いや、今日は惡戯なんどは致しません、本堂で以て一心に坐禪工夫をして居りました』、『何うも坐禪をして居た樣な顏附きぢやない、坐禪ではなく臥如來と云つて寢て居つたぢやないか』、『いや、そうぢやありません、今日は本當に坐禪をしながら、一つの難問體を工夫して居ました、それは凡そ人間が、此の世に生れて來た程の者は皆死ぬるものであるか中には死なぬ者も有るであらうか、是れ如何といふ事を工夫しました』、『幾等利口でも小僧は小僧だ、馬鹿な事を工夫したものだ、そりや生れた者に死なない者は一人も無い、設ひお釋迦樣のやうなお方でも、八十歳を一期として涅槃に御入りなされたではいなか、して見れば、どんな英雄豪傑でも生れた者は必ず死ぬる事は古今を通じて變りはない』、『それでは生れた者は皆死する者なりと、そうきめて置きませう』、『別に今更きめて置かんでも、もうきまつて居るのぢや』、『そうですか、それはそうとして、私はもう一つ工夫した問題があります、凡

あつて、只因緣力に依て現はれるものだと云ふ事を觀察すれば、決して生滅の相には迷はぬ樣になる。

## 一休和尚の奇智

一休和尚がまだ小僧の時分には周建と云ふ名であつた。九歳か十歳くらゐの時の事、或日、師匠さんが外出して留守であつた。方丈の間へ往つて見ると、兄弟子の小僧が泣て居る。なぜ泣くかと尋ねると、『御師匠さんが足利將軍より戴いたと云ふ秘藏の茶碗がある、お客の來る每に自慢さうに夫れを見せて居られるが、傍に居る時は充分に見る事が出來ないから、今日は御師匠さんの留守を幸ひに見てやらうと思うて、箱の中から取り出して見て居つたが、何所が好いのか一向に分らぬ、澁を引いた樣な汚ならしい可笑な茶碗であるわいと思ひつゝ眺めて居るうちに、つひ手の上から滑り墮ちて、その茶碗を壞したので、途方に暮れて泣いて居る』との事であつた。ところが、周建小僧の時代から一休和尚は才物であつたと見え、『お前はそういふ譯で泣いて居るのか、兎に角、飛んだ事をしたが、併し一旦壞れて了うた上は、いくら泣いて居ても何の効も無いではないか、苟も禪宗の小僧たる者が瀬戸物くらゐで泣くものでない、一滴の涙でも漫りにこぼさぬといふが禪僧の覺悟だ、泣きさへすれば其の功德で壞れた茶碗が元の通りに成つてくれると云ふならば、幾等泣いても宜いが、お前が幾等泣いても元の通に成る氣遣はないではないか』、『それでも御師匠さんが歸られると、どんな御叱りを受けるか知れぬ、どんな御折檻を受けるやらと思ふと悲し

遷流の義で、一切諸法は皆な業力の所造なるを以て行と云ふ。吾人の身體の作用、精神の作用は言ふまでもなく、天地間に所有萬有諸法の作用を總括して諸行と云ふ。此等は盡く因緣力に依て夫々作用を現はすのである。此の諸行は常に變々化々して暫くも停ることがないから之を無常と云ふ。

弘法大師は此の四句の偈文を『いろは』歌に作られてある。大師が高野山をお開きになる時に、此の歌を作られて、材木を運ぶ者をして此の歌を謡ひながら運ばしめ、又、之を材木の符調にせられたと云ふ傳説もあります。いろはにほへとちりぬるをと云ふのは『諸行無常』の句を詠じたのである。春の花が色も美しく咲き、殊に好き匂ひを放つて居る、ア、奇麗な花であると思うて居るうちに、夕の風にハラ〳〵と散つてしまう。わかよたれそつねならむは第二句の『是れ生滅の法なり』に當る。一切諸法盡く生滅變遷の法であるから、常に住つて居るものは一つも無い。人生百に滿たず、どんな長壽な人でも百歳の壽命を持つと云ふ事は甚だ少ない。近頃は百歳とか百二十五歳とか云ふ、人の定命に關する新說もあるが、よし百二十五歳の壽命を保つたとて、此の限り無き時間の上から見れば、僅に時計の一セコンド位の時間と同じいことである。『いふまいと思へど今日の暑さ哉』暑い〳〵と云つたとて別に涼しくなる譯でもないから、もう云ふまい〳〵と思ひながら、今日はお熱うございますと口癖に云うて居るがものゝ百日も經つか經たぬ中には打つて變つた寒天地、綿入の重着をして炬燵に這入つて居ながら、今度は寒い〳〵といふ樣になる。斯く僅かの間に變化することは諸法皆然りであるから、實に是れ生滅の法である。此の生滅の法は畢竟假相で

とを示したまへり。又、不淨觀に着する者には唯心に淨土あることを說く、而して其の歸する所は一切の迷執を解脫して、遂に淨に非ず不淨に非ず、不增不減、不生不滅なる眞空實相の妙理を照見せしめんとの轉大法輪です。般若は卽ち此の眞空實相を正面より開示せられたる法門であるから、之を信得及する時自づから一切の顚倒を遠離することが出來るのである。

## 伊呂波歌の事

夢想とは顚倒の迷執を夢中の妄想に喩へたものである。夢の中に現はれたる種々の境に對して起る思想であるから、殆どその根據がない。夢の中に面白い物を見たり、悲しい物を見たりして、之に向つて喜怒哀樂の情を現はし、其の思想が肉體にまで影響して、或は手を動かし、或は足を動かし、或は身を動かし、或は聲を發し、中には突立て座敷の中を駈け歩いたりする者もある。爲めに非常に精神を勞するのみならず、肉體にも疲勞を來すことが往々ある。併しながら夢が醒めて見ると、今までの喜怒哀樂は雲散霧消である。樣々なる物ありと思うたは元來何も無かつたのである。卽ち眞空實相、無の一字が本當の姿であつたのである。涅槃經の中に釋尊が四句の偈文と云ふものをお說きになつて有る。

諸行無常、是生滅法、生滅々已、寂滅爲樂、

是は顚倒夢想の迷執を離れしめんが爲めに說かれた敎である。諸行とは此の間も申した通り、行は造作

最も誡むべき無我顚倒です。故に吾々は小我を執せず、利己的我執を解脱すると同時に、宇宙の大我を徹證せねばならぬ。

次の不淨顚倒といふは、「人間の身體は皮一枚を剝げば手も附けられぬほど汚いものであるから、此の肉體に迷ふなよ」と佛が不淨觀を示されたのを極端に解釋して、世の中は凡てが不淨である。穢らはしいものであると云ふ觀念にのみ住して居たなれば、眞正なる愛情も慈念も起らぬことゝなる。之を不淨顚倒と云ふ。故に吾々は肉體の相に執着することを離るゝと同時に、天地の大美を感得せねばならぬ。一切萬象は盡く是れ一團の功德聚である、光明體である。山川草木も佛の淸淨法身であるといふことを明らめねばなりませぬ。

釋尊が如何に、吾々を濟度せんが爲めに、縱橫無盡に御說法を下されたかと云ふことは、此の八顚倒の說でも解ります。常顚倒の者の爲めには無常の理を示し、五欲に耽着する者に對して受は是れ苦なる所以を說き、我見に束縛せらるゝ者の爲めには無我の眞理を開き、肉體の假相を愛執する者の爲めには不淨觀を敎へられてある。而して小乘等の學者が出世間的に偏するを以て、又之が爲めに實相の妙諦を開示せられ、無常に偏する者には佛性常住の理を開顯し、苦痛に逼迫せらるゝ者には、此の世は即ち是れ極樂の佛土なる事を示し、設ひ九尺二間の裏店に住しても、愉快に安樂に日々の行持を行取せしめ、無我に偏する者の爲めには天上天下唯我獨尊たる大我の眞理を諭し、吾は是れ佛なり我が一身は天地の主人公なるこ

がら無窮の大安心大安樂の存することを忘却するのが苦顚倒であります。

## 西行法師と銀の猫

彼の西行法師の如き人は本より別者ではあるが、源頼朝公の柳營に招れて軍學の講話をせられた時、其のお布施として白銀の猫を與へられた。『是は厄介な物を貰つたわい、行脚の身には邪魔つたらしい迷惑な事』と思ひながらも、據なしにそれをかゝへて由井ケ濱まで來ると、漁夫の子供等が大勢遊んで居て『イヤアあの和尙さんは大層立派な猫を持て居るわい』と云つゝ後を追うて騷いで居る。西行法師は子供に向つて『御前達は此の猫が欲しいのか、欲しければ幸ひ邪魔に成るから貰うてくれよ』と云つて、惜氣もなく子供に與へ『ア、これで身輕に成つたわい』と云うて喜んだと云ふ事である。法師の精神の高潔無欲なるは實に百世の師たるに背かぬが、併し、今日天下の人が皆な法師の樣になつたなら、殖產興業も何んにも出來るものでない。兎に角、人生の苦惱を恐るゝのみを知りて、自然の妙樂の存することを知らざる所より、苦顚倒に陷る者が隨分宗敎家などにはあるものです。

又、諸法無我の理を偏執してもならぬ。法には我と執すべきはない。總て世の中の法は無我であるから泥棒が這入つて物を持て行かうが、大切な寶を盜まれやうが、これをビク〳〵するのは我執であると云ふ風に無我を極端に解釋して了へば、人間世界は都て無氣力になり、無秩序になり、惡平等になる、是等は

昔、谷風と云ふ名高い力士が野原を往くと、向ふから小いさな小僧がやつて來て『關取り一番とりませう』と云ふ、『何に貴樣のやうな小さい奴が取れるものか』、『イヤ體は小いが取れぬことはない、是非一番取組まう』、『生意氣な小僧だ、投げてやるからサア來い』というてとつて見ると、小僧め非常な腕力を有つて居る。さすが大關の谷風も到頭、小僧の押しを防ぐに由なく、草の中に投げられた。谷風は驚いて『此の谷風は天下無敵と思うたが、貴樣は實に強いものぢや、一體貴樣は何者ぢや』と聞くと、『私は谷風よりも強い無常の風といふものぢや』と申したそうです。成程、無常の風には如何な谷風もかなはぬ筈である。

併し、世の中が無常であればこそ、活動し、變化して、昨日の惡人も今日の善人となり、愚人も智者となり、貧弱も富強となるのですから、吾々は常に此の無常を善用して向上進歩する事が大事である。無常なるが故に一日の光陰も輕んずべからず、無常であるに依て、向ふにどの樣な憎むべき怨敵が有らうとも、充分之に感化を與ふるに於ては、取て以て我が家の寶とも我が身の寶ともすることが出來る。況んや無常は現象界の假相たるに過ぎぬ。實相を觀照し來れば佛性常住にして不生不滅である。此の理を知らずして、唯此の世の中は無常にして頼み少ないものとのみ思うて、爲めに常住の實相を沒却し、從つて氣力も精神も沮喪して生命ある死人となつてしまう、之が無常顚倒の迷ひであります。

又、人生觀の一面に於て此の身を苦みの器と思ひ込み、此の身が無つたら苦しみの種もあるまいと考へて、極端なる禁慾主義、隱遁主義となり、目前の境を恐れ六根門の活動を變へて、此の人生の中に在りな

は、此の我執よりして三毒の妄念も迸發します。

次に淨顚倒と云ふのは、總て汚穢なる物を奇麗だと思うて執着するをいふ。就中、美色に迷ふが如きは其の最も甚だしきものです。あの人の姿は美しいと思うてそれに迷ひ込む、斯う云ふ迷は世間に澤山ある。苟も青年時代の修養上最も注意すべきは此の點であります。故に釋尊は反對に不淨觀を示して『人身は皮一枚の裝飾に過ぎぬ、仔細に觀來れば膿血の器である、何の執すべきあらん』と說かれてある。然るに凡夫は兎角に淨顚倒を起してならぬ。

是の如く世間は無常であるから『常住の見を起すな、五欲の境は決して樂みでは無い、皆苦しみなものであるぞ、諸法は元より我は無い、無我であるぞ、此の身は淸淨で無い、不淨なるぞ』と說明せられ、斯云ふ觀念を爲さしめられたのであります。然るに佛弟子の中でも小乘部の衆生は、この敎に取附いて一方に偏するからいけないのである。昨日の淵が今日の瀨となる賴み少ない無常の世の中だと聞けば、妄りに世をあぢきなく思ひ『働いたからとて前途望みある世の中ではない、設ひ百萬兩の黃金を造つたからとて火事でもあつた日には灰に成つてしまうではないか、そう云ふ憐れ無常の世の中に在る身の上なれば、何時までも生きて居られるものではない、何うで明日をも待たで死ぬる樣なことならば、早く死んだ方が宜さそうぢや』などと云ふ考を起し、無常觀の爲めに精氣も弱くなりて、人間の活動力を失却し、所謂厭世的思想となる者があります。

にし物の正當ならざるをいふ。お父さんがヘイ〳〵云て息子さんが威張つたり、男子が無氣力で女子が高慢であつたりするの類は、人事上の顚倒である。これから色々の間違が起る。吾々は兎角、物を眞直に見て眞直な道を踏み行く事がむつかしいのである。

第一に世間の相に對して、凡夫は無常變化の甚しきを悟らず、百年も千年も生きて居る樣な氣持になり、未來の用心とても無く、何日もかも此の儘で居るやうに考へて、世相に執著して常住の見を起す、之を常顚倒と云ふ。

それから人生に就て見れば、世の人は常に苦みの爲に活動して居り、又、凡夫は多く苦みの種ばかり播て居るやうなものだ。然も夫を樂みだと思うて居る。修養の足ない智慧の淺薄な者ほど餘計に苦因を以て樂しみとして居る、何故ならば、酒と色は敵であるといふが、何うか其の敵に廻り遇ひたいなどゝ云ふ連中もあるからである。之れを樂顚倒と云ふ。

次に我と云ふは『おれが』と云ふ我である、おれが物、おれが財産、おれが〳〵と云うて法の上に主宰者、所有主を認めるが、能く研究して見れば、我れと云ふべきものは元來無いのである。諸法畢竟無我である。其の無い所の我に迷うて居るから之を我顚倒と云ふ、此の我見よりして世の紛爭の絶えぬのである。人間の強情我慢な者は、時としては爲めに常識をも逸することがあるものです。家庭にしても、家内の者が我を張つて居る樣では、決して圓滿なる家庭を作ることは出來ませぬ。況や法無我の理を知らざるに於

以上述べた如き四つの悪魔が、始終吾々の信心に妨害を加へるから、吾々は常に之れに苦しめられて居る。併し心に罣礙無き地位に達すれば、此等の悪魔も自づと退散するに依つて、自づと大安心の境界となるから、恐怖あること無しというたのである。何うか吾々も早く此の地位に達したいものであります。

## 八顛倒

遠㆓離一切顛倒夢想㆒究㆓竟涅槃㆒、一切の顛倒夢想と云ふは、悪業苦悩の根本たる迷執煩悩の全部を指したものです。顛倒に就ては涅槃経の中に八顛倒を説いてある。それをザッとお話して置きます。

### 八顛倒

| (凡夫) | | (小乗) |
| --- | --- | --- |
| 常顛倒 | …………… | 無常顛倒 |
| 楽顛倒 | …………… | 苦顛倒 |
| 我顛倒 | …………… | 無我顛倒 |
| 浄顛倒 | …………… | 不浄顛倒 |

凡夫は有に著して顛倒の見を起し、小乗は空を執して顛倒の計を為す。共に正見に背き中道に悖るものである。顛倒とはヒツクリカヘリで倒まごとになることです。冠履顛倒などいふ語があるが、上下位を逆

家の家に生れ、立派な學校に入て完全な教育を受け何不足なき人が、厭世思想を起し自ら求めて死を急ぐなんど云ふのは、昏沈の妄想に囚はれたので、是れ亦恐るべき一種の煩惱魔であります。

第三には天魔、是は佛教では天上界と云ふ世界を說くが、其の天上界の內、欲界の第六天に魔が居るというてある。此の天魔は吾々の道業を妨げ且つ種々の迫害を加ふる者である。かう云ふ說は、今日の科學的腦髓には一寸受取れない樣であるが、つまり前世よりの業力に依て天然自然に種々の妨害を受くるを天魔と見て置いても宜い。例へば火難、風難、水難等の諸難の如きもので、自分で十分の注意をして居りながら、他動的に免がれ能はざる自然的災厄は、全く天魔の所爲とでも申すべきものであります。

第四に死魔、卽ち生命を奪ふの魔です。短命の者なども死魔の祟りであらうが、壽命がありながら自ら死なうと云ふ量見の起るのも、俗に『死神に附かれた』と云ふが如く、無暗に死にたくなつて、汽車の軌道へでも、又は河の中でも何處へでも飛び込まうと云ふ心の起るが如きは、全く一時的にフラ〳〵と發生する精神狀態であつて、一種の惡魔らしい者が精神の內に亂れ入つた樣な形になるのである。其の時『まあ待ちなさい』と云うて人が押止めて、懇々と說諭でも受けると、其の心が變ずるものです。尤も說諭を受けたからとて、借金のあるものが借金を無くすると云ふことは出來ませんが、死なうとまで思ひ詰めた心は薄らいで來るものです。多くの中には、何遍も死を圖り、二遍目又は三遍目に、漸く本望を遂げたなどと云ふ者もある。が、多くは一時的の精神作用の樣に思はれます。

が無いとか云ふ様な人の苦惱不自由は如何許りか知れぬ。

私が東京の癈兵院へ慰問に行きますと、其の癈兵の一人で、何處かに書取ては置いたが唯今一寸名前を忘れました。何でも富山縣の人であつたかと思ふ。癈兵院中に於て最も氣の毒な同情に堪へざる癈兵があつた。卽ち、兩手切斷兩眼失明と云ふので、兩手兩眼ともに無い、せめては手が一本でもあれば何か細工事でもすることが出來るが、兩手共に無いから何にをすることも出來ぬ。私は院長さんに問うて『斯う云ふ癈兵には常に何う云ふ事をさせなさるか』と云ふと、院長さんが云はるゝには、『是に就ては色々と考へたが、何うしても適當の仕事が無い、人間はジッとしては居られない、水でも流れぬ水は腐つてしまう、人間でも運動をせねば死んでしまふ、そこで義太夫の稽古を始めさせた、本人も大層それに興味をもつて、毎日御稽古に通つて居ると云はれました』が、是等は實に氣の毒な話であります。設ひ此の身の爲めに種種の苦しみを受けて居ても、精神の修養に依ては身體が立派に備つて居る人より以上の安慰と幸福とを得ることも出來る。手が無いとか、足が無いとかいふ不幸の人でも、手足のある人以上の活動をしたいと云ふ程の奮發心を起せば隨分出來るものです。斯の如くなれば、身體には障る所があつても、精神は矢張無罣礙である。

第二煩惱魔、卽ち妄想の魔です。これには外に心の散亂するものと、又、精神の昏沈して活力を喪失するものとの二様があります。散亂の妄想は普通であるが、昏沈の人も隨分少なくない。例せば華族さんや財産

眞心より發して所得の念あることなく、胸中自づから宇宙の眞理に契ひ倫常の大道に遵ふ時は、そういふ邪見な姑の傍に居ながらも、仁義忠孝の道を實踐するに於て毫末の障りもなく行はれます。設ひ火の中水の中に居るとても、此の道を行ふに於ては縱横無碍である。之れが無罣礙の往來であります。罣礙が無いから恐怖と云うて恐るゝ所がない。此の恐るゝと云ふ事は、五怖畏などゝ申して色々に說いてあるが、つまり吾々の身體生命を危うし、若しくは、吾々の行道を妨害して不安の念を抱かしむることをいふのである。佛敎では總て行道修德を妨害するものを惡魔と云ひます。能く世間でも『寸善尺魔』とか『釋迦に提婆』とか云ふが、何事にも惡魔の附き纏うて居ることをいふたものです。此の魔障あるが故に吾々をして不安の心あらしむるのである。その魔障を四魔というて四つに大別してある。魔は害と云ふ意味で、吾々の安寧幸福を障礙し、行道を妨げ、德行の害をするものを云ふ。

## 惡魔の種類

第一が五蘊魔、是れはお互の身體が魔の根城である。尤も五蘊といふは肉體と精神とが集合した此の身をいふのである。卽ち此の身あるが爲めに種々の煩悶を生ず。一切の苦痛は皆此の身あるに依る。老子は身を以て大患として居る。況んや病苦などは全く此の身の存するが爲で、其の他の四苦八苦も身を以て本とするのが多い。中には六根が具足しない所から苦しむ者もある。目が見えぬとか、足が無いとか、手

は斯うぢや、「鬼婆々なりと人はいふらむ」かうぢや、これに上の句をつけておくれ』、サア敦子さんの身になつては非常につらい處である。平常から世間の人の評判して居ることは敦子さんも薄々知つて居る。夫れをお婆さんが聞いて腹を立てて居られることは顔色にても解つて居る。故に此方で歌をつけることは出來ませんと云へば、餘計にお婆さんの氣を損ずる。實にむづかしい場合でありますが、固より敦子さんは腹の中に一點疚しい處なく、至誠眞實であるから、『恐入りました、之は何う云ふ意味であります』、『お前も解つて居るであらう、世間で斯んな事を云ふそうだ、何うか早く上の句をつけてくれ』、『それでは恐れながら上の句を附けることに致しませう』と、流石は敦子さん考へる間もなく筆を取つて『佛にもまさる心と知らずして』と詠んだ。之れが敦子さんの信仰心の露現です。世間の人が何んと云はれやうが、私の目から見ると佛樣にも增して有難い阿母さんぢやと思うて居る。然るに、それをも知らずして、世間の人は樣々なることを申さるゝとは餘り情けなきことであるとの意です。これ全く敦子さんが其の時の間に合せにお諂ひを云つたのでなく、全く眞實心より出たので、殊に敦子さんの平常の態度と云ふものが此の歌の如く、全く斯の如き信念を持て居たのである。歌は特に非常の名人で、後には宮中へお召しに成つて、兩陛下の御寵愛を受けた程の賢女であるから、所謂天地鬼神も感じたであらう。此の優しい歌の文句を聞いて、流石のお婆さんも、何んとなく己が心に愧かしく感じたと見え、夫れからは次第〱に態度が一變して、溫良なる姑となつたそうであります。

教育の無い人であつたと見え、少しも敦子さんの價値を認むることが出來ぬ。又、小言も親切な小言なら ば宜いが、厭味ばつかり並べる。例へば食物がまづく出來たといふ樣な時は『無味いから煮直してくれよ』 とでも云ふのなら宜いが『お前は何の怨みがあつて斯んな無味い物ばかり食べさすか』と云ふ樣なことを いふ。そんな小言を云はれては誰でも溜りませぬ。一から十までそう云ふ筆法で小言ばかり云うて居る。 一方は人並勝れた溫厚な人であるのに、姑は此の上なしの邪見な人です。それでも敦子さんは、厭やな顏 もしないで『ハイ〳〵』と云て優しく事へて、他人に向ても恨みがましいことなぞ云うたことは一度もな い。けれども近所の者の輿論が許さない。『あんな優しいお嫁さんに向て、何時も邪見な事を云つたり、惡口 ばかり云うて居るあのお婆さんは、鬼だ、鬼婆々である』と、近所の者が綽名をつけた。『佛樣の樣なお嫁 さんは、實に可愛想だ、鬼婆さんなどは早く死んでゞも了へば宜い』といふ樣な評判になつた。

それが、お婆さんの耳に這入つたからたまらぬ。『近所の奴等があんな事を云ふからには、矢張、家の嫁 も餘所へ出て、そんな惡口でも云うて居るであらう』と邪推をした。併し『お前は妾の事を鬼婆と云ひや せぬか』とも云はれぬから、或日、敦子さんが仕事をして居るのを呼んで『敦子さん此所へ一寸來ておく れ、今日は好いお天氣であります、時に妾は歌を作りかけて半分しか出來ぬから、お前に上の句だけを附 けて貰ひたい』、『何う致しまして、私はもう至つて無調法であります』、『いや却々お前は無調法處ではな い、歌の名人ぢやないか』、『それは、兎に角、母上のお詠み遊ばされた御歌を伺ひませう』、『妾の歌

僧達は悉く焔の中に埋められてしまつた。快川和尚も坐禪をした儘從容として火定に入られたと云ふ事であります。右は戰國時代に於ける壯快なる禪話である。斯云ふ風に火の中、水の中にも應用してゆく時は盡天盡地皆佛法であるから少しも罣礙が無い。在家ならば親子兄弟互に顏を揃へて居れば、時としては苦しい事も有らうし、つらい事も有らうが其の苦しい所、つらい所に居りながら、立派に佛法の大安心を七通八達して往かねばならぬ。之れが心に罣礙無き底の境界と云ふのである。

## 税所敦子の崇高なる人格

明治三十年代まで存生であつた彼の税所敦子と云ふ人は、御承知の通り歌の名人であつた。嘗て鹿兒島人某の妻となつて京都に住んで居たが、不幸にして其の良人に亡くなられた。學者で且つ人格も高いし、殊に年齡も若かつたから、どんな所へでも再緣して榮華の出來る身であつたが、良人の母親が未だ鹿兒島に存命であつたから、良人が亡くなられてからは、良人に成代て其の母親に事へることこそ妻たる者の道であると云ふ考からして、多くの人が再緣などを勸めてくれるのも斷わり、鹿兒島へ赴き、良人の母親に事へることになつた。ところが其の母親が古今無類の意地惡るな人であつたが、敦子さんは衆に秀で溫厚篤實で精神堅固な婦人であるから、少しも姑を怨むる心なく、益々親切に事へて居られた。だが、お婆さんは段々氣に入らぬ樣になつて、朝から晩まで憎く〳〵しい小言ばかり、箸の上げ下ろしまでやかましく云ふ。殊に

しも動ぜず、『命を惜んで志に背くは人間の道に非ず、爭で此の身を惜んで武田の恩顧に反くべけんや』と云うて、何うしても應ぜぬ。短氣の信長はいとゞ怒りを添へ寺の本堂に火をかける。和尚も火の中に居る譯にもゆかぬから山門の二階へ登られた。其の時、相從うた僧侶は無慮數十名であつた。すると、こんどは山門の下へ薪を山の如く積んで、之に火をかけた。數十名の僧徒は和尚を眞中にして何れも樓上で坐禪を始めた。もう火焰は渦を卷いて山門の二階に漲り入る。其の時に和尚は大衆に向て、『諸人者卽今大火焰裡に向て如何が大法輪を轉ぜん』といふ釣語を下された。是れは禪宗に於ける常用の探竿で、一同の所見を點檢するための語、之を釣語と云ふ。サア炎々と燃え上つた此の大火焰裡に於ての佛法は何うぢや、安心は何うぢや、體中火が燃え附くと云ふ一生懸命の場合こそ、吾々の大安心を決定すべき好箇の機會ぢや、これが出來ぬ樣な佛法は講釋佛法、口先佛法である、そんな佛法ではマサカの時の役に立たぬ。數十名の大衆は全で夢中に成て問答を始めた。其の答辨には『喝』と云て大喝一聲した者もあつたらう。『無』と云うて答へた者もあつたらう。色々の機用を呈したでありませうが、もう法衣の袖や裳に火が燃え附く樣になつた。最後に至りまして、快川和尚は大音聲を揚げて、『安禪何ぞ必ずしも山水を須ひんや、心頭を滅却すれば火も亦涼し』、之れが最後の句であつた。眞箇の安心は高山流水の閑寂の地にのみ有るべきものに非ず、觸所々々が佛法である。徹底、無我解脫の境に達する時は、焰々たる大火も清凉の池となり、劍の山も好箇の遊戲場である。其の語の將に終らんとする時、山門の二階がドッと燃え拔けたから、數十人の禪

斯く吾人の心地が玲瓏潔白であつたならば、佛法は必ずしもお寺の本堂へ行た時ばかりに顯現するのではない。說教を聞いたり佛前に向うたりした時ばかり精神が落着と云ふことでは眞の安心とは申されぬ。善い書物を見て居る內は心も薩張りするが、惡い物でも見て居ると、また心が亂れると云ふ樣では駄目である。元來、世の中は一面から見ると衝突多き世界で、彼所には壁がある此所には垣根があると云ふ樣に殆ど八方塞りである。故に何方を向いても種々の物にぶつゝかつて、容易に自由を得ることが出來ぬ。併し其の本を究むれば。此方の心に障があるからである。心に罣礙が無くなりさへすれば、どんな逆境に立ても其處に於て大法輪を轉じて大佛事を行ふことが出來る。

## 快川禪師大火裏の轉法輪

彼の快川和尚は、武田信玄の歸依を受け、其の請に應じて美濃より甲州に來り、甲府の慧林寺の開山と成られた人で、大に武田家の國政をも助けられた。信玄既に歿して武田の勢力日に衰へ、嗣子の勝賴は遂に天目山に於て討死を遂げ、さしも名譽ある武田の系統は玆に斷絕したのである。其の時に當り快川和尚は猶ほ武田家の興隆を熱心に祈て居られた。織田信長は和尚の德を慕うて再三招かれたが應じない。そこで大に立腹して、慧林寺へ三百人の軍勢を派し、暴力を以て和尚を服せんとした。『若し今の中に予が命に服するとあらばよし、さもなくば此の寺を燒拂て汝等諸共に燒き殺してしまふぞ』と嚇した。快川和尚は少

は見たが、心には少しも見なんだ、お前は夫が心の累ひとなつて、何時までも執念強く腹の中にあんな藝者を抱いて居るとは氣の毒なものぢや、苟も聖賢の道を學ぶ身分としては、餘り情けないことではないか」と云て反對に遣られた。元來、程伊川は正直潔白な學者であるから、之を聞て大に感ずる所あり、『成程、兄上の仰恐入りました、私はまだ修養が足りなんだ』と云うて大に悟る所があつたと云ふことです。斯う云ふ事は佛敎では執着と云ふことになる。縱ひそれが善意の執着でも、矢張、思想を害することが少なくない。況んや惡い方の執着は、實に生死の大苦を感ずるの本となるから捨てゝしまはねばならぬ。

日本に於ては、天照皇大御神が、天孫瓊々杵尊命に一面の寶鏡をお授けになつて、『我が子孫たるものは此の鏡を以て我れと思へ』と仰せられて以來、寶鏡が御神體と成て、必ず神の御前には之が備へてある。全體、鏡と云ふ物は如何なる物でも明らかに其の姿を映さぬは無い。けれども映しながら少しも其の跡を殘さない、之が無所得である。少しも執着が無い、色卽是空である。『靈龜尾を曳く』と云ふ語が禪宗にあるが、善いにせよ、惡いにせよ、執着に渉れば早く是れ一種の幻影となつて、眞如界中の穢である。『水鳥のゆくもかへるも跡たえて、されども道は忘れざりけり』、水鳥が水中を自由自在に往來して居るが、少しも往來した所に其の痕跡を殘さない。吾々の心行も亦是の如くならねばならぬ。之を心に罣礙無しと云うたのである。心に寸毫の罣礙が無いから染汚することが無い。染汚することが無いから處として、般若ならざる無く時として眞空ならざるは無い。

嚴格な人であるから、苦い顔をして居る。其の女は商賣柄とて何となく淫靡の風があり、猥りがましい樣な姿をして、無作法な諂辭を弄してお酌なぞをしてくれるので、面白からざる感を起し、恰も自分の身が穢れると云ふ樣な考であつたから、盃も碌に取らず、箸さへも取らずに、ムツとして宴會の濟むのを待て歸てしまうた。兄さんの程明道は『これは御馳走さま』というて遠慮なく戴き、向ふで面白い事を云へば、自分でも戲談なぞを云ひ、飮食も充分にして歸られた。翌日に成て程伊川が『兄上、貴兄は何うして昨晩はあの樣な穢しき宴席に於て、賤き藝妓などがお酌に出て、聞くに忍びん樣な辭遣をして盃盤の間を奔走して居りましたが、私は夫を見ると胸が惡くなつて食物も喉へ通らない、ところが、貴兄は平氣の平左衞門で、面白可笑く酒を飮んだり、御馳走を食べたり、言語を交換したりして居られたには、實に驚き入たる兄上の擧動で有ると思うて、私はそれが爲め昨晩は少しも眠れなかつたのである。兄上は何故にあの樣な穢らはしき場所に在て、自分の體の穢れることも知らずに、平氣にあんな振舞をなさる』『そうだつたかいな』、『そうだつたかいなと云うて、昨晩の事でありませんか』、『成程そう云はるゝと、そんなものが居たな、そんな御馳走も食べた、食べた樣ぢやが俺はあの時はそう云ふ藝妓の姿も見たし、又、其の御給仕で御馳走も食べたが、あの席を離れると直ぐ忘れてしまつて、もう今は予の腹の中にそんな者は少しもない、ところが、お前は矢張、腹の中に今までそう云ふ穢れた物を持て居るか、お前の目から這入た藝者が、まだお前の胸に取り附いて居るとは大層しつこい奴ぢやなあ、予は昨日の席に於てこそそう云ふ穢い姿も目に

しましたでありませう」と云ふ話を聞かれて、明惠上人が『ア、左樣であつたか、老衲が松茸が好きだと云ふ評判であつた爲めに、施主家に於ては、三十日も前から心配をして、三人五人の人が一晩寢ずに居て御馳走をしてくれたのであるか、ア、勿體ない、苟も如來の弟子たる者が食物の上に好き不好きが有つて、夫れが爲めに多くの人に手數を掛けたり、心配をさせたりすると云ふは、實に愧かしいことで、佛祖に對しても相濟ぬことである』と云て、直ぐに法衣を着けて本堂へ往き、佛樣に向つて詫をなされた。『私が松茸が好きであつた爲め、是まで何程か人に苦勞をかけ心配をさせたか相分らん、是れ全く私の味境に對する執着より出でたるもので甚だ申譯ない、今後は身を終るまで松茸は食すまじ』と云ふ誓ひを立てられて、其後は生涯、松茸は食べられなかつたと云ふことであります。上人が自己に對する修養と云ふ點に於ては流石に立派なもので有ります。一面から見ると頑固の樣であるが、夫が法を守り道を重んずると云ふ誠心誠意から現はれて居るものだから、實に立派なものです。物に執着すると云ふことは醜しいものです。

## 程明道と程伊川

支那の宋朝時代に兄を程明道、弟を程伊川と云うて、兄弟二人共大學者の人が有つた。今日に至るも二程子と稱して人が尊んで居る。或日、二人共お酒の席へ招れて行くと、藝者と云ふ樣な者が盃盤の間を奔走して、戯談交りの辭を以て面白可笑く客をもてなして御給仕をして居た。程伊川と云ふ弟さんの方は一層

あります。

## 高辨上人の松茸懺悔

鎌倉時代に、高辨と云ふ名僧が有た。山城の栂尾に住んで居られたから、栂尾の明惠上人とも申した。當時最も高徳なお方で北條泰時のお師匠さんに成られた人であるが、此のお方は松茸が大好きで有た。或る京都の信者が、上人は松茸が嗜きであるから、松茸の御馳走を仕やうと思うて、一日、請待をして松茸づくめの御馳走をした。御飯は松茸飯、お汁も松茸、お皿も松茸の燒いたのが附いて居る。本膳、二の膳とも膳部一切が皆な松茸である。併し、夫を食べて見ると非常に結構である。餘程吟味したものと見えて料理の形も違ふが味も皆違ふ。生れ附きの大好物であるから、食べたく、ドッサリ食べた上人は、腹便々として寺へ歸られた。お弟子達が來て『今日の御供養は如何でありました』、『今日は生れてから始めての御馳走で、今迄に無くドッサリ食べた』、『澤山お召しに成て誠に結構でございました、向ふでは貴師がお好きで居られると云ふので、二三十日前から心配して同じ松茸ではいかんと云て、これは甲州から、これは大阪、これは東山、これは何所と諸方の名物の松茸を集め、殊に早く料理をしては味が變る、遲ければ間に合はぬと云ふので、奥さんから料理人などは一晩寢ずに料理に骨を折つたと云ふことです、其れぐらゐ丹精を凝らした松茸の御料理でりあましたが、貴師が心よくお召りに成つたので、定めて施主も滿足

一切顚倒夢想一究二竟涅槃一、三世諸佛依二般若波羅蜜多一故得二阿耨多羅三藐三菩提一。

【和譯】菩提薩埵は般若波羅蜜多に依るが故に心罣礙無し、心罣礙無きが故に恐怖有ること無し、一切の顚倒夢想を遠離して涅槃を究竟す、三世の諸佛も般若波羅蜜多に依るが故に阿耨多羅三藐三菩提を得たまへり。

菩提薩埵は、菩薩の詳名です。一切の菩薩は皆な般若、即ち佛智慧を根據として、眞空實相の理を明め其の理に隨順して諸の化他の作用を起すのであるから、其の行う所が自然と天地の道に合ひ宇宙の眞理に契つてゆく、故に心に罣礙無と云ふ。障礙する物、妨害する物は一つも無い、自分の身心がそつくり天地の大道と一致してゆくから、往くとして可ならざるは無く何等の魔障も無い、之を罣礙なしと云ふ。修養の上から申すと、一切の妄想執着を離れたのが無罣礙であります。罣礙はどちらの文字もサハリと云ふことである。大道が開通せず、隨處に束縛せらるゝを以て、障礙の本は妄想執着です。善い事でも執着心があつてはいけない。吾々は兎角萬事に執着が伴ひ易い。惡い事をすると、それを隱さうと思うて益々天理を昧まし、善い事をすれば、其の事を威張らうと云ふ様な考が起つて益々我見を増長する、むづかしいもので

つから、自分に善行があつても世間が之を認めてくれませんと、さあ不平を起し苦情を持ち出す。相當な功績でも顯はした場合に、賞典でも與へるとか御禮でもされぬとかいふことがあると、直ぐ不滿の念を起すと云ふ樣な人間の弱點が生じ易いものです。これが無所得であれば、自づと惡を止めて惡を忘れ、善を行うて善を忘るといふ境界になる。即ち吾人の身心全部が天念自然の正理公道と一致するからであります。彼の太陽は終日世界を照して居るが毫も其の功に誇ることはない。雨は常に大地草木を潤澤して居るけれども夫れが爲めに御褒美を請求したことはない。風は何時も吾等が爲めに新しき空氣を送つてくれるが夫れが爲めに手數料を要求したこともない。是れ即ち天眞の妙法である。

吾々の修養も、この天眞の妙法に一致する處まで進めば、そこに眞誠の無所得の妙理が現はれる。即ち眞空實相の本性露現である。既に眞空實相の本性露現であつて見れば、吾人と天地とは一體平等である。一體平等であるに依て他人の爲めにするのであるといふ考もない。他人の爲めに盡す事柄が直ぐ自己の本性を盡すのである。是れ全く自他法界平等利益であるからであります。

## 行人得益分

菩提薩埵依㆓般若波羅蜜多㆒故心無㆓罣礙㆒無㆓罣礙㆒故無㆑有㆓恐怖㆒遠㆓離

程鞏固でなければ出來ないことであります。

彌々刑場に引出されて首を切らるゝと云ふ際に、先生は筵の上に坐ると悄然として双の眼に涙を浮べられた。流石の先生でも、矢張命は惜いと見えて涙を溢してござるわいと思うて居たが、先生は一首の歌を詠じて、『親思ふ心にまさる親心今日のおとづれ何ときくらん』、これぞ血もあり涙もある偉人の眞情です。自分の一身は固より國家の爲に捧げて居るに依て、此の場合に於て、少しも怨みとも悲しいとも思はんが、唯忘れんと欲しても忘るゝ能はざるは國元に在す母親の事である。だが自分が晝夜となく母親の事を思うて居る心よりも、猶ほ切なるは母上が予を思うて御案じ下さる心根であらうと思ふ、斯く慈愛の深重なる母親にして、松陰が幕府の手に捕はれて殺されたと云ふ今日の消息を聞かれたならば、如何に歎き悲しみ遊ばされんかと思へば、落涙を禁じ難いといふ意味である。是れ天眞の至情であるから、如何なる英雄の膓も實に寸斷せざるを得んです。首切の役人が傍へ進み來るや、先生は忽ち泰然として殆ど身の刑に臨めるを忘れたるが如く、更に又一首の歌を詠まれた。『身はたとひ武藏の野邊に朽つるともとゞめおかまし大和魂』、これが先生の未來觀である。松陰先生の如く信念の强固なる人は、道を學ぶは己の本性を盡すが爲めにするのであるから、縱ひ學問の功成るとも、爲めに他人を侮るなど〻云ふこともなく、又、學問を以て名利の具となすが如き弊もないのである。

所が聊かでも所得の念がある時は、功があれば功を誇り、善を行へば行ひに驕る。而して報酬を他に待

が眞の信仰の發現である。此の如き眞信仰のある人こそ實に第一流の人格を得た者と稱すべきであります。

## 吉田松陰先生の臨終

一例を引いて申せば、幕末の偉人たる吉田松陰先生の如きは立派なる信念を有して居られた人と思ふ。松陰先生の行跡は初中後とも實に麗しいものである。先生は、安政年間、幕府の嫌疑に觸れて牢獄に繫がれ、到頭、刑場の露と成て終られた。初め牢獄の內に在りて泰然として孟子の講義をして居られたそうである。ところが聞いて居る門人は氣が氣でない。獄中生活は籠の中の鳥、網の中の魚の樣なもので、一身の自由を失うて居るのみならず、明日にも殺されるか今晩にも殺されるか分らぬものが、孟子や論語の講釋を聞ても仕方がない。それよりも何か面白い御話でも承はりて、幾分か銘々の心を慰めた方が宜からうと思ふから『何卒、先生孟子の御講義は御見合せを願ひたい、迚も助かる命ではなからうと思ひますから』と云ふと、松陰先生は『扨々怪しからぬ事を申さるゝかな「死生命有り富貴天に在り」とは古聖人の格言ならずや、人間といふものは、縱ひ牢獄の中に居らずとも、死すべき時節が來れば何處に居るとも死するものである、併し、死ぬ迄は生きて居るではないか、人間は一日たりとも此の世に生存すれば必ず一日の道無くんばあるべからず、予の孟子を講ずるは文字章句の末を追ふにあらず、人の人たる道を講究するのである』と云はれて、獨り悠然として聖賢の道を講じ、自ら其の道を樂んで居られたと云ふ。是は信念が餘

云ふことのあるのが未だ前途に修養の餘地が澤山ある。惡い事をしたいと思ふ心も起るが、惡い事をしては自分の良心に愧ぢる、世間へ對しても濟まぬ、神佛の照覽が恐しい、斯く觀念し、所謂己れに克ち私を制し、辛うじて惡い事を止め善い事を行ふのですが、吾々の修養も此所まで進めば前途甚だ多望である。一盃飮みに行きたいが何うも紳士の身分としては我慢せずばなるまい、玆で一つ虚言を云へば現に是だけの利益はあるが、併し虚言を云うては道德上申譯が無いと云ふ樣に注意を怠らぬ、縱ひムラ／＼と欲情の雲が起つて來ても、勤儉努力の勇氣を以て自ら之を抑壓し、勉めて惡を止め勉めて善を行ふのが第二の人格であります。夫れがもう一步進んで、第三の人格になつたのが全くの無所得主義です。

第三の人格は止レ惡而忘レ惡行レ善而忘レ善で、第三の人格になると、一切の惡を止めながら惡を止めたと云ふ觀念も無い。『貴君は能くあの事をお止めに成りましたな』、『そうでしたかいな』と云ふ樣な工合で、止め樣といふ考も無く自然に止まる。唯だ寢ても覺めても道を守り道を行ふ修養の精神に絕間が無いから、知らず／＼の間に惡を離れ、而して離さうと云ふ工夫力をも要せぬのである。若し惡を止めたと云ふを自分の誇りとして居る樣では、それが人心の弱點を誘發する因緣となつて、惡い事を止めた爲に却て、高慢に陷つたり人を侮蔑したりする樣なことになりたがるものです。それでは差引勘定をすると、左程人格の進步を見ることが出來ぬ樣な事になる。無所得心に住すれば唯天眞の大道を重んじ、其の大道を行ふ上に於て、毫も他より報酬を得やうと云ふ樣な所得の觀念はない。此の大道を實行して報酬を期せぬといふに至つたの

ふと云ふことにも注目せずして、唯外部を飾り、時の調子を合はしてゆく、と云ふ方へばかり人心が傾いて居る。之が現代に於ける一つの大缺點であらうと思ふのであります。

近來學生などが能くうたつて居る歌で以て分かる。『女優妾にポケット論語自動車とばして慈善會』これが現代的だといふのである。これが東京あたりの一部分の腐敗墮落の狀態を寫したものであります。現代の成金黨などゝ稱せられる人の內で、一攫千金の金儲をして、贅澤にも女優なぞを妾に持ち居るくらゐの者は無論自分の素行は修まらうはずが無い。從つて家庭の圓滿、夫婦間の和合など云ふことも望まれぬ。然るに表面はと云ふと、自動車に乘りながらもポケット論語を出して讀んで居る。『ア、あの人は感心な心懸である立派な紳士であると』人に思はれるやうに、表面をつくろひ外相を飾て居るが、實際は何うかと云へば女優を妾にして狂ひ廻はつて居るといふ有樣である。又、慈善會などに出席して、滔々と慈善の必要を唱へて居る人にして、實際は何うかといふに、自分は二町か三町ぐらゐしか無い慈善會の會場に行くにも、自動車を走らせて行く。其樣な贅澤な費用を幾分減じて慈善事業を助けてくれたなら、口頭に慈善の演說をするよりも却て勝つた効力があるであらう。今日、都會の士民の多くは虛禮虛飾を尊ぶの惡風習に傾き、僅に三町や五町しか無い所へ年始のお禮に行くにも、二人挽きの車を飛ばせると云ふ樣な有樣であるから、德行の智識に副はぬことは當然です。先づ現代の人は多くは第一人格の仲間である。

第二の人格は勉而止ㇾ惡勉而行ㇾ善で、第一の人格に較ぶれば非常なる進境であるが、此の勉むると

徳と雖も施すべき道が無いのであります。然るに本來定相も定性も無いから益々遷善することが出來ます。凡ての事が皆な因縁和合の力に依て成り立つのであるからして、なるべく惡因縁を截切て善因縁を結で行くと云ふのが、佛教に於ける修養上の目的に成て居るのであります。つまり所得が無いと云ふ觀念よりして高尚なる道徳も現はれ且つ養はれて來るのである。

## 修養上三種の人格

曹洞宗の卍山禪師と云ふお方が、人格に三等あることを示されてある。第一の人格は知二其惡一不レ能レ止レ之知二其善一不レ能レ行レ之で、これより一段劣等の人になれば、モウ教育も何にも無い、殆ど常識の無い人と云はねばならんから、人格の中には加へられぬ。第一の人格は稍常識を具へ、一通りの教育を受けて智識も相當に發達し、これは善、これは惡と云ふ事を辨へ得るだけの智能を有して居る。併しながら惡を惡と知りながら夫を止めることが出來ぬ、善を善と知りながら夫を行ふことが出來ぬ甚だ意志が薄弱なものである。今日の多くの人々が憂ふる所は此の點であらうと思ふ。學校教育は益々進歩して、人の人たる道は何う云ふものであるか、人としては必ず斯くあるべきものであるくらゐの事は、小學校に通ふ所の生徒に至る迄一通りは心得て居る。心得て居りながら、夫を實行することが出來ないのである。何故ならば外界の誘惑物の爲めに自分の徳性が發揮せられぬから知情意の調和を保つことが出來ぬ。爲めに實際の徳を養

のは凡て前に諸乘を擧げて無い〳〵と說かれてある、卽ち五蘊・十二入・十八界も無い、十二因緣も無い、苦集滅道も無く智も無く、亦得も無いと云ふ語に對し、それは畢竟所得が無いからであると結ばれたのである。斯う云ふふうに、結文として其の理由を御示しになつたと云ふ御詞と見た方が、甚だ穩當であり、又、意味も明に成る樣に思はれます。

所得とは得る所といふのであるから、ギリ〳〵結着といふ所に至て、何か自性の認むべき物の存するのが所得である。五蘊等を鑿穿して見て之が五蘊・十二入・十八界等の自性であると云ふ物が有れば、それは所得が有るのであるが、因緣假和合の相なるを以てさう云ふ物は無い。十二因緣も亦無明を以て本となし因緣假和合の業相に過ぎぬ。因緣業力に依て樣々なる生死の相を現はしてゆくのであるから、これも自性は無い。例へば玆に水呑と云ふ物が出來て居る。所が此の根本たる質素は何であるかと云ふとガラスである。ガラス其の物には『わしは水呑に成るべきものである』といふ自性があるのでは無い。唯或る因緣力に依て斯云ふ形に成て居るが、此の形を溶かしてしまへば、全く水呑と云ふ資格はなくなる。卽ち所得なしであります。今日の人性の上に就て觀ても同じことです。必ずしも人の性分には定まつた惡人も無く、定まつた善人も無い。又、定まつた地獄の世界も無く定まつた鬼と云ふ者も無い。定相が無いから變化が出來るのである。敎育や宗敎の力と云ふものは其所に至て非常に必要を感ずる。若し惡人とか愚人とか云ふ者が、確然變ずべからざる定つた性質であるならば、敎育の力も其の功力を奏することが出來ぬ。宗敎の威

師ならば、三年など掛らずに、ヒョイとお出でになりさうなものだが、矢張吾々と同じく肉身であればこそ三年もかゝつて西來せられた。從つて隨身の道具も相當にあつたに相違ない。それ故に吾々の模範的聖人となるのである。怪物的飛行自在の人ならば到底一般の模範とはならぬ。故に吾々は達磨の眞面目を究め以て眞實の禪に參じ、之を應用無礙ならしむべきである。これが般若の妙用であります。

要するに此の心經一卷は、衆生本心の說明をして下されたものと云うても宜いのであるが、然らば吾々は如何にせば高尙なる哲學的なる眞空實相の原理原則を完全に自分の物とし、此の眞空實相の原理に基いて日常の上に自利々他圓滿の道德を修め、修養を積んだものであらうかと云ふに、それは行人得益分と云ふ第三段に於て其の大要を御開示下されてあります。

## 無所得の意義

『以無所得故』此の五字を、後の菩提薩埵の上につけて後の段とする說と、前段の結文であると云ふ見方とがありますが、弘法大師なぞは後說を取て居られる。私も此の文を第二段の結文と見たいので、其の積りで講じます。此の邊は皆樣の御意見に依て何れとも取捨をなされて宜からうと思ひますが、私だけの考では矢張前段の結文に附けた方が、文章としての體裁をなすであらうと思ひます。是れは何れにしても、經文の意義に於ては格別の差は無いところの文字であります。唯、文法として『以無所得故』と云はれた

ない、如何なる時如何なる場合に臨でも自分の精神を不動の地に安住し、守るべきを守り行うて行くと云ふのが眞の禪的といふべき妙味の存ずる所であります。決して世の中の人情に背き人間の常識を沒却した樣なことを禪と云ふのでは無い。徒らに大言壯語して天下人を罵詈し高貢我慢の空見識を振り廻すを以て禪的だなどと誤解してはならぬ。若もその樣な誤解があらうならば、遂に今日の文明國民としての立派な態度を保つことが出來ぬやうになる。承陽大師の御示しに成た所の正法眼藏等に就て深く研究に成りさへすれば、禪を以て國民道德の花とも實ともなし、禪に依て正しき信仰を現はし、禪に依て大慈大悲を發揮して、博愛衆に及ぼすと云ふ其の愛情を現はす樣になります。かくしてこそ始めて禪の活用も應用も現はれることになる。

## 達磨西來の眞意義

彼の達磨大師の繪像なぞを見ると、妙なお顏をして坐禪をしておゐでなさる。禪定三昧が達磨大師の佛法の眞面目であるから、坐禪の姿のみを書いたものであるが、本來は不立文字教外別傳の宗旨を表したものです。達磨大師が三年もかゝつて、遙る〳〵と印度より支那へ御出でに成たが、所謂空手にて西來せられたのである。元より衣一枚經一卷をも持たずに來られた譯ではないが、大師の眞面目は空手裸體無一物で無ければならぬ。又、大師を以て徒らに不可思議の靈物と見てもならぬ。寒い暑いの感覺も無く飛行自在の大

れと同時に一切萬法の羈絆を脱して、非常に磊落無爲の境界が得られる。
併し、動もすると空見識に陥つて、無秩序惡平等に流れることがある。一休和尚なぞは、そう云ふ空見識を弄する人ではないが、隨分突飛な行狀もあるから、それを丸呑にしてはならぬ。東海道の關宿に名高い地藏樣がある。其の地藏尊が丁度出來上つた時、開眼を誰れかに賴まうと思うて居る所へ一休和尚が通りかかられた。『是れは幸ひ、大德寺の一休禪師ならば申分は無い』と云うて開眼をお願ひすると、和尚は快よく御承諾に成て、『汝は是れ小幡山の石、(小幡山と云ふ所から出た石なり)今日緣ありて地藏となる、我れは是れ空劫以前の佛、屈めや地藏〱』と唱へたとある。斯云ふ事は恐らくは後人が作つた事かも分かりませんが、一休禪師ともいはれる人が、信仰の深い多數の人民の建立せる地藏尊に對し、無茶苦茶に、この樣なことを果して云はれたとすれば、決して穩健なる行持とはいはれませぬ。矢張り一方向きの擔板漢である。尤も破相門で一切の相に迷ふ執情を破つて眞空の體に歸入し、人々盡く本來佛なりと云ふ佛智見を開示せられたことかも知れぬが、眞の善知識たる者ならばその向上より再び人世の中へ飛び込で、淚を揮つて一切衆生を救濟すると云ふ向下門の大慈大悲の作用がなければならぬ。
親が死んでも笑て居る、師匠が死んでも何んとも無い、損をしても平氣で居ると云ふだけであるのを、無慾だ禪的だなど〻思うては、決して眞の御悟りとは申されぬ。縱ひ損をしても立派に諦めを付けて、それが爲めに微塵も精神を亂すこと無く、親に別れては眞情より之を悲み、而して夫れが爲めに少しも安心を亂さ

が、妄想執着の雲霧の爲めに之を知らずに居るのである。その雲霧を拂つて明月を見たのが、眞の安心とも悟とも申すのであります。『雲よりも高き所に出でゝみよしばしも月に隔てやはある』と無窓國師も詠れてあります。一旦雲霧を飛び越えて見よ、隱れたとか現れたとか云ふ議論は用不着である。月は何時も常住にして光明を放て居る。如何樣な雨天でありましても、若し雲の上に出て見たならば、太陽は赫々と天地に輝いて居る。般若の其の眼を開いて見たならば、吾々は何時も佛樣の一大光明の中に包まれて居るのである。世の中に惡人とか凡夫とか鬼とかいふ樣な者は一人も無い。天地法界が盡く平等實相である。因緣力に依りて差別の假相を現はして居る今日の吾々が、其の儘ソツクリ平等にして一大佛光明である。故に元より差別を取除けての平等ではありません。こゝの道理をわかり易く云て見れば、恐しき氷の角も本を尋ぬれば極軟かな水である。それが凍る時は、一寸觸れても體が切れる程の堅い物に成て居る。之が融解すれば元の水です。水の本性を明めて見たならば別に恐しい氷の角と云ふ物は決して無い。吾々が若し諸法の實相を觀破して、此の如き信仰が出來たならば、そこに非常なる愉快を感ずることであらう。舜何人ぞ釋迦何人ぞ、吾々は釋迦牟尼如來にも阿彌陀如來にも毫末も異らぬ所の、立派なる絕對無限の大智慧を具へて居る。吾々は實に眞理の持主、佛法の所有者である。眞理と云ひ佛法といふ皆吾々の財産である。是の如き信念が所謂主觀的信仰で、自己方寸の内に觀て、宇宙の大精神が赫々として常に活動して居ると云ふを徹底信ぜられたならば、其の時直ちに凡夫の境界を一躍して、本來成佛と云ふ立派な境界を自得するのである。夫

布施以下の五つは智の妙用である。衆生濟度の目的も般若の智海に誘引するに過ぎぬから、智は目的で前五度は方法ともいふことが出來る。斯かる心で修行してこそ、遂には無上菩提と云ふ此の上も無い佛の大道をも成就することになるのである。菩提とは佛陀所覺の大道である。解り易く申せば菩薩の眞智が原因となつて成佛と云ふ結果が現れる、之を『智も無く亦得も無し』の得と云ふ。得は即は結果であります。

## 智もなく亦得もなし

併しながら、眞空實相を照見した般若の眼より眺めて見ると、本來一實相にして増減垢淨の相は無いから從つて修行の因であるとか解脱の果であるとか、能證の智であるとか所證の得であるとか云ふ假名字は無いはずである。何故かと云ふと、既に迷といふべきものが無いから悟と稱すべきものもないのである。衆生が無ければ佛も無い。所謂衆生を濟度せんとするも濟度すべき衆生が無い。何となれば一切衆生は元來佛であるからである。

華嚴經には『草木國土悉皆成佛』とある。天地法界を盡して迷つて居る者は一人も無い。佛智見より見れば一物として佛ならざるは無い。例へば、天上に月は皎々と輝き渡つて居るが、途中に雲霧があればその月を見ることが出來ぬ。併し月が見えぬといふは下界から見るからであつて、雲霧を超出して見れば決して月は隱れて居るのではない樣なものであります。吾々も亦是の如く、眞如の明月は常恒に輝いて居る

かく精神を正しく治むる禪定が消極的の智慧で、其の結果『是れなる哉〱、成程こゝぢや』と決定の智慧の現はれたのが積極的智慧である。是くの如く六度を以て智仁勇の三徳に配置することができる。此の六度の大行を、衆生濟度を以て目的となし、有らゆる方面に向ひて之を勤め勵んで行くのが菩薩である。併し此の六度は般若の妙用でありますから、結局は智慧の一つに歸するのである。之を眞智とも佛智とも云ひます。

## 智愚の四句分別

お經文の中に智愚に就て四句分別の意がある。卽ち智にして愚なるあり、愚にして智なるあり、愚にして愚なるあり、智にして智なるありといふの四種です。智にして愚なる者と云ふは、學問は出來ても身が修まらず、精神の置所の惡い所謂論語讀みの論語知らずの者、是れは利口の馬鹿である。愚にして智なる者とは、馬鹿の利口である。學問智能は無くとも其の行に於て實に立派な人である。次に愚にして愚なる者とは學問も無ければ行狀も善く無い者、是等は全くの大馬鹿である。又、智にして智なる者とは物の道理を究め學問才能に富み、而して人格の高い精神の善良なる人、之れは利口の利口と云ふものであります。

縱ひ慈悲心があり誓願心がありましても、眞實の智慧が無ければ實際の慈悲願力を現はすことが出來ぬ。動もすれば、行うた事が慈善にも布施にもならずして、却て社會人生に害を生ずる事がある。故に六度と云うても畢竟は智の一字に歸する。言葉を換へると菩薩の本當の修行は智の一字である。智は六度の總綱で

又、忍辱と精進の二行は勇氣の德である。消極的の勇は忍辱です。己の心に打勝つの力あるを以て、他の爲めに耻辱を受くるが如き場合でも、泰然自若として決してムカ腹なぞを立てぬと云ふ勇氣である。假ひ人に惡口を云はれ忌々しいことと思ても『イヤ〳〵此所が堪忍の致し所ぢや』とジッと耐へて笑つてしまう。此の勇氣あればこそ德行上所謂外魔を防ぐことが出來ます。是れが消極的勇氣である。次に精進とは勤勉努力の氣概にして積極的勇氣です。精進と云ふ文字はくはしくすゝむと訓じて、一心不亂に精を出して勉强することです。唯だ勉强と云ふ辭だけでは、何うしても精進ほどに意味を盡してゐない。『あの人は勉强家だ、夜中でもジッとして居ない』或は『あの人は惡い方にかけては非常な勉强力を有て居る』と云ふ樣なことにも使ふが、精進の方はそうでない。米を十分搗きあげて靑味を帶る樣になり、籾も糠もスッカリ離れて極々純粹になつたのを精と云ふ。卽ち一切の惡事邪業を除いて、純粹の善道に向て進で行くと云ふが精進であります。今日の我が國民などは一層大々的勇氣を養つて、益々忍辱と精進との二の德を具へてゆかねば、此の世界の大舞臺に立て競爭場裡に勝を占めると云ふことは出來ないであらうと思ふ。

次に智慧を消極的に養ふのが禪定である。尤も是は禪宗の禪でなくて普通の禪定である。お互の心の散亂を制して一方に落付ける、つまり一切の邪念と亂心とを解脫するが禪です。心が收まりませんと善い智慧が出ない。平生でも腕を組で考へると云ふことを申すが、これも他の方へ心を散らさず一心になつて研究することです。話などをしながらでは容易に好い智慧が出ないものです。冥想などいふことも此事です。

性なきを以て、悟界といふ種子も無い筈で、故に眞空實相の上から觀れば、苦集滅道といふものも無いことになるからである。

## 菩薩乘と六度の意義

「智も無く亦得も無し」と云ふは菩薩乘に就て眞空の理を示されたのである。抑々菩薩には六度と云ふ大行がある。六度とは、布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧で、之は菩薩が慈悲弘濟の誓願に乘じて、日用の上に實行すべき標準を示されたものであります。此の六度を智仁勇の三德に別けて見ることが出來る。

凡そ一切の物事には必ず消極と積極の兩面が無ければならぬ。先づ衆生を濟度するといふ仁の德を積極的に現はしたのが布施である。佛は常に普く布施の行を勵みて至らざる所がない。財産の有る者は財産を以て國の爲め人の爲めに之を施し、學問の有る者は其の學問を以て世の爲め人の爲めに之を施し、凡て己れの力を以て頒ちて衆生を救濟する。之が積極的の仁である。又、消極的には持戒の行といふを說く。戒はいましめと訓じ三業の上に於て一切の惡事を制するのである。即ち物の生命を殺害せざれ、人の財物を盜まざれ、不義婬奔の振舞を爲さゞれ、虛言を構へて人を欺かざれと云ふ樣に、一切の惡業を禁止して自己の智德を開發するの法則であるから、是れ即ち布施濟生の基礎であります。故に以上の二行が積極・消極兩方面の仁の德である。

古人の歌にも『手を打てば下女は茶を汲む鳥は起つ魚は寄り來る猿澤の池』とあるが、奈良の猿澤の池へ行きポン〳〵と手を叩くと、お茶屋の姉さんはお茶を汲でくる、鳥はビックリ仰天して高く空中に逃げ去る、池の鯉なぞは餌でもくれるかと思つてドン〳〵寄て來る。三方面が三樣に分れる。唯ポンポンと鳴る音なれども聞き手次第で、一面の者は御客の御用かと思ひ、一方は恐れて逃げる、一方は喜で來る。此の世界觀も亦是の如く其の人の果報に依て樣々に分れるから、苦みの世界とも樂みの人生とも極められぬ。然るに多くの凡夫が煩悶を來して居るのは、煩惱惡業と云ふ種を過去に於て蒔いてあるからである。此の苦・集の二は迷界の因果である。

さて迷界を解脱したる悟界の境界はと云へば滅である。滅とは生死を斷じ煩惱を離れ所有苦みを滅するので、之が悟の果である。その滅果を成就するの方法が道諦です。道とは佛の御說き下されたる滅諦に通ぜしむべき法門である。世間門で申せば教育勅語に『克く忠に克く孝に億兆心を一にして』と仰せられた忠孝仁義等の行ひが卽ち道諦であります。能く道を守る時は夫が原因と成て遂に德性を發達せしむるといふ結果を生ずるのである。何所へ出しても恥しく無いと云ふ國民が出來て來る、之が悟界の因果である。聲聞の人は迷界の因果關係を明らめて生死の根源を究め、次に悟界の因果關係を明らめて寂滅の因行を修む。故に迷悟苦樂に對する因果關係を諦めて寂滅爲樂の行を勵むのが聲聞乘の修行である。ところが心經に於て『苦集滅道も無し』と云はれたのは、生死の本は煩惱であるが、その煩惱なるものも畢竟じて自

門の一方に住着した者といはねばならぬ。卽ち前に述べたる破相門に偏して顯性門の修養を缺いたのです。それで緣覺乘に就いて觀れば、生死の理を明むるに十二の因緣を以てし、而して其の根本は一念の無明に在りとす。無明の實性空なれば生死も亦空である、生死既に空なれば生死の盡くるといふこともない、是れ則ち般若の中道眞空であります。

## 苦集滅道

次に無苦集滅道と云ふは、聲聞乘の法門に就て般若の妙理を示されたのである。聲聞と緣覺とは殆ど同程度の修行であるが、聲聞の方は自ら深く因緣の眞理を究めて解脫を得ると云ふ程にまで徹底して居らぬ。故に緣覺に較べて見れば稍や根機が鈍い方で、佛樣の御說法の音聲を聞き其の御指導を信じて修行し、漸く辛うじて悟を開くと云ふので、聲聞と名けたのである。緣覺の如きは、開花落葉を觀じて自づと因緣の理を明め生死を解脫するから、無師獨悟の性を有して居るのであります。

苦・集・滅・道、之を四聖諦ともいふ。苦とは此の娑婆世界の苦痛の果報をいふ。而して其の苦痛の原因は正しく煩悶である。煩惱は能く生死の苦果を招き集むるが故に集といふ。全體、何者が苦痛を招き何者が調和を缺きたる厭ふべき人生を造つたかと云ふと、其の造り主は全く自己の煩惱である。衆生の煩惱無量なるが故に、同じ此の世に生れましても各々の果報が皆各別である。

は生死の相に迷ふ心はない。即ち本來不生不滅であるから、設ひ鬼が來やうが佛が來やうが平然として寸毫も動著せぬ。生死岸頭に在て涅槃寂靜の大安心を決定してござるから、斯く大盤石な態度が現れるのであらうと思ふ。

軍人諸君が戰場に臨みて献身的行動を取る時なども實に立派な態度である。是れは國家の爲めに忠義を盡すのが人生の本務であると云ふ堅固なる一大信念から來たもので、もう命が畢ると云ふ瀬戸際でも『生ては忠勇の士となり死して護國の靈となる』といふ信念に包まれて、自から大滿足心を有して居るから、古への英雄豪傑、忠臣義士にも劣らざる立派な死を遂げるのである。斯うした兵士の澤山あつたことは日露戰爭實記なぞを見ても明かに分かる。是れ亦生死の相を超脱したる信念が有るからです。

深草の元政上人なども信仰力の堅固なる高僧であつたから、其の死際に『上人には最早大往生遊ばされますか』と申し上げると、『もう行てこずばなるまい、皆が泣くなら己れも泣かうかい』と云て『深草の元政坊も死なれけり我身ながらも憐れなりけり』と詠んだ。今息を引きとらうと云ふ場合に於ても『吾は決して死なぬ』といふ大安心をもつて居るから、このやうな氣樂な境界にもなれる。この境界は決して理窟では出來ぬ。縱し死といふことでなく、唯だ西洋あたりの遠方へ往くのでも『もう容易には歸られぬ、生きて歸へることの保證は出來ぬ』といふ樣な場合には、自然に愛別離苦を感ずるは人間自然の性情である。然るに、若し生死の實相を明らめたからとて、人情の自然に背きて人の死を笑うて居るといふ風では、向上

浄土宗の行誡上人が、各宗を通じての名僧の一人であつたことは、皆さんも御承知でありませうが、此の高徳は京都の智恩院貫首となり八十三歳を一期として御遷化になられた。上人がもう御臨終と云ふ時に、浄土宗では阿彌陀樣が御來迎遊ばさるゝと云ふ經意に依り、來迎佛の御像を懸けるのが恒例で、御弟子だちが急いで其の御像を懸けた。ところが、何ぞ圖らん、來迎佛と思つたのが閻魔樣の像であつた。普通の人なら『あの人は後生が惡いから閻魔樣が迎へに來た』などゝ、人も思ひ自分も氣にかけるであらう。人々は大に驚き、懸けた御弟子を叱り附け、早く掛替へよというて居ると、もう肩息同樣になつて居る上人が夫れを見て、『決して懸け變へるに及ばぬ、筆を持て』と云はれるから、直ぐ筆に墨を染めて差上げると、上人は筆を執つて

南閻浮提大日本國　行誡

八十三

右老病臨終の趣に付點檢申し候處御本願相應の人と斷定候に付御都合次第御來迎の用意可然候此段宜敷執奏有之度候也

閻魔王府

西方世界二十五菩薩御廳

と書き、筆を投げてお笑ひになつたが、それよりして眠るが如くに大往生を遂げられた。かういふ人々に

らない様になつたのである。時としては父母の墓前に到りて一日泣き暮したこともある。其の時の歌に、『たらちねの親の戀しきあまりには墓に音をのみ泣きくらしつゝ』、そう云ふ悲しい歌を詠む様になつたのである。其の後、深く佛法の門に入りて因緣因果の道理を觀じました爲、悲哀の淵に沈んで居つた心も自づと悟りの光明に觸れる樣になり、遂に尼僧となりて、最初は岡崎の里に庵を結んで、父母や良人や子供の菩提を弔うて、佛法三昧に修行をした。其の頃の歌に『岡崎のさとのねざめにきこゆなり北白川の山ほとゝぎす』とある。此の時は精神も穩に成つてモウ立派に諦めもついたらしい。明治十八年頃『願はくは蓮の花のその上に曇らぬ月を見るよしもがな』といふ辭世を詠んで大往生を遂げられたのである。

世に幾多の智者、學者、英雄、豪傑があつて、何にもかも承知して居ながら、人生逆境の波に漂ひ、因緣の束縛をうくる時は、人知れぬ悲しみを感じ非常なる苦悶を起すのもである。是れ畢竟愚痴の致す所であるから、遂には不平を起し或は不滿の心に驅られて、人を嫉み人を恨むと云ふことにもなる。是の如きは多く因緣に對する覺悟の無い所から起るのである。若し悟の眼を開いて、因緣所生の法は一時の假相であつて其の本體に至ては不生不滅なることを徹底了悟すれば、生死岸頭泰然自若、如何なる場合に臨んでもビクともせぬといふ信念が發せられます。

## 行誡上人の臨終

いはずである。若し生滅無しと云ふことの眞理を諦めたならば、玆に大安心の基礎が成り立つのである。

## 老死もなくまた老死の盡くることもなし

抑々人生に於ける苦痛の大なるものは生死の事であります。眞宗の蓮如上人が白骨の御文章に

朝には紅顏ありて夕には白骨となれる身なり、すでに無常の風來りぬれば則ち二つの眼忽ちに閉ぢ一つの息永くたえぬれば紅顏空しく變じて桃李の粧ひを失ひぬるときは、六親眷屬あつまりて歎き悲しむとも其甲斐あるべからず、

とある通り、昨日までは家庭の快樂を窮めて笑聲が外へ迄も聞えるぐらゐであつたものも、其の家に一人の息絶えた者が出來たならば、打つて變つて其の家の全體はもう涙の雨に潤ほはねばならぬ。玆に至ては如何なる英雄豪傑でも苦痛の腸を絞るのである。

彼の有名なる蓮月といふ尼さんは、俗名を誠子と稱し、明治十八年頃八十餘歳で歿した名高い歌人であるが、三十歳位までに四人も可愛い子供を設け、非常に愉快なる月日を送つて居つた。ところが禍の運命は蓮月の身に報い來り、四人の愛子は一人も殘らず死んでしまうて、それに加へて良人に死に別れた。其の後また杖柱とも賴みにして居つた一人の父親にまで死なれたのである。追の蓮月も悲哀の涙に咽び、一日たりとも心の安らかなことはない。雨の降るも涙の種、風の音を聞ても涙の種、最早、生きて居る心地す

も水が滾々として流れて息まざるが如く、車の轉々として廻つて停まらざるが如く、お互の生死が未來際に繼續して、境に依て迷を產み、迷に依て罪を作り、罪に依て苦果を感ずる、苦果に依て更に迷を起す、そういふふうに段々迷妄苦惱の淵に流れこんで行くから生死流轉といふのである。故に緣覺乘の人は此の因緣の理を觀じて、惡業生死の根本たる無明の煩惱を斷ずるのである。無明が滅すれば行は自づから滅する、行が無くなれば識も無くなる、識が無くなれば名色も無くなる、と云ふことになる。故に一番根本の無明を斷じてさへしまへば、後は枝葉の如きものであるから、自然に枯れて滅無に歸し、全く生死を解脫することが出來る。例へば夢中に樣々な事を見て色々の事を爲すが如く、夢が醒めてしまへば、今迄の樣々な事は盡く消滅して了ふやうなものである。故に佛法では直に其の根本に遡つて無明の惑を離れる。之を還滅門と云ふ。

然れば生死の源は無明の一に歸す。その無明とは果して何物ぞと究むれば、一念々起の幻相で、これが無明なりと捉ふべき自性あるにあらず、卽ち本來空である。此の空理を觀察すれば迷も無く悟も無い。卽ち流轉門と云ふものも無ければ還滅門と云ふものもない。病も無ければ藥もない。無明の實性を究むれば無明といふものも無い。無明が無ければ無明の盡くるといふことも無い。老死も亦是の如くである。是れ卽ち前の『生ぜず滅せず』と云ふことの理を丁寧にお示し下されたのである。生といひ滅といふ、是れ恰も影法師の幻出するが如く一時的に現はれたる假の相である。眞空實相の上から見れば、元來、生滅は無

するのを見れば、我知らず飛で往て之を助ける、是れ即ち惻隱の心たる仁の性を天然に具へて居るからだ」というてある。されば如何なる惡人でも利他的道德心を持たぬ者はない。唯その分量が多いか少いかと云ふまでゞある。又、どんな道德者でも自利心の一部分は持て居る。自利と利他とは共に離るべからざる本能性です。此の兩性を立派に調和し且つ、利他の德を一層擴大する樣に致すのが博愛道德の修養である。利他心の擴大がやがて自利の向上となるのである。

故に十二因緣の中の有の位に進んだ人でも、或點までは必ず之を濟度して將來の運命を變化せしむべき餘地は有るのである。故に此等の人々を化導し濟度して行くのが、今日の宗教家及び社會教育家の本務であらうと思ふ。併し此の化導濟度の因緣にも逢ふこと能はず、有の位に於て執着心が石の如くに固まりて種種の業を造る時は、最早、將來の運命來世の果報までも決定してしまふ。そこで愛と取と有との三位が未來の果を感ずべき現在の因となるのである。此の中、愛と取とは前の無明に當り有は前の業に當る。

## 流轉門と還滅門

次の生と老死とは未來の果報であります。即ち現在の業力に相應した生れ方をする。そうして年老い身死して更に第二の未來を感ずるのである。是の如く行は無明に依て生じ、識は行に依て生じ、名色は識に依て受く、斯う云ふふうに前因後果、因果相續して生々死々窮まりあること無し、之を流轉門と云ふ。恰

又、精神の作用から見ても、甲の作用と乙の作用と調和を缺くことがある、此の調和を缺くことが遂に惡といふものになるのであります。如何に大惡無道の人間といはれる者でも、其の本性は智德の體であるのである。今日の倫理學者などの話を聞ても、人には自利と利他と兩性がある、唯其の人の教育または習慣の如何に依て自利の性が五分あるとか七分あるとか、又、利他の性が六分であるとか三分であるとかいふ分量の上に多少の別はあるが、全く自利心ばかりの性質の者も無ければ利他心ばかりの者も無いと云うて居る。

菅茶山の書いた『筆のすさび』の中やらにあつた話であるが、一人の泥棒が或家へ入て物を盜まうと思ひ、家の樣子をひそかに窺うて見ると、一人の若い婦人が行燈の傍でサメ〴〵と泣て居る。合點ゆかずと思うて見て居る內、彼の婦人は剃刀を出して今や咽喉を突かうとするから、泥棒は大に驚き、覺えず家の中へ飛び込んで『マア〳〵待つた』というて留めた。『どうぞ御願だから死なして下さい』と云ひつゝ、たつて死なうとするから『コリヤ大變だ、みなさん早く起きて下さい』と云うて怒鳴つた。すると家內中の者は皆な目を醒して集り來り、とう〳〵右の剃刀を奪てしまつた。旣に死んでしまうべき危い處を助けてくれた人は誰れであるかと思うて見ると、其所に見慣れぬ人が居る。『お前さんは誰れだ』といはれて泥棒は始て氣がつき、『これは飛んだことをした、己れは泥棒であつたのだが、此の婦人が死なうとする所を見て驚きの餘り、自分が泥棒だといふことも忘れて居つた』というてあやまつたと申すことである。

又、彼の孟子にもある『非常な大泥棒でも、頑是ない子供が井戸の邊りに遊んで今や井戸に陷いらんと

ふ。此の時は愛執が凝り固つて自分に一定の目的を立て丶往くに依て、親や師匠が何と云ても容易に聞かぬと云ふ樣な强い執着を起す、斯云ふ場合に於ける敎育は非常にむつかしいです。青年時代などに一寸一足でも踏み誤ることがあると、將來浮ぶ瀨もないことにもなる。此の時代には一層盛に敎育を施して以て、精神の修養に力を致さしめなければならんのである。自分の精神にモウ固く執て動かぬと云ふ執着を發した時に粗ぼ其の人の人格が定つてしまひ、又、其の時代に於て、將來の運命までも大概はきまつてしまうものです。『三つ兒の魂は百まで』と云ふが、或る點に於ては慥に三つ兒の時代の魂が一生涯の人格を定めてゆくものです。併し敎育の力はまた格別なもので、敎育其の宜きを得れば、惡人を變じて善人となす事も決して不可能ではない。だが固く執て動かぬといふ取の位が繼續すると、それによりて種々の業を造り、遂に未來の運命迄も決定まる、之を有の位と云ふのである。

有とは物を所有すると云ふ意味で、善人になるとか惡人になるとか、若しくは貧窮人になるとか財產家になるとか、地獄に墮つるとか淨土に生れるとかいふ、將來の果報は今日に於て決定して、その果報が確かに自分の物となつた位です。斯ういふ位地にまで至ると、敎育家の力でも宗敎家の力でも却々之を解くことは容易に出來ない。尤も中には心機一轉して、瓦が鏡となり石が玉となるやうに、是れ迄は非常な惡人であつたのが一變して善良なる人間になることもある。何故かといふと、人間の性質には惡と云ふ部分もあるが、惡なるものは決して本來の性質ではない。自分の精神と凡ての境遇との間に調和を缺くことがあり

根が具足した所で、始めて母の胎内から出でゝ外界の氣に觸れるのが觸である。二歳や三歳までは、縱ひ外境に觸れましても唯だ觸るゝばかりで、苦樂を識別することが無いから觸といふたのです。識と名色と六入とは胎内に在る時の狀態であります。

それより少年時代になると、追々廣く外境界に接して六境を六根に於て受附ける。所謂眼には色を見て其の色の何たるを領じ耳には聲を聞て其の聲の何たるを感受し、自然に善惡苦樂を識別する時代が受である。併し是れは何れも天性の作用であるから、以上の五位は過去の因緣力に報いて現れたる現在の果報である。古歌に『我が子でもおほきくなればまゝならずかあいゝ時は二つ三つ四つ』とあり、子供の三つ四つの頃迄は天眞爛漫である。『生れ子が次第々々に智慧づきて佛に遠くなるぞ悲しき』、これは惡い方面から眺めたのであります。善い方面からいうたならば此の歌の反對でなければならぬ。況や現代に於ては、『生れ子が次第々々に智慧づきて佛に近くなるぞ嬉しき』と斯うゆかねばなりませぬ。

夫れで追々成長して十四五歳になり、事物に對して愛執を起す樣になるのが愛である。尤も少年時代にも愛の性質はチヤンと具つて居る。人形を翫弄ぶと人形を放さない、人形に着物を着せたがつたりするのも一つの愛情である。併し此の時代の愛は其の力が微弱である。つまり宿世の習性の爲す所である。愛情の强勢となるに從て最も强烈なる執着を起す樣になる。之を取といふ。

少し智慧の附き方の早い子供は、モウ十歳か十一歳位から此の取といふ作用も一分は現れて來る樣に思

行は世間で云ふ行爲または行動のことで、之を業とも云ふのである。吾々お互は既に過去世に於て無明煩惱を起して間違つた業を作つて居る。此の二つが過去世に於ける凡夫の狀態で、これが現在世の原因となるのである。此の原因に於て今日の現在の果報を感じたものです。一たび迷執を生じ惡業を作る時は、その惡業が一種の習慣性と成て今日の身にまで及ぼすのである。且つ善惡共に業を造れば、其の業力に相應した身口意を感ずるものです。天性に具はれる人の性癖などは、何れも過去以來の自己遺傳である。世に習癖ほど恐しいものはない。酒を飲む者も、それが習癖となつて酒嗜きと極れば、借金を質においても飮まずには居られぬと云ふやうな工合で、時々處々にその業作用を現はすことゝなる。そうなると、酒屋の前でも通りプンと酒の香が鼻をつくと、モウ咽喉が鳴り出すといふことです。それであるから、前世に於て無明の力に依て邪見業を起せば、其の邪見業の爲に陰然一種の習慣性を作ることゝなる。其の習慣的性質が父親母親を緣として、其の父母の業力と自分の業力とが相吸引して、それがピタリと合つた時母の胎內に宿る、これが識です。因緣力に依て父母に於て微細の愛執を生じた時、托胎するから識と名けたのである。

又、吾々が前々の世からの業力と父母の業力との間に一つの因緣を結び附ける、そうして吾々の業力に相應した形質を受ける、之を名色といふ、名は心のこと、心は無形であるから名と稱します。色は肉體のことです。卽ち精神と肉體の素質が成り立つた位である。

それから追々眼耳鼻舌身意の六根が完具してくる、之を六入といふ。六入とは六根の異名です。既に六

とが出來ぬといへば、そこで始めて諦めが出來るものであります。

## 十二因緣の意義

さて緣覺乘の人は何う云ふふうに因緣の理を觀ずるかと云ふと、十二因緣というて三世（過去・現在・未來）に涉つて因緣を觀ずるのである。其の因緣の觀じ方の狀態が十二因緣であつて、卽ち無明・行・識・名色・六入・觸・受・愛・取・有・生・老死の十二通りである。之を三世にかけて觀念し以て生死の始終を諦むるのであります。

無明とは煩惱の異名である。無明は明らかなること無しといふので、物の道理に迷ふをいふ。道理に暗い所から天理にも人道にも反した量見を起すのである。例へば此の本堂でも、此方が入口で此方が本尊樣で、此方に障子が有て彼方に壁が有る、と云ふことが明かに見えるから少しも迷はぬ。之が若し眞暗がりであつたならば、何方が入口であるやら、何方が壁または柱であるやら、サッパリ分らぬ樣になる。分らぬからして、此の本堂の中を彼方此方と迷ひ歩くやうになる。卽ち自由自在の道場に於て自己不明の爲に不自由不自在の苦みを感ずるのである。吾々も智慧の光明に一點の暗黑面が出來ると、物の實相を正確に見ることが出來ないから、遂に煩惱といふ迷惑が起る。（無明は惑なり）惑が起るから自ら眞理に背き天道に反する行爲をなす、之を行といふ。

である。耳の因と聲の緣とが相合して始めて業力が發生する。若しも善い聲ならいゝが、三味線や太皷の聲でも耳に聞えたりすると、その因と緣とが結び付けられて心とがグラ〳〵動き出し、しまひには親の金でも盗み出して使ふと云ふ様な騒ぎになる。尤も何方が因で何方が緣といふきまりはない。耳を因とすれば、聲が緣であり聲が因だとすれば耳は緣になる。相互に主人公たる原因と成つたり、又、その原因を助ける緣のお客さんと成つたりしてゆく。例へば此所に米粒が一つある。是れが因種であるが、併し米粒だけでは果を結ぶべき作用を現はすことは出來ぬ。太陽が有つて溫度を與へ、水が有つて之を霑ほし、田地があつて之を受くると云ふやうに、一の物が因となれば、種々の緣が結び附けられて、始めて芽の出る果を結ぶといふことになる。されば人生の苦樂貧富も、國土の淨穢文野も、皆因緣生の法である。而して一切の苦惱罪惡の根本原因は、吾々の煩惱であるからして、能く煩惱を斷ずれば苦惱も罪惡も自づと解脱する譯である。是の如く諸法因緣生の道理を觀じて悟りを開くのが緣覺の位である。

よく世間の人も因緣と云ふことを申します。日本人で因緣と云ふ事を知らぬ人はない。吾々の諦めは因緣の二字に依るのが近道です。例へば可愛い子供にでも死なれて、何うしても諦めが附かんと云ふやうな人に向つては設ひ天下の雄辯家が其の傍へ來りて、一日一夜の間種々の道理を說明して聞かしたからとても、却々諦めのつくものではないが、其の時は嗚呼これも因緣であると、たゞ因緣と云ふ二字だけで立派に諦めがつく。死ぬると云ふも因緣である生れると云ふも因緣である、病氣するも因緣であるから如何ともすること

## 緣覺乘の因緣觀

此の本文は聲聞乘・緣覺乘・菩薩乘の三乘に就て、眞空實相の理を御示し下されたのであります。其の中に於て『無明もなく云々』より『老死の盡くることもなく』といふ迄は緣覺乘であります。常には聲聞、緣覺と云うて聲聞を前にする順序に成つて居るが、心經では緣覺の悟りを先きに擧げられた。

緣覺とは委しくは因緣覺と稱し、佛のお弟子の中で諸法因緣の理を觀じて覺りを開き解脫を得たる者で敢て必ずしも佛の敎化を待たぬからまた獨覺ともいふ。因緣は委しくいへば因緣果報である。

凡そ天地間の物事は、苦みも樂みも、迷も悟りも、皆因緣力に依つて受けたる果報である。生ずる因は主人公で、緣と云ふはお客さんです。現在の諸法も盡く過去の因緣に依つて生ぜざるはなく、從つて現在の諸法が未來の結果を招くべき因緣となるのである。因は主因で緣は助緣である。因のみにては結果を招くの力がなく、必ず緣力を藉らねばならぬ。

例へば眼といふものが因でタネならば、眼に映ずる色相は緣である。吾々お互が人の姿に迷ふことありとせんに、眼がなければ之に迷ふべき因種がないのである。縱ひ天上に日月が輝き渡つて居やうとも目のない人には何等の關係をも生ぜぬ。眼があつても之に映ずる緣がなければ矢張因力が現はれぬ。必ずや因と緣とが相結び合つて始めて一つの妄想とか執着とかいふものが出て來る。耳の聲に於ける亦た是の如く

の有りのまゝを見ることが出來れば、眞に能く親の價値を照見するから、親の心に從ひ、親の辭を守り、親に孝養を盡くすと云ふ、卽ち親に對する孝道が遺憾なく實行せられる。ところが總ての物を有りの儘に見ることは却々難いものである。憎いと云ふ心があると、善い事までも隱れてしまつて見えぬやうになる。悲しいと思へば、花の綻びて居る姿を見ても、鳥の囀づる聲を聞いても、霞に戯れる胡蝶の影を見ても、何んとなく悲しいやうな情を起す。西行法師などは常に厭世的思想を以て居つたから、森羅萬象、盡く悲しさを感ぜられたらしい。『なげゝとて月やはものを思はするかこち顔なる我がなみだ哉』、悲しみの眼から眺むれば、天邊に淸く輝くお月樣までが涙の種になつて來るのである。西行の心には正しくそう映じたのである。此等も決して健全なる思想とは申されぬ。

故に、悲しいとか苦しいとか云ふ樣な、自分勝手な凡情を打捨てゝ、天地萬象の有りのまゝを徹見し去る時は、本來具有せる本性の德が自然に顯はれる、之を顯性といふ。顯性は目的で破相は手段である。心經の上に、色心の二法等に於て無し無しと仰せられたのは、眞空實相の本體を開示し、吾々衆生をして妄想執着せる煩惱の根本を截切つてしまう爲めの手段とせられたものである。手段というても、何にも假設の理を說かれたのではない。此の事は追々後に於てお話を致しますが、無し無しと說て、一切の相を拂ひ除けてしまつたのは破相門の說であると、一應御承知置きを願ひたいのであります。

凡夫は一切の相に迷ふものである。相と云うても、對手に成るべき前境界の相ばかりでなく、主觀的に內心に我を認むるも迷ひである。此の迷ひより無量の煩惱を發生し、それが爲めに有らゆる罪惡を作るに至る。佛敎は御承知の通り、轉迷開悟といふのが目的でありますから、先づ第一に迷の本たる色心の相を打破つてしまうのである。と申しても假說の方便ではなく、所謂哲學的原理の上から、一切の諸法は眞空實相であると斷ずるので、是れ卽ち破相門である。破相の後には本性を顯現せしむる故に、假令眞空と云ふと雖も空の一方を執するのでは無い。

若し果して諸法空であつたならば、何に依つて此の世界が現れて來りしものなるか、それは因緣の力に依つて現れ來つたのである。併し、何にか根據となるべきものがあればこそ、因緣の作用も發するのである。若し單に空のみであつたならば、因緣といふことの生じやうもない筈である。そこで本性とか實相とか云ふ名義を以て、其の根本の性を示されるのである。

元來、諸法は平等にして差別なしと雖も、其の平等性の內に是の如くの差別の相を生起すべき本性の德を具へて居る。其の性德に依つて法性自然の妙用として萬法が顯現する。柳は綠、花は紅、山は高く、海は深し、是れ皆其の儘の法性の姿である。此の法性の德に依つて吾々御互の如き立派な人間の形が現はれ來つたのである。それを有りの儘に見ることが大切です。

元來、物を有りの儘に見ると云ふことは却々難いものです。一家庭の上に於きましても、親に向つて親

氣と云ふ樣な癇癪玉がムラムラと出て來るが、其の根本はいへば元來有るものでない、此の後ムカムカと腹が立つた時分には、直ぐ人に向つてお饒舌りなどをするとやり損ひがあるから、其の時より自己に向つて短氣の出所を取調べて見るが宜い、『汝は何れの處より來る』と工夫して、愈々短氣の出所を抑へて見たならば、本來空であると云ふことが分かるであらう』と正眼國師が示されたと云ふことである。

眞空實相の理を明めて見たならば世の中に自分を束縛する物は別にないと云ふ大安心が出來る。此の五蘊・十二入・十八界も亦是の如く、本來執すべきもののなきことを明めなば、人間天上の迷執は自ゞに斷ずることが出來る。『眼界もなく、乃至(中間省略の義である)意識界もなく』本來無であると云ふことを悟つたならば、一切の迷執は根本的に截切られるであらう。吾々の煩惱を截切つて實相の無に歸すると云ふが大般若の妙用はあるが、單に空無となるのではない。大いに死して大いに生きると云ふが眞の般若の本領であります。

## 破相門と顯性門

五蘊・十二入・十八界の三科に就て、本來眞空平等にして無差別であると云ふの理は、一應說明に及んだが、吾々凡夫をして迷執の根本を截切つて、實相を觀照せしむるのが心經一部の本意であります。で、其の中の迷執を斷ずる點を破相門と申します。

と云ふに、畢竟無所得である。眞空實相なる般若の眼より見れば、元來無といはねばならぬ。迷ふべき種と認むべきものはない。

## 正眼國師短氣の敎訓

昔、正眼國師といふ臨濟宗の高僧があつた。此のお方の所へ或る在家の者が來まして、『禪師に一つのお願ひがある』、何事かと聞くと、『私は生來短氣で困ります、短氣は損氣と云ひますが、腹を立た後は自分の氣持も惡るし他人の感情をも害することが多い、ア、飛んだ事をしたと思うても、後になつては取返しがつかぬ、短氣の起るのが私の性質でありますから何うか、禪師のお力に依つて短氣を直して戴きたい』と云ふのである。正眼國師は『左樣か、お前は面白い物を持つて生れて來られましたな、隨分直して進ぜやうが其の短氣を玆へ一つ出して御覽なさい』、すると其の人が『何うも唯今は短氣も出ません』、『だつて生れ附きだと云ふからは何所かに短氣が匿れて居るだらう、頭の中に居るか胸の中に居るか索し出して見なさい、遠慮に及ばぬから思ひ切つて腹を立てゝごらんなさい』、『只今幾等體中を探して見ても、どうもその短氣が出て參りませぬ』、『併し何處かに有るだらう』、『今の所は何處にも有りません』、『そうで有らうよ、生れ附き短氣であると申したとて、是れぞ短氣の種であると云ふ塊り物はない筈のものぢや、唯何か聞えたり見えたりする上に忽然として發生するので、つまり一種の習慣性である、佛法で云ふと業習力に依つて、短

眼耳鼻舌身意の六識を加へて、十八界といふのであります。して見ると、五蘊と云ひ十二入と云ひ十八界と云ふも畢竟、色心の二法を說明したもので、唯開合の異同に過ぎない。

五蘊の方では凡ての物質を色の一字に收めて、精神の作用を受想行識の四つに開いた。十二入では色の一字を推し弘めて、色聲香味觸法の六境と眼耳鼻舌身の五根とに開き、意根の一つが精神を代表して居る。十八界では色心共に開いて、意根界と六識との七つが精神に屬し、他の十一は色に屬する。

是の如く開合する所以は、色に對する迷執深き者の爲めには色を開いて示し、精神に對する我執の强き者の爲めには、心を開いて示すのである。故に自然、五蘊・十二入・十八界といふ三科を擧ぐるに至つたものであるが、つまる所は色心の二法に過ぎぬ。卽ち物質と精神と相和合して、此の世界も此の身體も出來たものである。其の物質も精神も畢竟無我にして無法である。是れが精神の實質だ、此の物質が自性だ、というても捉へて見るべき物はない。元來、眞空實相であると御示し下されたのであります。

是れまでが、人間・天上の衆生が色心の二法に迷つて居るに依つて、其の迷妄を解脱せしめんが爲めに般若眞空の理を示された御語であるから、人乘・天乘の法門に當ります。元來、迷といふものにも多くの種類がある。金錢に迷ふ人もあれば人の姿に迷ふ者もある。或は愛着の爲めに迷ひ、或は悲しみの爲めに迷ふ。迷の原因となり動機となるものは澤山あるが、つまりは物質と精神と相對する上に於て、凡ての迷が起つて來る。ところが、其の物質と精神とを一々分析して見たならば、迷の根本と成るべき種子が果して有るか

夫世界に束縛せられて居る者は、皆六根と六境との交渉の上から、色々の迷を惹き起すのである。それで之を十二入といふ。固より五蘊も皆空なれば十二入も元來無いのである。根境の交渉というても恰も、水中に月の映ずるが如くにして、何等迷悟苦樂の性質は無い。苦樂是非を感ずるは唯だ一念心の作用に過ぎぬ。根境、本より因縁和合の假相であると明らめなば其の儘無自性不可得である。

## 十八界の空相

次に『眼界も無く乃至意識界も無く』といふこれが十八界です。眼耳鼻舌身意の六根と色聲香味觸法の六境と眼耳鼻舌身意の六識とで十八になり、之に一々界と云ふ字を附けて、眼界耳界鼻界舌界身界意界等といふ樣にあるのを、頭の眼界と終りの意識界だけを擧て中間を略したのです。是も畢竟、色心の二法を開て說かれたまでゝある。色心本より空なれば十八界も亦空なり。眼根と色境とが交渉して眼識を起すとはいふものゝ、若し意識分別なければ色境も眼根もそのまゝ假和合の相にして、其の實體は無いのである。之を界というたのは、界は界畔の義で、十八界は皆其の性質と作用とを異にして居るからである。眼にせよ耳にせよ、各々箇々特別の作用を有つて居つて、決して混亂せぬ。どんな大きな眼の人があつても、あの人は眼が大きいから一寸耳の代用をさせるといふ譯にはゆかぬ。どんな大きな口の人でも、口を以て鼻の代りにはならぬ。各々役割も定つて居る。故に、前の十二入に各々界の字を附け、それに精神上の作用たる

いのである。即ち五蘊即般若なることを示されたのである。

## 十二入の空相

次に『眼耳鼻舌身意も無く色聲香味觸法も無し』とあるのが十二入を擧けたのです。眼耳鼻舌身意は自分の方で之を六根といひ、色聲香味觸法は向ふにある前境であるから、之を六境といふ。入とは交渉の意で、六根と六境とが相互に交渉して、こゝに六識を起すのである。獨り現在の六境のみならず、過去及び未來の相、卽ち昨日見た色でも一昨日聞いた聲でも、ちやんと此方の意識には映ずるものです。そして此の對手となるべき色聲香味觸法には有形の物もあれば無形のものもある。

庭を一つ作るにも、斯う云ふふうに庭を作つたら、斯ういふ景色が見えて、斯ういふ音がするだらうといふ樣に、チヤンと庭の相を心の內に拵へるのであるから、心の作用に依つて種々の法を畫いてゆく。法は心の相手になるものであります。向ふに美しい花が咲いて居て、好い香を放つて居るといへば、眼と鼻とが色と香との間に一つの交渉談判を開始する、所謂因緣を結びつけるのである。又、好い聲が聞えると聲と耳とが交渉して、此方では氣に入つたとか氣に入らぬとかいうて分別を起し、彌々氣に入つたとすれば、夫れを無理也理にでも自分の方に引付けやうとする。

斯ういふ風に、始終、根境相交はり、夫れが根本と成つて、遂に百八の煩惱も起て來る。總て人間天上の凡

ぬ。五蘊のことは前に申した通り、精神と肉體である。精神と肉體とが本となつて吾々人間及天上の身を受けて居る。然るに凡夫は其の相を認めて我々所を生ずるのであるが、實相の上には精神とか肉體とかいうて執すべき實質は無いのである。これを『色も無く受想行識も無し』というたのです。禪宗で申すと趙州の無の公案にでも參得なされた方ならば、もう別に講釋を聞く必要はない。

趙州和尙に僧問うて曰く『狗子に却て佛性有りや』州曰く『無』、一切衆生皆佛性ありと聞くが、犬にも佛性が有りますか、有りませんかとは對待の見である。趙州は單刀直入、實相を把捉して無というた。卽ち絕對の無である。佛性と名くべきものゝ無も無ければ、其の無いと云ふ無もない。盡天盡地唯是れ無である。無いと云ふと有に對した樣であるがそうではない。故に無の一字こそ佛光明を顯現する根源である。

昔、或る禪僧が山寺の和尙の所へ尋ねて行つた。山寺の和尙、折角の來訪を受けても何にも御馳走がない。漸く麥飯のお茶漬ぐらゐを出して歌を詠んだ。『何にをがなまゐらせばやと思へども達磨宗には一物もなし』何にか御馳走をしたいと思うても無一物の宗旨であるから御馳走は無い、何うか惡しからず思召し下されよといふ。すると客僧も却々の洒落者だ『もとよりも賜はらざるをたまうこそ本來空の妙味なりけり』下されない物を下された、之れが本來空の宗旨で、何にも無い所に無限の妙味があるとの御挨拶である。こんなお客さんなら手數がかゝらんで結構だ。此所でいふ無もそうです。物を打ち潰して一切無にして了うたのではなく、實相眼を開いて見來れば、天地諸法、みな一實相、一佛身で、少しも我他彼此は無

であらう、あの顔で、今日はまことにと云つて、ポロ〳〵涙を出さうものなら、悔みの使者にはもつてこいではないか』と云ふて、笑つて居られたさうであるが、世の中は皆是の如く、どんなに、人が役に立たぬといふて、捨てゝしまつた地面からでも、黄金の湧出づる時節が無いとも限らぬものです。

朝鮮は半開だと云ふが、啓導誘掖其の宜しきを得ば、百年二百年の後には、或は東洋の模範的文明國となつて、我國光を增す時節があるかも知れない。佛教に所謂修行の願力如何に依るので、如何に進化をするかは分らぬものである。して見ると世の中の病は、唯物と物との調和が出來ぬ處から發するのである。故に其の病の本を探究すれば、元來病の自性は無い。病の自性が無ければ藥の自性も無い。それと同じことで迷の本性が無ければ悟の自體も無い。故に其の本體を徹見して、煩惱菩提の假相に執着せぬのが、實相の知見である。病も無いぞ、藥も無いぞ、煩惱も無いぞ、菩提も無いぞ、一切盡く、無いぞ無いぞと云ふて、遂に實相を開示せられるのが、是れから後に澤山ある『無』といふ文字である。而して是れを五通りにお別けになつて示されてあるのが諸乘即ち五乘の法門です。

### 五蘊の空相

初めには五蘊・十二入・十八界の三科をお擧げなされた。これが人乘と天乘との迷を拂うた空觀です。此の三科は世の中の差別の法相を三通りにお說きになつたので、三科といふも、つまりは色心二法に過ぎ

吾でもそうです。極精神の正しい人ならば、悪い者をも善く使ひ、悪をも化して善とする。

## 堀秀治公の人物使用法

彼の越後高田の城主となり、大閤秀吉の寵臣であつた堀秀治公は、非常に雅量に富んだ人である。此の人は如何なる人物と云へども之を捨てられぬ。或時、一人の泣き男があつて、何うか貴藩に御奉公がしたいと云うて來た。公は之を御許しになつて二人扶持を下さつた。此の男の顔附きは何時も泣顔をして居る。眼が悪いと見え、始終涙が出て居る。口もとの具合から眉毛の様子から、顔貌の全體のつくりが何うしても泣て居るとしか思はれぬ。御家老も呆れかへり、如何に殿様が御情が深いからと云つても、武士として御扶持を賜はるは餘り不向な御面相である、お諫をせねばならんと、公に對して『あの様な者をお抱えになる事だけは以後お見合せを願ひたい』と申し上ると、『イヤ夫れはいかん、凡そ世の中に無用な物は無いものである、之れは役に立たぬといふて捨てるのは、向ふの人の罪ばかりではなく、此方が能く夫れを使ふことを知らぬからである、之れを使ふに道を以てせば、役に立たぬ物は一人もあるまじきぞ、今の泣男の如きも顔附は餘り立派ではないが、古への楠正成公は泣男に依り敵を欺き、遂に大勝利を得た事があるではないか、此の秀治が泣男に二人扶持を與へたのも、他日有用の時あるが爲めである、今に於てこれ〳〵と示すことは出來ぬが、併し今日でも、他所に不幸でも有つて悔みのお使者でも發する時には、彼こそ最も適當

天上界とは迷界の部に入つて居る。後の三乘は悟界の部で、人天は世間的、後は出世間的である。是くの如く其の人々の根機に依つて、人間には人道を說き、天上には天道を說き、聲聞、緣覺には小乘の法門を說き、菩薩には大乘の行願を說くといふやうに、御說き下されたのが佛法である。萬物の實相を大觀すれば、固より悟も無く迷も無い。然るに何に依つて迷情が生ずるかといふと、吾々の生命等に於て、生死の相を執し、又、國土の上に於て善惡淨穢の跡を認め、又、果報の上に幸不幸、貧富、智愚、賢不肖の假相があるのに執着するからである。若しも眞空實相の理を明らめ、般若の智眼を開發すれば、本來一實相にして、迷悟・生死・凡聖・苦樂等の區別が無い。迷悟凡聖の兩頭を飛び越えてゐる。其の實相を端的に開示せられたのが此の本文であります。故に是れ丈けの事を能く心得ておいてお聞き下されたならば、後は自然に御解りが出來やうと思ひます。

元來迷悟等といふは對待の上から、假りに出來た名目である。例せば病があるから藥が要る。藥は病に對して現はれた名である。ところが其の病なるものは四大の不調和から起つたもので、天地の間に是れこそ病の種だといふものはない。正眼より觀來れば、天地萬物は皆無病健全なのである。黴菌だのバチルスだのといふ徒ら物があるなれども、能く調和を保つてさへ居れば、彼等といへども決して害を與へるものでない。故に古人も『上等のお醫者は毒を以て藥となす、中等のお醫者は藥を以て藥となす、下等の醫士は藥を以て毒となす』といつて居る。人に依つて萬法皆藥ともなれば、諸法盡く病の種ともなる、今日の吾

無苦集滅道、無智亦無得、以無所得故、

【和譯】是故に空中には色も無く、受想行識も無く、眼耳鼻舌身意も無く、色聲香味觸法も無く、眼界も無く、乃至、意識界も無く、無明も無く、亦た無明の盡ることも無く、乃至、老死も無く、亦た老死の盡くることも無く、苦集滅道も無く、智も無く、亦た得も無し。無所得を以ての故に

此の一節は正しく諸乘を分別して、般若眞空の妙理を開示せられたのであります。諸乘を區別すれば、人乘・天乘・聲聞乘・緣覺乘・菩薩乘の五乘となります。人乘は五倫五常の道で、人の道である。人間より一段勝れたのが天乘である。つまり人間の向上したもので、佛はこの類の人の爲めに十善道等を說かれてゐる。聲聞乘と緣覺乘の二乘を小乘と云ふ。菩薩乘は大乘である。尤も小乘の中にも菩薩を立てるけれども、先づ佛敎全體をひつくるめていへば、菩薩を大乘と見ても宜い。小乘といふは自分だけの解脫を計り、自分だけの迷を離れることを目的として修行するのであるから、聲聞、緣覺は小乘である。小乘には其の修行にも限りがある。然るに一身を忘れ自己を擲っても普く衆生を濟度しやうとの大願行を發するのが菩薩で、菩薩の修行には際限がない。設ひ何萬年を經るとも之れで濟んだといふ限りがない。生替り死替りして、一切の衆生を濟度し、社會人類を救ひ盡さんと願ふのである。衆生界が無邊なるを以て却却盡すことは出來ない。從つて菩薩の行願は際限が無い。以上述ぶるところの五乘の中に就て、人道と

い。二十世紀の今日は、世界列國と共に、生存競爭の舞臺の上に立つて居るのであるから、人間諸般の原動力たる勤勉努力が最も必要である。勤勉努力に依つてお互が國運の發展を促がしてゆくことも出來る。して見ると此の世界全體が總て寶であるが、働く所に増して、働かない所に減つてゆく。昨日までの長者も明日の乞食と變らぬともいはれず、朝の乞食も夕の長者たることも出來る。かく假相の上では始終殖えたり減つたりして居るが、寶其の物は天地に充滿して、始めより増減はない。卽ち不増不減である。

以上述べたる如く、身體生命等の生滅、國土の垢淨、果報の上の増減、各々相同じからざるが如くである處から、其の假相に迷うて、此の世界は苦しみの世界である、淚の世界である、牢獄の如き世界であるといふ樣に感じて、悲しみ苦しむ人もあるけれども、決して之れは世界の罪でも、人生の罪でもなくて、畢竟お互が實相を見ることが出來ぬ罪である。故に般若の智慧力を具へて、諸法の實相を觀察すれば、此の世の中は決して、悲しい世界でも無ければ、苦しい世界でもない、此の世界全體が般若の相である、卽ち大智慧の相である。換言すれば佛身佛光明であるぞと說かれたのが、此の本文の御開示で、取りも直さず空理の大綱をお擧げになつたのであります。

是故空中無㆑色、無㆓受想行識㆒、無㆓眼耳鼻舌身意㆒、無㆓色聲香味觸法㆒、無㆓眼界㆒乃至無㆓意識界㆒、無㆓無明㆒亦無㆓無明盡㆒、乃至無㆓老死㆒亦無㆓老死盡㆒、

話的な話だ）昨晩、ガタッと奥の方で音がした樣であつたが、あの時、泥棒が來て妾の頭を盜んでいつたのだ、頭が無かつた日には、商賣ができぬ、こりやどうしたら宜からうと云ふので氣違になつて、市中を驅け廻り『誰か妾の頭を持つて來やせぬか、持つて來たなら直ぐ返せ』といつて騷ぎ歩いた。『お前の頭は胴の上にチヤンと附いて居るぢやないか』と云うて聞かせても承知せぬ。餘計に腹を立てゝ騷ぎ廻るといふ有樣で、手が附けられない。そこで或る人が、背後から、其の女の頭を拳を擧げてゴツーンと叩きつけた。すると『ア、痛い』といひながら頭を押へて『イヤア此處に頭がありました』と云つて、漸く靜まつたと云ふ話しがある。併し演若達多其の人は頭が無くなつたと云つて、處々を尋ねあるき、又、心配をして頭を叩かれてア、此所に有つたというて、漸く安心が出來たのだが、實相の上からは、頭が無くなつたというても、減つた譯でも無く、見付かつたというても增した譯でも無い。不增不減である。此の世界を苦と見るも樂と見るも、見る人の果報と觀念に依つて種々樣々である。

勉強力のある人から見れば、全國土が皆寶である、そこを田中鶴吉の詠んだ歌にも『苦にやむな金は世上にまいてある欲しくばやらう働いてとれ』、勉強力に依つては何でも皆寶とも黃金ともなる。牛溲馬勃、敗皷の皮、牛馬の大小便や、敗れ太皷の皮、土瓶の壞れ、傘の骨の壞れまでも、皆黃金とならざる物は一つも無い。勉強力に依らざれば黃金も瓦に同じく、人間の努力を用ふれば、瓦も亦黃金となる。山も金なり海も金なりだ。之に反して、働かずに居たんでは、どんな良田地の中に住んでも米一粒も取れな

隙間から辻堂の中へ淸らかなる影が差込んだ。互に相手を見ると二人共に頭が丸くて、一本の角も無い、毛も無い。あゝこれは鬼では無かつたかと心附き、能く見れば昨日まで一處に托鉢をして居つた道連れの坊さんであつた。凡夫界に於て、迷ひとか悟とか、鬼とか佛とかいふのも、實相觀の悟の眼を開いて見ると大抵はこんなものである。盡天地盡法界は實相である。一如平等のものである。萬象は齊しく般若の光明聚である。『垢かず淨からず』何ともすることの出來ぬ筈のものである。

## 果報上の實相

次に『增さず減らず』といふのは、果報の上から實相を示されたのである。果報とは或は貧乏であるとか、或は富貴であるとか、位が高いとか、位が卑いとかいふ樣な、貧富、貴賤の隔絶が皆、因業に報いた果報の相である。果報なるものも畢竟、一時の因緣に依つて現はれたる假の相にして、諸法實相の上から眺めて見たならば、增さず減らずである。

昔、印度の尸羅波城といへる處に演若多達と名くる女があつた。我國で申すと藝妓の樣な身分の者であるから、非常なる洒落者で毎朝起きると、極まつておつくりをする。或朝おつくりを仕やうと思ふて鏡に對ふと、何うしたものか自分の顏がその鏡に寫らなかつた。すると演若多達は少し足らない人間であつたので、その顏が見えないといふ所から、忽ちにして飛んだ神經を起して、サア妾の頭が無くなつた（お御

り難うございます』というて、夕飯を戴いて、さて出掛けやうとすると、『マアお待ちなさい、あの辻堂には鬼が出るといふ評判がある、和尚さんだから鬼位は恐しくないかも知らんが、後で恨まれてはならんから、一寸申上げて置きます』、鬼が出ると聞いて、急に厭やだといひ出すことも卑怯ゆゑ、『夫れは宜しい、鬼が出ても構ひません』といつて辻堂へ往つた。其の中に日も暮れて、彼是一時も經つたと思ふ時分に、足音が外面から聞えてくる。ハテ鬼めが大層早く來たな、お負けに外から來たやうぢや、内へ入れさへせねば大丈夫といふので、戸をしめて力一杯之を押へて居ると、外から來たのは一人の僧であつた。これも其の村へ來て泊めて貰はうと思うたが、斷られて已むなく辻堂へ來たのであつた。この僧も鬼が出るといふことを聞いて居るから、心配しながら來て、戸を開けやうと思ふと開かない。愈々此の堂には鬼が居るに違ひないといふので、一層力を入れて開けやうとすると、内からも一生懸命で開けさせまいと思うて押へる。互にウン〱と唸つての大鬪爭が始まつた。折角此所まで來て、鬼を恐れて逃げたといはれては佛様に對しても濟まず、村の者に對しても愧ぢ入る、斯くなる上は飽までも鬼を退治せねばならんと、勇氣を鼓して開けやうとする、内の僧は外から開け様とする力に驚いて、恐しい腕力の強い鬼が來たわいと、命懸けになつて開けさせまいとする、開けやうとする、到頭、辻堂の破れ戸が打壞はれてしまつた。戸が壞はれる途端、頭と頭がゴツーンと鉢合せした。而して二人は上に成り下に成りして格鬪した。とかうするうちに、双方の身體が壁に突き當つて壁が破れた。恰も一輪の明月が今や東の山の端へ現はれて、壞れた壁の

いでありませう。例へば五指を集めて一拳となす、(拳骨を示して)趙州和尚などは握り拳を突き出して、『有りや々々』というて一菴主と問答をしたといふが、此の拳は果して文明なりや野蠻なりやといふに、此の握拳には文明とも野蠻とも名が附けられぬ。垢とも淨とも名をつけられぬ。垢と淨との兩頭を飛び越えて居る。『善惡は法なるも法は善惡に非ず』と承陽大師のいはれたのはこれです。握拳といふものには、善性も惡性もない。所が、之をもつて人の頭をポンと叩きでもすると、直ぐ野蠻な手となる。亂暴な奴となる。野蠻の國、亂暴な奴とかいふ一世界を産みだす。又、之をもつて親の肩でも叮嚀に叩きますれば、あゝ感心な人ぢや孝行者ぢやといつて、直ぐそこに道德的世界が産み出されます。拳その物は文明とも野蠻ともいはれないが、是れが動き出して文明をも産み出し野蠻をも産み出す。佛を産み出したり鬼を産み出したりする。此の文野凡聖は畢竟假の相である。拳其の物は實相である。實相は善惡の垢淨を超越して居る。此の點からして、吾々は佛教に所謂『三界は唯心の所造』といふ處に、大安心の基礎を定めねばならぬ。世界に有らゆる萬物は總て唯心の所造である。加賀の千代女が『千なりや蔓一とすぢのこゝろより』と詠んで居るが實にその通りである。

お經文の中に、かういふ話しがある。或所に一人の僧が在つて旅行してゐる中に日が暮れたから、或村の或家へ往つて、一晩の宿を求めましたが、一人旅する人は泊められぬとの挨拶であつた。困つて居りますと『此の村端れに一字の辻堂がある、其所へ往つて寢みなさい、手前で夕飯を差しあげるから』といふ。『有

を直覺的に超證するのが禪門の大悟である。獨り禪宗ばかりでない、眞宗や淨土宗は信仰門から這入るのであるが、己れを忘れて天地の眞理たる佛心に合體して、無量壽といふ佛の大光明に接觸してゆく處に信仰が決定する。是れが長生不死の御祈禱である。和尙は此の理を諄々と示されたといふことである。之を生ぜず滅せずといふのである。

## 國土身分上の實相

それから『垢かず淨からず』といふは國土及び身分上に就て示されたのです。淨土門では佛の世界を淨土といひ、凡夫の世界を穢土といふ。卽ち現在吾々の住して居る苦痛逼迫の多い世界が穢土で、一切の苦を離れたる世界が淨土がある。是の如く此の世界、身分の上から見れば、垢と淨との二つがある。之を現代的にいへば、野蠻と文明との意味にもなるが、世界の實相その物を究め來れば、本來垢淨の別は無い。卽ち淨穢不二であります。

例へば國家の要素は個人の身である。個人相集りて國民的性質を造る。國民の强弱、貧富、智愚、賢不肖に依つて、文明であるとか野蠻であるとかいふ價値が定められる。又、あの人は人格が高いとか、此の人は人格が劣つて居るとかいふのであるが、その主體たるお互の身體を分析して見るに、骨であらうが、肉であらうが、皮であらうが、元來定相は無い。是れが野蠻の皮だ、之れが文明の肉だといふ性質はな

尚は笑ひながら『如何にも承知した、然らば百五十歳まで佛様に願つて見るが、其の代り百五十一歳の元日に死んでも苦しう無いナ』、『マア〳〵待つて下さい、百五十一歳で死んで宜いといふ譯ではありませんが、百五十歳まではきつと死なゝい様にしたいと願うたのです』、『夫れぢや前の話しと同じ事ぢやないか』、『マア百五十歳と一應やつて見たんですが、それ以上ならば尚更結構です』、『そんな飾り語をいふには及ばぬ』、『だつて、モット澤山願はれませうか、きまりが惡いなア』、『何に、きまりが惡い事はない、お前が望み通りに云つて見なさい』、老人又もや考へて『然らば三百迄願はれますまいか』というた。面白いものです、人の欲望といふものは皆こんなものです。和尚は笑ひながら『思ひ切つて三百とは如何にも無慾の人だ、縱ひ三百年壽命を保つても、鶴の壽命の三分の一、龜の齢の三十分の一にも滿たないぢやないか、そんな切り刻んだ小刀細工の御祈禱をするよりも、寧ろ死なゝい御祈禱をするが宜いぢやないか』、老人は喫驚りして『そんな御祈禱が願はれませうか』、此の時、和尚は形を改めて『抑々釋迦牟尼如來のお説きになつた一切藏經は、皆な是れ死なゝい御祈禱であるぞ』というて、不生不滅の理を説て聞かせられたそうです。

死なゝい御祈禱といふは、つまり實相に歸入することである。諸法の假相は縱ひ如何程に變化するとも、其の本體に至つては決して生死はない。常住にして生滅の相に預らぬ。本來生滅を飛び越えて居る。即ち不生不滅の本體是ぞ宇宙の眞理である。天地の大道である。此の宇宙の眞理、天地の大道といふもの

或時、和尚の所へ八十歳ばかりになる老人が尋ねて來て『私は本年八十歳になりますが、此の間、子供や孫が多く集つて八十のお祝をしてくれた、多數の人が私の年にあやかりたいとて、お盃を頂きたい、お盃を差上げたい、貴翁の年迄生きたい生きたいと、來る人も來る人も同じことをいひますので、考へて見ると何んだか壽命の行留りまでいつたやうな氣がして、誠に心細くてなりません、どうか私の爲めに長壽をする御祈禱をして頂きたい』といつた。良寛和尚はニツコリ笑つて『如何にも承知致した、御祈禱をして進ぜやうが、全體いつまで生きる積りかな』、老人は頭を掻いて『左樣でございます、幾歳まで生きたならば宜からうか知らん、實はそこ迄は考へて來ませなんだので』といふ。そこで和尚『お前の命ぢやないか、大概望みがあるだらう、いくつまで生きたいのか』、『そうですなあ、幾つまで生きたなら宜いか知らん、百まで生きると、子供が幾歳に成つて孫が幾歳になるから、少しは都合が好いやうな氣がする、如何でございませう和尚さん、百歳までゝは……』、『誠にお前は慾の少い人ぢや、百というても、たつたモウ先が二十年しか無い、百まで生きさへすりや、百一歳の聲を聞いたら直ぐ死んでも差閊ないか』、『イヤそういふ譯ではありません、マア待つて下さい、百一歳で死んで宜いといふ譯ではないのであります、只一寸百まで生きて見たいと思うただけでありますが、モット願はれませうか』、『イヤ萬一、佛樣の御許しが無ければ是非も無いが、佛樣の御許しが有るか無いかは知らんが、本當の望みをのべて願うがいゝ』、老人又頭を掻きながら『如何でありませう、チト欲張つたやうですが、百五十歳まで願はれませうか』、和

が、其の先生が越後へ來り、與板町の三輪といふ家に滯在して、金屛風に書をかいた。其の後へ良寛和尚が來られたから、今度鵬齋先生が金屛風に書をかいて下されたから見て下されといつて其の屛風を出し、一間の內で和尚に見せ、自分は外の座敷へ行つたが、其の後で和尚は熱心に之を見て居て、頓て床の間に在つた硯箱を取り出して、鵬齋の書いた文字をスツカリ訂正してしまつた。そうして、主人から小言をいはれてはならんと思つたかして、ソコソコに逃げてしまつた。後から主人が來て見ると、折角書いて貰つた金屛風が、全で反古同樣になつて居るから、大に驚き且つ非常に腹を立てた。夕刻に成つて鵬齋が歸つて來たから、主人は早速『今日先生の留守の間に狂人和尚が來て、斯ういふ惡戯をしました、誠に先生に對して濟まないことを致しました』といつて謝つた。鵬齋はつく〴〵とそれを見て居たが、非常に感に打たれ『今、日本に於て、此の位筆力の確かな人は恐らく外に有るまい』と感歎措くことなく、道の五六里もある良寛和尚の五合菴を、その夜尋ねゆき、一升樽を擔いで訪れた。すると和尚が鵬齋に遇はれて、『お前は可なりに書が出來る、先々感心な人だ、折角尋ねてくれたから、今日はお前の爲めに御馳走をしやう』といはれたが、器具といふ物はサツパリ無い。茶碗もお椀もたつた一人前しか無い。そこで一つの椀に汁を盛り、一口づゝ飲み廻しをしやうといふのであつた。是れには先生もほと〳〵弱つた。御飯は未だよいが、お汁には愈々閉口したといふ。併し、其の晩は其所に泊つて、鵬齋は草書の口傳を良寛和尚から聞いたといふことである。良寛和尚は、かほど迄に書には堪能な人であつた。

其の內、初めに『生ぜず滅せず』とある此の生滅とは、生死といふも同じである。卽ち人生の一大事實をいふたのである。吾々お互人間の身の上に就て考ふるに、古往今來、生れたり死んだりして居る。如何なる聖賢、又は英雄も之を免るゝことは出來ぬ。其の生るゝを見ては喜び、死するを見ては悲む。人間世界に於ける最も悲むべき事といふは死の問題である。可愛い子に死なれては涕を流し、大事な夫に死なれては涙を流し、大切なる親に別れては歎き悲む。人生の悲劇は多くは死の問題より起るのである。而して生滅の相は、必ずお互の生命にばかり限つたものではない。財産の點に就ても、出來た時は嬉しいが、無くなつた時は悲しい。如何なる財産でも生じた上は必ず滅する時節がある。假相から見れば、天地萬物皆生滅變遷を免れぬ。併し是を實相の上から觀たならば、本來生滅は無い。卽ち不生不滅である。生滅と思ふのは變化の幻相たるに過ぎぬ。此の理が解れば。お互は此の儘の無量壽佛である。佛法の安心は全く玆に成立つ。

### 良寛和尚の長生不死の祈禱

越後國の良寛といふ高僧は、今より凡そ八十年ばかり以前に亡くなつた曹洞宗の名僧である。學者であつて書家で、詩歌に巧みで、加ふるに其の境界が頗る酒落で、凡骨を脫して居る。越後の國上といふ所の五合菴に閑居して居られた。是れが良寛和尚の菴です。一日に米が五合さへあれば、何にも外に望みは無いといふ誠に無邪氣な人であつた。其の當時、江戸に於て有名な書家で、龜田鵬齋といふ先生があつた

いふ。併し假相といひ實相といふも、畢竟ずるに是れ一法の兩面なれば、一面から見ると假相であつて、一面から見ると實相になる。故に佛は諸法はそのまゝ空相であるぞ、眞空實相であるぞ、是の諸法を破壞し打潰して、始めて眞空實相となるのではないぞ、是の諸法の現はれて居る儘が眞空實相であるぞ、と斯うお說きになつたのです。

例へて見ると、私共が夢を見て居る時の如き、夢の中に色々の境が見える。從つて色々の分別も起る。敵も見える味方も見える。悲しいこともあれば苦しいこともある。併し目の醒めた人から見ると、夢想も夢境も其の儘が假の相で、そつくり眞空である。夢の中にて御馳走を貰ふて、これは結構な物だ、旨いものだと喜んで、戯言をいつて食ふても、それは其の儘無所得にして空である。或る酒嗜きの人が上酒を貰つた夢を見た。非常に喜んで早く燗をして飲まうと思うて、家内に之を命じ、未だお燗が出來んか出來んかといふて催促する中に、目が醒めた。キヨロキヨロと其處等を見廻しても、今迄有りしと思うた德利も酒も何にもない、あゝ忌々しいことをした、旨い酒を飲み損つた、かういふ事なら寧そ冷で飲めばよかつたにといつたそうである。縱ひ冷で飲んでも、矢張夢であるから、飲むが飲むにならぬ。飲む儘が飲まないのである。世の中は實に大夢なりと諦らめて見ると、種々の境を緣ずるのも、皆夢の中の夢の戯れで、皆假相です。因緣所生の諸法は、千差萬別の相を現じてゐるが、其の儘無自性にして眞空である。其の眞空の實相を『不生不滅、不垢不淨、不增不減』と御示しになつたのです。

天地間に、色心の二法から、是の如く森々羅列して差別の相が現はれて居る。吾々が眼に色を見、耳に聲を聞く、その色に質像の殊なるあり、その聲に苦樂の別なるあり、此の如き差別の相の其の儘が畢竟空であると説く、これが即ち眞空である。吾々が耳に聞く所の聲や、目に見る所の姿は、出たり引つこんだり生滅變化して暫くも停まらぬ。例へば人間も死んでしまへば、何所を尋ねても再び其の人にお目に掛れない。死は暫く措き、現に生きて居る吾々でも、刹那々々に變化して往く。十年以前の吾れに遇はうとしても遇ふことは出來ぬ。昨日の吾れといふ者にも遇ふことは出來ぬ。人間の身體は時々刻々に變遷消磨して居る。今朝の私の身と唯今の私の身とは既に變つて居る。講演の始まつた時の私と、唯今講演の途中に在る私とは、最早、幾多の變化を經て居る。唯其の變化の狀態が極めて細かいから、肉眼では見えない迄である。して見れば昨日の吾れといふものも無く、今日の吾れといふものも無い。又、唯今の吾れといふものもない。始終變々化々して居るに依つて、之れが吾れであると認むべき固體が無い。故に吾々は、我れとか彼れとか、色とか心とかいふ、凡てを名けて假相といひます。それらは丁度大海の水面に現はれる波の樣なものです。波は靜つたり起つたり、靜つたり起つたりして、大波もあれば小波もある、男波もあれば女波もある、始終變化して止まることは無い。即ち假相である。其の假相の方面からいへば、實に世の中は千變萬化に相を異にして居る。『世の中は三日見ぬ間の櫻かな』三日どころではない、一日の間にも一時の中にも、變化を來たして居る。併しながら眞空の本體より觀ずれば少しも變易せぬ。其の變易せぬ本體を實相とも

# 舍利子、是諸法、空相、不生不滅、不垢不淨、不增不減。

【和譯】舍利子、是の諸法は、空相にして、生ぜず、滅せず、垢かず、淨よからず、增さず、減らず

これは『分別諸乘分』の第二段の文でございますが、中に就いて此の本文は心經一部の大綱骨髓を示されたものである。故に語を改めて舍利子と再びお呼び出しに成つた。これは凡て印度の風である。日本でも演說などを致します時は、『諸君』と呼びかけてから演說をする。印度の說法の仕方が矢張そう云ふ體裁である。向ふの相手と成るべき聽者たる舍利子を呼び出して、それから御說法になるのである。

『是の諸法は空相にして』といふ此の諸法とは廣くかかります。有形・無形の總てを諸法といふ字でおあげになつたのです。前には色心の二法に就て一通りお話致した。物質には形があるが精神には形が無い、其の形の有る物無い物を引つくるめて、諸法と申されたのである。五蘊皆空の理を照見すると、諸法は本來皆空である。空こそは是れ諸法の實相である。之を眞空實相と云ふ。

眞空とは諸法を拂ひ除けたる何にも無い、脫空の空では無い。卽ち有に對するの空には非ずして、諸法の有りの儘がそつくり空なのである。卽ち有を離れざる空、色卽ち是れ空といふその空で有ります。

說いて居る。併し理の一方のみを說いただけでは、空論たるに過ぎぬ。元來、本體があれば必ず相がある。相があれば作用といふものが、必ず現はれねばならぬ。これが萬物の妙德である。之を佛事ともいふのである。鶯が春になるとホウホケキヤウと啼て居る。ホケキヤウと啼いたからとて、鶯そのものは別に人を樂しませやうといふ様な考があるのではない。ホウホケキヤウと啼くのは卽ち鶯の天然自然の妙德が現はれたのである。親が子に對する情も、子が親に對する情も、亦天眞の妙德であるから、云ふに云はれぬ味のあるものです。其の根本は元來平等であるが、其の平等の儘が差別して居る。而して其の差別の上に人間道德の標準なるものが現はれて來る。夫れを空卽ち色、平等卽差別といふのである。獨り此の肉體ばかりでない、心の作用も亦其の通り平等卽差別であるから、『受想行識も亦復是の如し』といふのであります。受想行識は前に演べた通りです。是を詳しくいへば『受想行識は空に異らず、空は受想行識に異らず、受想行識卽ち是空、空卽ち是れ受想行識』といふべきものです。それを『亦復是の如し』と略して云ふたのである。前の色空の說に準じて知るが宜い。

要するに、觀世音菩薩が舍利弗尊者に向つて、五蘊皆空の眞理をお說きになつて、これから更に進んで三乘五乘等の佛敎全體に涉りて、眞空の道理を開示せられ、後に吾々がこの世の中に在りて、眞空妙有の眞理を土臺として、般若の妙行を現はすべき法門をお說きになつて、終りに眞言陀羅尼を以て結ぶと云ふが心經一卷の組み立てに成つて居ります。

娘がいつたのを親父さんは聞かなかつたと見え『娘やお前には斯んな事が分るまい』といふ。娘はそれに答へて『いや妾にや解り過ぎますよ』と云つたものですから、親父さんは驚いて、復た白隱禪師の許へ飛んで行き、その樣子を物語ると『夫れは面白い奴ぢや、老衲の處へ連れて來い』と云はれた。親父さんはお察を連れて行きます。白隱禪師は獨得の手段を以つて十分に接得なさる。お察は本當の禪宗流に育て上げられるといふことになつたのであります。

それですから、お察の見地の高く氣鋒の鋭い事は、當時の立派な禪僧も及ばぬといふ程であつた。併しお經文をお尻の下に敷いて、之を平等眞空の妙味と思ひ、得々として居ましたといふが如きは、全く一の禪病に罹つてゐたのである。動もすると、お悟を開いた者の中には斯う云ふ眞空平等の一方に片寄る盲目漢がある。人間界の階級に對しても、佛教では無論一如平等の理を說きますが、それが爲に人世の秩序を破壞する樣な事はないのです。天皇陛下に對し奉つては絕對に尊重奉戴の誠を盡し、陛下の爲めには飽までも忠義を勵みて報公の力を致すといふ健全なる國民道德が、平等主義の上から自づと現はれて來るのです。『君は君たり臣は臣たり』といふ差別の一方にのみ執着しては、上下心を一にすといふ眞の融和は出來ぬ階級の中に無階級の理が循環してこそ、國家を維持し且つ發達させてゆく事が出來るのである、佛教に說く所の體・相・用と云ふことは其の道理を說明したものです。體は本體で平等である。相は姿であるから差別、用は即ち作用であるから平等差別圓融の妙德である。本體は根源の理である。今日の哲學者も之を

めのうちは自分の願望、つまり欲張り根性から、佛壇に向つて朝夕之を讀んで、信心を凝して居たが、その中に所謂自己催眠にでもかゝつたと云ふ樣な狀態になつて、自然と精神が寂靜に歸し、知らず〳〵坐禪の狀態に成つたと見える。始終御經を讀んで居る内に、彷彿として萬物の實相は本空なりといふ觀念に入つた樣な鹽梅になつたものと見え、所謂一種の空見に墮在したのである。今迄讀んで居た高王觀音經を、何時の間にか自分のお尻の下に敷いてしまつた。夫れを見たる父親は驚いた『お祭や、お前はお經を尻にして居るではないか』『はいお經を布いて居りますが、妾のお尻とお經とは何方が有難いのですか』父親は驚いた。『これはマア飛んだ事になつた、大事な娘が發狂した、困つたことであるわい』と、直ぐ白隱禪師の所へ往つて是れこれでありますと話をすると、『夫れは發狂ではあるまい、一生懸命になつて御經文を讀んだ爲に、自然と坐禪の工夫の理に契うて、何か心に悟る所が有つて、所謂平等觀に入つたものであらう、平等智の眼から見ると貴い物も賤しいものもない、即ち絕對である、兎に角、老衲が試驗をしてやるから、此の歌を女に見せるがよい』と云つて、與へられたのが、『暗の夜に啼かぬ烏の聲きけば生れぬ先きの父ぞこひしき』といふ一首であつた。父親は益驚いた。『啼かぬ烏の聲を聞くなんて、是は全體何う云ふ事柄です』、『夫れはお前には解らん、娘に見せたら解るであらう』親父は面喰つて了うた、娘も狂人に成つたが、和尚さんもキ印だわい、どうしたら宜からうと思ひながら、持つて歸つて、娘に見せると、娘はニツコリ笑つて、『白隱も亦恁麼に道ふことを解す』、道は白隱禪師ぢや、中々氣の利いた事を云はつしやる、と

師のお弟子に成つてしまうたことがある。仁者は敵なしとはこれを云ふのでありませう。

## 白隠禪師とお察婆

吾々お互は兎角、此の色相に迷ふ爲に、色々の煩惱を起して煩悶苦痛をするのである。されど色相一切は元來其の儘空であると諦らめたらば、前話の如き逆境に向つても、一念の迷執も起らぬ樣になるのである。尤も唯空といふ一方になると、人生に處しても全で枯木のやうなものになつて了ふ。禪僧などでも、唯空の一方に片寄りますると、全く世の中を馬鹿にしてしまう。從つて世を利するの活動が無くなる。盲目坐禪になつて、見識一方に傾き、殆ど非常識に陥いる事がある、一例を申すと、白隠禪師の門下の有名なる彼のお察婆さんなど云ふ人は、晩年には立派な修行が出來たでもあらうが、始めの中は全く盲目坐禪の一人で、空見外道の魔境に陷つてゐたのである。白隠門下に於て、其の見識絶倫にして、天下の堂々たる雲水も遣つ付けられるといふ程の、機鋒嶮峻な婆さんであつた。

此の婆さんは原の庄司某といふ人の娘で、十六の年に獨で考へた。自分は別に立派な容貌に生れたと云ふのでもなく、又、財産家の家に生れたといふ譯でもないが、婦人と生れたからには何れ夫を迎へねばならぬ。が、何うか十人並に勝れた人を夫に持つて、生涯を安心に暮したいと思ふが、これは自分の力にも及ばぬ事なれば、佛樣のお力を仰ぐより外は無いと云ふので、高王觀音經といふお經を熱心に讀誦した。初

さんに對して、斯樣な亂暴をするとは、捨置き難い奴であります』、國師はニッコリ笑つて『併しこれが佛法の修業ぢやないか、口先ばかり幾等忍辱行などと云つても、かういふ場合に堪忍が出來ぬやうな事では、役に立たぬでは無いか』といひながら一首の歌を詠まれた。『打つ人も打たるゝ人ももろともに唯一ときの夢の戯れ』、これが『色は空に異らず』、『色卽ち是空』を得た人の境界である。打つ者も打たるゝ者も、皆一時の夢の戯れであると諦めが附いたならば、斯う云ふ逆境に臨んでも、泰然不動である。顏色を變へ唇を顫はし、拳を握り怒りを漏すと云ふ樣な事は無くなる。國師は笑ひを帶びてかく仰せられた其の一首の歌に依つて、流石のお弟子も腹を立てる譯にもいかぬから、漸く氣を靜めて控へて居る。其の中に船は向ふへ着く、國師は向ふの河岸にて、水を掬うて血汐のにじんだのを洗つて居られると、其の傍へ來て頭を下げた者があるから、能く見れば唯今の武士である。此の武士は又何か云ひに來たのか、執心の深い奴ぢやと思召してお出でると、武士は頭を砂の上にすり着けて、『貴師は一體何れの御僧で在するか存ぜぬが、實に感じ入つたる尊きお方である、先程よりして粗言を申上げたるのみならず、お頭に疵まで遺したる無禮の段は、御慈悲にどうかお許しを願ひたい。私は佛法の信仰も無く神佛を信ずる事も知らぬ大惡人で、貴師の如き名僧に向つてすら、言語に絶えたる無禮を加へました。それにも關らず、貴師は少しのお憎しみを抱かせられる樣子もなく、先刻の和歌を御弟子に示されましたのを見て、私は徹骨徹髓、懺謝悔悟を致しました、今日よりは御弟子の一分に加へて下され』と云つて、涙を流してお詫に及び、國

たが、生醉武士の事であるから、誰れとても咎める者もない。夢窓國師も隅の方へ小さくなつて居らるゝと、彼の武士は臭い息をしながら、斯うバタ〳〵と動いて然もヨロ〳〵して居る。『そう動きなさると船が動搖する、小船の事であるからお靜かに願ひたい』と仰しやると、其の武士は『狭くて困るから邪魔になる奴は投り出せ』と暗に夢窓國師にあてゝ云ふ『こゝに居る坊主などは外へ投り出しても構はぬ』隨分亂暴な事を云ふんです。夢窓國師はこれを制し『貴公はそう仰しやるが、少しの間我慢をなされば、直ぐに向ふ岸へ着きます、私どもはハヤ一時ばかりも船待ちをして居たのであるから、どうか暫くの間お靜かにして居て下され』と云はれた。すると『何、靜かにして居てくれい、喧しい、己れは靜に出來ない性分だ、出ろ〳〵』と云うて聞かぬ。國師も、隨分亂暴な人間だと思ひながら、別に逆はずに、知らぬ振で居られると、彼の武士は『ナゼ出ぬか』と云ひつゝ扇子を以て國師の頭を打つた。彼は何處かの乞食坊主でもあらうと思うたものであらう。國師の頭が少し切れて血がにじんだ。其のお傍に居た國師のお弟子なる一僧は、非常な腕力家であつた。元は北面の武士で劍術が出來て腕が強い。先刻より此の有樣を見て居たが、此の時憤然として怒りを發し『お師匠樣、今日は御免を蒙ります、此の樣な武士を活かして置けば、旅人の妨げになります、最早堪忍が出來ません、私は天に代つて、この樣な武士を引き裂いてしまひます』全で蛙でも成敗するやうな勢ひである。國師はにじんだ血汐を紙で以て拭きながら、顔の色も變へられぬ。『お前は此の位な事で腹が立つのか』、『ぢやと申して餘りと云へば、傍若無人の振舞であります、御師匠

來空である。して見れば、分析をしないでも、其の儘空であるといはねばならぬ。此の理が解れば、自然に無我の境界に達せらるゝのである。

## 夢窓國師の教訓

夢窓國師といふは、一に七朝の國師とも云はれ、足利時代にあつて、七代の天子様に仕へ、國の爲に力を盡された學德兼備の高僧、京都嵯峨の天龍寺の御開山である。かやうに國家に取つても大切なお方であるから、足利の御殿へお出でになる時には、始終駕籠でばかり御昇降になつたと申す事である。併し固より禪僧の事であるから、私に旅行でもなさる時には、依然として雲水の御姿である。或る時、一人の御弟子を連れ、信州の中野（元お住居になつて居た所である）に歸らうと思うて、都を後にして東海道をお下りになり、天龍川へ差掛られたが、此の天龍川は大井川・富士川と共に東海道の三大河の一つである。大河の事であるから能く船待ちをさせられる、運がよくても大抵は、一時や二時は船待ちをする覺悟をせねばならぬ。大水でも出たなら、事に依ると二日三日も船待ちをする事があつた。夢窓國師は一時ばかりも船待ちをして、漸く船に乘られた。所が、ホンの小さな小船であるのに、客は一ぱい乘り込んで居る。船頭は棹を取つて、今船を出さうとする所へ『オ、イ〳〵、其の船待つた』と云ひながら走つて來たのが一人の武士である。何所で飲んだか非常に醉うて居る。モウ乘込む場所の無い小船の中に、無理無體に乘つ

咲き亂れる櫻の木を、寸々に打割つて見ても、これぞ花の種と覺しき物は更にない。此の頃中は時々大風が吹いたり、大雨が降つたりして居りますが、古歌に『吹くときは音さわがしき山風も吹かざる時はいづちゆくらむ』とある。天地が震動するかと思はるゝ程の大風でも、止んでしまへば、今迄の風は何處へ行つたであらう、世界中を探して見ても、風の在り家といふものはない。唯空氣の波動する力に依つて、暫く風と稱するものが現はれるのであつて、畢竟するに風の實體は無い。卽ち空である。空ではあるが、只今は風は少しも無いと云ふ中に、斯うして扇子を使へば、忽然として現はれて來る。卽ち或因緣の力に因つて、忽ちに萬法生起する。

## 空は色に異ならず

たが今風が出て來てからと云ふて、その風を取り留めやうと思うても、もう風は無くなつて居る『色は空に異らず、空は色に異ならず』であります。有るかと思へば無い、無いかと思へば有る、是れが天地萬象の實相である。『世の中に我が物とては無かりけり身をさへ土にかへすべければ』と古人も云うて居る。吾々の身は我が物に相違ないと思へばこそ、此の身を可愛がつて居るけれども、死んでしまへば、燒けば灰、埋めば土となる。卽ち空より出でゝ空に歸るのである。これを『色卽ち是空、空卽ち是色』といふ。卽は相卽とも熟字して、そつくり其の儘と云ふ意である。斯く今日お互の身を分析して見ると、其の自性は元

に譯すると『子』である。舍利は印度語、子は支那語である。梵語と漢語と兼ね擧げて一つの名となつてゐる時、これを梵漢兼擧といふ。舍利といふ語を支那語に飜譯すると鷲といふ鳥の名である。これは何ういふ鳥か私は見た事が無いから、確かと分りませんが、目附きの鋭い鳥だそうです。舍利弗尊者の阿母の目附きは、鷲と云ふ鳥に似て居る所から舍利と名づけたとある。其の舍利の子であるから、舍利子と稱した。隨分滑稽な名の附け方の樣であるが、彼國では別に珍らしくも無いのである。此の舍利子は非常な大智慧者であるからして、心經をお說きになる時に當りては、尊者を正機の代表者としてお呼び出しになつたものであります。

## 色は空に異ならず

『色不レ異レ空ニ』云々の二十四字は五蘊皆空の理を、更に繰返して、叮嚀にお說きになつたに過ぎない。色とは五蘊の中の色である。お互の此の肉身が卽ち色である。お互の肉身には、いふまでもなく手もあり、足もあり、眼もあれば鼻もある。四肢五體がある。事實上、慥に現在して居る。が然し佛敎の上から、此の肉身の根源實性を穿索して見ると、皆な極微の所成にして、畢竟之れが自分の肉身であると云ふ永久に固つた自性といふ物は無い。能く其の本源を究むれば、終に空といふ處に歸着する。故に『色は空に異らず』と云ふのである。『櫻木を打ちわりて見れば何もなし花のたねとは何を云ふらむ』年々歲々美しく

## 分別諸乘分

舍利子、色不異空、空不異色、色卽是空、空卽是色、受想行識亦復如是。

【和譯】舍利子、色は空に異ならず、空は色に異ならず、色卽是空、空卽是色なり、受想行識も亦た復た是の如し、

是から以下が第二段の『分別諸乘分』である。舍利子とあるのは多勢のお弟子の中から、特に舍利子と呼び上げての御示しである。

### 舍利子の意義

舍利子は、釋尊の十大弟子の中、智慧第一のお方である。般若といふ佛の大智慧をお說きになるのであるから、智慧第一のお方を代表者としてお呼び出しになつたものである。併し其の御示しが普く一般の御弟子に對して居ることは勿論です。舍利子は、また舍利弗と申します。印度の語で『弗』といふ字は支那

みこそ、吾々に人生無限の樂しみを與へて呉れる所の増上緣となる。斯くの如く其の苦しみが吾々をして眞箇の人物たらしめ、且つ鍛錬の力を與へて修養に資してくれる世の中であるにも拘はらず、苦しみにあらざるものまでも苦しみの部に加へて、それに束縛されて、限りなき煩悶を起し、自ら此の一生を不平不滿の間に送ると云ふは、全く迷の甚しきものである。

觀世音菩薩は觀念自在の力に依つて、自ら其の苦惱を離れ、而して其の觀念自在を運用して、一切衆生の苦惱を救ひたまふ。之を『一切の苦厄を度し給ふ』と云ふ。厄は災厄厄難と熟字して、矢張苦しみの狀態を云ふたのである。『度』とは濟度の事で、渡すといふ意味である。迷妄の此の岸から安樂の彼の岸に渡すのである。卽ち吾々の迷を轉じて悟を開かしめ、苦しみを離れて樂みを得しむると云ふが『度』の意味である。之が心經の大眼目で有ります。轉迷開悟、離苦得樂と云ふ二つの目的を達して行くには、以後の本文に依つて研究して觀察することが必要である。

以上の生老病死の四苦に、愛別離苦等を合せて八苦といふのである。併し今日の吾々お互は、其の心に迷惑顛倒の情があるために、苦しみなき處に自ら求めて苦しみを招いて居る場合が多い。此の迷情を離れると、今迄は苦しみと思つて居た事も、却つて我れに快樂を與へて呉れる因緣となる場合が多い。

皆さんの御承知なる山中鹿之助と云ふ豪傑は、常に北辰妙見を信仰して居られたが、何う云ふ願をしたかと云ふと『吾れに七難を與へ給へ』と云ふのであつた。多くの人は『何うか諸の災難を遁れしめ給へ』と祈るが當り前であるに、却つて七難を與へ給へといふのは、自分にどの位な力があるか、己れの精神氣力を試したい、自分が自分に鍛錬を施したい、所謂可愛い子に旅をさせたいと云ふ希望であつたのです。非常の大人物に成るには、自分の方から求めて、艱難の中へ飛び込んで行きて、其の艱難に打勝つて始めて立派な人間になる。それであるから、吾々の精神の持方に依つては、此の苦しみのある世界が、頓て吾々をして立派な人物たらしめ、此の思ひの儘にならぬ世の中が、却つて吾々に非常なる修養の力を與へてくれる。名を萬世に遺す程の英雄豪傑や忠臣義士は、決して平坦々の生涯を辿つて來ては居らぬ。何れも非常な逆境に立ち、非常な艱難に處して、始めて英雄ともなり、豪傑とも成り、忠臣義士ともなつて、名を後世に現はして居る。それであるから今日の人でも、自己の人格を高めやうと云ふ心懸のある人は、自分は固より安樂なる位地に在つても、態々求めて艱難にぶつゝかつて居る。別段に役目を勤めて働かんでも立派に生活の出來る人々が、國の爲めには一身を犧牲にして、態々苦しみを求めて居る。其の苦し

ぬ。縦ひ親子兄弟でも心の合はん者がある。其の時は自分が十分修養に力を盡してゆけば、縦ひ性質の合はない人と居ても、存外親密に交際をして行く事が出來るものです。其の苦しみを苦しみとして諦むる事能はず、つまり精神上の修養を積まぬ時は、親子兄弟の間柄でも始終喧嘩が絶えないものである。之を怨憎會苦といふ。

第三は求不得苦である。此れは求めて得ざる苦しみと云ふので、是も人として免るべからざる苦しみである。これが欲しいと思うても手に入らぬ事がある。之を仕遂げやうと思うても出來ぬ事がある。人生萬事意の如くにはならぬ。世の中の煩悶などゝいふものは多くは之れから起つてくる。『朝夕の飯さへこわしやはらかし思ふまゝにはならぬ世の中』之れが求不得苦である。

それから第四が五陰盛苦です。これは此の肉體の苦痛の事である。五陰とは先に申した五蘊と同じ意味で、此の體のことである。お互は常に此の體の爲に始終、種々の苦痛を受けて居る。體の苦しみと云ふは却却範圍が廣い。或は情慾に動かされ、或は飢渴に苦しめられ、寒熱怖畏等殆ど窮り無き程です。老子が『吾に大患あり身あるに因る』と云つたやうなもので、體が多くは苦痛の土臺となる。であるから氣の早い人は、此の體が無くなつたら苦しみは無くなるであらうと思ふて、世の中を逃げ出さうと云ふやうな卑怯な者も出て來るが、これは大變な誤解である。體は苦本とは云ふものゝ、一面から見れば一切安樂の淵源である事を知らねばならぬ。

のです。

次に、老苦とは衰弱してゆくことの苦である。石でも嚙める様な達者な齒をもつて居た人が、僅か三十年か四十年の間に、豆腐も碌々食はれないと云ふ様な事になる。それから人はまた病氣をする。即ち病苦を脱れられぬ。人は病氣の容れ物といふ位で、どんな人でも免れぬ。而して結局、人は死と云ふ苦しみに逢着する。以上いふ如き生苦、老苦、病苦、死苦、これを人生の四苦といつて、吾等の免れることの出來ないものだと申すのです。

それから更に人生には四つの苦しみがある。その第一が愛別離苦である。可愛い子供に死に別れ、大切な親に死に別れ、或は兄弟朋友に生き別れする悲しい思ひである。どんな英雄豪傑でも、この愛別離苦は免れない。釋迦牟尼如來の御弟子の阿難尊者などは、二十年も佛の御傍に侍者として佛法修業をせられた御方で、最早、凡情を離れたお方ではあるが、釋尊御入滅の時は殆ど人事不省になるまで悲まれた位である。

第二は怨憎會苦である。之れは自分が厭やと思ひ、憎くらしいと思ふ人にでも廻り合うたり、又は一處になつたりせねばならん苦である。天地の氣候の上からでもそうです。熱い寒いは餘り人間の喜ばぬものなれども、何うしても暑い目にも寒い目にも遇はねばならん。東京あたりでは暑い時は避暑に出掛ける、寒い時は避寒に行く。暑いと云つちや逃げ出す、寒いと云つちや逃げ出す、人間もそこへ行くと、弱いものです。寒いも人の好まぬ所、暑いも人の好まぬ所なれども、其の厭やなものにぶつゝからにやなら

と同時に色々の苦しみが現はれて來る。第一に此の身が自分の思ふやうにならぬ。立派な身に生れたかつたと思うても仕方がない。財産家のうちへ生れゝば宜かつたと思うても之れもかなはぬ。又、幸に財産家の子供として生れて來ても、身體が弱かつたりして、却々思ふ通りな生れ方はならぬものです。先年亡くなられた岩崎彌之助君などは、御承知の通り一代のうちにあの通りの大身代に成つた人です。一時身體の惡かつた時、大隈伯が、『邸園を造つて園藝を樂しんだならば身體の爲に宜しからう』と勸められた事があるとやらで、高輪に五萬坪もある大きな邸園を造つて、其所に別邸を御建てになつたが、其の内に御病氣が益々惡くなつた。折角造つた別邸に入らぬうちに、萬一の事でもあつては遺憾であると云ふので、まだ全部の落成を告げぬ中に引移られたが、その時は最早重態であられたから、一室の寢臺の上に寢られたまま、夫程大きな邸園に一足も踏み出さずに、到頭逝去になられたと申す事である。そこへゆくと人の力も實に脆いものです。あれ程の財産家でも、壽命盡た時には如何ともする事が出來ぬ。『世の中は貧ぢや有德ぢや苦ぢや樂ぢや、何んぢやかぢやとて末はむちやくちや』、『思ふこと一つかなへばまた二つ三つ四つ五つ六つかしの世や』、縱ひ財産家であつても、金で命は繋がれぬ。總ての點に於て吾々の思ふ樣にならぬが世の中の狀態だと、よく／＼諦らめたなら、不自由があつても、不自由と思はずに耐へられるものである。ところが人の慾望は却々諦めがつけられず、思ひの儘に致さうと思ふ處から煩悶が絶えない。苦しみの世界へ生れた以上は、苦しみのあるは、當然であると思へば、却つて苦しみに打勝つてゆく事が出來るも

著地に達してこそ、其の一面には平等觀の上より大慈大悲の作用を發し、人間は申すに及ばず、鳥畜類に迄も、熱血を注いで濟度する樣になる。これが一切の苦厄を度し給ふと云ふ、卽ち先刻申した向下門の慈悲觀の方である。

此の慈悲觀の方から見ると、迷の衢に苦しんで居る此の世の衆生を見れば、何うしても之を見捨つる事は出來ぬ。所謂他を見る事猶ほ己れの如くに思ふのである。『河向ひの火事で構ふに及ばぬ』と云ふ諺もあるが、菩薩の心は之に反對である。縱ひ河向ひの火事であらうが、海の向ふの火事であらうが、出來得る限り飛んで行きて、身を粉に碎いても救はずんばあるべからず、といふ熱烈なる慈悲の心が現はれて來るのである。又『人の疝氣を頭痛に病む』など云ふ諺もあるが、菩薩にあつては、他人が疝氣を病んでゝも居れば自分の煩ひとなつて、どうでも看護してやらずには居られぬと云ふ風になる。その大慈悲心が人格の上に現はれたのが、阿彌陀樣である。此のお方は不可思議光とも申し上げる。法界を遍く照らして漏さゞるからである。阿彌陀樣ばかりではない、三世の諸佛も皆、大慈悲心の結晶體である。

人生は苦の海である。先づ生・老・病・死といふ四つの苦がある。この四苦はどんな人でも免れない。ところが一般の科學者の說などを聞くと、生れるには苦しみは無い。人の生れる時は、無意識であるから、苦樂共に無いと云うて居るが、佛敎では矢張、生苦がある。生れる時の苦しみありと說く。殊に種類の苦しみと云ふ事を說く。生れる迄は固より意識の作用が微細であるから、苦しみは無いにしても、モウ生れる

書などは非常な名人であつた。そうして天台宗の大學者で、又、頗る禪的の人である。愛知縣知多郡半田町の小栗三郎氏の御宅に、豪潮律師の書いた物が澤山ある。絲瓜の畫を書いて其の上に賛をした一幅に、『世の中はなんのへちまと思へどもぶらりとばかりしては居られず』とある、なか〳〵云ひ草が面白い。自然脱俗の趣味がある。其の半田町の近在で、乙川と云ふ所に正通寺といふ眞宗のお寺があるが、此の寺に豪潮律師の借宅證文といふのがある。其の文句は

借宅證文の事

地水火風空造の家　一軒

右借用申す所實正也、御入用の時は何時たりとも御返却可申候、仍て如件

さあ〳〵宿換の御用心〳〵

斯う書いてある。實に吾々の一身は、所謂地水火風造の家である。實にあてにならぬ。自分の身とは申してゐるもの丶自分の物とも認められぬ。深く人生の實相を究めて見よ、此の肉體といふ物も、財産といふものも、因縁力によつて、假に自分の物として現はれた姿にして、恰も電光石火の様なもので、決して實體はないものである。

此所に悟の眼が附きさへすれば、自然に解脱の境界を得らる丶から、縦令、萬兩の黄金が目前に在らうとも、少しも之に貪着せぬ。如何なる順境逆境に處しても、其の精神は更に動かぬ様になる。斯く不動

お尋ねです。其の時に禪師は『兩頭共に截斷して一劍天に倚つて寒し』と答へられた。兩頭とは生死のことです。生きるだの死ぬるだのといふ二つの影法師が、お前の目にチラツクと見えるな。生といへば是迄なかつた物が新しく出來た樣に思ひ、死といへば今迄有つた物がなくなつて了うた樣に思ふものだから、生死といふ相に取付いて、有るとか無いとか云ふ兩頭に惑う。そんなことでは何時迄經つても安心が出來ぬ。絕對界の眞如實相を徹見して見よ、元來生死などはない、故に生と死との兩頭を截斷して、一切の執見を離るれば、一劍天に依つて寒しで、天地一枚の般若の利劍のみである。別にお互が骨を折つて切らうとせんでも、元來、天地の眞理といふ一本の劍に既に截ち切られて居る。眞空平等といふ利劍に切られて居るのである。正成公は、此の一語に於て遂に大安心を得られたと申す事である。今日の吾々も斯くの如き大知見があつてこそ、世の中の一切の差別の相に迷はず、驀然として觀自在の聖域に遊ぶ事が出來る。古への眞の英雄豪傑や、又は聖人君子といはれる人や、大哲學者などは、其の信念に於いて、其の勇氣に於いて、自づと此の人生を度外にして、更に貪着せざるやうな、一種の安心を有つて居る樣である。故にまさかの時に當つても泰然不動である。

## 一切の苦厄を度したまふ

昔、豪潮律師といふ人があつた。今から凡そ百年ばかり以前の人である。書が出來て、詩ができて、殊に

れを元の通りに分散したならば、別に肉體と稱すべき永久的の自性は無い。併し地水火風が分散し了れば、此の新井なら新井といふ者はなくなるが、其の成分たる地水火風なるものはあるであらうと云ふ疑問が生じて來る。之に就いて佛教では極微と云ふ事を談じます。固より之は物質の上から云ふたのであるが、ごく〳〵細かい物であるから極微と名づけた。段々分析に分析を重ねて行くと、到頭、後には目にも見えない極く細かい微塵になる。それを更に一歩進んで分析せんとするも、最早、分析の餘地が無くなる、從つて之が物質であると認むべき物はないから、終には所謂無に歸してしまうのである、して見ると、假令今日因緣業力に依つて、假りに千差萬別と現はれて居りましても、其の根本を究めて見ると、元來空であるとすれば、吾もなく、人もなく、生死もなく凡聖もない。卽ち眞空平等である。此の理は本より釋尊が一時の方便を以てお說きに成つたのでない。元來、法の實相として斯くの如きものである。故に、人生の昇沈苦樂も、觀じ來れば、丁度、陽炎の如く、又、夢中に夢を見て居る如きものである。眞理を究盡して、絕對の眼を以て見れば、天地萬象そのまゝが空である。是れを五蘊皆空なりと照見すというたのです。此の空理を究める所から、生死の中に在りながら生死に迷はざる涅槃寂定の境界となる。

楠正成公が戰死せらるゝ前の日に、廣嚴寺なる明極楚俊禪師の所に參じ、『生死交謝の時如何』と問うた。それが愈々明日は湊川に於て討死をしやうと覺悟を定められた上の參問である。人間の一生は生より死に向うて居るといふが、生死交代の境に臨んだ時、果して如何なる安心をしたものでありませうかとの

るのである。即ち幾多の成分の和合體である。吾々の精神も亦是の如く、心王心所が相集つて始めて、心の作用を現はして行く。其の心王にも六識八識等があり、心所にも多くの心所がある。例へばお互が講習會に行かうと云ふ考を起すが如き、既に行かうと云ふ決心をする迄には、決して單純なものではない。色々の心作用が聯合して、始めて決心がつくのである。今日は非常に熱いぢやないか、又、家にも色々用事があるが、これはどうしやう、又、歸りに雨が降るかも知れぬから、その用意もせにやならんなどといふ澤山な考が、腹の中に集つて來る。夫れから色々の思想や感情を總合し、整理し、漸く今日は行かうと云ふ點に決定するのである。丁度、衆議院と云ふ樣な議場に於いて、多數の議員が相集つて、種々樣々な異議が出るが、結局、多數決で事の定まるやうなものです。吾々の精神も頗る複雜を極めたものである。夫れを統一した上で、初めて斷行するに至るのであるから、決して單純な力で以て、精神作用の實現せられるものではない。細かい多くの作用が集合して、始めて總ての作用が決定されてくるに依つて、五蘊というたのです。五蘊とは面白い語をこしらへたものである。

所で先刻以來申した通り、諸法の實相を究めて見ると皆空である。五蘊もまた空であるから、之を五蘊皆空といふ其の空といふは、萬物は斯の如くに千態萬狀に差別して居ると雖も、吾々の體にせよ心にせよ皆な因緣和合して出來て居るものであるから、之をバラバラにして、所謂因緣離散したならば、心と云ふ箇體も、身體と云ふ塊まり物もない事になる。地水火風が和合してお互の肉體が出來たものとすれば、夫

も益々進歩し、感情も亦益々高尚になつてゆく。例へば學校に於いて先生が塗板に何にか書いて見せる。夫を目で以て受取る。修身の話をして聞かせると、夫れをすぐ耳で以て受取る。其の受取つた事柄を念頭に把捉し記憶して想像してゆく。それが情の上に情を生み、智の上に智を加へ、段々と智能が啓發され、且つ進歩して行く。この三つの作用が働いた上に於て彌々善惡を識別し、一種の決定を與ふるのが、識でありますから、此の受想行識の四つは、唯一つの心を擴げて説いたまでのものである。それ故五蘊とはつまり色心のことである。物質と精神といふ事である。併し此の物質にも內外の二つがある。內の物質とは吾々の肉體で、外の物質とは天地間に存在して居る森羅萬象である。故に五蘊と云ふは、吾々の精神と肉體と相和合して、人格なるものが出來るをいふたものであるが、之を擴げて云ふと天地萬象も、五蘊といふ內に悉く攝入されて居る事になる。

蘊とは積集の義と釋して、積み集めると云ふ義であります。お互の身は決して單一のものから出來ては居ない。即ち物質と精神との積集體である。又、吾々の肉體だけに就いて見ても、衆緣の積集より成立つて居る。即ち地水火風といふ四大が集つて此の身を成すと佛敎には説いてある。唯人間等の肉體ばかりでない、一本の木でも一本の草でも、皆四大から成立つて居る。先づ米を作ると云ふても米ばかりでは出來ぬ。水がなければならず、風がなければならぬ。溫度もなければならぬ。色々の物が相集つて、始めて一粒の米も出來る。又、米その物に就いて調べて見ても、元素と元素とが相集つて始めて、米なるものが出來

中に就いて、受とは領納の義で、丁度受附の樣なもので、來客が名刺をもつて來ると宜しうございますといふて受取る。向ふから來た物を受附る、之を受の心所といふ。卽ち眼に在りては一切の色を受附ける、耳に在りては一切の聲を受取る、鼻に於ては香を受附ける、舌に於ては味を受附ける、身體に於ては觸覺を起して、熱いとか冷たいとか、軟かいとか堅いとか云ふ受附をする、是の如く眼・耳・鼻・舌・身・意の六根が色・聲・香・味・觸・法の六境に對して感受する作用を受と云ふ。

次に、想の心所は一旦受附けたるものに對して、善惡苦樂等を想像する作用です。受の方は受附であるから、前に來たものに對して起る作用であるが、想の方は一旦受取つたものを、自分の心に貯へてチヤンとその相をうつして置く作用をする。故に前日に見た事でも、先月見た事でも、若しくは若い時分に見た事でも、皆心にうつして居るから、絶間なく苦樂愛憎の念を生ずるのが想の心所である。想と云ふ字は心の上に相といふ字を書くのである。一旦見たり聞いたりした事は、心の上に寫し留めて置くの意を象つたものである。

次に、行とは造作遷流の義と云つて、造作は物を製造する事、遷流は變化する事であるから、自分の心に想つて居る事を、種々樣々の姿に製造し、變々化々して停まらぬ。卽ち彼の姿を斯うしたら好からう、此の聲は斯う云ふ風にしたら宜らうといふ樣に、始終心が變化して行く作用である。

斯くの如くそれ〳〵の作用をなす三つの心所がある。之れが爲めに、善い方面から云ふと、お互の智識

ふ義である。總て物質には夫々のもちまへがある。火には火のもちまへ、水には水のもちまへ、風には風のもちまへがある。之を質と云ふ。各々もちまへがあつて彼此各相異なるを礙と云ふ。礙は障礙など丶熟字して、他物と相容れざるを云ふ。例へば此所に水呑と云ふ品物がある。是れにはこれの性質がある。之を此所に置きますと、それが卽ち空間の一部分を占領して居るから、外の物は此の位地に今來る事が出來ぬ。机でも花瓶でも皆そうである。總て物質は何物に依らず、其の物其の物のもちまへを具へ、而して空間の一部分を占領してゐるものである。故に障子一枚隔て丶居ても、向を見る事は出來ぬ。卽ち彼れと此れとの間に隔てをつけるのが、物體の性質である。佛敎に於ては、か丶る質礙のものを稱して何時も色といてつ居ります。

吾々人間は物質と精神との集合である。之を佛敎の專門語でいふならば、色と心との集合である。その心を更に分けて、佛敎にては受・想・行・識の四つを示すのであります。なぜ四つに分類したかと云ふと、佛敎では心の主たるものを心王といひ、心の特殊なる作用を心所と云ふ。心所とは心の所有、卽ち心王に附屬して居るもの丶意味である。換言すれば精神には主人公と眷族とがある。主人公は如何なる處にも時にも嚴然として存在するが、眷屬の方は傭人の樣なものであるから、始終出たり引込んだりして居る。受想行識の四蘊の內、識は心王で他の三つは心所作用である。心所は特殊の作用であるから、皆一部分の役割を有して居る。識を一國の王様とすれば、心所は其の臣下である。

る悦樂の道具となる。豈に啻に相撲芝居のみならんや、春の天地に逍遥して、櫻の花を見、鶯の聲を聞くのも、皆な佛法の闊聒々、人世見來りて一大極樂世界といふ事が出來る。是を大活現成といふ。大死して而して能く大活する事を得た者を、人空法空を了じて般若の妙智を現はした人と云ふ。斯くの如く人法共に殺し盡すに依つて、初めて天地世界は佛の大智慧大慈悲の光明聚となり、天地と我と一體の大活動を發するに至る。これを深般若を行ずるといふのであります。觀音樣は正しくこれを圓滿せられたのであるが、その有樣はどうかといふに、五蘊皆空なりと照見して一切の苦厄を度し給ふのである。是れぞ正しく觀音樣の御修業と功德とを御示し下されたのであります。

『照二見五蘊皆空一度二一切苦厄一』これは實相觀と慈悲觀との二つの方面に就いて、觀世音菩薩の修業が圓熟せられた樣子を述べられたのであります。實相觀の上から云ふと「五蘊皆空なりと照見」する、慈悲觀の上から云ふと『一切の苦厄を度す』と斯う云ふ事になります。五蘊と云ふ事は後にも出ますが便宜上、唯今説明して置きます。

## 五蘊の解

色・受・想・行・識を五蘊と云ふ。是はつまり色心の二法を擧げたのであるが、今日の言葉で申すと、色とは物質の事です。何故かと云ふと色は質礙の義と解釋をする。質は物質の質、性質の質である。もちまへとい

もやさしい挨拶である。其の傍に居てこれを見た人が大に感心して、『此の人は自分の袴を燒かれても、こんな袴は家へ行きや幾等でもあると云うたが、設ひ家に袴の代りはないにしても、今更、小言を云うても仕方がないと明らめて、先方に心配をさせまいと思つてあゝ云うたのであらう、まだ若い樣だが實に見あげた心立の人だ』と非常に感心してゐた。すると今度は、その方へお鉢が廻り棧敷の上にゐた老人が、その人の頭の丁髷の所へ吸殼が落込ましたからたまらない、『アツ、』と云うて大騷ぎを始めた。すると例の棧敷の老人が『先刻も粗相をして人樣の袴を燒き、今度は貴公の頭の上に落しまして、何とも申譯の無い事を致しました。餘り夢中になつたものだから、重ね〳〵の御無禮をいたしました。どうか御勘辨を』と謝罪をすると、謝罪された方は先程隣の人が袴を燒かれて怒らなかつたのを感じて居た際であるから、『何御心配なされますな、此の位で無くては本當の相撲道の熱心家とはいはれませぬ。何に斯んな頭は家へ行けば幾等でも有ります』と云つたといふ話が有る。此等の連中は相撲に捕はれてしまつてゐるのであります。是の如く見る物、聞く物に付いて迷ひを起すと、一切萬境も皆吾人の爲めには三途の緣となる。故に常に我々は靜平なる常識を失はぬやうにして、心に堅く護る所があれば、世の中の事は何でも愉快に感じ、又、修養の助けとなる。併しその安心がくづれると、一々の法に執着して、繩なきに繩に縛ばられるから、先づ第一に其の執着を拂ひ除けることを習はねばならぬ。即ち迷執を殺し盡してしまうことが肝要である。

迷執を殺し盡してしまへば、相撲でよし芝居でよし、花でよし月でよし、是れが皆な佛心佛行を發揮す

が、彼の屈原などと云ふ人は汨羅江の邊りに彷徨し、川の水の澄んだのに感じ、『世は皆濁れり我れ獨り清めり』というて、遂に江水へ飛込で死んでしまつた。これは華嚴の瀧の連中の開山ともいふべきものである。是等は世相に捕はれて煩悶を起し、世を離るれば安樂が得られるものと思うたのだ。これも迷ひです。疎末な連中は芝居や相撲に迷ふ。芝居に迷ふ者などは、明日は芝居に連れて行くぞといはれると、もう其の日は仕事も手につかぬ。若し明日は都合が惡いから連れて行かれんとでもいはれやうものなら、それが悔しくて益々仕事が手につかぬ。女中連には往々あるとのことである。是れが即ち芝居に捕はれた連中である。或る所に相撲狂ひの老人が有つて、棧敷の上に居て煙草を吸ひながら、煙管を振り廻して、『ソコダソコダ』と懸聲して騒いで居る。何時の間にか下に坐つて居る人の袴の方に其の吹殻が落ちて、袴が燒け出した。何んだか臭いではないかと云はれても、落された方も餘程相撲狂と見えて、自分の事には氣も附かず、『臭いぞ〳〵シツカリ遣れ〳〵』と云うて居る。そのうちにだん〳〵燒け擴がつて、烟る、咽る、俄に氣が附いて消し止めた。棧敷の上の老人は、『申譯がないことをしました、私は極、相撲が嗜きでありますから何時も狂氣になつてしまつて、折り〳〵斯云ふ麁相を致しまして、誠に濟まんことをしました、何うか堪忍して下さい』と云ふ、袴を燒かれた人も同じく相撲が嗜きで矢張我が黨の人だから『何に此の位な事はなんでもありません、相撲を見るなら其の位熱心でなくちやいかん、私等も相撲の爲めには夢中になる方です、相撲には袴燒く程の勇氣が無ければならぬ、ナニこんな袴は家へ行けば幾等でも有ります』と云ふ、如何に

深般若とは深い智慧である。智慧には淺い智慧卽ち劣等の智慧と、深い智慧卽ち優等の智慧とがある。先づ理の上から申すと、小乘教に說く所の人空偏眞の理を照す智は劣等で、人法二空の理を照す智は優等の智である。人空と云ふは、己れがといふ我の無いこと、卽ち無我の理を明らめて我執を離れたること、法空といふは己がといふ我が無い許りではなく、善惡・苦樂・迷悟・凡聖等の差別の法も元來無いものだといふことである。人我を空じて、更に法をも空ず、人法共に空じ盡したところに、始めて一實の眞理が現はれるのである。而して、人法共に空じて一實の眞理を現はれしむるものは卽ち般若の妙理であります。

禪宗では大死一番大活現成といふ。人だの法だのといふ總ての執着を悉く拂ひ除けてしまつて、本來無一物の本體に歸する、これが大死である。其の時始めて天地萬物が都盧一平等に、佛の光明體と成つて、山川草木一々大佛事を現ずる、これが大活現成である。大般若は先づ空を說いて大死の法を示す。多くの人は己れがといふ我に迷ひ、又、法を實有なるものと認め、六塵等の法に捕へられ、姿を見れば姿に捕へられ、聲を聞けば聲に縛られる。斯ういふ人から見ると、世の中は總て是れ惡魔の境で、我れを迷はさぬものは一つもない。芝居を見ても相撲を見ても皆吾れを迷はす所の法となる。寒山は山の景色を見て、歸路を忘れてしまつた、といふが是れは山に捕はれたのである。併し寒山などの境界は、又格別である

道を明め、進んでは能く慈悲の働をなす、これが眞の大丈夫です。世間の道德上から見ても、かういふ人こそ立派な人と云ふことが出來る。慈悲の德が具つて居るに依つて、どこまでも同情博愛の念に住して、國家・社會・人類の爲めに活動してゆく。之れでこそ始めて智情意の圓滿したお互の理想的の人格が現はれて來るものです。世間でも拔群の人があると、あの人は大人物である豪い人であるなど云ふが、それが卽ち大士であります。併しその豪い人とは、どんな人かといふと、豪い人の標準を定めることが却々六ケしい。世の中には官等といふて官の等級があるが、之れに依つて人物の評價を定めることも出來ない。尤も評價するには其の人に依つて、其の目標も違うでありませうが、要するに學問があるからというて、直ぐ大人物とも云はれぬ。官等が高いからと云うて大人物とも云へない。財產があるからというて大人物といふ譯にもゆかない、今日の倫理學者は合理的活動などというて道理に合うた大意志の活動して行く者が、大人物であるというて居るやうであるが、つまり道理を堅く踏まへて、其の道理には絕對に服從して毫も其の私を顧みぬ、道理の前には己れがと云ふ我見を存せぬ、徹底合理的で、全く無我の境界になる、そうして自己が全分道理に隨順して、道の權化となつて活動する、是を自彊主義とも努力主義ともいふ。これが正しく倫理學者の所謂自我の實現である。自我を現はすとは無我の大活動をなすことである。或る人は是を無我主義と名けて說明して居る。觀自在菩薩の行ふ道は、この無我主義である。無我主義を行ふことを、深般若波羅蜜多を行ずともいふ。

## 菩提薩埵

菩薩とは、詳くは菩提薩埵と云ふ。故に本文の中にも菩提薩埵と云ふ語がありますが、此所でお話をしておけば、別に本文では講釋は致しませんから、其の積でお聞きを願ひます。菩提薩埵を略して菩薩と云ふ。支那でも言語は成るべく簡單にするのが便宜であるから、印度の語を支那流に簡略してこしらへた熟語が、此の外にも幾等もある。

さて菩提薩埵を飜譯すると覺有情と云ふ。有情とは衆生といふも同じで、一切の生物を指したのであります。これは菩薩の所化の對象を明したのである。覺は佛となることである。菩薩は佛地を目的とする。上の佛に向ては向上門の理を悟り、下の衆生に對しては向下門に出でゝ慈悲の用を現はす、これが菩薩であります。菩薩は此の二方面に向て修行をせらるゝ。佛に向ては、正しく法の實相を究めて、生死の苦しみを離れ、煩惱の根本を截斷して、超然として悟の位に入る。下の衆生に向ては、人間は云ふに及ばず、鳥畜類に至る迄も、齊しく濟度して行かうといふ大慈悲の働をなす、之れが菩薩の最大目的であるから覺有情といふのです。

又、菩薩のことを大士とも高士とも云ふ。大士とは大きな人といふこと、高士とは氣高い人といふことで、堂々たる大丈夫と云ふも同じである。堂々たる大丈夫の人とは、どんな人かと云ふと、退ては深く

に下つて平等慈悲の妙用を現はし、子供を見れば懷いて之を憐む、病人があれば傍に飛で行つて之を見舞つてやる、貧窮に苦しむ者があれば出來得る限り之を救つてやると云ふ樣に、恰もお月樣が萬水に影を寫すが如く、衆生濟度の佛事を打する、これが必要である。之を向上門の智に對して向下門の悲と云ふ。

故に向上にのみ滯てもいかず、向下のみでもならず、悲智の兩門が相待つて始めて完全なる人格を作ることが出來るのです。唯今の大燈國師の歌を曹洞宗の天桂禪師が『坐禪せば四條五條の橋の上往き來の人をそのまゝに見て』と訂正されたとある。歌としては餘り面白くないかも知れないが、生きた人間を林などと同じ樣に眺めるやうではならぬ。そんなことでは血も涙もない人となつて了ふ。善人は善人と見、惡人は惡人と見る、差別智を發せねばならんから、『往き來の人をそのまゝに見て』と改作されたものでありませう。親は親と見る、子供は子供と見る、目上の人は目上の人と見る、目下の者は目下の者と見て、差別の相を誤らず、而も因緣生の原因結果を明らかにし、機に應じ物に對して、佛德を發揮し以て社會國家の爲めに盡すのである。是れを任運無爲の妙用ともいふ。觀世音菩薩が三十三身に身を現ずと云ふも全くそれである。故に觀世音は正しく吾々の理想的菩薩であります。今日の人間も何うか觀音樣になつて欲しいものと思ふ。又、觀音樣にならんことを期すべきである。私共もせめては粗末な觀音樣にでも成りたいと思うて修養し稽古をして居るが、時々は觀音樣に成れることもありますが、一年中觀音樣を繼續することは却々難いのでありますから、是れ大いに修養を要する點であります。

ところが其の自在なることが却てむづかしい。禪門では向上向下、自由自在と云ふことを申します。向上とは眞理の根本を窮めてゆくことで、これが所謂お悟である。智を開發する方面である。向下とは百尺竿頭に登りつめてから、更に一歩を進めて再び下に降り、人生の眞唯中に飛び込んで、衆生濟度の大活動をすることである。設ひ向上の分はあつても、向下の作用がない時は、百尺竿頭の死漢なりと古人も誡められてある。全で枯木も同様、死人同様だと誡めてある。

大燈國師の歌に『坐禪せば四條五條の橋の上ゆきゝの人を深山木に見て』とあるが、京都の四條五條の橋の邊りは一番賑かな場處であるが、其の橋の上は一日の中に、何萬人とも數知れぬ程多くの人が往いたり來たりするが、そう云ふ場處に居ながらも、悟つた境界から見れば、多くの人も深山木を見るが如くにして頓着せぬと云ふ意味であります。成程、斯う云ふ向上の大安心も必要である。設ひ百千兩の金の番をさせても、一文でも欲しいと思ふ心も起らない。それでなければ眞の道德といふものは現はれませぬ。どのやうな美しい物が眼に映じても、どんな好い聲が耳の邊りで聞えても、ピクともしない、縱ひ水火の中に在るとも、泰然として心頭を動かさぬといふことは必要であるが、そこに囚はれてしまつては役にたゝぬ。之を禪門では魂不散底の死人といつて誡める。百尺竿頭に死在してはいかぬ。百尺竿頭より再び人生

化が起る。そうすると、何となくこれ迄の樣に親子の愛情も濃でない。從て養子たる者と母との間にも、自然墻壁が出來る樣なことになる。甚しきに至ると、養子は終に其の家に居たたまらぬやうな事が、家庭に依ては往々見る所である。是等も畢竟するに實相觀といふ安心が無くて、唯可愛いと云ふ情の一方であるから、親子であるとか他人であるとか云ふ差別の相を執し、其の結果偏頗なる執着心の爲めに捉はれてしまうからである。此の執着の念を、禪宗などでは非常に八釜しく呵り付けて、何でも彼でも皆打ち拂つてしまうのであります。

併し、角をためて牛を殺すといふ樣な結果になることがあるから、それを注意いたさねばならぬ。執着を打拂うて、全で死人の樣になつてしまひ、何もかも捨て去つて、惜くもない欲しくもない、憎くもない可愛いくもないといふ風になつてしまつては、何の役にも立たぬ人間に成てしまう。金が欲しいか欲しくない、國家に仇なす者は憎いか憎くない、國家に忠良なる者は可愛いか可愛いくもない、また假りに外國から我國に非常な無禮を加へて國家を侮辱するやうなことがあるとする。されど、外國が憎いとも我國が可愛いとも何んとも思はぬ、と云ふやうなことでは、一日も國家を維持することは出來ぬ。要するに吾々は公明正大なる道理、卽ち實相を深く諦觀し、其の道理をしつかりと踏まひ込んで、其の上に精神を落着けて、差別界の對手次第に色々のはたらき作用を現はして、而して毫も實相に背かぬ樣にならなければならぬ。このところを自在に運爲されるのが卽ち觀自在菩薩であります。

吾々も右の如く、實相觀に依つて理を悟り、慈悲觀に依つて事を照し、以て衆生濟度の願行を營まねばならぬ。之れが悲智圓滿の佛德です。

理智のお悟りが立派に圓成しても、慈悲の德が無ければ眞の菩薩ではない。又、慈悲ばかりあつても、理智が無ければ、自づと惜しい欲しい憎い可愛いの妄情に役せられ、知らず〳〵差別の相に迷うてしまう樣になるものである。人間と云ふ者は妙なもので、子供に對しては菩薩の樣な佛樣のやうな母親が、一朝他人に向つては丸で之と反對で恐しい鬼の樣な心的作用を起す場合がある。是れは實相觀のない所より招き出す缺點です。

婦人などで若い時分に夫を失ひ、獨身にて子供を育て、子供の爲めに再緣も致さず、何うか子供を早く立派に成長させたいと、一心に思うて、所有艱難辛苦を嘗め盡し、世間からも佛樣のやうだと云はれた程の者が、萬一、其の子が女であつて、成長の後相當の養子でも貰ひ、段々と日數を經る中に、その母親の樣子が一變して、可愛い娘の婿がなんとなく憎い樣な氣がして、娘にまで追々つらく當る樣なとがある。之れには色々な原因も有りませうが、一つは斯云ふ譯から起つたものもある。今迄は水入らずの親子であつたから、可愛がられたり可愛がつたりして居た。而して母親が娘の爲めには、愛情の中心となつて居たのであるから、親子間の愛情は恰も膠漆も啻ならずといふ樣に親しかつたが、其所へ一人の他人が這入てくると、母親を中心として居た娘が、今度は夫を中心にするやうなふうになる。即ち娘の心にも一つの變

を觀ずるに依りて、自づから差別の執を離れて、所謂自他平等の理に安住したまふ。これが菩薩のお悟りの根本である。

それから、次に事觀の話をいたさねばならぬが、事觀の事は事相と云うて差別の相狀です。因緣によつて、無量の相狀を現はしてゐる森羅萬象のことです。此の森羅萬象、卽ち事相を觀察して度生の悲願を觀世音菩薩は發せらるゝのである。人世の有樣を見渡しますれば、此方には悲んで居る衆生があり、彼方はに苦しんで居る者がある、一切衆生の多くは苦海に沈淪して居る。自他平等の觀念より心に廣大の慈愛を抱いて之を觀察せられる時、此所に苦しんで居る者があれば、恰も自分が苦しんで居る如くに觀ぜられる。丁度母親が可愛い子供を家に置て、他所へ往て居る時の如き、子供が母を慕ひて阿母さん〳〵と云うて泣き叫ぶ時は、縱ひ二里三里隔た所に居つても、天然自然の情感力は母の乳房より乳汁が滴りて、胸騷ぎが致すと云ふ事を、お經文に說かれてある。子供の精神が母親の心に感應して、急かに胸騷ぎがして乳が流れる。そこで今頃は定めし自分を戀ひ慕ふて泣いて居るであらうと思へば、用事を半途にしてゞも歸つて來るやうなことになる、其所へゆくと親子は實に兩體一身である。別れて居る儘で、一つの體も同じ感應性があるのである。菩薩の衆生に於けるも亦是の如く、法界の衆生本來平等といふ觀念のお悟りの上に發したる慈悲の眼を以て、世界を見そなはすから、他人の苦痛を[illegible]ること、自分の苦惱よりも切なる思ひを起さるゝのです。故に火の中、水の中へ飛込んで、誓つて之を救濟せずには居られぬのである。

くを理觀といふ。

觀世音菩薩は、理を觀じて諸法の實相を明められた。之を實相觀とも云ふ。併し、現象界の方からいへば、此の世の中は差別の世界であるから、貴い人もあれば賤しい人もある。男もあれば女もある。利根な人もあれば愚鈍な者もある。千態萬狀種々樣々な相を呈して居る。獨り空間の上のみでなく、時間的から云ふも、生れたり死んだり、花が咲いたり、葉が散つたり、千變萬化の象を現はして居るが、根本の理體を究めて照見すれば、元來、生れもせず死にもせぬ、卽ち生滅を離れて居る。此の不生不滅の理を諦觀してゆくから生死の相に迷はぬ。縱ひ生死岸頭に臨みても、泰然として安ずる所がある。

楠正成公は、七度人間に生れて以て國賊を斃さんと誓ひ、刺し合ひて死なんとする時分に、早く後生の支度をして居る。生死の相の上に束縛せられぬから、七度人間に生れてといふ安心も出來たのである。所謂實相觀から悟りを開いたのであるから、今息を引き取らうと云ふ場合にも、吾れは決して死なぬといふ明らめがついたのです。此の現象世界は差別の相から見れば、生死去來もあるが、其の本體を究めて見ると、平等にして不生不滅である。此の理を體する者は差別の相に迷ひませぬ。所がお互は人は人なり、吾は吾なり、生は生なり、死は死なりで、何うしても差別の相に執するから、我と云ふものが起る。我と非我とが益々隔たりて、遂には人を怨み他を疾み、其の結果唯だ已れのみを益して、他を苦しめると云ふやうな、種々樣々な穢らはしい罪業を造るのである。然るに、觀世音菩薩は明らかに萬物の理體

青膨れになる、腐敗する、蛆が出る、到頭それを野原へ捨てる、狼などが來て噛ぢる、終には累々たる白骨となる、夫等を繪に書いたのが九想圖である。長安の都に留學して居る時でも、或は旅行中でも、懷中から放さずに居つた。壯者は之を愼むこと色にあり、情欲は制することが難いものである。九想圖はこの欲を抑へる爲めの不淨觀である。不淨の觀念力が强大であつたならば、どんな美人の中に交はつても少しも心は動かぬ筈のものである。親鸞上人の傳にある歌の如く『明日ありと思ふ心のあだ櫻よはに嵐のふかぬものかは』、斯う云ふふうに心の眼を以て物を照し見る時は、縱ひ奇麗な花を見ても何んとなく、一種の悲みを覺えるやうな心持が生ずる。心の働きと云ふものは、實に靈妙にして廣大なものである。

## 理觀と事觀

然らば、觀世音菩薩は如何なる心眼を以て、此の世を御覽になつたかと云ふと、觀心の相手となるものは澤山あるが、縮めていへば、理を觀ずるのと、事を觀ずるのとである。理を觀ずるといふは、例へば因緣の力に依つて瀨戶物の如きものが出來、その形は樣々に現はれて居ても、其の本質はと云ふと、同一の土である、本性の土は少しも變りないが、同一の土でありながら、因緣の作用に依つて水を入れる器にもなれば、又、水を受ける道具にもなる。大きい物にもなれば小さい物にもなる。身になる物もあれば蓋になる物もある。色々樣々に別れて居る。が、其の本體には差別はない。この差別なき根本理體を觀じて行

## 觀自在菩薩の御名號

舊譯、卽ち古い飜譯には、觀世音菩薩とあるが、新譯卽ち玄奘三藏の飜譯は、觀自在菩薩と改めてある。尤も日本では、觀世音菩薩の方が一般に通じて居る。此の菩薩の御名は吾々の修行上の標準になるべき極めて完全なる有り難き御名目である。

第一に觀とは、觀照の義である。吾々の心の鏡に、物を寫して見ることを觀照といふ。眼で見るを見といひ、心で見るを觀といふ。眼で見ると心で觀るとは大層違ふ。眼で美しいと思つても、心で見て汚い物がある。例へば賤しき女が紅粉を施したる如き、眼で見れば奇麗である樣なれど、心の眼を以て眺めて見ると、美しい處か却つて非常に汚く感ずるのがある。假令身に錦を纏うた人でも、心の眼を以て見ると、實に目も當てられん程汚い感じのすることがある。

支那の王陽明は餘程佛教も研究した學者であるが、殊に頗る禪を味つた人であるから、支那の儒者の中でも王陽明とくると、餘程禪臭いといつて居る位である。王陽明自身は佛教でないと云て、時として佛教を誹つて居るけれども、併し、流石は大家と云はれるだけあつて、青年時代は常に九想の圖を懐中して居たといふ。九想圖は佛教の不淨觀を描いたものである。人間の姿といふものは甚だ不淨なもので、花を欺く程の美人でも、一たび息が切れやうものなら、誰も傍へ寄り附く者はない。僅か兩三日も經つか經たぬに

事實の問題として論究する時は、論難百出で、いつまで經つても解決は出來ないことであるから、觀音樣が有るとか無いとか、お說きになつたとかお說きにならぬとか云ふことは、そう深く力を入れんでも、つまり觀音樣と云ふお方は釋尊の慈悲體に名附けたお名前である、もつと適切にいへば、觀世音菩薩が釋尊の代表者と成つてお說きになつたものと御覽になつたならば、差閊は無からうと思ふ。獨り私許りでなく、古人も多くは斯くの如く解釋して居ります。

觀音樣は心經の御本尊樣である許りでなく、古德も『濁世末代名觀音』と申して、此の末世末代に於て、一番御因緣の深いのが觀音樣であります。尤も緬甸・安南・暹羅・印度等には餘り觀音樣は信仰されて居らんとか申すことであるが、支那及び西藏を始め、朝鮮・臺灣・日本にては、至る處に觀音樣がまつられて無い所はない。日本では殆んど全國を通じて觀音樣は御歸依を受けておいでる。西國に三十三ヶ所と、秩父、阪東との百觀音樣を始めとして在々處々にある。臺灣の佛教寺院などは多く觀音樣が本尊樣で、お釋迦樣や阿彌陀樣は少い樣です。併し、お念佛はといふと、矢張、南無阿彌陀佛であります。朝鮮でも支那でもさうです。彼地ではアミダといはずしてチミトといふ。今では感謝を表する時の通用語となつて居る樣にまで發展し、菓子や牡丹餠を貰うても、お禮の代りにチミト・チミトと唱へるといふ樣な有樣である。兎に角、觀音樣は此の世界に大層御因緣の深い菩薩であることは事實の證明する所であります。

# 人法總通分

觀自在菩薩、行深般若波羅蜜多時、照見五蘊皆空度一切苦厄

【和譯】觀自在菩薩、深般若波羅蜜多を行ずる時、五蘊皆空なりと照見して、一切の苦厄を度したまふ。」

これだけが第一段で『人法總通分』と申すのであります。心經は觀自在、卽ち觀世音菩薩の名義を以て、釋尊がお說きになつたのであると申します。尤も唯今の本文には、觀世音菩薩が自らお說きになつたと云ふことは、明かに現はれて居りませんが、他の飜譯に依ると、觀音樣が自らお說きになつた經文だと云ふことが、明かに記されてある。けれども弘法大師の如きも、此の經は佛敎で摩訶般若波羅蜜多心經と題し、佛が鷲峰山に在つて說きたまひしものであるといふて居られる。之れを當世流の理窟で云ふと、釋尊が觀世音菩薩と云ふ一つの慈悲體になつてお說きになつたので、つまり釋尊の觀念の妙用が取も直さず、觀世音菩薩である。卽ち釋尊の觀念の妙用を一の主體としてお說き下されたものと見ることも出來る。斯う云ふ事を

ゆく處に、眞言の功德が現はれるのである。

以上の五科が心經の本文の組立方である。これだけをザット申上げておいて本文に移ります。

## 總歸持命分

第四、總歸持命分。これを總じて持命に歸すると云ふのであるが、持命とは陀羅尼のことである。陀羅尼は梵語、これを譯して總持とも持命とも云ふ。持とは能く諸の善法を總持するの意、明とは能く煩惱生死の暗を照すの意である。一切諸乘に渉り、般若の妙理を廣大に擴げて、お說きになつたが、縮めて見ると唯一つに歸する、卽ち萬法一に歸するの理で、一切の法門も畢竟吾人の一心に歸す。陀羅尼とは一佛法の義である。一佛法とは一心である。一心は眞の陀羅尼である。其の事はまた本文に就て詳しくお話します。本文に當てると『故に知る般若波羅蜜多』と云ふより『眞實にして虛ならず』と云ふ處までが總歸持命分であります。

## 秘藏眞言分

第五、秘藏眞言分。般若心經の全體を一つの眞言の中に悉く藏められたのである。眞言といふと大層むづかしい樣に思はれますが、佛敎の廣大靈妙なる功德を一句に收め、吾々が平常口に唱へ、手足を動かす上にも、自由自在に應用してゆくといふ微妙の文である。眞實の妙言なるが故に眞言と稱す。眞言宗では三密相應と云ふことを申すが、つまり身と口と意との三つの働が、そつくり一の般若波羅蜜と成つて

て目的地に行けとお示しに成つたのである。向ふの根機に依つて小いさな乘り物に乘つてユルユル近い所へ往いて休む者もあれば、大きな乘り物に乘つて急いで遠方まで往くと云ふ人もある。そこで法の淺深に依つて小乘・大乘の別あり、根性の趣く所に就て、聲聞乘・菩薩乘等の區別がつく。此の法乘を悉く網羅して行くのが心經で有ります。故に此のお經を緻密に研究して往く時は、聲聞乘、縁覺乘、菩薩乘、等の法門を了解して、而して此等の法門を擧げて、般若の大海に融合するものである。

斯く佛は諸の乘り物、卽ち二乘三乘等全體に渉つて、般若の空義をお説きになつたものであるから、分別諸乘分と云ふ。之を本文に當てると『舍利子色は空に異ならず』と云ふ所から『所得無きが故に』と云ふまでが第二段になつて居ります。

## 行人得益分

第三、行人得益分。佛教の目的は、本より學問として研究するが爲めでは有りません。唯佛の教を信じ、忠實にそれを實行して、其の利益を現はすに在るのである。つまり佛教を研究し佛教を實行したる功德に依つて、お互に轉迷開悟の利益を得るのを、行人得益分と云ふ。卽ち之れは實行の法門です。其の法門をお説きに成つたのが第三段である。『菩提薩埵』と云ふより『阿耨多羅三藐三菩提を得たまへり』と云ふ處までゝある。

居るやうで有ります。私も其の例に倣つて弘法大師の科段に依つてお話をしやうと云ふ考で有ります。弘法大師は心經を五段に別けて註釋せられてあります。先づ其の名目を擧げますれば、

## 人法總通分

第一、人法總通分。『觀自在菩薩』と云ふところより『一切の苦厄を度す』と云ふ處までが、人法總通分である。觀自在菩薩と云ふは人である。深般若波羅蜜多を行ずる時と云ふが法である。觀自在菩薩といふ行ふ人と、その人が行ふ所の法と二つを擧げてあるのである。此の二つが心經全體を通じて居つて、全經の根本に成つて行くから、人法總通分と云ふのである。所謂心經の大綱を述べられたものです。

## 分別諸乘分

第二、分別諸乘分。諸乘とは、諸の乘りものである。乘は運載の義、衆生を載せて目的地に運ぶといふことで、つまり法門の異名です。卽ち大乘・小乘又は聲聞乘・緣覺乘・菩薩乘のことです。釋尊は同じ教を施さるゝにも、教を聞く所の根機の種類が區々であるから、聲聞と云ふ地位に上るべき者もあれば、緣覺といふ悟を開く者もあり、又菩薩の位地に進む者もある。であるから、そこへ運載しゆくところの乘物、卽ち法門にも種々ある。釋尊は種々の根機に應ずる種々の法門、乘り物を與へて、此の乘り物に乘つ

# 五　大　分　科

## 心經の科段

これより愈々摩訶般若波羅密多心經の本文の講述であります。大抵の御經文は、これを三段に分けて見ると云ふことが普通の法則の樣になつて居りますから、それに隨ひますと序文、正宗文、流通文、の三段であります。序文と云ふのは、始めに此のお經をお說きになつた場所、並に對手となるべき聽衆等や會場の組織などを述べるのであります。正宗文と云ふのは、本文であつて、流通文と云ふのは、本文に說く所の法門を一般に勸め、且つ將來に傳ふべき詞をお述べになる文である。大概のお經が皆此の三段に組立てられてあるのであるが、此の心經だけは序文と流通文の前後が省かれてあつて、唯正宗文だけであります。古人の多くはこの正宗文について段落を立てゝ解して居る。尤も註釋者其の人に依つて、多少趣を異にして居りますが、中に就て弘法大師の科段が一番正確のやうでもあり、又、本文を見る上に於て便宜が多いやうで有ります。近頃出來た心經の註釋物を見ますと、重に弘法大師の科段に依つて、解釋を致して

心不亂にお經を讀みなさい、それが何よりの土産ぢやから、私が必らず御供養をしませう』、『イヤ却々面白い、それぢや今後お友達にならう』と云うて、兩人が長く水魚の交を致したと云ふことである。此の澤井知明といふ人の如きは、自分が商法家であるからして、大般若を信仰して、その信仰の力を算盤や帳面の上に現はしたものである。これが矢張文字般若の働きである。筆の先きで文字に書いた計りが般若ではありませぬ。總て世の中の有らゆる物は、木でも竹でも、雨でも風でも、皆般若の道理を説明して居る。電光を見て宇宙間に於ける電氣の理を知り、雨を見ては水分が蒸發して再び雨と成て降ると云ふことを知り、風の吹く事に依つて空氣の流動する微妙なる作用を知ることが出來る。天地間に存在して居る萬物が、皆大般若を現はして居る、所謂活文字である。算盤をはぢく上にも、吾々の大安心を得ることが出來るとすれば、お互の一擧一動が悉く大般若經の活動と成つて現はれねばならぬ。此の心經は二百六十二文字と云ふ僅かな文字であるが、此のお經文を能く研究して、お經の精神を以て吾々の精神としたならば、恐らく今日の吾々が平生に於ける七顚八倒の働が、其の儘佛の悟となつて現はれて來るであらうと思ふ。是れが卽ち佛教に於ける活きた安心立命であります。

前の大般若經は餘程變つて居るな、お寺の大般若は六百卷もあつて、本堂へ往つてお袈裟を掛けて、大聲を發して大般若を讀む、お前の大般若はパチリパチリと云ふ音がして居るが、そんな大般若では御利益があるまい』、『却々御利益が澤山あります、私は若い時分から每日此の大般若を讀んで居りますが、此の功德に依つて身代が段々大きくなりて、妻子眷族を養ひ、御先祖の祭も出來ます、疊も新らしくなれば着物も着られる、土藏が欲しけりや土藏も建てる、又、向ふ三軒兩隣は云ふに及ばず、見ず知らずの人へでも大般若の功德を別けて御扶け申すことも出來ます、熱心に此のお經を讀で居ると其の功德に依つて、子供や孫に至る迄も安樂が出來ます、又、天下國家へ對しても立派に義務を盡すことが出來ます』、『成程そう聞て見れば尤もである、それぢや私も習うてやらろうか、お廢しなさい、中途半端で稽古を始め、若し讀み損つたら大變です。此のお經は一寸一口でも違ふものなら大失敗です、少しでも胡魔化す心でもあつたら神罰覿面、動もすると後へ手が廻つて此の世の地獄にも行かねばならぬ、そうなれば此の身體の自由を失うて、子孫滅亡の基を招く、功德の廣大なる代りに、亦罰を蒙ることも強い、尊師は矢張小さい時から讀み慣れた大般若經を讀で居なさるがよい』、『イヤ面白い事を云ふ男だ、時々話に來るから茶飯の一椀も馳走してくれ』、『それは宜しいが、漫りに供養を受けると死して牛になるから、何かお土産を持て來なさい、そうすりや茶飯の御馳走位は致します』、『何も私の方には珍らしい土産もないぞよ』、『お前さんは水引を掛けた物でなければ、土産でないと思ひなさるであらうが、私の家へおいでたら佛壇に向つて、一

ある。知明さんは其の袋を掛けて散歩に出掛る。子供の泣聲や女の怒鳴聲でも聞えると、之れは定めしお米の無い爲めに起つた問題であらうと、樣子を窺つて、此所は三人家内であるから一升位あればよからうと、五合入り二袋許りも取出し、戸を明けてポイト投げ込んでサッサッと歸る。是れ卽ち陰德の行である。喧嘩の最中に何か投込んだものがある。之を見るとお米だ。戸を明けて見ても誰も投込んだ人の姿が見えぬ。そうすると夫婦とも自慢くらべである、己れが正直者だから天道樣が惠んで下されたのだ、イヤ妾が信心深いから佛樣が與へて下されたのだなどと云うて互に自慢をする。そうして居る中に喧嘩も自然に治てしまう。知明さんはそういふことを常に愉快に感じて居つた。

或る時、歌の中山の淸閑寺の智眞長老が尋ねて來た。頗る禪的な人だから、愛想も何もない。ヅカヅカと傳兵衞の居る所へ入つて見ると、傳兵衞さん頭には毛も何にも無い、本當のお寺さんの樣である。今算盤をはぢいて帳合をして居る所へ行きなり『傳兵衞と云ふはお前か』と云ふ。傳兵衞さん何かと思うと、大きな和尙が來て居る、『ヘイ私は傳兵衞であります』、『お前は一年中、佛法三昧だと云ふ事を聞いて居つたが、私は中山の淸閑寺の智眞と云ふ者だが、佛法三昧とは珍らしい男だと思ひ、一度顏附を見てやらうと存じて尋ねて來たが、妙な事をやつて居るな、夫れも矢張佛法かえ』と云ふと、傳兵衞は『ヘイ是れが最も大事な佛法であります、尊師方は御經驗が無いかも知らんが、これより有り難い佛法は有りません』、『それは何んと云ふお經か』、『これは大般若經であります』と云うて、知明さん一心に帳合をして居る。『お

## 大黒屋傳兵衞の話

心經は要するに、心地上の法門であるから、唯理論や見識にのみ流れず、宜しく吾々が心の寶として、平生底の上に、般若心經の精神を活用して頂きたいのであります。これに就ては昔から色々の實例もあるが、其の中で面白い御話しの一を擧ぐれば、昔、京都に名高い慈善家で而も佛教の大信者で、澤井知明と云ふ人があつた。之れはお寺さんではなく、屋號を大黒屋と云ひ、本名を傳兵衞と稱した人である。若い時から佛教を信仰して居りまして、本名よりも法名の知明と云ふ方が、能く世間へ通じて居た程である。彼の江州の大津と京都との間は、里程は三里許りあるが、「これやこの行くも歸るも別れては知るも知らぬも逢坂の關」と云ふ關所のあつた程の山路である。唯今では隧道で汽車が通うて居りますが、昔は山路であるから、時として追剝などが出て、夜に入ると通行人は一層困難を感じた。知明は之を氣の毒であると思うて、自費で以て三里の間に常夜燈を拵へた程の慈善家であつた。それから此の人には妙な道樂がある。何時も晩景になると散歩に出掛る。夫れが普通の運動とは違うて、首に大きな袋を掛けて、それには三合入り五合入りと云ふふうに、小さな袋に米を入れたものを入れて、托鉢坊さんの樣な姿をして散歩をする。どんな所へ行くかと云ふと、町はづれの貧民窟へ行く。貧民窟には每晩の樣に喧嘩が絕えない。それが多くはパンの問題である。『明日のお米が無い、お腹が空いた、どうしやう』などと云ふのが喧嘩の原因で

た經文は眞理を基礎として居るのであるから、世間・出世間、一切の道を一貫して居るのである。時間的にいへば、三千年の昔より、世變り代移ると雖も、佛教の眞理は始終一貫して少しも變動することがないから、貫線の義といふのである。

又經は竪糸のことゝも見る。機を織るにも、横絲は無數に交互錯綜して居ても、縱絲は初めから一貫して居るが如く、何千年何萬年の時代を一貫して變ぜざるものである。支那でも聖人の教を經といふ。孔子の說きたまひし道の大本は、矢張古今不變の道である。我が日本では、天皇陛下の教育勅語が卽ち眞のお經で、之を古今に通じて謬らず。之を中外に施して悖らずとある。此の教育勅語は吾々日本國民としては、最も大切なるお經文であると思ひます。日本國民道德の最大標準であるから、吾々宗教を布く者の如きは、取り分け此の教育勅語を實行せしむる方法を教ふることを、畢世の事業とせねばならぬ。博愛衆に及ぼし、恭儉己を持すると仰せられてあるが、如何すれば恭儉の德を養ひ、如何すれば博愛といふ精神を發揮することが出來るかと云ふ事は、充分に研究して相共に之を實現することに向つて修養を積まなければならん。夫れが今日の教育家若しくは宗教家等の最も盡瘁すべき所であらうと思ふ。釋尊の如きは所謂時代思想に應じてお說きになつたお經も有りますが、佛教の骨髓、釋尊の御本懷に至つては萬世に渉りて、決して變らない所の教であるから、之を經と名けたのであります。

じて用ひられて居るお經と申しても宜しい。夫れであるから、此の心經を詳細に翫味して見ますと、其の中には自ら各宗全體の敎が含まれて居ると云うてもよからうと思ふ。これは私一人が申すのでない、古人もそう云うて居られる。禪宗から見ると心經は一種の禪經とも見られます。

## 經の意義

經は梵語では修多羅、或は素多覽とも云ふ。夫れを支那で經と飜譯して居る。經とは貫線の義である、貫線とは絲を以て物を貫く形で、例へば珠数は百八あつても一本の絲で貫いて居る如し。世の中は外形の上から見まして、千差萬別であるが、內容の方から見ても亦千差萬別である。男子には男子の務め、女子には女子の務め、又、上に立つ人には上の人の務め、下にある人には下の人の務めがある。又、孝行と云うても、其の孝行の道は一つであるが、行ひの相は人に依て皆違ふ。年老たる親に對する孝行と、若い親に對する孝行とは違ふ。家にある親に對する孝行と、遠方に在る親に對する孝行とは、其の根本の道は一つであるが、孝行の仕方が異る。若い親ならば先づ餘りにグチャグチャせぬ御飯でも拵へて上げるが注意の一つになるかしらんが、今日は强飯を拵へたからおあがりなさいと云うても、老人の親ならば苦い顏をするであらう。老人には却つてお粥の樣なものを拵へて進めるのが孝行になることもある。そういふふうで、孝行の仕方は千差萬別でなければならぬ。また世法無量なれば道も亦無量であるが、佛のお說きになつ

の精神は何所にある、戊申詔書の精神は何所かと云ふが如き、勅語、詔書の全文は皆御聖意の所發ではあるが、其の中に於て一番肝心と認め奉るべき御聖旨の存する所は、何所にあるかと云ふことになる。斯の一番に肝要なる心のことを精要心と云ふのである。そこで般若心經の心と云ふ字は即ち此の精要心であつて、大般若六百卷を總括して、其の歸着する所の精義を云ふたのであります。

四には堅固心、普通吾々の心と稱するものは、頗る堅固ならざるものであつて、眠つてしまうと心の作用はなくなる。又、卒倒しても心の作用は無くなる。又、見聞覺知の爲めに始終變遷して留まらさるものである。して見るとお互の心と云ふものは、頼みにならぬ弱いものであります。所がこの堅固心と云ふのは不生不滅の心である。之を佛教では法性とも、佛心とも、佛性とも、本來の面目とも云ふ。

斯くの如く心といふ意義を四通りに解釋してゆくのが定りになつて居るが、其の中でも第三番目の精要心と云ふのが、心經の心の義であつて、つまり肝心かなめと云ふことです。尤も廣い意味から申しますると、お釋迦樣のお悟りから現はれた一切藏經は、縱ひ八萬四千の法門と別れて居ると雖も、其の中の一番肝心かなめとする所の精神は、此の心經であるといふことが出來る。して見ると、釋尊が一切藏經の大精神をお說きになつたのが此の心經であると云ふほどに心得て、審細に研究して貰ひたい。

殊に此の心經は御承知の通り、どの宗旨でも大概用います。眞言宗などでも心經秘鍵といふ弘法大師の註釋もあつて、極大切なお經になつて居る。眞宗だけは餘りお讀みに成りますまいが、其の他の各宗に通

らん、凡夫はとかく見聞覺知の爲めに惑はされて、諸の妄想顚倒を生ず、然れども一心生ぜざれば萬法に咎なしぢや、サアかやうに障子を閉めたならば、向ふの船も決して老師の御邪魔は致しませぬといふ御挨拶と見える。其の時に寒巖和尙は、『尙ほ手脚に涉ることあり』何んだ、立つたり坐つたりして手脚を動かして、始めて船を停めるやうな事では遲了八刻であると云はれまするど、大智和尙は默つて斯う兩眼を塞がれた。成程、手も足も動かさずに船も何にも見えぬ樣になつた。是等は一寸聞くと單なる頓智談の樣だが、さうでない。吾々は今日見たり聞いたりする上に於て、種々の妄想を描き、諸の罪惡をも招く、妄想や罪惡を離れるには、向ふと此方との因緣關係を斷てしまうが早道である。それには吾々の精神に一段の勇氣を起して、自分に信ずる道力を以て截ち切てしまはねばならぬ。例へば之を食べたいと思うても、之を食べたなら父母に心配をされるか知れぬ、此所が大事な所だと耐へる。食べたい物も、遊びたい心も、孝行といふ觀念が、障子となり戶となつて、ピシヤツと中間を遮斷すれば、煩惱の惡魔は無くなつてしまうものです。然るに、吾々はとかく向に在る六塵の境界に特別の關係を附けて、善い惡いと思うて、思慮分別して休む時がない、之を緣慮心と云ふ。

三には精要心、此の精要心は普通に『こゝろ』といふ意味とは少しく違ふ。例へば皆さんが法律の精神とか、教育の精神とかいふことを云はれるが、法律は人間でないから、固より緣慮心のあらう筈はない。これは理の上から、教育には教育の極肝心なる意味合、即ち理義の存する所を云うたものです。又、教育勅語

の弟子と成られて、後に明峰禪師の法を嗣がれたのであるが、此のお方も非凡の俊傑であつた、八歳位の頃に母親に連れられて寒巖禪師の所にゆかれた。菓子器に饅頭が出て居る。目附きの利巧そうな子であるから寒巖禪師が『お前は幾歳か』、『八つになります』、『お前の名は何と云ふ』、『萬十と云ひます』そこで寒巖和尚が饅頭を一つ挾んで、試に問うて云はるゝには『萬十、饅頭を食ふ時如何』どんな度胸のある子供かと思はれての點檢である。すると大智禪師は手を出しながら『大蛇の小蛇を呑むが如し』と云うたそうです。其の後、出家して寒巖禪師の弟子に成られて、小智と云ふ名を附けられると、『小智は菩提を妨ぐ、宜しく大智と替へて下さい』、と自分の方から望まれて、改稱したと云ふ話もある。

寒巖禪師が肥後の大慈寺においでになる時、大智禪師は未だ十七八の若い時分で、始終近侍して居られた。外にも澤山の雲水と云うて修行をして居る坊さん達が居た。大慈寺と云ふ寺の前には一條の河がある。朝から晩まで商船が往きつ戻りつして不斷に通て居る。或る時、寒巖禪師が、會下に列坐せる多くの弟子に向つて、『這裡に在つて彼の船を停め得る底の者ありや』と云はれた。此所に坐て居て彼所を往來して居る所の船を停める者があるか如何だ、此處に在りながら彼船をピタツと留めさす位の力が無ければ佛法の威德は現はれぬ、どうぢやとの驗問です。ところが他の雲水衆は互に顏を見合せて居て、何んとも言ふ者がない。すると大智和尚は默つて立ち上り、進んで忽ち障子をピシヤツとしめられた。これで船が留りましたらうとの作用である。船が目につくから邪魔にもならう、別に見えさへせねば吾れに於て何かあ

## 心といふ字に四義あり

それから心經の心の字のお話を一通りして置きます。心といふはこゝでは肝心要と云ふ意味であつて、普通にいふ『こゝろ』といふ意味とは違ふ。佛經では心と云ふ字の意義を四通りに分つて有ります。

第一には肉團心であります。肉團とは生理組織の上の機關である。卽ち吾々の身體の上に於ける精神の機關となるものを肉團心と云ふ。昔は心臓を肉團心と云つたが、唯今では腦髓であると云うて居る。つまり精神の作用を起すべき機關のことであります。

次には緣慮心、これは精神の作用そのものである。卽ち外界の事物に交渉して、それを自分の方に緣じて、分別を生ずる働きである。緣とは絲などが互にもつれ合うて居るやうな貌、慮は思慮分別です。例へば向に花が咲いて居ても、其の中間に障子でもあれば、見えないから關係はつかぬ。その障子を開けるとア、好い花であると感ずる。卽ち花と自分との間に離るべからざる關係を生ずる、之を緣と云ふ。この緣の正しくないものを妄緣といふ。それを斷ち切つて根本の淸澄に戻ることが大事である。その根本に立ち歸つて回光返照し遂に精神の本體を明めるのが坐禪工夫である。

昔、寒巖禪師と云ふお方の許に大智禪師といふお弟子があつた。寒巖禪師は後鳥羽天皇の皇子であらせられたとも云ひますが、兎にかく曹洞宗に於ける蓋代の名僧である。又、大智禪師といふ方は初め寒巖禪師

が有りません、やつて御覧なさい』、『摩訶般若はらみ女の奇特かな、サア宗長如何だ』と云ふと、宗長も困つたが退は歌人の弟子だけに『一二もすんでさんのひもどき』と後をつけた。此の時、不思議にもヒョツト産れた。サア家内中は大喜びである。『貴師方は何所の大本山の御名僧か』と尋ねられたが、名乘も出來んから直ぐに宿屋へ歸つて、『マア宜かつた、是れも佛樣の感應であらう』と云ふので、線香をつけて佛樣にお禮のお拜をしたと云ふ話がある。

總ての御祈禱には大概、般若を用いる。大般若といへば六百卷もあるので、心經だけのことではないが、ともかく大般若と名のつく御經は御祈禱の御經の樣に思うて居るのは、どういふ譯かといふに、祈禱と云ふ上から申せば、必ずしも大般若には限りませぬ。法華經であらうが阿彌陀經であらうが、皆御祈禱にならぬ御經はない。祈禱とは願ひ求めるの義、卽ち佛陀の威力を願ふことである。人事を盡して天命を待つ、自分の力の有らん限りを盡して、其の及ばぬ所は佛の大威力を仰ぐと云ふことになるから、どのお經でも御祈禱にはなるが、其の中で大般若を多く用いるはどうかと云ふと、般若は眞空の妙理を說いて、世の中の總ての迷の相を破り、智慧の威劍をもつて一切の障礙物を悉く切り捨てゝしまう。又、本具の斷德を發揮し、勇猛決斷の力を以て、內外の所有妄想妄惱を切て切て切り盡して。諸 の惡魔を降伏するのが般若の威神力である。故にお經の中でも、此の般若を降伏大魔のお經として、古より多く御祈禱に用いて居ります。併し、大般若の眞の目的は佛果菩提の彼岸に到達するに在ることは勿論であります。

此の人が弟子の宗長と云ふ者を連れて、或處の宿屋に泊つた所が、隣の家が大そうに騷がしい。樣子を聞けば、其の家の妻が難産で苦しんで居るといふ。唯今ならば醫術が進歩して居るから、結構なお醫者もあり産婆もあるが、何にしても幼稚な時代で、殊に片田舍の宿であるから、九死一生といふので大騷ぎである。ところが、親類中の一人が宿屋へ飛んで來て、宗祇先生に遇ひ、『私の親類の嫁が唯今産氣が附いて、非常に苦しんで九死一生の場合であります、お見受けすると貴師は却々御名僧と見受けました、どうか恐れ入るが安産の御祈禱を願ひます』と云ふ。宗祇も之れには困つた。餘り熱心に賴まれたので、實は本當の坊さんでないのだとも云ひ兼ねたものか、マゴ〳〵して居る中に、賴だ男は歸てしまうた。後で宗長に『如何したものであらう』、『貴師、直ぐ御斷りになれば宜いではありませんか』、『イヤ餘り氣の毒と思うて愚圖々々して居たから、向ふでは願はれるものと思うて飛んで歸てしまつたのぢや』、『夫れでは先生夜逃げでもしませうか』、『マサカそう云ふ譯にもゆかん』、『貴師はお經を御存知でありますか』、『お經は知らんが兎もかく往て見やう、佛教は信仰が大事だと云ふから、一生懸命に腹の中で念じてやつたら、少し位は御利益もあるだらうよ』と云ふので、宗長を連れて宗祇が行くと、『サア上人樣がお出でになつた』と蒲團などを敷いて騷ぎ立てる。病人は非常に苦しんで居る。先生は愈々困つた。『お花を持て來ませうか、お燈明を附けませうか』と云ふ騷ぎだ。宗祇は宗長に向ひ、『外のことを云はうとしてもだめだが、吾々は歌だけは本職だから一ツやらう、歌でもつて御祈禱をしやうぢやないか、どうぢや』と相談する。『仕方

へて云ふと祖先に成佛の緣を結ばせると云ふ事からして、彼岸會には各々祖先を祭ることになつて居りますが、元は皇室から始つた宮中に於ける年中行事の一である。

昔、宗祇法師といふ有名な歌人があつた。此の人は頭だけは圓く剃つて法師の姿はして居ても、戒法を受けた本當の僧侶ではなかつたのであるが、昔の歌人などは多く法師の姿をして諸國を遍參したもので、此の宗祇法師も本より純粹の坊さんではないが、餘程佛教を信じた人であつたらしい。所が此の人は大層髯の長い先生で、後には髯が眞白に成つて餘程みごとなものであつた。或時、山中で追剝に出遇つた。少しばかり有つた懷中物をスツカリ取られたが、先生一向平氣である。向ふに行きかけると後から、オイ〳〵と云つて泥棒が呼ぶ。『盜んだ物でも返してくれるのか』といふと『乃公等は固より泥棒商賣だ取つた物を返す氣遣はない、未だお前の物を取りたいのだ、お前のその髯を置いてゆけ』と云ふ。宗祇先生これには弱つた。懷中物は取られても構はんが、大切にして居る髯をくれと云はれたには困つた。『どうか之れだけは勘忍してくれ、自分は歌人だ、歌を詠んで賴むから、どうか勘忍してくれ』、『お前は頭を剃て居るが、髯があるのは變な和尙だ、幸ひ髯が立派だから、それを貰つて拂子屋へでも賣り飛ばさうと思ふのだ』そこで宗祇は直ちに『我がために拂子ばかりはゆるせかし浮世の塵をすてはつるまで』と詠んだ。卽ち己れが浮世の塵を拂つてしまうまでは拂子も入用だから、之を取ることだけは勘忍して吳れといふのである。泥棒も之に感じたと見え、髯を取ることは止めたそうです。

來ぬ。轉迷開悟の實があがらず、離苦得樂が出來ず、止惡作善の實があがらぬ。そんなことでは、唯佛教を學んだと云うても、丁度、繪に書いた餅を眺めたやうなもので、決して佛教を信じてゐる人と云ふことにはならぬ。世に所謂神人合一で、佛陀の精神と自分の信念とが全く一致しなければ、本當に佛教を信じた人と云ふ事は出來ぬ。蓮如上人の詞を借りて云へば「彌陀を賴めば如來の佛心と一つになしたまうが故に一心と云ふなり」である。一つになつてしまはねばいかぬ、一つになつてしまつたのが到彼岸である。波羅蜜多である。

佛教には六波羅蜜と云ふ大切なことが有る。波羅蜜の行を六通りに說いてあるのです。これについては本文に入つてから詳しく申しますが、その六通りある中で、第六が智慧で、他の五つは智慧を現はして行く方法になつてゐる。それであるから摩訶般若と云ふ中には、六波羅蜜が自然に具はつてゐることになる。

## 到彼岸に因む話

日本に於ては齊明天皇樣の御時代よりして彼岸會と云ふ事が行はれた。尤も聖德太子の時代からであると云ふ說もあるが、兎にかく皇室から行はれたものです。彼岸會とは純佛法的の法會と云ふ意味である。吾々は容易に眞正の佛教の行ひができないから、春秋の二回に一週間づゝ身心を淸くして、自分が彼岸に到る目的を達するのみならず、自分の祖先を祭つて、祖先を彼岸に到らしむるの緣を助けて上る。言を換

火となり、折に狂風が吹いて來て諸方へ飛火が到し、大惨禍を呈して江戸市中の三分の一以上を焼き拂つてしまつたといふ。是が徳川時代の三大火事の一つである振袖火事の由來である、此の最初は娘さんが唯振袖が欲しいと思うた一念の情である。一念の情より命を捨つる程の大煩悶をなし、それが傳はり傳はつて、大變なことになつたといふのである。

華嚴の瀧や淺間山の信者であるとか、鐵道や細引の御厄介になる連中なんども、大概はその起りは一念の妄情である。其の妄情を斷ずれば、苦みは卽座に離れて、大安樂を得ることが出來る。これが離苦得樂です。この境界に至りますれば、情の上に於ける佛敎の目的を達し、卽心に於て淨土を得、極樂を現ずるのである。

次に意志の方面から、佛敎の目的を達する方法をいふと、止惡作善である。一體、意志とは何かといふに、これはつまり實行の勇氣である。自分が惡いと思うたら斷じて之を止める、善いと思つたら斷じて行うてゆく、これが意志の活動である。故にこの意志を皷舞して、惡を止めて善を作してゆくならば、佛敎の目的は達せられる。縱令此の體が粉になるとも、一旦意に決した事は飽まで之を成し遂げるといふのが、佛菩薩の誓願力である。

吾々は右に述べ來つたところの智情意の三方面から、佛敎の目的たる彼岸に到らねばならぬ。而して、それを全うするについて一番の根柢となるのは佛智慧である。佛智慧がなくては彼岸に達することが出

苦められて、中には病氣を起す者さへある。昔、東京にあつた振袖火事といふの原因もそれである、或る所の娘が其の時代に流行した振袖を非常に欲しがつたが、親の手元の都合が惡るかつたと見えて、買うてくれない。それが買つて貰へぬので學校へゆくのもいやになつた。學校と云うても昔の事だから本當の學校らしいものはないが、物を習ふ所のことです。そこへ行くにも、流行の着物がないと友達に笑はれるといふので、獨クヨ〳〵胸を痛めて居たのが原因で、神經衰弱の樣な病に罹り、たうとう死んでしまうた。親の身になると『可愛想な事をした、親が貧乏であつた爲に、欲しい衣服を買つてやられなかつたのは殘念である、セメテはその振袖を拵つて棺へでも掛けて遣つたなら、娘も喜ぶだらう』といふので、俄かに之を求めて棺に掛けて、お葬をした。本郷丸山本妙寺と云ふが菩提所であつた。お寺では振袖を貰つても仕方がないから、古着屋に賣つた。地方の寺ではよく打敷などにして用ゐるが、東京あたりでは古着屋が來て買て行くものと見える。ともかく本妙寺から買つた古着屋はまた他へ賣つたが、それを買つた家の娘は間もなくフラ〳〵病になつて、たうとう死んでしまうた。その家も矢張、本妙寺の檀家であつて、又もや件の振袖を棺に掛けて葬つたから、振袖は再び本妙寺へ歸つて來た。寺では格別氣にも留めず、またいつもの古着屋へ賣ると、又候それを買つたのが同じ檀家のうちであつた。が、その振袖を着た娘は同じ樣な病氣でまた死んだ。かくして三度も同じ振袖が本妙寺に來た。寺でも漸くそれに氣がついて『不思議でならぬ、氣味の惡いことだ』と云つて其の振袖を寺で燒いて了うことにした。然るに、それを燒いた火が元で大

ではなく腐つた茄子であつた。グシヤツとして足あたりが丁度蛙の樣に自分が感じた。實際は蛙でないが自分が之れは蛙だと一心に思つたその神經の作用から、其の晩の夢に蛙の姿が現はれて、一晩自分を苦しめたのである。婆さんは唯、可愛想な事をしたと思つただけで本より惡い了簡は少しもないが、蛙ならざる物を蛙だと思つたその智の不足から惡夢を招いたのである。翌朝に至りて彼れは蛙では無かつたと明らめてから以後は、少しもその樣な夢を見ることがない。人生一切の苦惱も煩悶も之に類することが多い。故に吾々は眞智を開いて眞理を悟り、即ち迷ひを轉じて智識の完全を求めるがよい、是が彼岸に到る道である。

次に情といふのは苦樂を感ずるの心的作用である。佛敎の目的を情の方面から云ふと、離苦得樂、即ち苦みを離れて樂みを得ると云ふことである。吾々は情の上に於て、常に苦痛を感じ且つわざ〳〵煩悶を招く場合が多い。一たび煩悶に陷る時は、先刻の土瓶先生の樣に、譯もない事が非常に苦痛の種になる。人間といふものは、何か物に引ツ掛つてそれに束縛されると、見る物聞く物が皆煩悶の種になるものです。結局その果には此の身の置場にも差支へて來る、妙なものです。一つ精神が狂ひ出すと『世の中は四尺五寸になりにけり五尺の體置所なし』といふ歌の通り、此の廣い世界に一身の置場がなくなつてしまふ。

娘の子などの望みは着物である。着物が何より欲しい。欲しいけれども阿母さんが買て呉れない。あの着物が無いと世間へ出られない。友達の前へ出ても肩身が狭いと云ふ樣な妄情を起す。その妄情の爲めに

完全より發するものです。例へば此の前云うた麻繩といふ物は麻から出來てゐる、因緣の作用に依つて麻が集合して繩になつたのである。其の場合、麻が繩になつた因緣などをよく明めるのが觀照般若である。觀照般若が曇ると繩を繩と思はぬのみか、これを以て蛇なりとするが如きことがある。それは迷である。『幽靈の正體見たり枯尾花』と云ふ句があるが、向の枯れた尾花を見て臆病な者が幽靈と思うて非常に怖がる、かくの如きは、つまり智識の缺點に基くものです。

或る處に一人のお婆あさんがあつた、盆の十三日にお墓參りをして、お寺の庭を通つて歸らうと思うて、門前まで來ると、グシヤツと蹈み潰した物がある。恰度黄昏時であるから何物であるかは明かに分らぬが、是れは蛙を蹈み潰したのであらうと思うた。ヤレ〳〵可愛想な事をしたわいと思うたから、南無阿彌陀佛々々々々々々とお念佛を唱へながら歸つた。其の晩眠つたかと思うと、夢中に、どうもすばらしく大きな蛙が現はれ出て來て、『あなたはお寺參りに行つて御先祖のお祭をなされながら、私を下駄の齒で踏み殺すといふは何事ぞ、此の怨みは生れ替り死に替り』と云ふ見幕でその蛙奴が恐しい目玉をむき出して、頻に嚙り附くやら胸を壓へるやら、お婆さんはとう〳〵一晩中苦しみ通しに苦しんだ。目が覺めてから『嗚呼飛んだ疎相をした爲めに、蛙に恨みを受けてサン〴〵苦しめられた。實に蛙としては無理もないことである、せめてはお寺へ往て蛙の死骸を葬つて、お寺の和尚さんに心經の一卷も讀で貰はう』と思うて、翌朝すぐにお寺の門の所へ往て見ると、向ふに昨晩踏み潰した蛙の死骸が見える。傍へ寄て能くよく見ると、蛙

向ふには立派な悟りの境界、即ち大覺世尊の淨土がある、これを彼岸と云ふのである。吾々が此の迷の岸を離れて悟の岸に行く方法として、或は念佛を唱へ、或は題目を唱へ、或は眞言、或は坐禪と、夫々の法門に依つて目的の彼の岸に到るのでありますから、つまり大理想の彼岸に達すべき橋ともなり船ともなるのが佛樣の法門である。されば如何なる人でも、法門の力に依らざれば彼岸に到ることは出來ない。今日の世事に就て見ても同じことで、病院といふものが橋となつて、病と云ふ岸から健康の岸に着き、學校といふ船があつて、無智といふ岸から智識といふ岸へ達するが如きものです。今日吾々が、生れてより常に外界の誘惑を受けて、亂に亂れて居る精神を、宗教の力に依つて、立派に之を治めて行くのも皆彼岸に達するのである。之を小さく云へば、腹が空つたといふが此の岸、どうか腹を充たしたいと云ふのが彼岸、その彼岸に到るには食物が橋となり船となるのである。其の他の事も之に準じて知るが宜い。佛法の目的は無論佛のお悟を標準として、吾々も立派な悟を開きたいといふので、種々の法門に依るのである。而して結局、轉迷開悟の實の現はれた時が彼岸に達したのである。

### 佛教の目的と智情意の三作用

尤も佛教の目的を吾々の精神作用の上から、智・情・意の三つに分析してお話をして見ると、智の方面から云ふと、佛教の目的は迷ひを轉じて悟りを開くに在ることは言ふ迄もない。迷といふは吾々の智慧の不

無類の秘密學校を發見した。夫れは泥棒を教育する學校である。三年位で卒業をするのであるといふ。泥棒の教育をされちやたまつたものでない。掏摸だの誤摩の蠅の稽古などが一年級の修業で、二年級位になると器械を應用して泥棒をする。三年になるとモウ化學的應用術を覺えて泥棒をするといふ樣な鹽梅になつて居るさうです。此の樣子では末には泥棒用の飛行機なんぞが發明されるかも知れぬ。日本には、未だ泥棒學校は無いにしても一種の惡漢仲間があつて、斷えず惡事を教へて居る。世界の中でも今では日本の警察が一番進歩して居ると云ふことだが、それ位に警察の方は進んでも、其の上を越す程の惡い者があるとは情けないことです。

　して見ると道德の如きも、自分一人だけが如何程完全になつても、社會の道德を進めなければ、佛界を實現することは出來ぬ。故に佛教では專ら利他を旨とし、社會の爲め人類の爲めに、主として一般的道德をお示しになつたのであるから、佛の御精神を以て眺めると、世の中に一つの缺點があれば、それを恰も自分の缺點の如くに思ひ、家內に一つの缺點が出來たならば、それを皆自分の缺點なりと思うて、世の爲め人の爲に盡すのが佛教の目的です。今日の世の進むに連れ、益々自分の責任が甚だ重くして且大なることが感ぜられる。猶ほ現代の狀態は道德のみならず智識の點から見ても、經濟の方面から見ても、甚だ缺點が多く極めて不完全である。これが此の岸である。吾々は自己の修養からいうても、社會の狀態からいうても、まだ〳〵迷ひの岸にマゴツイて居るのである。

居らぬ。若し買ひたいと思ふ物があれば、事務員の控所にゆき、代金を支拂うて買取るのである。番人が居らぬから、若し之を盗まうと云ふやうな者でもあれば幾等でも盗むべき隙間がある。十間も二十間も離れた所に事務員が一人か二人か居るだけであるから、到底隅々迄は目は屆きませぬ。故に取らうと思へば幾等でも取られさうに思はれる。斯ういふ事では甚だ不安心なことではないかと思うて、之を事務員に尋ねると『一年に五遍や七遍は取られることもないではないが、それは極些々たるものである、五圓の品を十遍取られた所で五十圓、十圓の品物を十遍取られた所で百圓に過ぎぬ、一ヶ年に百圓や二百圓では迚も番人を一人置くことは出來ぬ、故に番人を置かない方が非常に經濟上の利益がある、殊に他人の品物は取るべきものでないと云ふのが、天下の通法である、苟も一等國たる首府に於て番人を附けなければ物品陳列場の商賣が出來ぬといふやうなことでは、世界列國に對しても愧ぢ入る次第であるから、吾々は一は國家の體面を重んじて、番人の少い陳列場を設けて居るのであると申したさうです。井上博士もそれには非常に感じたさうです。東京に於て見ると小さな勸工場でも、邪魔になる程ゴタ〳〵と番人が附て居る。それでも油斷をすると毎日のやうに品物が盗まれる。是等の點から見ても英國人の公德心の發達と日本の首府たる東京あたりの現狀とは餘程の相違がある。これは吾々が大に反省すべきことである。

英國なども、それ位社會の公德心は發達して居ても、所謂晝があれば夜があると同じく、一面には闇黑面のあることは人間世界に於ては免がれ難いものと見える。一昨年、倫敦市の警察が非常な苦辛をして珍

摩訶般若は佛の智慧である。さうして佛の智慧は廣大にして最も世に勝れて居り、且つ最も多量の智能を具へておいでになる所謂大多勝である。その佛の智慧を開發して之を自分の物と爲し、以て眞の大解脱を得る是が波羅蜜多である。

波羅蜜多とは解脱の境界に名けたものであるが、支那に飜譯して到彼岸と云ふ。到彼岸とは彼の岸に到ると云ふことで、例へば此處に一條の大河があるとせんに、吾人は此の岸に在るを以て容易に向の岸に行くことが出來ぬ。吾々の現在の地位は恰も此の岸の如く、而して此の岸たる現在の境界は、果して如何なる位地であらうか、この岸に滿足することが出來るか出來ないかと云ふことは、常に自ら考ふべき問題である。知らず吾々の此の岸、吾々の現狀は果して如何。

知識の上から云うても道德の點から云うても缺點だらけで、決して滿足しては居られませぬ。今や上は政府の人々より、宗教家、教育家及び世の有志の方々が相擧て精神の修養、道德の奬勵に力を盡して居られる。是れは我が國民の現狀に於て、精神道德上の缺點が多いからである。然らば、西洋に於て世界第一の公德國と自ら任じて居る英國の倫敦あたりは如何かと云ふに、井上圓了博士が再度歐米を漫遊して歸た時の話に、倫敦に在つて非常に感じた事がある。其の一つは、或る大なる商品陳列場に這入て見ると、數十萬圓の物品が數限りもなく陳列されてある。實に立派なものである。其の中に這入て見ると、ところどころに事務員の控所が在つて其所に控へて居るのみで、商品が陳列してある其處には別に番人らしい者は

ます。佛教全體が心の講釋をしたやうなものである。『一切藏經は心の一字の註脚』と古人も云ふて居る。宇宙の眞理とか、或は天地萬物の實相とか云ふ事は、當然研究すべき問題ではあるが、佛教は轉迷開悟が目的であるから、之を一種の哲學として高尚幽玄なる原理を研究すると云ふ事は眞の目的ではない。

全體、學術なるものは、人生の目的を達する上の方法に過ぎないから。學術だけを以て滿足して居ては決して其の効を奏することは出來ぬ。故に哲學者必ずしも道德家ではない、科學者必ずしも慈善家ではない。吾々が智識を開發し、進で高尚にして幽玄なる眞理を窮めて行くと云ふことは、眞正なる人となり、又、賢聖の德を顯はすべき方法である。つまり佛教の目的とする所は吾々の身心が佛の身心と同一になり、天地の眞理、萬法の實相と、吾々平常の一擧一動とが、自然に融合してゆくと云ふ所にある。これが佛教の目的であります。そこで之を心地の法門とも本來成佛の大道とも申すのである。縱ひ如何程巧みに倫理道德を説いても、心と行とが一致せざる時には、道德家とは申されない。假令縱横自在に忠孝仁義の道を説いても、道と心とが一致融合せざれば忠臣とも孝子ともいはれぬ。それは唯上手に理窟を言ひ現はすだけの學者で、一種の説明機械たるに過ぎぬ。故に宇宙の眞理といひ人間の大道と稱するものを吾々の方寸の内に收めて、實踐躬行してゆくのが佛教の目的であります。

但し此の如くに三種の般若ありといふも畢竟ずるに、佛智慧を三方面から見たのであります。併し何事にも此の三種の智が必要です。例へば一軒の家を治めるにも、唯人數計りでもいかぬ。財産だけでもいかぬ。必ずや無形の精神が家の全體を統一するのでなければ治まらぬ。その精神が實相般若である。併し精神のみでは矢張其の實相を擧ぐることは出來ぬ。家内一同が各々手分をして其の職に服し、相共に其の一軒の中で本當の根本に基いていつて、其の隆盛を計らねばならぬ。無論金もためねばならず、財産も殖やさなければならぬが、と云て無謀なことをして財産をこしらへたのでは永久に維持することは出來ぬから、一軒の家が永遠に繁昌する所以の道理を窮め盡してゆくのが觀照般若である。それが彌々實行に現はれて成功を見る樣でなければならぬ。財産が出來ると奢る心がなくとも、富は家を潤ほすで、食物も自然に善くなる。別に飾る了簡もないが、金が出來ると自ら衣服も綺麗になる。履物でも別段に洒落る氣はないが、善い物を履く樣になる。家の造作も飾り道具も自然に家の實力を發揮して來る樣になる。是れが文字般若で、智慧の功德が姿の上に現はれて來たのである。佛樣のお悟の言葉が末代までに遺されたから文字般若といふのであるが、唯だ經卷のみと思うてはならぬ。吾々の身體も行動も、自づと生きた經文となつて來ねばならぬ。かくして吾々の身の上に廣大なる般若の威德を現はして、佛心に契當したのが、般若波羅蜜多と云ふのであります。

元來、佛法の事たる、總て心地の法門と申しまして、吾々の一心を離れた敎と云ふものはないのであり

の如く其の本性は平等一如であるが、畜生にならんと欲すれば畜生にもなる。佛樣に成らんと欲すれば佛樣にもなる。定相なきが故に種々の相を現じ、善惡苦樂を異にするに至る。此の善惡苦樂の由て來る處を明めてゆく智慧を觀照般若と云ふ。萬法をよく觀照して誤らざる智慧といふ意である。

元來、本性に具有する智慧は鏡のやうなものであるが、無明の塵に蓋はれて理を見ることが出來ぬ。若し修養の力に依つて此の智慧を現はし、之を以て萬物を照らし見る時は、何に依つて一切の諸法が現はれて來たのであるか、又、吾々は如何して生れたのか、死んで如何なるものかといふ諸法の相を明めることが出來る。これは皆、觀照般若の働きである。この般若の働きが無ければ、衆生を濟度することも出來ぬ。佛樣は此の智光があるから、衆生を見そなはして是れは如何なる根機なりや、又、如何にせば之を救濟し得べきかを觀察せらるゝのである。

縱ひ實相の上からは一切衆生は本來平等であると看破したからとても、惡人も善人も同じ樣に取扱つてゆく譯にはゆかぬ。賞勳局も裁判所も同じ樣に見ることは出來ぬ。惡人も善人も同じ樣に取扱つてゆくのでは所謂假相に昧いのであるが故に、實相に就ても亦本當に知つたものとはいはれぬことになる。故に一面には諸法の本體卽ち實相を明めて平等の理を知り、一面には萬法差別の假相を現はして居る所以の因緣の理を明めてこそ、中道の智慧を得ることが出來るのである。實相般若や觀照般若のこの道理を明かに示されたのが、佛の說法であつて、之を文字に詮顯したのを文字般若と云ふ。

ばならぬ。併し此の忠孝の大道だけは、決して建國の始より變化は致さぬ。我國に於ける常住不滅の眞理である、實相である。それと同じで、此の天地萬物は畢竟、常住不滅の眞理より現はれて來たのであるから、目前に現はれて居る萬物は、そのまゝ常住不滅の眞理の實現にして、萬法は即ちこの眞理の一體である。是を實相般若といふ。

然らば何故に一眞如の體より種々の假の相が別れ出るのかといふに、例へば土の性には差別なければども、或は水瓶になつたり或は茶碗に成つたり、時に隨つて千態萬狀の別を呈するが如く、差別の相を示して來るのは因緣合力の所變であります。此の事は本文に入て十二因緣等の說があるから、其の處で委しくお話申します。

唯識論の中に面白き譬喩がある。此處に麻と云ふ物がある。麻を即ち實相として考ふるに、麻は何處迄も麻としての面目を持つてゐる、其の麻が甲と乙と又は甲乙丙とが左右から捻つてゆくとせんに、捻ると云ふ因緣力に依て繩といふ相が現れる。一たび繩といふものが出來ると、細繩もあれば大繩もあり、井戸繩もあれば籬に用ふる繩ともなる。麻その物には井戸の御用を勤めるとか籬の役に服するとかいふ定相はないが、一時の因緣力に依つて種々樣々な相が現はれると、それに相應する所の作用が現はれて來るのである。然るに顚倒の心あるものは、此の繩の假相なることを知らざるのみならず、却て之を見て蛇なりと思うて狂亂する樣なことになる。衆生の妄想は皆繩を蛇と誤りて計執するものである。吾々も亦た麻

土瓶を一つ壞さうか』などと云うて喜んだと云ふ話がある。どうも多くの人は此の御殿様の如く、假の相に迷うて、夢に夢見る様であるが、これは爲てならぬものであります。故にどのやうに學問の力が進でも、理窟の研究が進んでも、假の相に迷うて居るうちは、依然として妄想窟裡に墮在して實相の理が解らぬのである。それで佛教では總ての迷の根本を離れて常住不滅の眞理を見つけ出す、即ち諸法の實相を明める所の智慧を般若といふて貴ぶのであります。

## 實相・觀照・文字の三般若

さて此の般若（智慧）に三種あつて、一つは實相般若です。即ち唯今申した所の實相を證するの智慧です。實相とは道である、道と云ふものは不生・不滅・常住・一如の法である。我國では、教育勅語にもある通り、『克く忠に克く孝に』というて忠孝の二道が道德の根柢である。天皇陛下は更に『斯の道は皇祖皇宗の遺訓にして子孫臣民の倶に遵守すべき所』と仰せられ、日本國體の根本は全く玆にあることを示されてある。社會の文明を物質的方面から見ると、御維新以前と今日とではもう天地の相違があるが、是れは我國の假の相である。昔はチョン髷を結て居たが、その時分にはチョン髷を切ると泣き出した位のものであつた。しかし今日に於て貴公はチョン髷を結ひなさいと云つたなら、如何です、昔は非常に厭やがつた斬髮が、今は唯一の風俗となつて居るではないか。是の如く總て變化する、變化する相は皆これ假相と云はね

と自分の精神を傷める人があつた。今日はお正月の元日でお芽出たいからと云ふので、金の鉉のある土瓶にお茶を汲んで呑まうと思つて居る所へ、下女は恭しく御膳を持て來た。誤て轉んだはづみに土瓶が二つに壞された。さあ例の神經が起つて、『今年は如何も碌なことはあるまい、正月早々から大切な土瓶が破れるやうでは、火難に遇うか水難に遇うか盗難に遇ふか、何れにしても芽出度いことはあるまい、情けない事である』と、非常に鬱ぎ出して、其の結果、元日早々から大不機嫌で八つ當り、奥方であらうが女中であらうが、手當り次第に叱りつけるといふ始末であつた。お隣に幸ひ加茂の某と云ふ歌詠みの先生があるので、平生懇意にして居られるから、女中が直ぐに飛んで往つて、『どうか助けて下さい、家の殿樣はこれ〳〵の譯で、お正月の元日から何時もの病氣を起して、どうも手が附けられません、どうか宜しく取りなして下さい』と願うた。夫れはといつて隣の先生、直ぐに飛んで來て、『お芽出度うございます』と申しました。すると殿樣は、『何に先生そんなことは云うてくれるな、私の家はチットもお芽出度ない』といふ。『お芽出度ないなんて、何か變つたことがありましたか』、『實は斯樣〳〵で土瓶が二つに壞れた、此の通りと云うて悄氣てゐる。そこで先生は『夫れは一段お芽出度いと思ひます、其のお芽出度さを歌に詠んで祝ひませう』と云ひ『元日にどんとひんとが打ちわれてあとに殘るは金のつるなり』とやつた。御殿樣慾張つて居るから、それを聞くと、忽ちに胸の曇りも晴れ渡り大喜び、『成程芽出たい、金の鉉だけが殘つて、沌と瓶とが割れたとは有りがたい、今年は先生のお蔭で嬉しい正月が迎へられる、來年も元日に

一時の幻影にして、其の實體を看破すれば本より定つた相は無い。吾々の觀念の力に依つて奇麗にも見えるが汚くも見える。元來、天地の實相は本來無淨穢であり無東西である。東の方角が好いとか西の方向が惡いとか云ふのも、一時の假相に執する人間の妄想であるから、吾々が能く法の實相を悟れば法界平等である。その平等の理體と融合したのが佛樣である故に、吾々が佛樣の大慈悲光明と一致することが出來れば、此の世が直に佛樣のお淨土となる。古歌にも『極樂は西にもあれば東にもきた道さがせみんなみにあり』といふ。三部經の中にも『此を去ること遠からず』と說いてある。吾々が佛樣の光明に接觸し信仰の力が增進する時は、所謂信心感應の理で、隨處佛光明で、東西南北がみな極樂淨土ならざるはない。所謂此を去ること遠からずである。若し吾々の精神が佛樣に一致することができず、至誠心が現はれぬ時には、假令百千萬億のお念佛を唱へても、決してお淨土參りはできぬ。眞宗には不來迎と云ふことを云ふて、阿彌陀樣のお姿が別段目の前に現前するを待つに及ばず、吾々が眞實、佛の大願力を信仰する一念に於て、既に極樂往生の因種が定まりて、正定聚の位に入る、と云ふことを說くのは、正しく大乘佛敎であるから、そう云ふ甚深なる說明ができるので有ります。念佛宗であるからとて輕く見てはならぬ。眞箇信心が發現すれば、本來無東西の佛光明に接觸するのである。然るに今日の吾々は十人が十人とも假相にのみ迷ひ易い。隨分利根な人といはれる者でも多くは假相の迷は免れがたい。

昔、京都の公家さんで何でも能く心得た人で、無論相當の學問もあるが、つまらぬ事を氣にして、種々

天地萬物のすがたにも假相と實相との二つがある、假りの相は誰れでも見らるゝが、眞實の相は容易に明めにくい。例へば人の姿で申すと、あの人は大層器量がよい、美しい白いなどといふのは、皆一時的なる假の姿であつて、本當の姿ではない。器量がよいとか美しいとか云ふ假の姿には、動もすると、青年時代などには迷を起すものであるが、實相を明めて見ると、奇麗な姿とか醜い姿とかいふ確然たる定相はない。古歌に『引きよせて結べば柴のいほりなり、とくればもとの野原なりけり』色々な材木を聚めて結び構へると、一軒の家といふものが出來る、すると是れは好い家だとか惡い家だとかいふ假の名字がつくが、其の實は多くの材木が集つて出來た假の相であるから、其の實相を究め來れば、大小好惡の定まりし自性はない。解くれば元の野原なりけりである。此のお寺の本堂にしても多くの材木が斯う集まり合うて出來たもので、此の材木は奇麗だとか立派だとか云ふ相を現はして居るが、此の材木の實相には奇麗なすがたもないが汚い相もない。山の中へ往て樹木に向て、お前は何所へ行く積りか、お前はお寺の柱になる積りか、或は監獄署へ行く積りか、お役所へ行く積りかというても、私は斯う云ふ所へ行く木であるというて挨拶するものはない。山上の樹木は元來無階級である。其の無階級の所に恒久不變の實相がある。今日吾々の姿もさうで、果して此の人が美しいとか醜いとかいふて決定することはできぬ、時々刻々に變化して決して一定の相に住しては居らぬ。且つ假相の當體からいふても甲の人は美しいと云うて喜ぶかと思ふと、乙の人は醜いと云うて嫌ふこともあつて、法に定相無しといふが全く其の通りである。美醜好惡は

あるから、『多』といふ義がある。又、智慧の上にも劣た智慧と優れた智慧とがある。世間の智慧は限りがあるから劣た智慧であるが、佛は超世間の勝れた智慧であるから、『勝』の義を有して居る。そこで此の經では大般若といはずして、摩訶般若というたものである。

## 般若と智慧

夫れから『般若』は智慧と飜譯します。それゆゑ摩訶般若といへば、廣大無限なる智慧といふことです。佛智のことであります。私共も自分が多少學問など致しますとか、或は宗教を研究しますとかすれば、宗教上の智識と學問より得たる智識とは、幾分か具へては居るが、佛樣の智識に較べたり、聖人賢人の智識に較べて見たならば、小いさな智識といはねばならぬ故に、吾々共に多少の智慧があるというても誠にお愧かしい智慧である。凡夫は劣等の小智であるが、佛の智慧は最も優れた大きな智慧であるから、摩訶般若というたのである。

是も何故飜譯をせずして般若といふ原語を用ゐてあるかといふに、唯智慧といへば、世間普通の智慧と混同する、あの人は商業上の智識があるとか、農業上の智識があるとか、或は宗教上の智識があるとか、哲學上の智識があるとかいふやうに、何れも一小部分の智識であるが、佛の智慧はさういふ一小部分の智慧でない。卽ち天地萬物の實相を明めて、煩惱生死の苦本を斷じ盡してゐる大智慧である。

の十字の題號だけを充分に研究してゆけば、後の二百六十二字の本文は皆解るといふ程の、深妙なる旨意を含蓄して居る。

## 摩訶とは何ぞや

摩訶般若といふは、大般若といふも同じことです。『摩訶』は大の義である。何故、大といはぬかといふに、摩訶といふ語に三つの意味を含んで居る。摩訶は天竺の語であるが、此の一語の中に、大・多・勝の三つの意義を具へて居りますから、わざと、梵語の儘を存したものです。是は所謂『多含不飜』であります。例へば斯ういふ物（水瓶を指す）でも、是れは大層大きな水瓶であるといへば『大』の義である。是には緻密な繪が澤山に書てあるといへば『多』の義になる。そうして是が非常に結構な品で、殆ど他に類の無い程の物であるといへば『勝』の意味になる。

佛教に於て佛のお悟を『摩訶』というたのは、佛の御悟は絶對の御悟である、即ち一部分のお悟ではなく、圓滿のお悟であるから、是を『大』と名けたのである。佛以外の者の悟は一小部分の智能の發揮したものである。彼の人は禪定の方は明るいが世間の事は暗いとか、軍事の上には明るいが教育の上には暗いとか、學術の上には明かるいが經濟の事は下手であるとかいふやうに、人間の智慧は多くは一部分の能力しか無い。然るに佛の智慧は全體に渉つて、世間・出世間、平等・差別の全局面に通達しておいでで

# 解題

## 摩訶般若波羅蜜多心經

### 題號と內容

此の心經の經題を摩訶般若波羅蜜多心經といふ。『名は實の賓』といふことは支那人も申して居るが、殊に此の佛敎に於ては經文の全體の意味を題號の上に現はしてある。法華經は八卷あるが妙法蓮華經といふタツタ五字の內に、八卷の法華の大體の意味は悉く具つて居る。夫れから、又、大無量壽經にしても、大無量壽經といふ五字の內に、全部二卷の歸趣が自然に含まれて居る。又、阿彌陀經や大般若經等の如きも、皆一經の要旨を題號の上に盡してある。故に御經文の表題は古人が非常に精神を籠めて附けられたものであると思ふ。中には釋尊が御自分にお付けになつたのもあります。

心經の全體の字數は僅に二百六十二字である。千字文の約四分の一位な短いお經文ではあるが、この二百六十二字に、佛敎八萬法藏の全體を總括して居るといふ程の深い意味を持て居る。また其の二百六十二字の深義も玄旨も、殘らず摩訶般若波羅蜜多心經といふ十字の題號の內に備はつて居るのであるから、此

ら、其の間だけ待てくれといふて、神僧から傳へ授られた心經を三遍程讀まれた。御經文の靈驗なるか、將た偶然の出來事なるか、恰も三遍目の讀經の時分に、一天俄にかき曇り、忽ちにして大風を起し、烟の如くに沙を卷きあげて凄じい光景になつた。迷信深き土人どものことであるから大に驚いた。此の人が何にか讀むと俄に天が暴れだした。若しこんな人を殺したならば、どんな神樣の祟をうけるかも知れぬといふので、本より惡意なき土人どもは此の天變に驚き、玄弉三藏の繩を解いて深く其の非を謝し、『誠に御無禮をしましたどうか勘辨して下さい』といふたから、玄弉三藏は始めて安心の息をつき、遂に危い所を免れられた。斯くの如き御利益を戴くといふのも、あの時の老僧のお庇護であるからといふので、歸路に態々訪はれたのであつたが、何程尋ねても其の寺さへも見えなんだといふ話である。

玄弉三藏歸國の後は、其の全力を經典の飜譯に傾注せられました。古來より多くの飜譯の中でも、羅什三藏と玄弉三藏の飜譯とが一番多く且つ立派であるやうに思はれます。以上は心經飜譯の由來であります。先づ序論は是れだけに致します。

取つて、河邊へ連れて往つて大地へ仰向きに臥かした。三藏は何んでさう云ふ事をするのか一向理由が分らぬ。『なぜ斯んな亂暴な事をするのであるか』と片言交りに其の樣子を尋ねた。以前老僧から心經を傳つた時に少しづゝ覺えた印度語を以て、どうにか斯うにか會話も出來るから、彼等の云ふ所を聞くと實に驚いた。

印度は波羅門敎の盛んな所である。婆羅門敎の或る派の惡習として毎年人間の生命を犧牲と爲し、恒河の河の神樣にお供物として祭らねばならぬと云ふ野蠻の習風がある。日本でもずつと古い時代には斯う云ふ習慣の存じた土地もあつたと云ふことでありますが、上古に於ては萬國を通じて斯う云ふ惡習慣があつたらしい。卽ち其の部落の內から一人の人間を選んで、其の血を以て神を祭るのである。所が丁度その日がお祭日であつたから、此の村の何某といふ者を殺して河神を祭るといふことに成て居た。さあ親類緣者のものは歎き悲んで淚を流して居る。所へ通り掛つたが玄奘三藏、人品は好し體格はよし、何國の者かは知らんが外國人である。氣の毒ではあるが、村の者を殺すより、いつその事此の法師に神樣の供物と成て貰はうといふ事であつた。故に決して惡意が有て殺すのぢやない。誠にお氣の毒ではあるが、お前さんの命を下さいといふのである。玄奘三藏は縛られた儘であるから、何んと思ても仕方がない。自分は單獨の旅行で本より助けてくれる人は無し、向ふは野蠻人であつて、それが何十人ともなく取り卷いて居るから、如何ともすることが出來ぬ。最早自分の運命も之れまでゞあると諦めて、末後の看經をして立派に死なうと思ひ、片言交りに話しをした。私は支那の僧侶であるが、斯くなる上は止むを得ぬに依つて末期のお經を讀むか

氣が全快に及んだから、之れより再び發足して愈々天竺へ這入らうと思うて居られると、老僧が云ふには『あの樣な業病を患つて、迚ても全快の見込の無い者を助けて下された其のお禮に、我が秘藏のお經文を授ける』と云つて、一卷の天竺の辭のお經文を授けた。玄奘三藏は最先がよい。『未だ天竺の本國に這入らぬうちに、お經を授かると云ふ事は、誠に愉快なことである』と云つて、それより熱心に其のお經を朝夕唱へて印度へ行かれた。不思議にもそれから後は更に災難にも遇はれなんだ。其の時に傳はつたと云ふお經が即ち此の心經であつた。之を神僧傳授の梵本と唱へて居ります。

神僧とは如何いふ事から云つたかと云ふに、玄奘三藏は此の僧よりこのお經を授かつてからは、種々の災難を免れたからといふので、天竺よりの歸りに再び其の寺を尋ねられたが、以前の老僧が居らないのみならず、其の寺さへも何うしても分らなんだ。『或は羅漢樣のやうなお方が假りに人間に姿を現はして、自分の精神に一つの訓練を與へて下されたのではあるまいか、彼の心經を授けて下されたのは、私の願望を成就せしむるやうにとて、此のお守りを與へて下されたのではないか』と云ふ所から、神僧と云ふ事を申されたのである。

傳記を見ますと、其の中にも色々の功德があつた事が擧げてある。印度には御承知の通り、恒河と云ふ大きな河がある。玄奘三藏が其の恒河の邊へ差掛られると、大勢の土人が何にかワア／＼騷いで居たが、今玄奘三藏の來たのを見ると、何にやら云ひつゝ、大勢飛んで來てペチヤ／＼云うて、玄奘三藏の手を取り足を

するなぞといふ人々に較べると、何十層倍の難儀であるかも知れぬ。

罽賓國には大きな一條の川がある。其の川の邊りに往つて見ると、船も無ければ橋も無い。玄弉三藏は如何がはせんと思案に暮れて居ると、川上より木殼のやうな物（屋根に用ふるもの）が流れて來た。さては此の川上には人間が住んで居るに相違ないと思ひ、夫れを便りに川を遡つて見ると、山の中に一軒の破れ寺があるから、内へ入つて見たが誰も居ない。境内は一面に草が茫々と生ひ茂つて居る。奥の方へ進んで行つて見ると人間の唸り聲がする。合點行かぬと立寄つて見れば、一人の老僧が病氣で寢て居る。傍へ立ち寄つて見ると、然もそれが癩病患者である。玄弉三藏は『私は支那の玄弉と云ふ者であるが、貴僧は此の通り病氣をしておいでるに拘らず、看病する人は無いのであるか』と尋ぬると、老僧が云ふには『始めは二三の人も居りましたが、私の病氣を嫌うて去つてしまうて、今ではもう他の人は一人も居ない、自分の命は實に風前の燈の様なものだ』と云ふ。餘り氣の毒であるから、玄弉三藏は其所に足を留めて老僧の看病をしたのである。こゝらが志のある所で、自分は大望を抱いて居る身の上であるが、我れも因縁あればこそ老僧の枕邊へ尋ねて來る事が出來た、斯くの如き病人を其の儘に見捨てゝ行くと云ふは人情で無いのみか、苟も佛法を信ずる僧侶の身として、爭でかこのまゝ立去るに忍びんやと思うて、遂に其所に足を留めて看病を致したのである。其の看病の功あつて老僧の難病も平癒致した。玄弉三藏は自分が道中の用意の藥などもあつて飲ませたでありませうが、又、相當の御祈禱もしてやつたであらう。幸にして其の病

行く事は出來ぬ。玄奘三藏は非常な學者で、殊に宗教家にして國の寶であると云つて、太宗皇帝が珍重して居る位であるから、數々留學願を出しても御許しがない。萬一お前を他國へ遣つて、他國の寶になつてもならぬ。又、萬一お前が天竺へ往つて、獅子に捕はれ狼の爲に喰はれる樣な事が有つては、支那の大切なる人間の寶を失ふからと云つて、お許しがない。そこで據なく玄奘三藏は夜逃げをして天竺へ行かれた。併し天竺へ行く時は殆ど四十人からの供を連れて出立せられた。

玄奘三藏が居た、長安の都の自分の寺の庭に松の樹がある。其の松の樹に別れを告げて、『我れは今より天竺へ行くが、設ひ自分は死して歸らぬ樣になるとも、お前は千代に八千代に榮えてくれ』と云ふ別れの辭を遺して發たれた。菅原道眞公が左遷に遇うて筑紫へ行かれる時、梅の御殿にある秘藏の梅の木に歌を詠んで別れを告げられ『東風ふかば匂おこせよ梅の花あるじなしとて春な忘れそ』と詠まれた。そうすると翌年梅が咲くと其の中の一枝が、筑紫の太宰府の邊りに居る道眞公の許へ飛んで行つたと云ふ。それで今尚ほ太宰府の天神境内には飛梅と稱する老梅樹がある。それと之れとは違ふが、玄奘三藏は四十人からの伴連れがあつたが、道中に於て水が變り氣候が變り、所謂風土が變つて、丁度、臺灣の生蕃界の土地の樣な所を通過して往つたので、途中に於て昨日は水あたりの爲めに死し、今日は虎の爲めに喰ひ殺される、又は河に溺れて死ぬ、或は山から墜ちて最後を遂げたと云ふ樣に、一人死し二人死し、とうとう四十人の者は皆死んでしまうた。罽賓國と云ふ所へ行つた時分には玄奘三藏たつた一人になつて了うた。今日の世界を漫遊

一々お話し申す程の必要もありますまい。唯飜譯が幾らあると云ふ事だけを御承知を願ひたい。唯今行はれて居るのは玄奘と云ふお方の飜譯である。之れが五譯の中に一番善いやうに思ふ。支那に於ての四大飜譯家と云つて四人の飜譯の大家がある。中にも、第一流の大家がこの玄奘三藏と羅什三藏である。

## 玄奘三藏の傳

玄奘三藏は唐の太宗皇帝の時代の人で、若い時分から萬人に勝れた才智があつたから、太宗皇帝も玄奘は國の寶であると云つて珍重せられた程の人物である。玄奘以前にも多くの飜譯もあつたが、支那佛教の飜譯が、天竺の原語に一致して居るか居らぬかと云ふ事が疑問に屬して居つた。譯人に依つて詞が違つて居たり、本文にも廣略の差があつたりして居るから、どうか天竺へ往つて原書や原語を學んで見なければ、完全なる研究が出來ないから、是非とも天竺へ往つて實地に就て梵語の研究をして見なければならぬ、さうすれば未だ支那に渡らない所の大般若といふお經が、天竺にはあると云ふから、それをも是非支那に傳へたいと云ふ志願を起して印度留學を望んで居られた。唯今とは違つて、其の當時は未だ交通の極めて不便な時分であるから、中々天竺あたりへ行くと云ふ事は容易でない。日本でも維新前の交通の不便な時分などは、此の邊から大阪へ行くとか若しくは江戸表へ行くと云つても、泣きの涙で出た位なものである。況んや虎や獅子の棲んで居ると云ふ様な國々を通り越して、天竺へ行くと云ふのは、決死の精神でなければ

たのであると見ても差支ない。外にも地藏菩薩がお說きになつたと云ふ表題の下に、お釋迦樣がお說きになつた經文もある。又、觀世音菩薩を一番の御主人として御說きになつたお經もある。卽ち本尊開會觀世音菩薩といふて、大般若經六百卷は開會して見ると本尊樣が觀音樣になつて居る。觀音樣が何所にでも能く御顏を出しておいでる。阿彌陀樣の兩脇には觀音・勢至と云ふ具合に現はれてゐる。又、楞嚴經をお說きになつた時にも、觀音樣が現はれておいでる。佛敎全體の中で一番よく現はれて居られるのは、佛樣では阿彌陀樣、菩薩では觀音樣で有ります。此の心經は『觀照眞空』の經であるから觀世音菩薩が本尊樣になつて居る。

心經の飜譯は澤山有つて、支那の唐朝の玄宗皇帝と云ふ天子樣の時代には、心經の飜譯が十一通りあつた。今回お話をしやうと云ふお經は、其の十一の中の一つである。其の中には餘り感心しない樣な心持のもあつて、追々とそれが廢つたものと見える。今日の如く印刷事業が發達して居つたならば、或は十一共に傳つたかも知れないが、如何にしても昔の事であるから、多くは寫したものである。非常に流行を極めたものでないと、大概は版に起さぬ時代であるから、段々無くなつて、僅かに殘つたのが七通りの飜譯である。其の中でも亦缺けたのがあつて、唯今日本には五譯と云つて五通りだけ傳はつてある。之を五存二缺と申して居ります。之に因つて見ても心經といふお經は盛に世に行はれたといふ事が證明される。

現今の一切經の中では今云ふ通り五通りの飜譯があつて、多少題號も本文も變つて居りますが、夫れを

話をする積りである。先づ空と云ふ門を潜つて、中道と云ふ奥座敷に這入るが、此の心經である。
して見れば、心經の佛敎に於ける位置から云ふと、もう最第一の經文と云ふ事であるが、と云つて、心經の外には別に結構な御經は無いかと云ふにさうでない。華嚴經にせよ、法華經にせよ、皆最上のお經である。私共の見地から見ると、大無量壽經なども、皆實に最上のお經と思ふ。佛敎全體を通觀して佛陀の精神の歸着點を見ると、大無量壽經も、法華經も、決して等差はない。中道一實の經文を、佛は種々無量にお說きになつたものである。之も此の講義中に差挿んでお話申したいと思ふ。

## 心經の飜譯

次にお話したいのは心經の飜譯の異同ですが、凡そ此の心經ほど飜譯の多いお經は無い。印度に於ける原本の經文が、既に澤山有つたものであらうと思ふ。そして、此の御經は釋尊が御說きになつたと云ふ說と、觀音樣がお說きになつたと云ふ說と二つあるが、これだに未だ充分の決定が出來て居らぬ位である。此の兩說に於て私は何方を取るかと云へば、釋尊がお說きになつたと云ふ方を取る。然るに或る飜譯に依つて見ると、觀音樣がお說きになつたと云ふ事が、お經の文章の上に現はれて居る。そうして見るとお釋迦樣がお說きになつたと云ふ說が曖昧のやうであるが、是等は夫れ程に力瘤を入れて見る程のことでもあるまいと思ふ。表面は觀世音菩薩と云ふお名前になつて居るが、其の實は釋迦如來がお說きに成つ

日本に於て佛教の宗派は澤山有るが、結論だけ申して置けば、現代行はれて居る佛教全體は悉く此の中道教である。淨土宗にせよ、日蓮宗にせよ、趣は變つて居ても、其の根本に至つては皆中道教である。縱ひ指方立相といふて西方の淨土を說き彌陀の實在を說くとも、大乘佛教の見地より見れば、其のまゝが中道一實の教に歸するのである。故に各宗各派に別れて居りましても、通佛教の眼から見ると即ち一佛教である。各宗を統一したいなんと云はなくても、元來統一して居るのである。斯う云ふ話をすると長くなるから、此の心經の御話の中に多少の餘地があれば、各宗教義の一斑を差挿んでお話をして見たいと思ふ。

## 最上乘の法門と心經

佛教をひつくるめて見ると、心經は何れに屬するかと云ふに、表面から見ると空教にして、其の實は中道教である。五蘊皆空と云うて空理を說いてあるから、空教の樣であるが、併し精神は中道大乘の經文である。即ち佛教を總括して、是れより以上は無いと云ふ佛教の唯一乘の根本法輪であつて、最上乘の教を說かれたのが心經であると云ふ事を御承知願ひたい。

尤も此の經は般若部に屬するから、天台宗等では是を別教と云うて、一分の方便を帶びたるものと判じてあるが、所謂禪門の見地から見ると、一乘圓頓の教と見ることが出來る。其の事は本文に於いて充分にお

ちず、我れも我れにあらず、元來平等である。平等であるからして因緣の作用に依つて、色々と現はれ來ては居るものゝ、根本の體より見ると諸法其の儘が畢竟平等である。無自性不可得である。之れが人間とか畜生とか、善とか惡とか云ふ固つた性質の有るのではない。無いに依つて、善人が惡人にもなり、惡人が善人とも變化する作用をもつて居る。して見ると諸法の實相から、見ると決して差別で無い。從本以來、畢竟平等であると說く、之を空敎と云ふ。丁度有敎の反對である。

有敎は表面を說いたものであり、空敎は其の內實を說いたものである。有敎は相を說き、空敎は本體を說いたのである。本體は本來平等ではあるが、因緣の力に依つて限り無き差別の作用を現はして來る。その狀は同一海水に波瀾を起すが如きものである。千態萬樣の波の全體が、そのまゝ同一味の水であるが如く、諸法の差別の相の現はれたその儘が平等の本體であると、斯う云ふ風に說くのを中道敎と云ふ。平等にして差別であるから平等とも定められない。差別にして平等であるから差別とも定められない。差別にして差別にあらず、平等にして平等にあらずである。之を中と云ふ。

佛敎は八萬四千の法門といふ樣に、色々に別れて居ても、つまり有空中の三つを離れて居らぬ。有の方から御說きになるか、空の方から御說きになるか、或は中か、此の三つの外に出でない。此の三つの中に於て、有敎といひ、空敎といふは、つまり眞理の一面を說いたものである。眞理の全體を說いたのは、これを中道敎と云ふ。

してゐたのである。

然し、實際は刹那生滅で、斯うして指を彈く間にもお互の體は變化して居る。お互の見るもの聞くものも變化して居る。昨年は奇麗な花を見たが、今日では其の昨年の奇麗な花は、何處を尋ねても無いのである、昨年どころぢやない、今年の春、奇麗に咲いた花、其の奇麗な花が、今は何所を索しても最早無い。一切萬物皆是の如く、刹那に生滅變化して更に實體は無い。之れを佛敎に於ては無自性と云ふ。之れが善人であるとか惡人であるとか、佛であるとか鬼であるとか、人であるとか、畜生であるとかと云ふ樣な固つた性質は無いと云ふのが無自性である。

物體と云ふものは、其の本源を究めて見れば元來平等である。決して差別した各々の自性は無い。差別の相のあるのは、因緣假和合の姿に過ぎぬ。例へば斯う云ふ陶器物の本體はと云へば土である。土と云ふ上から云ふと、性質は唯一つであるが、夫れが茶碗となり或は水瓶と成り、或は皿となり鉢と成り、樣樣に姿が變つてゆく。變つて行くに依つて、之れが出來れば結構な物が出來たと云ひ、之れが潰るれば大事な水瓶を壞したと云ふ。或は喜び或は歎き、或は愛し或は怒る。併し土其の物に於いては、之れが水瓶になるべき土であるとか、或は急須に成るべき土であるとかと云ふ事は無い。土は平等であるが、之れが因緣に依つて色々の姿になり、長い物があり短い物がある。奇麗な物があれば汚い物がある。千態萬狀に現はれて居る。諸法の姿も、其の本體を窮めて見ると、山も高きにあらず、海も深きにあらず、人も人にあ

ものは云ふ迄もなく、面たり現はれてあるには相違ない。併しながら、果して其の實體があるかと云つて其の根本を窮めて見ると、有ると云ふ事が云へなくなつて仕舞ふのです。

私と云ふ者が現在この演壇に立つて御話をして居る、が果して私といふものがあるか、決して私と云ふ者は無い。私は四十八歳になりますが、四十八歳以前には、日本全國何所を探しても新井石禪と云ふ者は無かつた。それのみならず、今晩にも息が切れたらモウ新井は無い石禪も無い。此の天地間は、時間的にも空間的にも無限である。横に、空間から云うても無限絶對である。縱に、時間の上から云うても、何萬年經つても無くなると云ふ事は無い。卽ち無限である。時間・空間の無限である事は一般の科學者も證明して居る。何萬年何千年とも知れぬ無限の時間の上から申しますと、假に私が五十年七十年の壽命があるとしても、實に時計がカチンと云ふ一セコンド位の壽命に過ぎない。其の短日月の間、玆に新井石禪と名づくる物が現はれて居るが、其の本來を究むれば始も無く終も無い。

然らば現在の五十年七十年の間だけは、儼然として存在してあるのであるかと云ふに、存在してあるとはいへない。實體と認むべきものは無い。吾々の身體は七年毎に組織が一變してしまふと云ふ事です。然るに、幸にして四十八年まで同じ名義の、同じ體が、斯うして居るのは如何いふ譯か、七年毎に組織が變つて身體が一變するにも拘らず、斯うして現存して居るのは、始終食物等を以つて補充して行くから、今日までは、戸籍上に於いて新井石禪と云ふ者があつて、假りに權利とか義務とか云ふものが附屬

から見ると氷炭相容れずといふ様、全然反對して居るが如き宗旨もあります。從つて佛教は如何なるものであるかと云うても、各々の宗派に各々の主張が有るのであるから、其の歸趣を得るに大いに人が迷ひます。併しながら佛教と云ふものを總括して見ますと、法相宗に於ては、三教の判教といふことを說いてゐますが、これが只今お話をするのに都合のよいものであります。

## 有空中の三教大意

法相宗では、佛教を有・空・中の三教に分けて、判じて居ります。本より是を以て完全無缺といふ事は出來ますまいが、佛教と云ふものゝ大體は此の三つに區別して見る事が出來ます。詳くは有教・空教・中教であります。又、有宗・空宗・中宗といつても宜い。

其の有教とは何かと云ふと、現在に顯はれて居る萬有諸法に就ての教です。即ち天地間に現はれ居る一切の萬法、即ち此の現象界を中心として說いたのが有教で、即ち花あり月あり樓臺ありで、無限の空間に無限の諸法がある。私といふ者があり、諸君と云ふ者がある、寺と云ふ物があり、門と云ふ物がある。市街もあれば村落もあり、山もあれば川もある。それは千差萬別の姿である、そして實際であり、現實である、斯くの如き諸法を中心として說かれたのを有教と云ふ。

空教と云ふのは、何にも無いことを教へる教です。有教の反對の教であります。成程一切の諸法といふ

# 般若心經精義

## 序　辯

### 佛教中に於ける心經の位置

心經と云ふお經文は、佛教の上に於てどう云ふ位置を占めて居るかと云ふことを先づお話し致したい。申す迄も無く佛教は實に廣大な法門で、釋尊の御説法だけでも三千餘卷と稱し、唯今日本に於て縮冊藏經に成つて居る經論の數は、菩薩の論藏、祖師の語錄等を併せて、一萬卷に近いのであります。其の通り澤山有りますに依つて、同じ佛教の中に於ても種々の宗派が別れ、天台宗がある、眞言宗がある、禪宗がある、淨土宗がある、眞宗がある、日蓮宗がある、其の外宗旨の數は現今、十三宗五十餘派と申して居ります。併し何故宗派の數がさう多いかと云へば、一つは佛教の敎理の發達及び佛教の應用上の發達の結果です。其の爲に此の宗派の數が、段々と澤山殖えて參つたのであります。同じ佛教の宗派の中でも、外面

# 禪學講述篇

第一

禪學講述篇 第一

目次

四八端嚴微妙姿渾
身總是大慈悲分明點
出金剛眼恩德如雲
隨處垂

總持石禪

# 新井白石全集

